

---

# 呪術の契り

こんこん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

呪術の契り

### 【Nコード】

N5707G

### 【作者名】

こんこん

### 【あらすじ】

元々呪われたような家系に生まれた、新道徳人は不可思議な同級生に出会う。彼女は「呪いを解いてほしい」そう懇願するのだが、当の本人はさっぱりで、数奇な運命に巻き込まれることを余儀なくされる。

## 1話

俺はどこにでもあるような普通の高校生だと思っていた。それは本当の意味で。

毎日の過ごし方はいたって単純だ。

まずは学校に通い授業を受ける。そしてそれから帰宅。家に帰ると、家事全般を行って、くだらだらテレビでも見たら寝ている。

何故、家事全般を俺がやっているかって？それはやってくれる人がいないからだ。

どうも俺の身内は呪われているらしい。若くして皆、理由もなく亡くなっている。

それは俺の両親も例外ではない。

両親共に不治の病にかかり、俺が中学二年の頃には亡くなってしまった。

そのことに対して？

それは俺だって両親が亡くなった時は悲しかったし、自らに訪れるであろう危機感も感じていたよ。

周りの人間も一度お払いをもらった方がいいと何度も話していた。

だから何度か、名前の売れている高名な霊媒師の元に行ったのだが、あいつらの話すことはみんな食い違っていた。

自縛霊の仕業だとか、生霊の祟りだとか、先祖供養が足りないとか…

そのいい加減さに頭にきて、その時点で完全に諦め、自分の人生を早くに割り切ってしまった。

長く生きられない家系なのだとしても、四十過ぎまでは生きられている。それならそれでいいのではないか…

両親は四十過ぎて亡くなった。それでも苦しんで亡くなったわけではなかった。

もうこうなることを分かっていたかのように、最後にすまなかったの一言で人生の幕を閉じていた。

そりゃあ悲しかったが、それでもそんな両親の姿を見て幸せだとも感じた。

短い人生かもしれないが、悔いというものがまるでなかったからだ。

長い人生を薄めて生きている者もいれば、短い人生で満足するものもいるんだ。

だから俺もこのように生きれるように頑張ろう。それに俺が若くして死ぬとは限らない。

例外だつてあるし、何よりも俺がそんな呪いのような迷信じみたものを信じていない。

そういつた経緯で、今の俺は家事全般を一人でやっているが、住んでいる家も大きな家ではなく、

アパートなので掃除等は楽だった。

生活は苦しくないとはお世辞にも言えなかったが、両親の残したお金で何とか学生生活は送れていた。

それに近所に住む俺の仲の良い友達のお陰で、アパートには格安で住まわせてもらっている。

このアパートはその両親の持っている物件の一つだった。

何個も持っているので、家賃四万を一万でいいよという太っ腹は俺も感謝している。

ここらで一人暮らしのできる高校生なんてそうそういないから、俺は俺でこの生活を満喫していた。

バイトも日雇いのものを少々やったりして、それを小遣いにあてたりしていた。

さて…俺の日常生活と境遇はそんな感じだが、そんな平凡な生活を送っていた俺にも転機つてものが訪れた。

俺の住む町は大都市ってわけではない。地方都市に毛の生えた程度のものだ。

それでもコンビニ、ファミレス、交通環境はまずまず充実していた。

俺の通う高校は私立錬道高校と言って県内七十ある高校で三番目ぐらいに位置する優秀高校だ。

勿論、不良といった類とは縁がなかった。

それでもがらの悪い奴も少しはいる。性格という意味で…

俺の日課であるゴミ出しを済ませると、いつものように徒歩で高校に向かっていた。

すると、俺の大家の息子である例の友達が駆け寄ってきた。

「おーす。ノリ」

軽い挨拶をすると、俺も返事をした。

「おっ、シヨウ」

俺の名前は新堂徳人というから、名前の愛称でノリと呼ばれた。

一方、こいつは相川翔太だから、シヨウだ。

互いにこの名前にも呼び慣れた。

高校生活は二年目を迎えようとしていて、季節は春だった。

桜がちらちらと舞い、心地よい風が流れていた。

「今日から新学期だ。ぞくぞくと新入生が入ってくるなー…いやー緊張しないか？」

翔太がそんなことを口にしたが、俺も同じ気持ちだった。

新学期で新入生も入ってくるとなれば、どんな展開が待ち受けているのか淡い期待も抱いてしまう。

それだけ学生生活が充実しているから言える言葉だ。もしもいじめにあつたり成績で悩んでいたらこんな発想はできない。

しかし俺がそっけない反応だったからか、翔太はしつこく聞いてきた。

「お前：興味ないの？可愛い子が入ったらどうしよーとかさ…」

「期待してるさ。俺も男だし。やっぱり新しい環境ってのはどきどきするだろー」

俺はそれほど冷めた人間ではない。

周りがんばろうとしていることに水を差すこともしなければ、傍観者を気取るのはあまり好きではなかった。

しかし翔太も俺の性格に輪をかけたような奴なので、こいつの前では少し引いてしまうのだ。

「お前さ、今日どうする？何か予定あるか？」

翔太が俺の放課後事情を聞いてきたが、俺は考えてみた。

「うーん…あ、そっだ」

俺はふっと思い出したことがあった。そう言えば洗剤が切れていたのだ。

「洗剤買わなくちゃ…切れたの今思い出した。それに今日火曜だよな。特売日だ」

「おいおい…相変わらず所帯じみているな」

「しょうがないだろ。一人暮らしなんだし。でもよ、お前の親父さんには感謝してるぜ。」

だって格安であるアパート借りれているからな」

「何だよ、いきなり気持ち悪いな。あんなぼろでよければただにしてやってもいいって話していたのに、」

お前が無理やり金払わせてくださいって言ったんだろ？」

「だってさ、もらってばかりって嫌じゃん。」

施しを受けてるっていうか、それが当たり前になるのが怖いって言うか…」

「そう言うものか？俺にはその考えは良く分からん。もらえるならただでもらったほうがいいだろうが」

「坊ちゃんには無縁の話だ」

「お前なー…俺だってちゃんとバイトしたりしてるだろ？小遣いだって普通だ。別に金品を親に要求したりしてねえよ」



「分かってるって。お前が散財するような奴なら俺だって付き合っ  
てないって」

「しかし…お前、本当にあのアパートでいいのか？もう少しいい所  
だってあるぞ。同じ値段でな」

「いって。お前の親父さんの手を煩わせたくないしな…」

それにこいつの親父のことだ。十万する家賃でも一万でいいよと  
いうはずだからな。

## 2話

「それにしても楽しみだ…」

またその話か。

にやにやしている翔太に聞いてみた。

「シヨウは彼女ほしいのか？」

すると、何を寝ぼけたことをと言うような表情で俺に迫った。

「お前なー…青春は何のためにあると思ってるんだ？恋して、笑って泣いて、バトルしてそうやって人生経験を積んでいくんだ」

最後のバトルは意味が分からんが、確かにその通りだとは思った。

9

人生の中で一番きらきらしている時間なのは事実だ。これを無駄に過ごすのはあまりにも勿体ない。

「え？欲しくないの？まさか…こっち系？」

頬に手を立ててくつつけて見せた。

「うるせえ！そんな訳ないだろうが。俺だって普通に恋してえよ。ただ聞いてみただけだろ」

「ははは…流石にそうだと即答されたら、俺はダッシュで逃げたんだがな…」

「そうですね…まあ、俺もお前が男の方が好きだよ何て答えられたら引くかな」

ふざけながら歩いていると、片道二十分の距離もあっという間だった。

目の前に校門が見えてきた。

「おーいるいる」

そこには新入生の初々しい姿があった。

中学校から高校に上がったばかりのその姿は幼さを感じた。

「お兄さんは嬉しいねーみんな立派になって…」

翔太は、うんうんと一人で頷いていた。

「いつからお前はみんなのお兄さんになったんだよ」

「そこ、つつこまない」

きよろきよろと辺りを見回しながらゆっくりと教室に入っていた。

そこには一年の時と同じ顔ぶれがあった。

俺の高校は三年の時にクラス替えがあって、受験対策ごとにクラスが分かれる。

だから一年、二年は同じメンバーと過ごすことになる。

「やつほー諸君。今日も元気かな？」

翔太は偉そうに男子に声をかけていた。すると、一人の仲の良い奴が、

「おう…お前らも相変わらず仲良く登校か、できてるんじゃないの？」

とさっきの会話を思い出させるようなことを話した。

「え？ばれた？」

翔太は瞬時にその言葉に乘っかり、否定することもなく体をくねくねさせながらそいつに答えた。

「気持ち悪いからやめろ」

俺はすかさず翔太に脳天チヨップをかますと、自分の席に座った。

さてと…一時間目は現代国語か…

俺は持っていたリュックから教科書を探していた。すると隣から声がかかった。

「ノリちゃん…ご機嫌いかが？」

その声は…俺はふっと横を見ると、そこには俺の天敵がいた。

女魔術師、鎌田梨絵。

彼女は決して黒魔術とか、魔法とかが使える訳ではない。

言葉の例えなのだが、その名の通りに人を思いのままに操る策略家のような奴だった。

こいつは小学校からの付き合いだが、何度も泣かされたし、利用された。

ある時は、かくれんぼで置き去りを食らい、ある時は、先生の机に入れた蟻螂の卵が孵化したのを俺のせいにしやがった。

俺の好きな子が分かれば、その子に勝手に俺が好きだと話すし、俺の数々の恋路はこいつによって踏み潰された。

そして高笑いをしてやがる…

究極のドSといっても間違いではないだろう。

「今日から新学期だよね…いやー楽しみ楽しみ」

その笑顔は不気味以外の何物でもない。俺は具合が悪くなりそうだった。

こいつの悪事はこれから一体どんな風に働くのだろうか…

いろいろ悩んでいると、いかにも真面目を絵に描いたような担任が教室に入ってきた。

しかし今日は後ろに誰かついて来ている。

誰だ？

すると、担任は転入生が今日からこのクラスにやってきたことを話した。

「それじゃあ、自己紹介してもらおうか」

そのように自らに振られると、そいつははきはきと答えた。

「双葉聖夜です。趣味は新しいものを見つけて、特技は経験豊富な所から繰り出される絶技ってことで…」

しーーーーーん

クラスは静まりかえっていた。仮にもここはそんな冗談が通じる人間のたまり場ではない。

何だ？こいつ頭がおかしいのか？

いきなりそんな会話したらエロい方に捕らわれてしまうだろうが。

また変な奴がこのクラスに増えたと思った。それにしても聖夜って…クリスマスにでも生まれたのか？

どうも俺はいまいち聖夜にぴんとこなかった。

しかしクラスの連中は、あいつが自己紹介を終えて席に着くなり、

いろんな質問攻めをしていた。

どこから来たのかとか、どこに住んでいるのか。

まあ、見た目は顔立ちもいいし、背も高いから気になる奴はなるな。

それから一時間目が数分後には開始されていた。

### 3話

昼休み。

相変わらずあいつの前にはクラスの何人かが話し相手をしていた。

そんな様子を見ながら、俺は昼飯をどうするか悩んでいた。

すると、

「ノリちゃん、パン買ってきてよ」

あの忌まわしき女、梨絵が俺にそんなことを言ってきた。

「俺はな、お前のパシリじゃねえーよ」

丁重にお断りしてみたが相手はそんなことで引き下がるはずもない。

「あらあら…そんな態度とって言いわけえ？」

「え？」

「ノリちゃんこの間、本屋で何か買ったでしょ…三日前だったかなーここから少し外れた駅前の橋書店でさ…」

どげね…

まさか…俺、見られていたのか？



あの時、誰もいないことを確認したのに。

「その中身、ここで大声でばらしてもいい？」

それはまずい。ここで、それは…俺の高校生活が終わってしまう。

「みなさん。ここにいる、新道徳人君は、三日前に…」

俺は慌てて梨絵の口を塞いだ。

「分かった。勘弁してくれよ。言うこと聞くから…」

「はじめから言うこと聞いてればいいのよ」

「ったく…どうしてお前があんな所にいるんだよ」

「へっへーん。昔からあなたの悪事には鼻がきくのよ！」

「悪事って…」

それ以上は何も言えなかった。

「それで、何を買ってくればいいんだ？」

「えっとね、やきそばパンとジャムパンと牛乳。それと…カツ丼お願いな」

「おい！パン以外の物も入っているし、最後のカツ丼って何だよ！」

「あれえ？嫌なのかなー」

「うっうっ…分かった分かりましたよ。行ってくるから」

「五分いないね。はい、ダッシュ！」

鬼だ…こいつは本当に鬼だ…

どこの世界に女にパシリをさせられる主人公がいるんだ。

それにこいつどんな胃袋してるんだよ。女子なら弁当を作って持って来たってんだ。その方が可愛げもあるだろうに。

俺はぶつくさ文句を言いながらも、廊下を有り得ない速さで走り、角を鋭角に曲がり、購買までたどり着いた。

「はあ…はあ…はあ…」

久しぶりだな。運動部でもない俺がこんなに走るの…

さて、パンは…

俺は頼まれたパンを二つ見つけるとそれを買った。そして牛乳。

これは自販機にあるから大丈夫だ。

そして残りのカツ丼は…と…え？売り切れ。天井しか残ってない。

どうする…でも丼には変わりがないしいいだろっ。そう思ってそのまま買って、再びダッシュで来た道に戻った。

「はい、四分五十五秒。ぎりぎりだったね。もしも五分過ぎたらケラスにはらしているところだったよ」

やはりか…この悪魔め。

「それで…頼んだ物は？」

俺はビニール袋から買ったものを取り出した。すると、

「これ、カツ丼じゃないよ！天井じゃん！どういうこと？」

「売り切れだったから大目に見てくれ。丼には違いなidaroo？」

俺はそう話したが、梨絵は納得しない。言葉による一斉射撃が俺を襲った。

「丼が一緒？カツ丼を甘く見るんじゃないわよ！

丼物といったらカツが一番、親子丼が二番、天井は三番目なのよ！一番手に三番手が勝てると思ってるの？」

「たまには勝つかもしれないだろ…食べたくなくなる時だってあるんだから…」

「はん！これだからノリちゃんは乙女心をわかっていないのよ。

食べたい時に食べられない苦しさが分かんないからそんなことが言えるのよ。

乙女は食べる欲求には素直なの。純粹なの！」

お前の脳みそが一番よく分からないよ。

「減点三ね…」

「おい、いつから減点方式になったんだよ。それに俺は何点持っているんだよ」

「ちなみにマイナス十点になると私からきついお仕置きが待っているから覚悟するように」

無視かよ…

そこまで話すと、五百円玉を俺の机にはしんと置いて、そのまま走り去っていった。

「足りねえーよ!」

## 4話

放課後になった。

腕時計を見ると時刻は四時半を過ぎていた。

スーパーの特売は五時だから十分間に合う。

洗剤買って…それから今日の特売が肉類だから、一人すき焼きでもやるかなー

そう思っていると、後ろに誰かが立っていた。

「新道…徳人だっけか？」

声をかけられ俺は振り返った。するとそこには転入生の双葉聖夜がいた。

お互いばたばたした一日で会話すらしていなかったもので、これが初めての会話となった。

「双葉だっけか…何か用？俺、急いでいるんだけど」

「いやさ…徳人と話したくてね。何度も機会を伺っていたんだけど、あいつらがいろいろ聞いてくるからさ…」

近づく聖夜の姿は夕焼けに映し出されて神々しい様子に見えた。

「お前、本当に高校生か？もっと年上みたいな感じがする…物腰が

自己紹介通りに経験豊富そうだからな」

「へー鋭いな。見てないようで俺のこと見ていたんだ」

「俺ってキャラかよ…まあ、正直気にはなっていたよ」

「素直なところも感心、感心。その方が腹を割って話せそうだからな。時間がないなら徳人の家でもいいよ」

「ずっとずうしいな…お前は家に帰れよ。明日なら聞いてやるから。それじゃあな」

俺はそのまま聖夜をそこに置いて、駆け出すようにスーパーに向かった。

ぎりぎりセーフだった。

「よっしゃー！」

そこからは俺は慣れた様子でかごを取ると、おばちゃん連中の塊の中に突っ込んでいった。

ここで引き下がったら俺の夕飯は違う物に変更される。引き下がってたまるかよおー

一人すき焼きの想像をしながら俺は牛肉一パックを掴み取ることに成功した。

よっしゃー！後は他の具材と洗剤だ。

軽快な足取りで買い物を買わせると、時刻は五時半だった。

ふんふんふん…鼻歌交じりで俺はエコバック片手に帰り道を歩いていた。

そして自分の住むアパートが目に入ると、誰かがそこに立っていた。

「あいつ…」

聖夜だった。

どうやって俺の住所を調べやがった。そのことにも腹が立ったが、諦めの悪いその性格に俺は腹立った。

普通の奴ならこんなに腹が立たないのに、どうしてこいつは初めて見た時から苛立つんだ？

自らの体の不思議を感じながらゆっくりと近づいた。

「何でここを知ってるんだ？」

すると悪びれた様子も無い。

「そんなの簡単だ。職員室に行けば全員の住所が書いてある書類があるからな」

「そんな簡単に先生が転入生に他人の住所録を見せるかよ。どうせ、友達になった奴にでも聞いたんだろ？」

「信じてくれなくてもいいが、中に入れろよ。俺も一時間は待つてるんだから…」

「図々しいにも程がある。話しは明日聞くって言ったろ？」

「何イラついてるんだよ。俺に何か怨みでもあるのか？」

初対面だって言うのにさ…話ぐらいすぐ済むんだから」

根競べのような感じではあったが、このままでは埒があかない。

俺は折れることにした。

「上がれよ」

そのまま俺はアパートの階段を上がっていった。

そして聖夜もそのままついてきた。

俺のアパートはお世辞にも綺麗とはいえないが、それでも築二十年にしてはましな方だと思っていた。

そんな部屋に他人を上げるのはこれが三人目だ。

ここに来たことがあるのは、翔太と梨絵だ。翔太は親友だから当然だが、梨絵は半ば強制で仕方なくだ。

その話の詳しい内容は流しておこう。

聖夜は俺の部屋をきよろきよろと見回すと、



俺がどうしても言わない内に上がり込んで、畳の上に座り込んだ。

「おいおい……」

俺は呆れてしまったが、聖夜はいたって普通といった様子だった。

「お前なー……遠慮ってものがあるだろうよ」

「細かいことは抜きにして、ほら早く座れよ」

「ここは俺の家だっつーの！」

自分のペースをかき乱されてどうすることもできなかったが、話だけすれば満足ならさっさと聞いてやるつう。

俺は茶も出さずに正面に座った。

「それで？話って何だよ」

「あのさ……単刀直入に話してもいいか？」

「あ？その方が助かるけど……」

「じゃあ、話すけど、俺に協力してくれないか？」

「は？それって単刀直入すぎるだろ？何に協力するってんだよ！」

「俺の呪いを解くための」

「聖夜は真剣だった。」

しかし俺は頭が真っ白になった。それと同時に笑いも込み上げてきた。

「お前、オカルトか何かにはまっているのか？」

呪いつて何だよ。冗談にも程がるだろうが：俺が祈祷師にでも見えたのか？

くだらねえ。そういうのは、専門の人に頼んでくれ。俺はそんな特技も必殺技もねえよ」

軽くあしらったが、聖夜は引かなかった。

「冗談でこんなこと話すと思うか？俺はようやくめぐり合えたんだよ。」

俺の呪いを解いてくれる奴にな。それはお前しかいない」

こいつ天然なのか？それとも変な宗教でもやっているのか？

「どこをどう見たら俺がそんな大層な人間に見えるんだよ！頭おかしいんじゃないか？」

「お前、俺の事嫌いだろ。放つ気配でそれが分かる。でも無理もないか：…そういう運命だからな」

運命？何を話しているんだ？

こいつは勝手に納得しているが、俺には何一つ見えてこなかった。

「話はそれで終わりなんだろ、それならとっとと出て行ってくれな  
いか？俺は夕飯の支度で忙しいんだよ」

そのまま聖夜の腕を引つ張り上げると、玄関まで連れて行った。

「明日も同じようなこと頼まれても俺の答えはノーだからな。もう、俺に係わらないでくれ」

そしてたんとそのままドアを閉めた。

「はぁー…ついてねえ…今日は梨絵の件といい最悪の日だ」

聖夜がそのまま大人しく立ち去ったのが、階段を降りる音で分かった。

新学期の楽しい一日のはずが、最悪の一日になってしまった。

## 5話

翌日。

俺は昨日と同じように翔太と登校した。

景色は昨日と何ら変わらない。新入生の初々しい感じは健在だ。

「昨日何かあったか？」

「え？」

「いや…表情が暗いからさ…」

流石親友、俺の僅かな心情の変化も察知するとは恐れ入るぜ。

「ああ…実はさ…」

俺は昨日の話を翔太に包み隠さず全部話した。

すると翔太は笑いやがった。

「面白いなー…転入生の聖夜だったか、あいつすごいなー」

「俺も参っている。俺がどうやったらそんなの解けるって言うんだよ。」

しかも初対面でそんなの真顔で話されたらこっちだって引くだろ？なあ？」

「いやいや…お前の背後に徳の高い陰陽師でも見えたんじゃない?」

「止めるよー!テレビの見すぎだっつーの。そんなの俺は信じない」

「でもよ、どうするわけ?このままだと付きまとわれるかもしれないぞ?いつそのまま付き合ったら?」

「ふざけんな!」

俺は翔太の尻に蹴りを入れた。

「しっかし、お前も厄介なことに巻き込まれたな。この学校って優秀な奴も多いけど変わった奴も多いからな」

「何だよ、それ、ならお前も変わっている部類だろ?気持ち悪いし」

「三途の川を渡ってみたいのか?」

俺はそんな風にいつものように他愛もない話をして学校に着いた。

教室に入ると、そこには聖夜の姿があった。

よりによって仁王立ちかよ。

「昨日の話の続きがあるんだけど」

むうー…こいつ…大丈夫か?

「あのよ、俺は忙しいから無理だ。」

他を当たってくれ、そつだ、三組の関根つて奴に頼めば多分大丈夫だ。

あいつの家は寺だったからな…それじゃ、そう言うことで」

俺はそのまま聖夜の脇を通り過ぎた。そして自分の席に着くと、違和感が…

「いてえ！」

椅子に腰を下ろしてすぐに飛び上がってしまった。

尻にはたくさんの画鋐が突き刺さっていた。

誰の仕業かは一瞬で把握した。

「双葉！てめえ！」

しかし聖夜の姿はもうそこにはなかった。一人叫んだ俺は恥ずかしい…

「ノリちゃん。あいつと何かあったの？昨日お友達にでもなった？」

俺が尻に刺さった画鋐を痛そうに抜いてると、梨絵がそっけない態度で話しかけた。

「お友達になったように見えるか？この画鋐見れば分かるだろ？あいつは嫌いだよ」

「ふーん。ノリちゃんがこんなに人のこと嫌うなんて珍しいね。

でもさ、痛みも愛情表現の一つなんだよ」

「恐ろしいこと言っな。痛さはお前だけで十分だっつーの。心も体もぼろぼろなのに……」

「何か言っただ？」

「いや…別に…」

それから授業は開始されたが、聖夜は何事もなかったかのように席についていた。

先生はいつものように黒板に数式を書いていくと問いを生徒に出した。

数学の先生は小松良雄という四十代のはげかけて太ったおっさんだった。

ホラー映画なら真っ先に殺されるような風貌だ。あだ名はこでぶだ。小松のでぶ、略してこでぶ。

こいつは、生徒にあまり人気がない。

ねちっこい性格で、問題が解けないとくどくどと説教をするからだ。

どうして解けない？どうして予習してこない？その繰り返しでうんざりする。

そうやって説教することで、憂さ晴らししているのが誰が見ても分かる。だから人気がないのだ。

「さて、この問題誰に説いてもらおうかな。今日は四月の九日だったな。なら、出席番号九番の奴に解いてもらおう。誰だ？」

出席番号九番：それは鎌田梨絵だ。俺はずっと彼女を見たが、こいつは恐れ知らずだから焦った様子など見せない。

「はい…」

とすぐに黒板の前に立ち問題をすらすらと解いていた。

完璧な計算式がそこに並べられ、見ていたこでぶもつまらなさそうな表情をしていた。

「正解だ…まあ、レベルを落としているからこれ位は解いてもらわないと困るからな。ほら、戻っていいぞ、なら次いくぞ」

正解してもそれかよ。俺はむっとしたが、他の奴も同じ考えだろう。

しかし梨絵もよく短時間であの問題が解けるな…

こでぶが言っていたレベルを落としてやったなんて真つ赤な嘘だ。負け惜しみで言っているから、あれはかなりの難題なんだ。

俺だともっと時間が掛かるし、ひよっとしたら間違えてる。

梨絵もあの性格の悪ささえなければ、頭も良いし、顔だってかわいい部類だ。



いや：俺何言ってるんだ？

そんなの認めてたまるかよ。あいつは悪魔なんだ。鬼なんだ。魔術師なんだ。

俺も知らず知らずに操られているんだ。

みんな外見に騙されるな。

## 6話

「さて…次は、武井！お前だ。お前がこの問題を解け！」

こでぶが次に当たてたのは、クラスでも大人しくて、人と話すのが苦手な女子だ。

「え？あ…はい」

武井は急に当てられてびっくりしたのか、小さな体を小刻みに震わせていた。

「速くしろ！とつとと前に出ろ」

こでぶが更に急かすものだから武井はパニックになっていた。

おろおろしながら分厚い眼鏡の中から黒板を何度も見ていた。

問題はよりによって超難問。こんなこのクラスで解ける奴いるのか？

俺がそう思っていると、案の定、武井はその問題を解くことができないうで、えつと…えつと…と同じ言葉を連呼していた。

「どうした？解けないのか？おいおい…これじゃあ先が思いやられるぞ？」

数分間同じ姿で微動だにしない武井を見ているのは辛かった。

でも、俺には何もできない。

しかしそんな緊迫した状況を打ち破るかのように聖夜が前に歩み出していた。

何をする気だ？

「おい…何だお前、転入生の双葉だったか、お前は呼んでいないぞ」  
聖夜はこでぶを無視してチョークを手に取ると、武井が解けなかった問題をすらすら解いていった。

そして更に黒板に新たな問題を書き足していた。

「先生、これ解いてください。先生なら簡単に解けますよね」  
「明らかな挑戦だ。」

ここでこでぶが逃げたら、権威を失うのが必然。しかしこんな問題見たことがない。

当然こでぶも困った様子だった。すぐには解けるはずもなく、終いにはうやむやにした。

「関係ないものを今の時間に持ち込むな！こいつは後で…解いてやる。」

だから、お前らはもう、下がれ！」

額には汗を大量にかいていた。動揺しているのがはっきりと分かる。

くく…いい様だ。

そのまま残りの授業は再開され、何事もなくこの時間は終わりを迎えた。

休み時間には昨日のように聖夜はクラスの連中に囲まれていた。

「すごいね。頭いいんだ」

「すかつとしたよ、あのこでぶの戸惑う姿を見たらさ…」

俺はそのまま寝たふりをして席から動かなかった。

黙っていてもクラスの連中の話の内容は耳に入ってきた。

「ノリちゃん。あいつ何者？凄すぎなんですけど…」

「俺に聞くなよ。俺だって意味不明なんだから。とりあえず聞くけどさ、あの問題お前でも解けた？」

先ほど聖夜がこでぶに出していた問題のことを聞いてみた。すると、梨絵はあっけらかんと答えた。

「無理無理…オイラーの等式なんて解けないから」

「オイラーの等式？何だそれ？」

「大学でも高度な数学の公式の一つ。高校のレベルじゃないわ」

「そんなの何でお前が知ってるんだよ」

「私も、ほら、秀才の一人だからさ」

「そうですか…」

こいつが自らを秀才と話しても決して間違いではない。俺はそう思っている。

しかし聖夜の奴はよく分からない。

狂人の部分もあるが、まともな部分もありやがる…まさかあそこで同級生を助けるとは思わなかった。

そして放課後が訪れた。

するとまた聖夜は俺のことを懲りずに待っていた。

「おいおい…お前も諦めが悪いよな」

二日しか経っていないが、初対面に近い相手に容赦なく切り捨てるような言葉を口にした。

それでも聖夜は引き下がらないし、食らいついてくる。

「ああ。それが俺の売りみたいものだからな」

「何度も話しているように、俺にはお前を助けるような力はねえよ。椅子に画鋏まで仕掛けやがって…」

「まだ朝のこと怒ってるのか。まったく…徳人も話ぐらい聞いたらどうなんだ？」

「聞きたくないな。それにお前が昨日話したようにお前の事は好きになれない」

こればかりは生理的なものだからどのように表現したらいいのか分からなかったが、

運命…そう聖夜は話していたが、そんなことってあるのだろうか？

「事が起きてからは遅いが…まあ、いいか。俺も気長に待つか」

そして聖夜は、それ以上俺を引き止めることもせず、ばいばいと手を振るとそのままいなくなった。

前途多難の新学期だな。まあ、いいや。帰ろう…

## 7話

時刻は夜の十一時を回っていた。

学校の明かりは全て消えていて、誰もそこにはいないはずだった。

そして深夜の学内は人の息遣いがはっきりと聞こえるように静かだった。

そんな中で一つの音だけが聞こえる。

「はっ…はっ…はっ…」

何かの音が冷たい廊下に響き渡っていたが、それが人が獣か分からない。声は苦しんでいるようで、言葉は発していなかった。

それから別の音が後からついてきた。

ずり…ずり…ずり…

引きずる音まで、その荒々しい呼吸音と共に響いていた。

闇に蠢くものが獲物を巣に連れて帰る、そんな感じだった。

引きずられる音は奥の視聴覚室まで続き、扉を閉める音が最後の音になった。

そこから先は何も聞こえなかった。

月明かりが眩しいくらいの夜に、学校の中は一つの変化を見せていた。

翌朝、俺がアパートを出ようとした時に聖夜が待っていた。

またかよ。

折角、少し落ち着いたかと思ってほっとしていたのに家にまで押しかけられると見えない不安が募るばかりだ。

当然のように聖夜のことを無視して俺は歩いていった。

すると、聖夜は俺を追いかけるように後ろをついてきた。

「なあ……」

早速話しかけてきたが俺は無視した。

すると後ろから翔太がやってきて、俺たちの姿を見るなり驚いた。

「ノリ！」

「え？」



俺はその声に振り向いてしまった。

どうしたんだ？そんな大きな声を出して、そう思いながらノリを見ると、あいつは目を真ん丸くしていた。

「え？お前ら…もう…そんな関係なのか？」

まさか、こいつ勘違いしている？俺の家から一緒に来たって思っているのか？

瞬時にそのことを把握し、俺は弁解した。

「違う…こいつが勝手についてきただけだ。だから、こいつとは何も…」

「そんな嘘をつく奴だったとは思わなかったぞーくそーこの薄情者」

俺の話も聞かないままにあいつは猛ダッシュで俺たちの前を駆けて行ってしまった。

よりによって親友に見られてしまうとは。

何も無いのに下手な噂でも流されたら厄介だな。

そんなことを気にしつつ再び歩き始めた。

「何だ？あいつ…クラスの奴だよな」

聖夜も翔太の様子に啞然となっていた。

「おい…ちょっと待てよ」

そんな聖夜をよそに俺はどんどん進んでいた。

教室に着くなり、変な噂はクラスを渦巻いていた。

嫌な予感は的中していた。

翔太は面白おかしく友達にばらしていたのだ。

あいつ…

翔太に文句を言うのよりも周りの反応が速かった。

「お前ら…まさか知り合ってたったの三日で」

「時間は関係ない。要は密度だ」

「そつだな。人が恋に落ちる時間は誰にも測れないからな」

そこ、上手いことを言うな！

「ノリは、つかみどころのない奴だったから良い機会だ。ここで今までの自分を脱ぎ捨てるんだ！」

「全てを俺らに話すんだ！ありのままの君を…」

話すか！ばけ！

「俺たちはお前の恋路は邪魔しない」

「みんなの公認だ」

どうしてそんなに話が進むんだよ。

誤解だっつーの。

「おい…ちょっと待て」

俺は必死に数人の友達のを止めようと思ったが無駄な行為だった。

「しかし…ノリも遂に…大人の階段を…」

「止めろよ!」

「照れるな。俺たちはお前らのことをこれからも温かく見守ってるからさ」

「そっだな…」

「ちよっ…ふざけんなよ!」

俺は思わず友達にも恥ずかしくて本気で突っ込んでみたもの誰も聞いてはくれない。

そうこうしている内に授業開始のチャイムが鳴った。騒いでいた俺の友達数人は虫の子を散らすように自分の席に戻っていった。

やれやれ…これで落ち着くと思われたが、隣にいた梨絵は俺にそんな安らぎすら与えてくれなかった。

「ノリちゃん。ああいうのが趣味なんだね。いやー…驚いたな。君の手の早さに」

「おい…誤解だつて。シヨウのアホが勝手に話しているだけなんだから。妄想だあいつの…」

「でも、アパートから一緒に出てきたんでしょ？」

恋愛は自由だよ。そんなに否定しなくてもいいじゃん。はははは…」

目が笑ってないぞ…

「ないない…あいつが勝手に俺のところにつきまとっているだけで、正直俺はあいつと合わない」

「合わないって、性格が？」

「生理的にな…」

「毒舌だねー…そんな言葉私にも話したことないのに」

「お前に話したら何されるか分かったものじゃないからな」

「それはその通りだけどね」

てへつと笑って見せるが、可愛らしさは感じられない。寧ろ恐怖感でいっぱいだ。

「だから、あいつとは何もないんだよ。クラスの連中も面白おかしく俺をからかっているだけだ。いい迷惑だ……」

「ふーん…そんなに言うなら、信用してもいいかな」

「勝手にしろよ。どうせ少し立てばほとほりも冷めるんだからよ」

それから英語の先生がクラスに入り、授業が始まった。

## 8話

「武井は、今日は来ていないか？」

担任の先生が血相を変えて二時間目の始まる前の休み時間に入ってきた。

そしてクラスを見回し、更にクラスメイトにも聞いて武井がいな  
いことを確認した。

何事だ？

クラスの連中も思わず顔を見合して相談し始めた。

先生はそのまま何も話さないうちに出て行ってしまったが、何かある  
のは間違いなさそうだ。

「なあ…梨絵、お前は何か知ってるか？あいつが休んでいる理由と  
か…」

「私を知るわけじゃないじゃん。武井さんとは仲も良くないし、それに  
…あの友達いるのかも知らないし…」

俺も同じだな…武井のことは何一つ知りはない。

「まあ…それもそうだな。でもさ、ただごとじゃないような気がし  
ないか？先生の様子とかさ…」

「そうだけど、人の噂ってすぐに広まるから嫌でも分かるんじゃないな

いかな？」

確かにな…

梨絵の言葉がそのまま証明されるように数時間後には俺の耳にも武井の事は入った。

武井は昨夜から家に帰っていないらしい。そして朝も帰ってこなかった。

両親も昨日は家にいなかったらしく、帰っていないことを朝に知ったらしい。

もしかしたら友達の家泊まっているのかもしれないと思い、登校時間まで待っていたらしが、

先生から登校していないことを聞くなりすぐに警察に連絡した。

そして俺たちは担任にその話をそこから更に遅れてから聞かされた。

「話を知っている奴もいるとは思うが、武井が昨夜から行方不明らしい。

行きそうな場所は探したらしいが、どこにもいないらしい。

それでだ…気がついたことがあったらどんどん教えてほしい。これは時間の問題だ。

時間が過ぎれば過ぎるほど、探すのは困難になるし、武井自身にもよくない可能性が起こる。

だからどんなことでもいいから、気がついたことがあったら話してくれ」

生徒は全員黙って聞いていた。しかしどこかリアルティーに欠ける。

それは武井がクラスでも目立たない存在だからってこともあるの  
だろう。

数分でその話も終わり、俺たちは帰された。

「ノリ…一緒に帰ろうぜ」

翔太が誘ってくれたので、俺は素直に従った。

「なあ…お前、武井のことどう思う？」

帰り道歩きながら翔太に自然な感想を聞いてみた。

「さっぱりわかんねーよ。あんな大人しそうな奴が家出ってことは  
ないから、

何か事件に巻き込まれていなければいいけどよ」

「そうだな…俺もそう思っている。自分の意思でいなくなったので  
はないような気がするんだ。

っていつても心当たりは全くないけどな」

「どこ行ったんだろうな…武井の奴」

そしてその日は、警察も目まぐるしくあちこちを動いていた。

この物騒なご時勢、初動捜査が発見の鍵を握るから警察も決して  
軽んじて捜査していなかった。



そんな努力も空しく、武井がその日に見つかることはなかった。

「残念ながら武井はまだ帰っていない。それで、不審者情報も入っているそうだから部活動は今週中止にする」

担任は武井の近況報告と生徒への注意事項を話した。

ここで分かることは武井が第三者によってさらわれた可能性も出たということだ。

「不安になっている者もいると思うが、くれぐれも勝手な行動は取らないように」

再度釘を刺され、クラスの中もどよめいた。

各々が自分の通学路は大丈夫なのだろうか？そういった感じだった。

しかし…どこか引っかかる。

これは俺の体がそう感じているだけで、何も根拠がない。

そんな確証もないもののせいで、昨日は良く眠れなかった。

眠たい目をこすっていると梨絵が話しかけた。

「ノリちゃん。心配？」

「何が？」

「帰り道襲われたらどうしよーとかさ」

「お前…こんな時に不謹慎だな。ま…でも不安なのは不安だ」

ぼろりと本音が漏れてしまった。

「やっぱり？何かいつもと顔つき違うからさ…」

顔つき？不安？やっぱりそうだろうな。

俺は得体の知れない恐怖に怯えている部分はあった。

最近変だ。

あの転入生聖夜の出現から、どうも緊迫感というか、体がぴりぴりと緊張しているような感じになっている。

「ノリちゃん、本当に大丈夫？顔色悪いよ」

「そうか？」

うーん。そう言われると、頭痛も眩暈がするかもな。

「保健室行った方がいいってば…」

そう提言してくれるのが速いか、俺はすつと気を失ってしまった。

「ノリちゃん！」

梨絵の大きな声が響いたのまでは覚えていた。

## 9話

「あ…」

目が覚めた時、俺は保健室にいた。時刻はもう昼の十二時を回っていた。

「う…ん」

三時間もここにいたのかよ…

それにしてもまだ気分が悪い。熱でもあるかのように体が重いし、頭がぐらぐらしやがる。

俺はゆっくりと体を起こした、すると

「あれ？気がついたかい？」

保健室の先生が俺の様子に気がついた。

「あの…俺、どうしたんですか？自分でも良く覚えていないんですけど」

頭を抑えながらそのように聞いた。

「ホームルーム中に気を失ったんだよ。まあ、軽い貧血だよ。クラスメイトにお礼言っとくんだよ。ここまで運んできたんだから」

「貧血ですか：俺、なったことないんだけどな」

「なったことがなくても、なる時はなるんだよ。体調不良で夜更かしてもしたんだろ？」

でも気にすることはないよ。そんなに重いものではないからね。まあ、気分が良くなるまでは横になつてな」

「分かりました」

俺は素直にその言葉に従って、休むことにした。公認でどうどうとサボれるのなら言うことはない。

とりあえず昼が過ぎるまでそこにいて、午後の授業は出ないでそのまま家に帰った。

担任の先生もそれに異論はなく、すんなりと了承してくれた。

昼過ぎの通学路は静かだ。普段はこんな時間に帰ることがないからどこか新鮮だ。

通行人も少なく歩きやすいので、ついついゆっくりと歩いてしまふ。

働く人たちを横目に俺は、今晚のおかずのことを考えていた。

折角早く帰れるのだから、今日は少し手の込んだものでも作ろうかな？

焼いたり、切ったりだけのものよりは、煮込んだりするものにしてみるか。

シチュー…うーん。カレーもいいな。

それなら商店街で一通り揃えるかな？ここいらは、材料別の商店が並んでいるから楽だ。

魚屋、肉屋、八百屋、雑貨屋。高度成長を遂げている町も存在するが、ここは昔から残っている。

馴染みの人たちがおまけしてくれるので、とても助かっている。だから忙しくない週末はここで買い物することになっているんだ。

「いらっしやい。おや？ノリちゃんじゃないの。まさか、サボリ？」

ふらつと入った行きつけの八百屋のおばちゃんが俺に声をかけてきた。

「そんなんじゃないよ。少し具合がね…」

「どこが悪いのかい？」

「軽い貧血。寝れば治るって…それよりもさ今日安い野菜ある？」

「ああ…それならじゃがいもと玉ねぎかな？」

ノリちゃんなら、同じ値段でほうれん草もサービスしとくよ

「うん。それならそれに人参もつけて」

「はいよーじゃあ、これとこれとこれで…いや、これももっていきな！」

そう話しておばちゃんは大根をサービスで付けてくれた。これで何と五百円。破格もいいところだ。

袋に野菜をたくさん詰めてもらつと、俺はおばちゃんにお礼を言つてそこを出た。

「後は…肉とカレー粉か…」

八百屋の前でうろつろしているよ、

「徳人…」

横から声をかけられた。近所の人か？そう思つて声のする方に顔を向けると、何でこいつがここにいる…

聖夜の奴だった。

俺はまたいつものように無視してあいつに背を向けた。しかし聖夜は俺の前に立つて行く手を阻んだ。

「おい、どけよ。ここまでしつこいとは思わなかったぞ？」

俺は睨んでしまった。

「わざわざ、学校をサボつてまで俺に何の用があるんだよ！」

こつちにこいと聖夜は俺を誘つた。

俺も知人だらけのこの商店街で揉めるわけにもいかないの、し

ようがなく聖夜の後を追った。

聖夜が案内したのは近所の公園だった。

滑り台もブランコもシーソーもあるが子どもの姿はそこにはない。

それはそうだ。平日の昼過ぎに小学生や幼稚園児が遊びに来ることなどないのだから。

俺はベンチに腰掛けたが聖夜は座らなかった。

「徳人、もう諦めたらどうだ？そこまで強情になることもないだろう？少しは俺の話聞いてくれてもいいと思うが？」

座っている俺を少し威圧しているように、強めのトーンで話しかけた。

「そうだな…お前の話がいんちきだとしても、ここで終わらせたいからな。」

俺の学園生活が破綻する前にもお前という厄介な存在をなくしておきたい」

「厄介な存在って…まあ、いいか」

こほんと咳払いをすると早速本題に入った。

「ならまず聞くが、徳人が体調の変化を感じたのはいつからだ？」

それが何の関係があるのか知らなかったが、正直に今朝からだ



答えた。すると立て続けに聖夜は質問する。

「体が何か感じなかったか？」

「何か？」

「どこかいつもと違うとか……」

「うーん……そういえば、お前と初めて会った時に近いかもな。

苛立ちと、気持ちの悪くなる感覚だ。今でもお前と話しているだけで具合が悪くなりそうなんだが……」

嫌味も含まれていたが、嘘ではなかった。こいつと対峙すると鳥肌が立ち、自然と妙な胸騒ぎが起こる。

何度か顔を合わせることでそれも解消されつつあるが、未だにその感覚は失われていない。

「やはりか……」

一人で分かったような顔をしていたが、俺には何のことだか分からない。

「この前、呪いを解いてくれと俺は頼んだのは覚えてるよな？」

「ああ、頭がいかれてるんじゃないかねえかって思ったよ」

「呪いは存在する。歴史上にもいろいろ存在するだろ？」

記述やら伝承で残っていてもいる……でもそのほとんどはまがい物だ。人を恐怖させる手段であり抑止力のために利用され本来の形を濁

しているんだ。

だが、そんな中にも純粹な呪いは存在する。本物の呪詛って奴は、人の形やその運命まで変えてしまうんだ。

俺を見れば分かる…。」

俺はじろじろと聖夜を見たが、どこが変わっているというのだから？どこからどう見ても普通だ。

「角でも隠しているのか？それとも尻尾か？」

「そんなのあるか！生きてきた証が呪いそのものだ。

信じないかもしれないが、俺は四百年行き続けている」

「は？」

「だから四百年このままだということだ」

こいつ本気でそんなこと言ってるのか？

俺には到底理解しがたいだから証明してもらいたかった。

「やはり信じないよな…それなら」

すると聖夜は短刀を取り出した。

どこから持ってきたのか知らないが、切れ味の良さそうな刃渡り三十センチぐらいの代物だった。

何をするんだ？そう思っていると、聖夜は躊躇うことなく自らの腹部を貫いた。

「お…おい！」

唐突の出来事に俺は対応できない。まさか、自殺か？

聖夜の側に駆け寄りおろおろする俺とは違い、あいつは声を上げなかった。

しかしナイフは腹部にしっかりと刺さっている。

それははっきりと見えた。血だつて服の上からにじみ出ている。手品ではないし、我慢できるような怪我っていう程度じゃないぞ？

それから聖夜は自ら短刀を腹部から引き抜くと、短く速い呼吸をしながらふらふらと立っていた。

「はあ…はあ…大丈夫だ」

俺は正直怖かった。こんな場所がまさか惨劇の舞台になってしまふなど数分前まで予想などできなかったのだから。

そして黙って見ていると、重傷とも思えるあの傷がどんどん塞がっていた。

「これは…」

一部始終を啞然としながら見ていると、聖夜はふふっと笑っていた。

傷はなくなりすっかり元通りになってしまった。

「証明したんだよ。俺が四百年生きているっていうことだな。だっ

て、徳人は俺の言葉では信じないだろ？」

平然としながら何を言ってるんだ、こいつは…

まじで心臓が止まりそうになっただぞ。

犯罪者として警察に捕まる最悪のシナリオまで頭の中に浮かんだ。

「だからってあんなびっくりショーを俺に見せるんじゃないよ！  
もっと軽い切り傷とかにしてくれ。本気で焦っただろっが！」

怒鳴りながらもどこかほっとしていた。

「まあ…これで、少しは信用するだろ？」

にっこりと笑っているが、こっちは頭が痛い…

## 10話

それから聖夜は落ち着いた俺にゆっくりと話しかけた。

「始まりは今から四百年前。貧しい農村であれば起こった」

「四百年前：関が原の戦いとかの辺りか…」

「流石学生だ。そうだな。まあ、そのせいもあってか、貧しい農民は生きてはいけなかった。」

食べ物を求め、必死に探して死んでいくものが数多にいたよ。だからあんな甘い誘惑にも人は従ったのだ」

過去を振り返り、自らの過ちを悔いているかのように聖夜は奥歯をぎりりとかみ締めていた。

そこにはへらへらしたような甘い顔はなかった。それだけでただ事ではないことははっきりとした。

「俺の村にふらりと訪ねた一人の男がいた。見かけはどちらかといえば、僧侶に近かったな。」

黒い衣に身を包んで、顔を布でぐるぐるまきにしていたから眼孔以外全く分からなかった。

そんな見ず知らずの男は、疲れきって死ぬのを待つばかりの俺たちに甘い誘惑を持ちかけた」

聖夜はぎゅっと両手を組み合わせながら、その力を緩めることをしなかった。

「ここにいる全ての人間で殺し合いをして、生き残れたらそいつの望みを叶えてやるよとな…」

「それで…どうした？」

聞いてはならない気もしたが、それでは先に進めない。

「したに決まってるだろ！あの時代の人間はなあ、この時代と違って生き残るのに必死なんだよ。」

食うものがなければ雑草だって食べるし、泥水だって飲むんだよ！お前ら生きている時代とは桁外れだ。だから殺した…何人もな…」

「そこに両親は？」

「いたよ。まあ…俺の手ではなく違う奴の手で殺されたがな。」

みんなはそれだけおかしくなっていったんだ。貧困にあえぎ、苦しみ、死ぬしかないのだと分かったら誰でもそうする。

弱肉強食の時代だからそれが許される」

こいつは、はっきりとそう言った。誤魔化すこともしないで…

時代背景を考えればそれも分かる。

こいつの放つ独特の雰囲気はそれらを含んだ経験が現れていると  
いうことが。

ごくりと唾を飲んで、冷や汗を背中に流した。

「ここからが本題だ。」

そんな意味不明なことを持ちかけた僧侶は、約束どおりに生き残りの私に力を与えた。

しかしそれは望んではいけないものだったんだ」

「さっき見せた不死の力か？」

「そうだ…あの日から私は死ねない体になってしまったんだ。

あの僧侶の力を受け入れてしまっただけからな…なあ、七つの大罪って知ってるか？」

「あ？人間の抱く欲のことか？」

「そうだ。あの僧侶は言ったよ。人間の七罪をお前が代行して背負うのだと…人間は罪深き生き物。それを一掃するためにも…とな。

そして唯一かけられた呪いを解きたいのならこの先に五十年周期で出現するであろう自らの同類を全て滅ぼせだど…

あの時の俺には何のことだかさっぱり分からなかったよ。でも…ここ最近になってようやく分かりだした」

「最近って四百年もかけることなのか？」

「俺の呪いを境にゆっくりと俺の同類が出始めた。おそらくあの僧侶が行ってきた行為だろう。」

さっきの話の続きだが、七つの大罪は、怠惰、暴食、色欲、強欲、嫉妬、激怒、傲慢だが、

それになぞらえたような仕打ちを与えられた。そういつた欲を持った人間を探し、その魂を食わなくては生きていけないんだ」

「ちょ…ちよつとまで！まさか、お前もそうやって生き続けたってことなのかよ！」

「それは違うな。俺だけは七つの大罪にはない呪いをかけられた。」

それは執着：生に対するものだ。生きたい、生き続けたい。それが形になってしまったから死ねないことができない…

そうすることが俺そのものの仕打ちだ。他の奴らは自らの欲望を止めれば、死ねるけどな…ま、それはしないだろう」

「どうしてだ？」

「欲っていうのは次から次に湧くんだ。それを抑えられるのは…死んでから気がつくもんだ」

「それなら誰も呪いを解こうなどと考えないだろうが！」

「たぶんそのことをあの僧侶も知っているんだ。」

呪いをかけられたものが八人揃って何をするのかは分からないが、俺たちが殺し合いをすることはないとな…」

「運命共同体みたいなものか…しかしそれでお前は何故俺にその呪いを解けと言っ。

俺がそんな偉そうな存在に見えるか？」

一番聞きたいのはそこだった。

一介の高校生の俺は今までそんなこと体験したこともない。それに親戚の中を見回してもそんなことできる奴はいない。

「お前は、俺の子孫なんだよ。直系のな」

「へ？」

「簡単に言えば子どもみたいなものだ」



「ちよちよちよ…ちよつと待て。話が飛びすぎて訳がわかんねえ」

「驚くのも無理はない。お前と初めて会った時に俺も驚いたのだからな。まさか…生き残りがいるとは…」

「生き残りだ？」

「そうだ。俺は呪いをかけられてから、子どもを数人持つてみたがその全ての子孫が途中で途絶えていった。

俺という呪いの効力のせいだな。自らの子孫を持つことは諦めてから百年以上は経つのに…」

まさかこんな形で出会えるとは思わなかった」

「そ…そんなことを急に言われてもなあ。納得できるわけないだろう」

「お前の周りの人間はどうなんだ？生きながらえているか？」

「ま…まさか…」

俺の両親が長生きできなかったのも、親戚が死んでいくのも…呪いのせいってことか？

そんな馬鹿な…

俺は取り乱していたのにぴたりと止まった。

「どうやら思い当たる節があるようだな」

次の瞬間、俺は聖夜に向かって怒鳴った。

「嘘だ。そんなの信じるかよ！お前が俺の先祖で、不死身だ？呪いだ？何だよそれ！笑うしかねーよ。はは！」

怒りが湧き上がるのはどうしてだ？今のこいつの話聞いていたらイラついてきた。

「それで何で俺がお前の呪いを解かなければならないんだよ！

お前が他の奴らを殺すでもして解けばいいじゃないか！」

「無理だ…私だけはお前の力がないと呪いが解けない。

殺されない俺が、殺せる奴らを殺したらあっさりと呪いは解ける。だからそれも考慮して俺だけは他の奴らを殺せない体にされているんだよ」

「ちっ…だからって…俺がお前を助ける理由なんかにはならねえぞ！」

俺はぎろりと憎悪にも似た気持ちで睨みつけてやった。

「お前の気持ちも分かる。だが、時間はない。危機は迫っている。お前も学校の変調に気がついたのだろう？」

「む…」

俺の貧血のことを言っているのか？

「あれはお前が感じたんだ。呪いを持つ者が側にいるのをな…」

「ってことは、武井がいなくなったのも」

「可能性は大いにある。だから俺はこうやってお前の前に立っている」

「ちくしょう…全部受け入れろってか。お前の話をよ…」

「嫌でも先に分かることだ。こればかりはな。俺はずっと探し続けていたんだ。」

自らの呪いを解ける者をな…しかしそれは叶わなかった。

僧侶が話した最後の言葉に、全ての大罪を背負うものが現れた時にお前の呪いを解く鍵の者も出るはずだ。

そこでお前は他の者を滅ぼせる力を得るはず…とあった。

四百年前の俺には分からなかったが、このことを話していたんだと思った。体が自然と反応を見せたのだからな。

徳人、お前もそうだろ？」

「気安く名前を呼ぶんじゃないやねえ！俺はお前の意見に従う気にはなれないぜ。」

自分でも受け入れられてねえのによ…」

「七つの大罪者が揃った今、これからお前らに何が起こるか分からないのだぞ？」

「ちくしょう…なんだってこんなのに巻き込まれるんだよ！

俺の両親もそんなことのせいで死んだのかよ」

混乱していて頭の中がぐちゃぐちゃだった。

「全ては俺が蒔いた種だとは分かっている。済まない…それでも今はお前にすぎるしかないんだ。頼む！」

聖夜は深々と頭を下げた。

俺もその姿を見てみると、これ以上何もいえなくなってしまった。

落ち着きを少しずつ取り戻してから、大きく深呼吸した。

「分かったよ…もう、いいよ。俺はあんたを怨んだりはしてねえ。ただ…非日常の出来事が多すぎて事態を飲み込めていないだけだ。クラスメイトが窮地にさらされているのなら動かなくちゃいけないのも分かっているさ」

そつだ。聖夜は悪くはない。

四百年もの時代を生き抜いていくのには、相当の地獄だったのかもしれない。

めぐり合えた唯一の希望が俺だというのならそれに順ずるか。

「それなら、何をすればいいんだ？」

早速形にする段階で話を切り出した。すると聖夜はにっこりと微笑むと。

「とりあえず徳人の家でご飯でも食べながら話そう」

「おいおい…」

さっきまでのシリアスモードはどこにいったんだよ。

この切り返しの速さ…四百年生きてるっていつのは伊達じゃないな。

しかし俺は本当にこの女の子孫なのかよ。未だに信じられない。女じゃなければこんな話をされた時に、多分ぶん殴っている…

## 11話

とんとんとん…

まな板で野菜を切る音が響いた。一方でふつつつと鍋に入っていた水も沸騰し出した。

手際の良い手つきで、切った野菜を鍋に入れて、まな板で今度は別の野菜を切った。

余った野菜を利用してサラダも作る。同時に二つの作業は慣れないものだったが、最近では当たり前のようにできるようになった。

しかし台所で何故俺一人が立っている。

「おい、客人」

奥でだらだらしている妖怪に声をかけた。

「何だ？」

「暇なら手伝ってくれないか？それともお前がその長い経験を生かして俺の代わりに料理を作ってもいいんだぞ？」

「ばす」

「何だよその軽いノリはよ…さっきまでの張り詰めた感じはどういったんだよ」

「それはそれ、これはこれだ。料理に関して俺には期待しない方がいい。」

手先は器用なのだが料理をすると必ずと言っていいほど失敗する。過去に四度ほどガス爆発を起こしているが、それでもよければ手伝うぞ」

「お前…脅しかよ。どこの世界に四度もガス爆発させる馬鹿がいるんだよ」

つくならもつとましな嘘をつけていうんだ。

「あの時はまいった。ガスが漏れていることに気がつかなかったり、油を大量に入れすぎて火の回りにもぶちまけたもんだから引火してな」

嘘じゃないのかよ…それに四度もって学習しないのか？四百年も生きていて…

「どんな料理したらそうなるんだよ。普通にやっつてれば有り得ねえだろうが。もういいよ。お前には頼まねえ」

俺はそのまま聖夜の方を見ることもなく、料理にせっせと専念した。

三十分後。

食卓にはできたてのカレーとサラダが並んだ。

本当はもう少し置いてから食べるのがベストなのだが、

あの口うるさい客人が腹が減ったと散々抜かすものだから待たず

に出した。

聖夜はがつつくようにカレーを食べた。俺が一杯食べ終わる前に三杯は食べていた。

「お前は遠慮ってものがないのかよ」

俺は見かねて愚痴ってやった。しかしそんなことを屁とも思わない相手は、凶々しくも四杯目のおかわりをしていた。

「もう米がねえよ！」

結局俺は一杯しか食べられなかった。

「腹も膨れたことだし、話してくれるんだろ？さっきの話の続きをよ……」

熱い茶を二人分入れて持ってきた。

「気が利くな……」

「お前から見たらな」

嫌味も言い飽きてきた。

座ってお茶をすすると、早速本題に入った。

「なら、話すが。まずは俺の呪いの解き方だが、それは俺は知らない。」

徳人お前自身が持っている潜在能力なのだからな」



「潜在能力？」

「ああ…俺の血を受け継いだ者は、皆呪われて原因不明の病や急な事故に襲われ現代までに生き残ることはできなかった。」

しかし新堂家は生き残っていた。呪いを薄めて、徐々に浄化していったんだ。それがお前ら新堂家に宿る力になったのだ」

「何を根拠に？」

「お前には自然に呪いを祓う能力が備わっている。だから呪いそのものが憎い存在に思えるし、

今日のように学校にいるであろう呪われし者の能力や気配にあてられたんだ。

思っている以上に敏感だからな」

「それだけで、俺が呪いを祓えるという根拠にならないだろ」

「いや…俺ははつきりと感じた。俺の細胞がお前を否定し、何かを恐れているのだからな。」

まさか長い年月をかけて、俺自身の手で呪いの特効薬ができるとは…」

「俺は、お前の薬じゃねーよ。でもよ、俺の親族も呪いの力で短命になったんじゃないのか？それなら俺も…」

「その可能性は十分だ。呪いを祓う能力があるといっても、長い年月を掛けた血族の呪いまでは祓えない。」

原因を絶たないといけないのだからな。自らの呪いを解くには俺の呪いを解くことが第一だと思っている」

「俺自身のためにもお前の呪いを解かなくてはならないってことか…」

「そういうこと。呪いつてのは末代にまで影響するからここで因縁を絶っておくのも悪くないだろ？」

「元はといえばお前の生み出したものだろうが」

「まあな。だから俺の呪いを解くのはお前自身だから俺の体を自由に使ってもいい。いろいろ試してみてくれ」

「試してくれって言われても…」

聖夜を見回して思わず恥ずかしくなってしまった。

「今日は無理だ。もう少し考える時間を俺にもくれ…お前には協力はする。それを変えたりはしない」

聖夜がとんとん拍子に事を進めたいのは分かるが、俺がそれを受け入れられるだけの時間をもらっていない。

だから少し落ち着きたかったのかもしれない。

すると聖夜も大人しく俺の意見を受け入れてくれた。



## 12話

「ところで、お前のことは、何て呼んだらいいんだ？ご先祖様か？それともおばあちゃんとか？」

「聖夜でいい！それから苗字で呼ぶのも止めるよ。変な距離感があるって気持ちが悪い」

「まったくどうやってつけたんだよその名前。双葉聖夜だなんて、乙女チックもいいところだ」

「四百年前の名前は違っただろうからきつと誰かに付けられたか、自分でつけたかである。」

「まあな。ダサイ名前だったから改名したんだよ。戸籍なんか元々存在しないしな…」

「それならどうやって高校生になり済ませられるんだよ」

「そりゃ、年の功ってやつさ。四百年も生きていれば自然とコネクションってのはできあがる。裏からの情報操作など容易い」

「確かにヤクザなんかより怖い存在ではある。暗殺されても困るからこれ以上は聞かないでおこう。」

「今まで高校ばかり回っていたのか？」

「だって俺は十七の年でぴたりと止まってしまったからな。」

「どの時代も学生を演じるしかないだろうが…そしてこの国を南か」

ら北まで飛び回ってみたが有効な手がかりは何一つなかった」

「一度も聖夜の同類とは出会わなかったのか？」

「いや…一度だけ。憤怒の称号の奴にあつたが、あいつは狂っていた。」

見境無しに人を殺しまくっていたからな。俺も死なない体ではあつたが、初対面であつけなく五体をばらばらにされたよ」

「おいおい…」

スプラッター映画のワンシーンのようなことを何事もなかったかのようにあっさりと話したので、俺は逆に引いた。

「俺の考えでは、最近生まれた同類がきつといなくなった武井と関係しているに違いない。」

こんな近くで会えるとは運がいいのかもな」

俺は運が悪いと思っている。

「もう一ついいか？」

「何だ？」

「聖夜みたいな奴のことは何と呼べばいい？」

呼び名がないのはこちらも困った。

「そつだな、一言で表現するなら呪者だな。カースヒューマンでもいいし好きなように呼んだらいい」

「そうかい。だが、こいつらはどんな能力があるのか全く分からないんだよな」

「そうだな。会ってお楽しみつてところだ」

「そんな楽しみはまずごめんだな」

ふつとため息をついた。

「俺の望みはただ一つ。人間に戻りたいだけだ。それだけで十分だ」

「それだけって…それが難しいんだろうが」

「徳人なら大丈夫だ。最も優秀な子孫だからな」

「どんな根拠から出る発言だ？」

「別に…」

こいつは本当に適当だ。幾多もの死を体験しているから経験値は相当だと思っんだが、俺ら高校生と変わらない幼さも垣間見せる。

「もう一つお願いしていいか？」

聖夜はそう言ってきたが、これ以上のお願いはないからとりあえず聞いてみることにした。

「ここに住まわせてくれ」

「は？」

何を言っているのか分からず、俺の思考回路がその言葉を理解するのには時間が掛かった。

それでも相手は遠慮などしないでどンドン話を続けていた。

「実は、俺は住居というものが存在しないんだ。まあ、それでも何とかやってこれたがな。ははははは…」

ここまで能天気だと呆れるというよりも賞賛に値する。

「今までどうやって生活してきたんだよ？」

「まあ…その…金はあるんだ。しかしどうも一箇所に留まる癖がなくてな。放浪しているのが俺の生活の大半だったからな」

けたけたと笑いながら俺の方を見たが、同情する気にもなれない。

まあ、そりゃ、四百年も生きていれば同じ場所にずっといるとは考えられないが、それとこれとは別だろう。

### 13話

「そう言うことで、ここを拠点にこれから動こうと思っている」

俺の表情を伺うこともしないで最後まで自分の意見を押し通した。全く…人の気も知らないで、こいつは一人で一方通行だな。

それに現実も見えていない。そのことにまず俺は噛み付いた。

「おい！冷静に考えてもまずいだろうが。学校にこんなこと知れたら俺が退学になる。それに回りの目も考えろよ」

「なーに。上手く誤魔化すから大丈夫だ。それに親戚なんだから、別に問題はないだろうが」

こいつは…本当に俺の気持ちを分かってないな。お前がよくても俺が駄目なんだよ。

「お前を親戚だ何て思えるかよ。四百年も生きているんだぞ？それで今更俺のご先祖様だって言われたってピンとくるかよ！

年をとってる割に軽すぎなんだよ、お前は！」

「おいおい…随分と否定的だな。でも学校の事は心配するな。

さっきも話したが、伊達に年は取っていない。一言、校長にでも話しておけば容認してくれる。

そうだな…お前の事は遠い親戚ということにしておいて、住む場所を見つげるまでに住まわせてもらうという設定にしておこう」

「あのなあ…現実にはちゃんと自分の住む場所を見つげるんだろうな



「？」

そこは確認しておきたかった。この先こいつと寝食を共にするのは気が狂いそうだ。

しかしあいつはしたり顔でさらっと言いやがった。

「そんな訳ないじゃん。金の無駄だ」

「おい！さっき金ならたくさんあるって話しただろうが！」

「あるけど、宿が折角あるのに無駄に使ったら勿体ないだろ？」

ここは下宿かよ。こいつは甘い顔するとどんどん付け上がるな…

最初の時のように完璧に冷たくあしらった方が良かったと、自らの行為を振り返り後悔してもみた。

「ちなみに金はいくらあるんだよ？」

「そつだなー…きちんと数えたことがないから分からないが…多分三億はあるんじゃないか？」

「さ…三億？」

同年代にしか見えないこの妖怪ばあは、同年代とは思えない金額を口にした。

すげえ…

三億あったら何が出来る？とりあえず料理が快適にできるように

システムキッチンにここをリフォームして…

って住む場所変えたほうが良いに決まってるだろうが！

思わず心の中でのりつつこみをしてしまった。

「こんなに金があっても持ち運ぶのに苦労するんだがな」

「持ち運ぶって…お前、持って歩いているのか？」

「流石に常に持ち歩くのは無理だから、駅前のロッカーに入れてある」

「おい！物騒だろうが。誰かに盗まれたらどうするんだよ？」

「だってさ…俺が口座を持ったら怪しまれるだろうが。四百年も生きてるんだぞ？」

「戸籍もないに等しいのに…口利きしてもらわなければどこにも適応できないのが現状だ」

「それはそうだが…」

「手元にあればすぐに使えるから便利なのは便利だぞ？」

「まあ、強盗にも何度かあったが、そいつら全員半殺しにしてやったがな」

「そいつらご愁傷様です…こいつ自体が金庫みたいなものだから、かえって持ち歩いた方が安全でもあるのか。」

「ふむ、と納得してしまった。」

「金はどうやって稼いだ？」

「年の功を利用して、情報を買ったり、裏の方で人には言えない活動をしたりな…ふふふ知りたいか？」

目がやばい。これ以上は聞かないでおこう。

「いや…いいです」

「金の話の続きだが、ここに住まわせてもらう以上家賃として金は払う。そうだな、いくらがいい？八万か？」

「いや…それは」

多すぎるだろう。この家賃が二万なのに、その三倍以上ももらったらリッチな生活になってしまう。

「少ないのか？なら十万でどうだ？」

こいつの金銭感覚は良く分からない。だから前もって諭しておくか。

「金は食費分だけでいい。後はお前が必要なものを自分で買えよ」

「それだけでいいのか？」

「金にそこまで執着してないしな。幸いまだ学生だ。金のかかる生活はしていない」

さらっと話してみたが、これは本心だった。もう少し大人になれ

ば、車やら家やらと欲が出てくるのかもしれないな。

そう思っていると、

「偉いなー」

聖夜は大きな声を上げながら、ばんばんと俺の背中を思い切りたたいた。

「が…ごほっ！ごほっ！…おい、何すんだよ！」

「いやー若いのにすれてないってのがなあ。俺は嬉しいよ」

俺のことを温かい眼差しで見ていたが、こちら辺は年を確実に感じるな…うん。

「でも、お前の望みとやらが叶ったら出て行ってくれよ。それだけは約束だからな」

「分かってるって。お前も年頃だし、女の子をここに連れ込めないのは何かと不便だからな」

「う…うるせーよ。そんなんじゃないよ！」

「赤くなるな。ごく自然なことだぞ？俺だって未婚の母だったが、恋多き人間だ。その気持ちはよく分かるさ」

参考にもならない発言を連発され、俺は気が滅入っていたが、聖夜は持ち前の明るさを絶やすことはなかった。

「徳人も好きな子がいるのか？」

「いねーよ!」

「照れるなよ!俺にこっさり教えるよ。悪いようにしないからさ」

完全に調子に乗ってやがる。だからここいらで俺はこいつに身の程を知らせてやろうと思った。

「これ以上詮索するなら、その度におかずが一品減るがそれでもいいか？」

その効果は抜群だった。こいつは基本、食いしん坊だ。

食というものが生きる上で楽しみの一つだとしたら、この上ない懲罰だ。

だから大人しく従った。俺にこれ以上余計な詮索はしなかった。

やれやれ…これで少しは落ち着くだろう。

そう思って、二杯目のお茶を湯のみに注いだ。

## 14話

夜になると、妙な緊張感がこの部屋に漂った。まるでここが異世界のようだからだ。

今まで異性が俺の部屋に泊まることなどあるはずもない。

例え親戚だとしても、こいつはどっからどう見ても同じ年の女性だ。

意識するなという方が無理に等しい。

さて…どうしたものか。

俺はしばらくの間困惑していたが、聖夜は逆にあっさりしていた。

「一緒に布団でも別にいいぞ。

お前のことだから気を使って別の場所で寝るとか言い出しかねないからな」

こいつ…本当に何も考えていないよな。だったら思い知らせてやるよ。

俺は違った意味で心に火が付いた。

「ご心配なく。お前がどっかで寝ろよ。廊下でもキッチンでも…俺は布団で寝るからさ。

俺は家主、お前は居候。立場分かってるよな。それならお前がもつと俺に気を使え！」

「お前：そこまで薄情な奴だったのかあ！さっきは褒めてやったのに…くそっ前言撤回だ。」

「お婆さんは悲しいぞー！」

「こんな時だけ年を武器にするな。卑怯な奴だ。それにお前は野宿の経験も絶大だろうが。」

「だから心配はしていない。そういうことで」

そのまま俺は無視して、片づけをするとさっさと布団を敷いた。

「あ…これなら貸すからよ」

そう言っって寝袋を押入れから引っ張り出し、聖夜に押し付けた。

「それじゃあ、こっから入るなよ」

「あ…」

そのまま聖夜の反論も待たないままに部屋の戸を閉めて、追い出しました。

非常にスムーズに効率よく俺は自らのいつものスペースを確保することができたのだ。

「はあー…」

今日という日は、俺の人生でも大きな転機の日だったのだろうか？一人で冷静に頭の中を整理したかった。

布団の中に入っても悶々と考えることばかりで落ち着かない。

やれやれ…これから厄介な毎日になりそうだ。

欲を抑えきることができない。

もとだ…もつと…

喰らわないと空腹が満たされることはない。

喰らい続けなければ私の人格はおかしくなりそうで、肉体も崩壊しつつある…

小動物の魂は小さすぎて、腹を一杯にするには何十という数が必要になる。そんなの手間以外の何物でもない

効率よく空腹を満たすのなら、やはり人だ。無尽蔵の欲を持った人の魂はおいしい。

暴食の欲という呪いをかけられた以上、私が生き残るには同じ欲を持つ人間の魂を喰らわなければならない。

食に飢えた人間…

探すのは意外にも簡単だ。

太っている人間を見つければいい。食の欲は自然と体に現れる…



昨日は初めて人間の魂を食ったが、あれは美味だ。あの味を忘れることはそうそうできないだろう。

昨夜の食感を思い出すだけで身震いがして、これが快感にも変わっていた。

元々私は人間だった。しかしあの不可思議な僧侶に人生を大きく変えられたのだ。あいつは何なんだ？

私の望みを叶えはしたものの恐ろしい呪いまでかけて…

あ…また腹が減ってきた。

次の日、俺の朝は激怒で始まることになった。

朝六時、目覚ましもならないうちに俺は、はっと何かに気がついた。

俺の布団が妙に厚い…それに重さを体に感じる…

寝ぼけ眼だったので視界はぼやけて、当然まともな判断もできない状況だったが、一気に俺の目は覚めた。

「おい！」

掛け布団を思い切り引き剥がすと、そこには猫のように丸くなった聖夜の姿が。

俺の叫び声にも気付かず幸せそうな顔をして寝ていやがる。

どんな神経の持ち主だ。呆れて物も言えないのが普通だが、俺は物を言った。

「起きろよ！この野郎！」

肩を掴んでぶんぶんと前後に振ってみた。

すると薄っすらと目が開いてこちらを見たが、すぐにまた目を閉じた。

「寝るな！」

こいつは、どこまで俺の自由を奪えば気がすむんだよ。

しかし何をしてもしも反応のない聖夜に俺は業を煮やししながら、遂にほっておく決断をした。

無視だ、無視。

何度も心の中でそう自分に言い聞かせながら、朝食の準備を進めてご飯と味噌汁、

それから出汁入りの卵焼きを完成させ、ほっと一息ついた。

布団を片付けて、テーブルで朝食を取るのが俺の日課だが、今はそんな日常は俺にはない。

あるのは妖怪が一人俺の布団に死んだように寝ている現実だけだ。  
だから俺は作ったガス台の側で立ちながら朝食を食べようとした  
が、妙な感触に今度は襲われた。

むにゅ

何だ？背中に柔らかいものが…

これは…

人生十七年、初めての体験だが、一瞬心を奪われてしまった。

「だーれだ！」

目の前が真っ暗になる。

じじじじじじ…これは…

恐る恐る振り返ると、さっきまで屍だったはずの聖夜が生き返っ  
ていた。

あるうことか、俺の背中に自らの胸を押し当てて、この年ではし  
ないであろう、だーれだ、をされた。

「おい…どういつつもりだ」

わなわなと震えながら、聖夜に怒りをぶつけた。しかし当の本人

はきよとんとした表情をしていた。

「顔が怖いぞ？」

「お前なあ！あれほど叫んだのに、何で起きないんだよ。それなのにどうして飯を食おうとしたら起きるんだよ！」

「はは…それは決まってるだろ、俺は食いしん坊だからな」

「そんな一言で片付けんなよ。ったくよ。離れるよ」

「相変わらず冷たいな」

不満の声を浴びせられたが、毎度のように無視した。

## 15話

朝からすっかり聖夜のペースだったので、頭を冷やす意味で朝食もしないで洗面所に向かった。

頭から冷水をかぶると、かつかした頭も少しは冷めて落ち着いた。

「くそ…」

俺の生活めちゃくちゃじゃねえかよ。プライバシーもへったくりもあつたものじゃない。

じゃーじゃーと流れる水音を聞きながら鏡で疲れきった自分の顔を見た。

そして頭をタオルで拭きながら台所に戻ると、俺の朝食は跡形も無くなっていた。

やっぱりかよ…

予想はしていたからこれ以上は怒るまいと決めていた。

朝食を食べた犯人は、居間に移つてのんきにテレビを見ていた。

俺はそのまま聖夜に気にも留めず、学校へ行く準備を黙々と整えていたが、聖夜が低い声で俺に話しかけた。

「おい…」

いつもと声のトーンが違うので、何かかと思い俺は無視せずに聖夜の顔の方を見た。

すると聖夜はじっとテレビを見ながら険しい表情をしていた。

「どうした？」

「呪者の犠牲者が出た…」

「何だと！」

慌ててテレビの方に近づいた。

そしてテレビを見ると、俺の住んでいる場所に近い道路で倒れている意識不明者二名の名前が上げられていた。

場所はばらばら、年もばらばらで二人にはどこにも接点もなさそうだった。

「これのどこが？」

俺は報道の一部始終を見終わっても理解できなかった。

だが、聖夜の見解は違った。

「外傷なしでいきなり植物状態になる人間がどこにいる？  
しかも一度に二人も…そんなことができる奴でもいるか？」

「それは…」

「過去の経験則からも言えるが、ほぼ間違いない。それにしても…もつと普通ならもつとばれないようにやるもんだが、

こいつは生まれて間もないから欲に身を任せたのか、それとも自らの肉体の崩壊に恐怖して焦ったのかもしれないな」

「そういうものなのか？」

「ああ…人の目に触れてしまえば、それだけ警戒心は強まる。あいつらも不死身じゃない。

返り討ちにあう可能性だってあるんだからな」

こいつのように不死身でなければ、大きなリスクを起こすのは避けたい所だな。

「なら、こいつ止めないとどんどん被害者が出てくる可能性があるってことか？」

「そういうことだ。武井のこと心配だろう？」

急がなくては事が大きくなるだけだ。学校に行って調べるぞ。きつとあそこに何かある…」

いや、いると言ったほうがいいかもな」

聖夜はかつこよく俺に道を指し示すと、すつくと立ち上がった。

その光景を見て俺は冷静に一言だけ話した。

「それは分かったが、その前にズボンを履けよ」

学校はいつもと同じ風景だった。

そう外見は…

俺からすれば昨日の眩暈が嘘ではなかったことを再度確認させられるように、

校舎の中に入ると体が大きくぐらついた。

「う…」

くそ…またかよ…

頭を抑えながらしばらく症状がおさまるまで待っていた。

「やはり、感じるか？」

こっちも見ないで脇を通りながら聖夜が俺に話しかけた。

「お前…」

「俺の感覚もお前ほど敏感じゃないがな。そこそこは分かる」

「それならお前が特定しろよ。このままだと俺もまた倒れちまうぞ」

「弱音を吐くな。まだ始まったばかりだぞ？それにお前じゃないと無理だ。」



俺のは、ほとんどあてにならないからな…」

ばいばいと手を振りながら先に行ってしまった。こいつは、鬼か？

しかし俺の体も昨日に比べて慣れたのだろうか、眩暈は少し経つたらだいぶ落ち着いた。

呼吸も動悸も元通りだが、こんなの毎回味わいたくない。

不満を抱きつつそのまま教室に入った。

相変わらず武井の姿はそこにはない。

「ノリ…今日は何かあったのか？」

席についていた翔太がいつもの様子と違う俺を心配していた。

「大丈夫だ。ちょっと昨日の眩暈がまだ続いていたからな。悪いな、朝は一緒に登校するの断って」

「いって…お前も無理すんなよ」

「ああ…」

そのまま席に着くとすぐに授業は始まった。

頭はすつきりしなかったが、まあ、それでも授業を聞くだけなら問題はない。

俺は頭に入らない内容を漠然と聞いて一日を過ごしてしまった。

休み時間にも先生達は慌ただしく武井の話をしていたが黙ってても聞こえてきた。

どうやら彼女は完全に音信不通になっていた。

携帯も繋がらなければ、行動範囲を搜索してはみたものの手がかりはない。

長距離移動もした可能性は交通機関を張り込んでいた警察の証言からもなかったらしい。

自転車も家に置きっぱなしとなれば、これはもう命の危険性も感じられる。

最悪の状況は殺されて遺体を隠されてしまったか、拉致されてどこかに監禁されているかだ。

同級生の間でもそんな話はすぐに広まり、不安は募るばかりだった。

やはり呪者に襲われた可能性が高いのかもな…

昨日まではそんなことは信じられなかったが、

聖夜の話聞き、今朝のニュースを見たことでその可能性をどうしても追ってしまう。

これは間違いであってほしい。どこかそう願っていた。

「ノリちゃん」

一人教室に残っている俺を見て梨絵は声をかけてきた。

「何？」

「どうしたの難しい顔してさ…それより今日は体調大丈夫なの？  
昨日はいきなり倒れるからびっくりしたよ」

「ああ…そういやそうだったな。でも大丈夫だ。もうすっかり元気だからな。さぼれて俺もラッキーだったよ」

「ふーん…そうは見えないけどね」

ちっ…長い付き合いだからこいつには見透かされてしまうな。

「そんなら私がノリちゃんの家に行つて、腕によりをかけて料理を作つてあげても…」

その先を言おうとしていたが、俺は真っ先に遮断するかのようには話した。

「遠慮する。お前の料理は殺人的にまずいからな。」

第一、料理が出来る奴は学校に弁当を持ってくるものだ。どう見てもお前はそんなキャラじゃないだろうが！

菓子パンと学食ばかり利用しているんだからな！」

「流石、よくご存知で…」

「そういうことで心配は無用だ」

「あっそ…そういうことなら私、先に帰るけど、甘える時は甘えて

もいんだぞ！強がなくてもさ！」

「うるせえな！とつとと帰りやがれ！」

「こわーい…ノリちゃんが怒った！」

梨絵は軽いノリのまま鞆を持って教室からそくささといなくなっ  
てしまった。

あいつは励ましてくれるんだか、からかっているんだかよく分か  
らんな。

俺はため息をつきながら夕暮れのグラウンドを窓から眺めていた。

それにしても聖夜の奴もどこへ行ったのだろうか？

一人で考え込んでみたが良い考えが浮かぶはずもなく、このまま  
帰ることを決断したその矢先に大きな衝撃が体を駆け巡った。

「これは…」

体の中をまるで蛇が駆け巡り暴れ狂う。生涯感じることはないような衝撃が俺を襲い、体を硬直させた。

それは防衛的に何かを拒絶していることを証明していたからなのかもしれない。昨日の眩暈とは比較にはならない。

「く…そお…」

体が思うように動かず、小刻みに震えやがる。

ここまで体に異変が出たって事は、この学校には確実に何かがあるのかよ。

確証はないが、体がそう言っている気がした。

しかし今は俺一人…勝手に動いていいものか。優等生のような解答が俺の頭の中にはあった。

そして縛られたような感覚は次第に薄れて、俺の四肢は自由になった。

「はあ…はあ…はあ…」

このままでは何も分からないまま学校で倒れてしまう。

そんな毎日がこれから続くとなれば、やはり…自分で何とかするしかないのかよ。

本来の自分の生活とかけ離れた行為の連続を受け入れる時がきたのだ。

話だけでは現実味は湧くはずもない。自分が体験し、それを視覚、触覚、聴覚でしっかりと受けとめなければ。

知りたい…

そんな気持ちも必ず俺の心のどこかにはある。

だから無意識にも足は動いていた。

自らの体を感じるままに…

いいのだろうか？このまま本能に身を任せても…俺の人生がまるつきり別のものになってしまったとしても…

そんな理性が闘ぎあいながらも足は勝手に動き続けていた。

一本道をどんどん進む。

その先には一つの部屋があった。

視聴覚室。生徒に教材の映像を見せたり、学習発表会で使われる場所で頻繁には使われることはない。

ここは二つの部屋に別れている。

生徒達が映像を鑑賞するホールと教材を保管している保管室でい

わゆる物置だ。

保管室は観賞用ホールの三分の一程度の大きさだったが、そんなに狭くはなかった。

がらつと入り口を開けると、そこには誰の姿もなかった。

俺の勘違いなのだろうか？あれほどまでに体で感じていたのに…

その中へ足を踏み入れて一通り部屋の中を見回したが何もなかった。

薄暗い部屋ではあったが、夕暮れ時だったので真っ暗とまではいかない。

足元だって十分に見える。だから見落としするような大きな出来事もない。

どこかほつとしていると、奥から物音が聞こえた。

しゅん…

何だ？

俺は瞬時に反応して物置の扉を見た。静けさで埋め尽くされるこの部屋は俺にとって重圧でしかなかった。

気になる…

どくんどくと高鳴る胸を落ち着かせることもできずにそのまま俺は進んだ。

ドアノブは今時の取っ手ではなく、回すタイプだった。

鉄の感触が冷たい。

ごくりと唾を飲み込んで、こんちくしょーという気持ちで、ぐりりとドアノブを一気に回して扉を開けた。

すると目の前にあったものは、落ちているダンボールだけだった。

「何だよ…これが落ちた音かよ」

独り言をぶつくさ口にしながらもどこかほっとしていた。

しょうがない、という気持ちで俺は片付けなくてもいいようなダンボールを持ち上げた。

すると何かが視界に入った。薄暗いのでよく分からない。

「え？」

人形か？

黒い塊がそこには倒れているように見えたが、はっきりとは断言できない。

じいっとそれを見た。



視覚が脳に達してそれを認識するには時間が掛かったが、今ならはつきりと分かる。

あれは…人だ。人が倒れているんだ。

俺はそれがようやく理解できた時、ダンボールを地面に落として、そのままそこに駆けていた。

通路が狭いから素早くは移動できないがそんなの気にしていられない。

学ランを着ていることから男だと分かったが、どうしてこんな所で倒れているのだろう。

まずは安否を確認しなくては…

「大丈夫か？」

そいつは同学年ではないので、名前は分からなかった。太っていて、着ている学ランも窮屈そうだ。

意識を失っているようだが、外傷らしいものは見たらない。

もしかしたら転んで頭でも打ちつけたのだろうか？どちらにしても誰かに知らせなくてはな…

そんなことを考えながら奥の通路へふと目を移した。

すると、そこには信じがたい光景があった。



## 17話

「何だよ…これは…」

俺は立ち上がって暗がりの中、その状況をゆっくりと氷解させるように視界に入れた。

三人…四人？

狭い通路の奥までこの男同様に倒れている生徒が他にもたくさんいた。

いずれも男と同じ容態だ。こんなことってあるのか？

たくさん生徒が普段使わない視聴覚室の倉庫で倒れているなんて。

もしかしてガス漏れなのだろうか？そんなことも疑ってはみたものの理解できるはずもなく、  
きょろきょろと何も出来ずにその場を見回していた。

しかし…この様子はどこかで…そんな時に今朝のニュースの出来事を思い出した。

まさか、それと同じことだというならやはり聖夜の言うとおりに呪者がいるってことなのか？

生きているのか死んでいるのか分からない人間がたくさん倒れている中、静けさは俺の心をぎりぎり締め付ける。

にじり寄る恐怖って奴だ。

まるで巢穴に飛び込んだ獲物だな。恐怖心で思うように体も動きやしない。

足は鉛でもつけたかのようにべったりと床にくっついちまってる。

「くく…また餌が入り込んだのかな？」

そんな声が奥から聞こえた。しかしどこか聞き覚えのある声だ。太く、低く、忘れようにも忘れられない印象的な声。

その人物は俺の顔を見て驚きの様子も見せなかった。

「何だ、お前か…名前は…確か、新道だったか？」

けたけたといつものように嫌味つたらしく笑う表情は気持ちが悪い。それにこの状況を隠す気もないようだな。

動揺といった類の感情を見せずに自然体だ。

「こ…小松先生…あんたがこれを？」

声が震えてはつきりと話せていない。それとは対照的にこでぶは流暢に俺の質問に受け答えをしていた。

「そつだ。こいつらは俺を満足させるための餌だ。

大体、若いっただけで無能な奴らばかりだからな、かえって俺

の食料になつてもらつたほうが幸せかもな、かかかか…」

吐き気がしそうだ。餌だの食料だの人間を捕まえてそんな平気なことを口にできるなんて、確実に頭がいかれてやがる。

「ってことは…あんたが呪者ってことなのか？」

今までどの言葉にも反応しなかったこでぶは呪者という言葉にだけはびくりと反応を見せた。

どうして俺が知っているのかそこを気にしていた。そして自らの中で納得できる答えを見つけると元の表情に戻っていた。

「そうか…お前、別の奴に会ったんだな？しかし物好きな奴もいたものだ、自らを呪者と明かすなどな。」

そんなことせずにとつと魂でも肉体でも喰らえばいいのにな」

「肉体を喰らうだ？あんたらは魂しか食べないんじゃないのか？」

聖夜の話ではそう聞いていた。こいつらは自らに課せられた欲を持つ人間の魂を喰らうのだと。まさか、嘘なのか？

「まあ、中にはそういう信念の奴もいるが、全部無くしてしまえば簡単な証拠隠滅にもなるだろ？」

それに全てを喰らうということはその人間にもなれるってことにも繋がるんだ。喰らった人間のスキルと肉体を頂戴できるのさ…

だから遅かれ速かれ呪者は人の肉を喰らい生きながらえ、世間から身を隠すようになる。

それは俺が早かっただけということだ」

「まさか…もう、誰か食ったっていつのか？」

「はは…決まってるだろ？」

ここに居る人間の他に誰かが先に食われたということだろうか？  
しかし誰が？

頭の中がぐちゃぐちゃでまともな解答が浮かばない。すると、こ  
でぶはそんな俺に愛想をつかせたのか、

「武井だ…」

何の躊躇いもなくそう言った。

頭は空白になりかけたが、現実を受け止めなければならないと必  
死に踏ん張った。

幸いしたのは武井がそんなに仲が良くなかったということだから  
なのだろうか、そこまで心に響きはしなかった。

しかし人を喰らう魔物を目の前にして気を抜けるはずもない。

ずっとぴりぴりとした緊張感は保っていた。決して相手から視線  
を逸らさないように。

「どうして？武井を選んだ？」

真っ先に武井に目をつけたのが気になっていた。誰でもいいとい  
うならリスクの少ない郊外の人間を普通は選ぶはずだ。

「目障りだから」

あつさりとそう言い捨てた。人を人とも思っていない。

俺たちが普段口にしてている食材に話しかけているかのように心がそこにはない。

「あいつ、暗いし、気持ち悪いし、俺の問題に答えられないくせに、目線だけは俺に対して怒りがいつも籠もっていた。

あれはまるで殺意だ。そんなもの教師に抱いていいのか？生徒として有るまじき行為だろうが。

まあ、品行方正な学生が少ない現状だからこんなこと言ったらきりがないがな……

ここに転がっている奴らだってそうだ。食という欲に体を蝕まれてこんなにぶくぶく太ってやがる。

いくら食に困らない時代だって言ったって限度ってものがある」

説教でもしているのか？それは人としてか？呪者という化け物としてか？

どちらとも取れる発言にぎりつと奥歯をかみ締めながら必死に耐えていた。

「それで、のこのここに来たお前は、俺を狩りにでも来た救世主って所か？そうは見えないがな……さっきから足が震えている」

がくがくと小刻みに揺れる俺の膝はどうあっても俺の意思では止まらないらしい。

「確かに怖い……俺だってこの状況を理解しろったってさっぱりだ」





「やけに潔いな…それは大人しく俺の餌になるってことか？」

いや…でもお前は食に対する欲が薄いから食っても不味そうだな。しかしこのことを知られては俺の身も危うい。それなら好き嫌いもしてられないか…」

「これだけ大量の人間が消えればすぐにばれるんじゃないのか？」

未だに震える膝を押さえるのに必死だったが、言うべきことは言おうと思っていた。

「そうでもない…今夜ここから姿を消せば何も問題はない。死体のない失踪事件の犯人を見つけるのはそう容易ではない。

後は違う町にでも行って同じ行為を繰り返すだけだ。

幸いここで食った人間に成り変わることもできるのだから俺が捕まえることもない。

俺は生まれて間もないから計画性がないのは否めない、次はもつと少しずつ上手くやるさ」

ふてぶてしい態度で焦りなど微塵も見せない。そして最後の獲物を俺に決めたのだ。

にじりよることも未だせずただ立っただけだったが、その重圧は相当のものだった。

決闘というのはこういうことなのか。

殺気を込められたのは生まれて初めてだ。喧嘩ぐらいはやったこ

とはある。

それでもこんなプレッシャーは感じたことがない。

まるで自分が大きなものに飲み込まれそうな感じで、右に動こうが左に動こうが、背を向けて逃げ出そうが、

全ての思惑の先を読まれると直感した。

これが…殺し合い…

蛇に睨まれた蛙だな、こりゃ。

冗談を飛ばせるほど余裕はなかったが、そんなことが頭の中を過ぎっていた。

このままこの状態が続けば、俺は頭真っ白で、自滅のパターンだ。

しかしそんな都合よく無作為に放たれる殺気を緩和させられる程器用じゃない。

魂を抜く…どうやって？

痛いのか？

死ぬのか？

全てのイメージが死の方向に向かっていつてしまっている。

「やれやれ…この程度の殺気で身動き一つできないなんてな」

主導権を握っている方は楽だ。相手をどうしてやるうか考えられるほど余裕があるのだからな。

「さっさと終わりにしてやる。一瞬だ。後は真っ暗になってそのままだ…」

死でも見てきたかのように話したが、そんなの誰にも分かるはずもない。

すつとこでぶの手が伸びた、もう来るのか？

びくりとしながら俺は逃げようかと思ったが、胸の奥から沸きあがる衝動に気がついた。

死んではならない！

だから逆に前に動いた。

こつなればどうにでもなれ！そんな気持ちで思い切り地面を蹴り上げて何も考えずに相手の体に突っ込んでいった。

対格差を考えて全体重を乗せれば、あいつの体は倒れるはずだ。そう思った。

こでぶは身長が小さい。体重は俺の倍ぐらいだが、思い切りぶつかれば倒せない相手ではない。

がつんと肩が、こでぶの胸に当たると、あいつは大きく体を後ろに仰け反らせた。

そのまま倒れると強く願ったが、それは叶わなかった。相手はどうにか仰向けに倒れる前に踏みとどまっていたのだ。

しかし一瞬でも隙は出来た。それなら真っ先に出口を目指す。

わき目も振らずに俺は走った。地面に倒れている奴らを踏みそうになっていたが、そこまで気も回らなかった。

狭い通路をががつと棚にぶつかりながら出口にたどり着いたが、あろう事か俺の落としたダンボールが出口の邪魔になっていた。

「あ……」

くそっ……これではあいつがすぐに来てしまう。

急いでダンボールを取り除こうとしたが、時既に遅し。

俺の体は襟首を掴まれるとそのまま大きく後ろに投げ飛ばされた。

「うっ……お！」

硬い鉄製の棚に背中をたたきつけられると、棚もろとも床に思い切りたたきつけられた。

上からは、がらがらといろんなものが降り注ぎ体に容赦なく直撃した。

「驚いたな……逃げずに突っ込んでくるとは。それが俺の一瞬の隙になっちゃった」

声はすぐそこまで迫っていたが、身動きは取れなかった。幸い骨折はしていないようだ、体中は痛かった。

「呪者の身体能力をなめてもらっては困る。生まれたてはそんなに力はないが、人の魂を食い続ければ様々な能力が身に付く…」

そして俺の能力はそうだな、鋼筋肉といった所かな？筋組織が人間の何十倍にも膨れ上がっている。

これで殴られたらどうなるかお前の脳みそでも分かるだろ？」

近くにあった石の塊を握りつぶして見せた。

こんな力で殴られたら俺の頭はトマトのように潰れるな。

「あっさりと魂を奪ってやろうと思ったが、気が変わった。

お前は食いながら魂を奪ってやるよ…顎の筋肉も相当発達しているから硬い骨も一瞬で噛み切れる」

「そんな…」

顔が真っ青になった。生きながら俺は食われるってことか？

そんなの想像もしたくない。

そんな死に方臨むはずもないだろうが。

「どこからいく？手か？足か？」

唾液を垂らしながらにじり寄る化け物に声も出なくなってしまうた。

今までどうにか保っていた平常心が途切れて恐怖心が完全に俺の心を支配してしまったからだ。

正気も失われそうになる一歩手前で、咄嗟に救いの手にも似た爆音が響き渡った。

バガアアアアアアアン

流石にこでぶも驚いて振り向いた。

煙で何も見えないが、誰かがそこには立っていた。

こでぶがそれを認識するなり、俺の事をほつといて態勢をそちらへと変えた。

が、それよりも先に爆煙の中から飛び出した凶器に体を貫かれていた。

「ぐぐっ！」

弾けるような衝撃とその速さに我が目を疑うほどだった。

弾丸のような速度で飛び出した凶器の正体は鋭利に尖ったクナイだった。

それが理解できたのは突き刺さっていたこでぶの体を見たからだ。胸と足と手に捻り込むように数本刺さった。

いくら化け物でも不死身ではない。痛みも感じていた。

今まで揺らぐはずのないその強靱な肉体は、ゆくりと仰向けに倒れていた。

好機だ。藁にもすがりたい気持ちで俺はどうか体を起こして抜け出すようにその場から離脱した。

這うように進みながら自らに危険が及ばない範囲まで移動を終えると、振り返ってこでぶの方を見た。

すると、まるでゾンビが立ち上がるかのように急ぎもしないでゆっくりと、そして恐怖心を煽るような奇怪な動きを見せていた。

致命傷じゃなかったのか？

どう見てもすぐに立ち上がれる傷じゃないはずだ。

呆気に取られていると、ぐいっと誰かが俺の手を引っ張った。

「うわ！」

思わず叫んでしまったが、そんなことお構い無しにそいつは俺を立たせた。

「騒ぐな、俺だ！」

聖夜が粉塵と煙の立ち上がっている中から姿をぬっと現した。

まさかこいつだとは俺も予想していなかったので、その腕を振り払おうとしていた。

「お前か…」

「今は話している時間はない。来るぞ」

そつだ、こでぶが立ち上がったのだ。

「お前は…転入生の双葉か…おいおい、先生に向かってこれはないんじゃないのかな？」

突き刺さったクナイを指差して笑っている。出血もしていない。

「この程度で俺の筋肉を貫けると思ったのか？数センチ刺さった程度で致命傷には至らない。

しかし…驚いた。まさかお前が同業者とはな」

「貴様と一緒にするな、下種が。歩んできた年数が違う。ついこの間に生まれたばかりでうるさく吠えるな」



聖夜は憮然とした態度で構え余裕すら感じられる。こいつの体がこんなに大きく見えるは初めてだった。

それだけ頼もしい存在だということだ。

身に纏っている空気が俺を守ってくれているかのようだった。

「呪者同士の戦いは初めてなんだろう？坊主。それなら俺の方が一歩リードだな」

俺の前に立つてクナイを構えた。

「坊主か…はは、お前みたいな小娘にここまで舐められるとはな。これは教育者としても男としても指導が必要だなあ」

欲望をむき出しにした汚い生物が舐めるように聖夜のことを見ていた。

「貴様は呪いを解きたいわけではなさそうだな。自らの欲に溺れすぎている」

「解いてどうする？欲深き者の魂の味を知ってしまったら後は中毒者のようにそれを求めるのが我々だ」

「あの僧侶からは何か聞いたか？」

「僧侶だ？」

こでぶは何を聞いているのか分からなかったらしい。そのことに

聖夜も疑問を抱いていたようだが追及はしなかった。

「お前がどんな能力を持っているか知らんが、俺には勝てない」

「そうか…人も集まって来そうだ、ここは徳人を連れて帰るだけにしておこうか…」

未だに非常ベルが鳴り響いていた。人気のない校舎だとしてもおそらく数分で誰かが来るだろう。

聖夜は俺の手を引き、開けた穴から出ようとした。

「待て！」

こでぶが聖夜に向かって踏み出そうとした瞬間、彼女の手にしていたはずのクナイが奴の眼球に突き刺さっていた。

「え？」

投げた動きすら見えないその攻撃は、こでぶにも俺にも時が止まったかのように感じた。

そして空白の間が引き裂かれるようにこでぶの絶叫が大気を震わす。

その隙に俺らはそのまま姿を消した。



## 20話

校舎から抜け出てもずっと走っていた。拭いきれない恐怖心が俺の心と体を支配していた。

「もう大丈夫だ」

無我夢中で走っていた俺に聖夜が声をかけてくれた。そこで俺も我に返ることができたのだ。

どうやってここまで走ってきたのかもろくに覚えてやしなかった。

気がついたら学校に程近い公園にいた。

「はあ…はあ…」

まだ心臓が激しく動いている。呼吸もすぐには整うこともなく、喉がからからだ。

公園の水を蛇口からひねり出すと、俺はごくごくと喉を鳴らして飲んだ。

「悪かったな…」

背中越しに聖夜がそつとささやいた。

聞こえない振りしようかとも思ったが、そんなことも出来ずに俺は振り返った。

「いきなり徳人が呪者を見つけ出すとは思わなかったからな。探すのに手間取った」

「…」

「しかし、得た情報は大きい。それに被害者もあの程度なら少なくともすんだものだ。

もしももつと見境なしにやっていたらあの学校の人間を根こそぎにやられたかもな」

まるで他人事のように話していたが、俺にはさっぱり理解できなかった。その酷く冷たい言い回しには…

だからかもしれない、嫌味を聖夜にぶつけた。

「悪かったなあ、何の力にもなれなくてよ」

自分の非力さにも怒りが湧いていたが、それ以上に襲われた人間を軽視している聖夜の態度にも腹が立った。

「でもよ、あの程度つて何だよ！あんなに死んだんだぞ？人の生き死にに多いも少ないもねえ！」

聖夜は悪くない。でもどうしていいのかわからずに、俺はガキのようにあたってしまったのだ。

聖夜の言いたいことが頭の中で理屈では分かっているつもりでも心がそれを許さなかったのだろう、だから俺は後悔もしていた。

「ちくしょう！もっと…俺が早く見つけてれば…」

あの光景を思い出しながらその場にしゃがみこんでしまった。

「お前は悪くない。それに自らが犠牲になったほうがいいって考え方は止める」

「何だと？」

「犬死と意味のある死は違う…今のお前が犠牲になればそれはただの犬死だ」

「デメエ…」

思わず拳を握って聖夜をにらみつけたが、鼻で笑うかのように流された。

「呪と戦う力が眠っているのなら、それを磨き上げるしかない。力を付けるしかないんだ。死ぬならそれから死ね。」

力を持っているものが出し惜しみして死んだのなら殺されずに済んだ者を救えなくなるんだよ」

その言葉は胸を貫いた。

こいつの生きてきた年数は伊達ではない。言葉というものを通じてその重みがぐっと伝わってくる。

自分という存在が小さく見えてしまうほどに…

「あいつもすぐにまた姿を隠すだろう。それならば、逃がす時間を与えないで一気に狩りに行くぞ」

そうしないとまた次の犠牲者が出るんだな。同じことの繰り返し  
…意味もなく殺される人間がどんどん増える。

「これからの行動はお前自身が判断しろ。初めての呪者との接近、  
それがお前の転機だ。」

ここで下がるか、自分の血筋に従うか…ここからはお前の意思で  
なければ駄目なんだ。

俺の呪いを解くのは二の次でいい。俺に協力するかだ」

聖夜はそれ以上は何も言わずに黙りこくっている俺を静かに見つ  
めていた。

静寂が公園一体を埋めつくし、俺は自分自身に何度も問いかけて  
いた。

正しいことは何なのか…あいつを野放しにしているのか…

そうやって呪者であることでぶのことを考えていると自然に体中の血  
液の動きが早まるのが感じられた。

血筋…

初めて俺があのでぶを見たとき、どう思った？逃げたか？

いや、違う。真っ先に突っ込んで倒そうとした。あれは体が細胞  
が自然にそうしたんだ。

したかったんだ…

呪われし者を目の前にした時に嫌悪感ともう一つ闘争心も湧き上がっていた。

それは俺が呪いに対して強い親近感を持っているからかもしれない。

しかし本能では汚れたものを浄化したい。そうやって自分の存在を証明したい。

俺の血が…肉が…それを求めている。

やはりそうか…これは嘘じゃないんだな。

何度も誤魔化して見ない振りをしてきたが、

これは宿命って奴だ。

「分かったよ。俺もお前に協力する。

何ができるか分かんないけど、それでも可能性つてものがあるならそれに賭けてみたい。何も無いよりはましだ」

「徳人は俺が守るよ。だから心配するな」

聖夜は俺の表情を見て安心したようだ。

「それなら早速で悪いが今夜決行といこう。あいつも傷を負っているからすぐには移動できない。

人の少なくなる夜の方が動きやすいだろうからな」

それから俺たちは数時間後に向けて一旦家に帰ることにした。





## 21話

空気が澄んでいる。そのせいで今日の月ははっきりと見える。

月明かりは外灯とも引けを取らないくらいに明るい。それが逆に不気味にも感じられる。

俺と聖夜は真夜中とまで行かない時間帯に自然公園を目指していた。

俺たちの学校の側で姿を隠せる場所はそう多くはない。

繁華街や住宅地はまず避けたいところだとすれば、数キロ先に小さな山の麓に自然公園があった。

ここは遠足などで利用できる町の中の大きな自然みたいなものだった。

規模はかなりのもので、こんな場所がかくれんぼでもしようものなら探すのに数時間掛かってしまいそうだ。

外灯も当然ないので、月明かりだけがここではその代わりだ。

「どうだ？感じるか？」

聖夜は俺の呪者を探知できる能力に期待していたようだ。俺もその期待に沿えるように神経は研ぎ澄ませていた。

近いと明確に分かるのだが、遠く離れると感覚は鈍る。それでも

ここに着いた時に微かな違和感を感じていた。

「微かに感じる…ここにいるな」

聖夜は分かったと言うと、俺に小太刀を投げて渡した。

「お前の武器だ。身を守るために必要だろう？」

これで俺自身が身を守れるのか自信はないが、ないよりはましだ。

ぐつと力強く生まれてはじめて握る武器に俺は緊張が走る。

「俺は奴を傷つけられても殺せない。その話はしたよな？」

「ああ…」

「だから俺が弱らせるから、徳人、お前が止めを刺すんだ。いいな？」

「わ…分かった」

つい数時間前の出来事が再び頭の中を駆け回る。

胸は不安でいっぱいだったが、こいつが側にいるだけで何とかな  
りそうな気もした。

芝の上をさくさくと踏み鳴らして歩いていた。キャンプ場にもな  
るこの場所は見晴らしが良かった。

藪の中意外は全て見渡せている。

俺は呪者が潜んでいる方向を必死に探した。近いような気がするが、どこにいるのかさっぱりだ。

強風が草木を揺らす音がするのと同時に俺たちの足はぴたっと止まった。

そして風が止んでもう一度進もうと思った瞬間地面が割れた。

「うおー！」

いや、地面から何かが出てきたのだ。

マグマが地底から噴出すように、黒い物体は聖夜の足を掴んだ。

「何だと！」

それは腕だった。こでぶが地面から飛び出して聖夜を捕まえたのだ。

あの小柄なでぶの人間の力とは思えないように片腕だけで聖夜をぶらぶらと支えていた。

「待っていたよ…お前をなあ！」

貫かれた左目は治ってなどいない。傷が深々と残っていてその痛さを教えてくれるようだった。

「俺の目を抉ってくれたんだからな。たっぷり礼はしないと」

そう言つと、数十キロある人間の体をむちでも振るつかのように鋭い速さで地面に叩きつけた。

その衝撃音はすさまじかった。聖夜の体は地面にめり込んでいた。高層ビルから飛び降り自殺でもしない限りこんな状態にはならな  
いだろう。

「ここが軟らかい地面で良かったなあ。コンクリなら肉が飛び散るところだ…どれ、死んだかな？」

持っていた足をぐつと引つ張り、埋もれていた体を無理やり持ち上げた。

「あれあれ、割と人間の体って頑丈だな」

外見は特に変わった様子になかったのでこでぶは不満そうだった。しかし内臓やら骨はずたずたのはずだ。

あんな衝撃を受けたら柔らかい地面でも死に至る。

「期待に添えなくて悪いな」

かつと聖夜の目が開くと、持ち上げられたまま何かを懐から出してこでぶの顔面にぶつけた。

ぱりん

硝子の割れるような音と共に液体が飛び散り無防備なこでぶの顔に降りかかった。

「ぐあああああああ」

その液体を浴びせられたことで、こでぶは声に出して痛みがり、思わず聖夜の足を握っていた手を離した。

どさりと鈍い音がして聖夜は受身も取れないままに地面に落ちた。

聖夜が無事だとは思えない。俺は慌てて側まで駆け寄って体の様子を伺った。すると聖夜は胸を抑えて荒々しく呼吸を整えていた。

どうやら無傷ではなかったらしい、内臓の幾つかは潰れていたようだ。顔には出さなかったが冷や汗をかいていた。

「おい！大丈夫か…」

俺は声をかけて励まそうとしたが、予想以上にダメージは大きいらしい、会話もできなかった。

「貴様あ！な…な…何をかけた！」

こでぶは顔の皮膚を焼かれたかのようにぶすぶすと燻ぶるように醜くただれていた。さっき聖夜がかけた液体のせいだろう。



## 22話

聖夜はすつくと立ち上がると、体が万全ではないのにこでぶを見下すかのような冷ややかな視線を浴びせた。

「あんた教師なんだろ？それぐらい理解しろよ」

強がって挑発しているようにも見えるが、思わせぶりの話をして時間を稼ごうとしているのもどこか分かる。

「超酸だ…硫酸の千倍以上もある酸だ。どうだ？初体験の感想は？」

こでぶは本当に苦しがつていた。顔はすごい力がかきむしっていたので、

血と唾液と剥げた肉が混ざり合った奇怪な粘土細工のようになっていた。

「ぐ…うつつ…そんなものを…どっで」

一般人には入手困難なものでも、こいつの人脈やら経験を考えればそれも容易であることが良く分かる。

「お前は迂闊にも早々に自らの能力のネタをばらした。それならば、時間をもらえばそれなりの対応はできるってことだ。

筋組織が常人の数倍あるとしても皮膚や内臓はそういかない。それなら物質的な攻撃よりも化学薬品の方が殺傷能力が高いはずだ」

次第に聖夜の顔色が良くなる。時間を稼いだ成果が出ているのだろつ。



内臓の機能が回復したのが見て取れた。

「が…ふ…うう…俺は、まだ死なない」

こでぶは、ふらつきながらもその目は死んでいなかった。ただで  
は死なない、そういつた意思が伝わってきた。

「俺ではお前を殺すのは無理だからな。ボタンタッチだ…」

聖夜はいきなり俺に戦いを変えるように指示した。

「え？」

気持ちの整理もつかないままいきなり戦闘に駆り出されて俺には  
現実感があまりなかった。

目の前には怒りを露にした醜い怪物が俺の事を睨んでいた。

怯む俺を見て聖夜は一喝する。

「うるたえるな。お前がこの生き残るのには避けて通れない壁だ。  
自分でどうにかこいつらを殺せる方法を探せ」

確かに、このままでは俺はこいつに助けられて全てが終わる。

自分が生き残るのには自分で何とかしなければならぬ。

それに…あの感覚がまた湧き上がる。

呪者を見ると払いたくなるこの衝動。血筋なのだ。

小太刀を構えると、咆哮を上げながら突っ込んでくるこでぶの動きを冷静に目で追った。

こいつは今、逆上している。まともな判断はできないはずだ。

それなら俺にだってこいつに勝てる方法が見つかるかもしれない。

こでぶが大地を蹴り上げた後には大きな窪みができていた。脚力も常人の数倍。

重い体は羽でもつけたかのように数メートルの距離を一気に詰める。低空飛行のつばめのようなようだ。

拳を固めると俺の顔面めがけてその凶器をり下ろす。もしも直撃したら俺の頭は潰れて飛び散る。

そんな恐怖も脳裏に走ったが、恐怖を感じるよりも先に俺の体は反応した。

単純な直線の攻撃はどうか避けれる。ぶんぶん空振りの音だけがそこに響いた。

そして三度目の空振りを見計らって遂に俺は動いた。

曖昧な自分の考えを捨てて、運命に従うことを決意する一撃だと思っ

た。だからこそ握っていた小太刀を何も考えることなく相手の脇腹に思い切り突き刺してみた。

がぎん

硬いものにぶつかると音がした。その音で分かるようにこでぶの体は正に鋼だった。

持つ手にもびりびりとその振動が伝わって、その反動で俺の力も跳ね返された。

「くそ…」

固い決意も空しくその結果は拍子抜けするものだった。それでも、一太刀入れられたことは自分の大きな変化にも繋がった。

刃を人に向け、本気で殺そうとした行為にはそれだけ重みがあるものだ。

ほいほいと感情もなしに凶器を人に淡々と突き刺せるほど俺は異常者ではない。

覚悟を決めても実行するのは難しい。だからこそ、この一撃は例え相手に致命傷を与えられなかったとしても、新たな一歩なのだ。

殺意を込めた初めての衝動。

自分が生きてきた中で越えてはいけなと思った一線を越えた瞬間だ。

しかし数秒にも満たない間での俺の体、いや心の変化をあざ笑うかのようにこでぶは、嘲笑していた。

「貴様のその細い太刀では俺の体に傷などつけられるものか…この顔の報いはしてもらおう」

癒えない傷に歯がゆさを感じ、怒りの矛先を弱い俺に変えたのだろうか。ただれた皮膚は心の醜さを現しているかのようにだった。

そのまま攻撃の手を休めることなく、扇風機のように拳を振るい続けた。

地面を割り、側の太い木々も枯れ木をへし折るように何本もなぎ倒した。

豪腕は名ばかりではないが、何度も同じ速度で攻撃をされればいい加減目も慣れる。

かわしながら小太刀で反撃を試みる。

頭部、胸部、腕、足、どこかに弱点があるのではないかとすがる様な気持ちで攻撃に変化を付けてみたが、結果は全て同じだった。

今思うと聖夜の眼球を狙った攻撃は的確だ。

あの場所だけは目を瞑らない限り防ぎようがないだろう。しかしあんな狭い範囲だけを正確に狙うのは俺の技術では無理に等しい。

そうこう考えている間にも時は進んでいる。俺も相手の攻撃のプレッシャーで極度の疲労感に体を襲われる。

数分でも数時間のよう感じるのが現実だ。

殺し合いというものが経験則にはないものなので致し方ないが、このままでは技術うんぬんではなく力でねじ伏せられる。

そんな焦りを背後に感じながら俺は必死に動いていた。

機械運動のように何の変化もなかった相手にも微妙な変化が現れた。

それは俺がこでぶの攻撃を避けた時だった。切れた腕の傷口から出血した血液が一滴、皮膚に触れた瞬間、表情が一変する。

## 23話

「ぐお…」

苦しんでいるようにも見えたが、そこまで察することが出来るほど俺には余裕がなかった。

俺はそのまま動きを止めずに、こでぶの動きから目を離さなかった。

「徳人！」

そんな中で聖夜は急に俺に声を掛けた。本来ならば、集中していて声も耳に入らないのだがすっと入り込んだ。

「お前の血が奴にとっての弱点だ！」

意味が分からなかった。何を根拠にそんなことを話しているのかも。

さっきのこでぶの一瞬の顔の歪みで判断したのだろうか？だとしたら考えが浅はかだ。

しかし打開策が見つからないまま過ごす時間は想像以上に長い。これを打ち破るためにも違ったことをしなくてはならない。

だからだろう。俺は自らの武器で自分の腕に軽く傷を付け、そこから流れる血液を指先に付けるとすっと刃にこすり付けた。

聖夜の発言の真相は試してからだ。

俺の動きによどみはなかった。自然に一連の行動を無駄なくこなすと、こでぶに向かって一直線に走り込んだ。

自ら攻撃を仕掛けるのはこれが始めてだった。

目の前にこでぶの苦し紛れのような攻撃が飛び交ったが、もう見飽きた。

俺はそれをぎりぎりの距離で見切ると、小太刀の刃先を心臓目掛けて突き刺した。

硬い金属音が再び耳の奥に響くのだろうかと思っていたが、結果は全く別物だった。

ずぶつという切っ先が肉に入り込む感触を自分の五感が真っ先に選択していた。

これは…

快樂にも等しい感覚が体を支配した。

自分がこうしたかった…できて良かった…そんな気持ちで心がいっぱいだった。

今まで何度となく跳ね返されていたが、まるでこんにやくに串でも通すかのように力を入れなくてもずりりと刃が体内に入り込んだ。

「あ…がが…き…貴様…」

あれだけ動いてたこでぶの体もぴたりと動きを止めてしまった。

電池の切れかけた玩具のように、話す言葉も途切れ途切れになっ  
てしまった。

「俺の…力を…いや…存在そのものを浄化…したのか？そんな…者  
が…」

体に起こった変化を自分なりに悟ったのだろうか、こでぶはその  
ままさらさらと砂のように姿を塵に返してしまった。

「くっ…はあ…はあ…」

極度の緊張が体力を大幅に奪っていた。俺は拘束された体を開放  
するように全身の力を抜いた。

無我夢中でどうやって相手を倒したのかすら覚えていなかった。

ただ目の前で一人の人間だった者が、映像のように姿を砂に変え  
たことだけをしっかりと目に焼き付けた。

長い付き合いと言うわけではないが、知っている人間の最後の姿  
を見てしまったことには少なからず心は動いていた。

これは現実なのだと思し付けられるような強迫観念にも襲われた  
が、俺は自らの行為に対して後悔はしていなかった。

必然的にこいつは生きながらえていたら、たくさんの人間が犠牲



になっていたことは間違いない。

正当化するわけではないが、運命っていつもものがあるのならそれに従ったまでだ。

少しずつではあるが、俺は自分の行為そのものと生き方を受け入れていた。これは普通ではない。

しかしそれを必要としている人間もいるのだ。

そして何よりも俺が、呪者を許せないという思いが心の奥底にある。

そう…自分の起源と言ってもいい。それだけ体が疼いて抑えられない衝動に駆られるのだ。

だから俺はその意思に従うだけだ。

「上出来だ…」

聖夜は疲れきった俺の側に近づいてきた。

「荒療治というわけではないが、お前の意思がはっきりと伝わる戦いだっただ。」

その表情を見ると、どうやら腹をくくったようだな」

迷い、それを俺が抱いていると感じていたのだろう。

それは分かっていた。だから俺一人で戦わせたのだ。

しかしそれを責めることは俺にはできなかつた。新たな能力の開花と呪者を葬り去る快樂を手に入れてしまったのだから。

これは使命なのかもしれない。

俺は奴を殺したことで自分の生きている理由をふと考えてしまったのだ。

「お前の血で呪者を葬り去ることができるのは意外だったな。しかしこれはこれからの戦いでも十分な武器だ。

これからもこの調子でよろしくな」

よろしくなって…人の気も知らないでいい気なものだ。

「今日はこのまま帰ろうか。お前も初めての体験だらけで疲れただろう？それなら帰って休むのが一番だ」

「あのなあ、家主の俺が言うならまだしも何でお前がそれを言うんだよ？」

「細かいことはいいだろ？たくさん動いたら腹が減った。早く家に帰って夜食作ってくれよ」

おいおい…今までの緊迫感が台無しだ。それに何で俺が夜食を作らなければならぬんだよ。

こいつの脳みそを一度覗いてみたい気分だ。

「夜食うと太るぞ」

「大丈夫だ。俺はまだ若いからな基礎代謝が違う」

はいはい…そんな発言ももう慣れましたよ。

傍から見ればこいつは年頃の女で可愛いかもしれないが、そんなことを考慮できないほど中身は別物なんだ。

## 24話

一夜明けると、昨日のようなからっと晴れた良い天気は一変して、雨の一日になっていた。

薄暗くて何とも言えない切なさを感じるような天候だ。その雰囲気だけで憂鬱になってしまいそうだった。

昨夜の事は寝起きでもはっきりと覚えている。なかなか寝られないのもあったが、忘れようにも頭の中から離れないのだ。

脳裏に焼きつくように、あの時の光景が何度もフラッシュバックされる。

呪者を名乗る教師は俺の前から砂のように姿を消した。それは紛れもない事実で、取り返しのないことだ。

だから振り返ることはしないと決めていたが、流石に知っている人間の最後ってやつはそう一筋縄ではいかないものなのだ。

ゲームのように簡単に殺したり、復活させたりできないのだから…

「顔色が良くないけど、寝不足か？」

一緒に登校していた翔太は俺の顔色を見て気にかけてくれた。

機嫌は悪かったが、友人にそんなことをべらべらと話すわけにもいかず、誤魔化すことで精一杯だった。

「いやさ…ゲームのやりすぎでな。最近出たる？恋愛シミュレーションの人気ゲーム。あれを借りたんだよ」

話題をゲームにすると翔太は逆に食いついてきた。

「何だ、お前あれやってたのか？話してくれば全員の攻略方法教えてやったのによ」

「やっぱり、あれは自分でクリアしてこそ達成感があるだろ？だからこっそりやっていたんだよ。ネタバレするのも怖いし…」

嘘をつきまくっていた。話にしか聞いていないゲームの内容でどうにかその場を乗り切ろうとしている感じに罪悪感も感じていた。

しかし本当の事を話してこいつを巻き込むのもどうかと思っていた。

「そうか…確かにあれはネタバレしたら腹立つもんな。

それぞれのエンディングを見てこそ六十時間も費やしたかいがあるってものだ」

そんなに掛かるのかよ！

俺は心の中で思わず突っ込みを入れてしまった。

「まあ、分からないことがあったら俺に聞けよ。知らないことにはもないぐらいやりこんだからな…」

「ああ…」

降り続ける雨に苛立っているのか友人に嘘をついていることに苛

立っているのかは分からなかったが、今日の俺は気分がめちゃくちゃだ。

学校に着くと教室には聖夜が早々に席に着いていた。

それは同じ家に暮らしているとはいえ、登校も一緒だとまずいと思えば聖夜だけ早めに出てもらったからだ。

そもそもこいつに登校する理由はもうないはずなのだ。

しかし昨日の一件の後始末という訳ではないが、確認する意味としばらくこの制服が着たいという訳の分からない理由でここにいた。

担任がクラスに入るなり空気の重い雰囲気を漂わせていた。

それを見るなり俺は俺で覚悟をしていた。

「学校の視聴覚室が老朽化のためにしばらく工事が入る」

その話から切り出したが、爆破された行為は口にしていない。

それはそうだが、そんな話を口にしたら生徒が不安がってしまう。無難な言葉の選択だと思った。

すると次には昨日魂を奪われた生徒の話をした。

「それと私用で学校に残っていた何人かの生徒が昨日昏睡状態で病院に運ばれた」

ざわざわと教室内が騒がしくなっていた。どうしてそんなことが起こったのか？それを知りたくて話し合っていた。

「静かに：命に別状はないし、数時間で意識が戻ったので大丈夫だ。明日にでも退院して学校に来られる。」

そして今回の件は校舎内のガス漏れの可能性もあるので業者の方に調べてもらった。

しかしどこにも異状はなかったから、集まっていた者たちの起こした何かが原因かもしれないと調べている。

ちなみに教室は既に調べてあつて大丈夫だ」

真実を捻じ曲げて言葉巧みに生徒を落ち着かせた。

事実を知るものと知らない者の大きな溝がそこには出来てしまつたが、そこを否定する気はない。

そのまま話を続けた担任はこでぶのことは何も話さず、欠席だと言っただけだった。

無断欠勤も長く続けば詳しく調べられるだろう。そして恐らくは失踪という形になって結末を迎えるに違いない。

それにしても倒れていた連中の魂が戻ったことは何よりだった。

昨夜、聖夜には呪者を殺せば奪われた魂は肉体に帰るのではないかという信じがたい話を聞かされていた。

肉体が保存されていれば元通りになるという想定の話だったが、それが実現されているので証明されたってことだ。

とりあえずこの町の脅威は排除されたと、担任の話を聞きながらほっと胸を撫で下ろした。

しかし次にはそんな俺の安易な考えを一蹴するような話が飛び出した。

「話は変わるが、また昨夜この町に意識不明の被害者が数名出たよ  
うだ…」

どういうことだ？

事件の原因だったはずのこでぶが死んだ。

しかし被害者が出ている…これが何を意味するのか理解できなかつた。

今朝はニュースも何も見なかったから担任から告げられたこの情報  
報はあまりにも新鮮だった。

流石に声に出すわけにもいかないのでぐっと堪えて平静を装っては  
いた。

「だから当分このまま部活中止で早めの帰宅をすることになる。  
下校は集団でなるべく行い、人通りの少ない場所を通るのは避ける  
ように…」

警察も巡回はしているから何かあったら必ず頼るようにな。こんな  
ことは話したくないが、今は物騒な世の中だ…

自分の身を守るにはそれなりの危機感を一人ひとりが抱かなくては  
ならない。意識することが大事だ。

だから軽率な行動はくれぐれも避けてくれ」



それ以上しつこく説教することはなかった。それはひとえにこの学校の生徒が優秀だというのもある。

不良も存在しない真面目な生徒ばかりのこの高校は先生の言うこともきちんとして聞いている。

一つ話せばそれだけでことが足りると先生も皆思っているようだ。

しつこい話を聞かなくていいことは助かるが、どこか冷めた間柄だとも感じる。

「以上でホームルームは終わるが、聞きたいことがあったら職員室まで来てくれ」

そのまま担任は別のクラスの授業へと向かっていった。

教室内の様子は一段落迎えた感じだったが俺はそうではない。

新たな問題が再浮上したことで聖夜に話を聞きたかったが、ここでその話をするのはまずいと思いつくと堪えていた。

そんな俺の気持ちを知らないで、隣の悪魔はいつもの調子で話しかけた。

「ノリちゃん。物騒だからさ、今日一緒に帰らない？たまにはいいでしょ」

「はいはい……」

考え事をしていたので上の空で半分聞いて曖昧な返事をしたが、

梨絵は喜んでいた。

「いやー久しぶりだね。一緒に帰るのって。まあ、もしも断ったら閻魔帳で揺する所だったけどね」

本気だよ。この女はそれを平気でやれるんだよ。その言葉で現実に戻された。

俺はつくづく断らなくて良かったと思った。

## 25話

休み時間、俺は聖夜を屋上に続く階段先へ呼び出した。

ここは人通りが少ないので秘密の話をするにはもってこいだ。

周囲を気にしながら俺は本題を切り出す。

「どついつことだ？こでぶが死んだのだから被害者はもう出ないはずだろ？」

大声では話せないのでできるだけ小声で話した。

周りに誰もいなかったが誰が聞いているか分からないからな。

聖夜は腕組みをしながら眉間にシワを寄せながら難しい顔をしていた。

「こいつにも分からないってことか？」

「新たな呪者の可能性もあるな……」

「他の……」

「お互いをはつきりと探知する能力は我々にはない。だとすればそこにいるんだということを証明することができればいい」

「見せしめってことか？」

「普通なら死体を隠す。それを発見されるように出しているって」とはそうも考えられるってことだ。おびき出すための餌とかな…」

「マジか？」

「断言はできない。しかしこのまま死体が増え続ければ嫌でも分かるんじゃないか？」

他人事のような口ぶりだった。

しかしそれだとしたら見過ごす訳にはいかないな。

「そいつを探せるとしたらやっぱり俺しかいないのか？」

念のために聞いてみた。すると聖夜はそうだと話した。

呪者同士の探知能力は数メートル近づかないと分からないらしい。つまり目の前にいる人間が分かるという程度だ。

これじゃあ互いを探すのは無理に等しい。国内に散らばった奴らを全員探すなど、それこそ数十年掛かってしまう。

聖夜がこの地に着てからすぐに呪者を発見できたのは運が良かったのだろうな。

「そうか…」

それ以上の会話に困り俺はそこで口を噤んでしまった。

すると聖夜は俺の心を見透かすように

「新たな呪者が気になるんだろ？はつきり言えよ」

にやつきながら話した。

「う…うっさいな。違っ」

「こいつが暴れまわっていれば、無関係の人間がどんどん餌にされていくかもな。それをお前は黙って見ていられるのか？」

「それは…」

聖夜は正しいことを話していたが、自分に未だに自信が持てない俺は煮え切らない態度しか取れなかった。

「お前の探知能力、俺の不死の力があればどうにか先手を打って葬ることができるんだぞ？これは他の奴らにはない武器だ。

それを利用しなくてどうする」

それは分かっている。しかし俺に昨日のようなことが再びできるのだろうか。

「悪い…少し考えさせてくれ」

すぐに行動に移すことは躊躇った。だからここでは答えを出せなかった。

## 放課後

雨は上がっていて、夕焼けがいつものように顔を出していた。

梨絵は約束どおりに俺の事を待っていた。

担任の話したように当分部活もないので、学校に残るものは誰もおらず、先生達もすぐに帰る支度を整えていた。

この町はたったの数日間国内一物騒な町になってしまった。

連日の報道のせいであちこちうるつく報道陣と大量の警察官、どこを見ても数日前の町並みと全然違う。

四人の意識不明者。外傷はいずれもない。

医者も困り果てているだろう。病気とも取れるが、そんな病気は存在しない。

怪事件として事件、事故の両面で警察機関は動いている。

今のところその原因を知っているのは俺と聖夜だけだ。

「ねえ、何難しい顔してんの？」

「え？あ…いや、ちよつとな」

「最近物騒だからねーいろいろ嫌になるよね。それに武井さん、どうしたのかな？」

「お前でも人の心配するんだな。冷血漢の悪魔かと思ったのによ…」

「何、殴りたい訳？」

「冗談だよ。俺もそこまでマゾじゃねえ」

そして俺は大きなため息をついてからぼろりと自分の溜め込んでいた思いを愚痴のようにこぼしてしまった。

「ここ数日さ、目の前が目まぐるしく動きまくってさ…何が何だかよくわかんねえよ。それに対して俺自身がどう動きたいのかもよ」

くだらだらと情けない自分の話を聞かせてしまったが梨絵はただ黙って聞いていた。

「ノリちゃんらしくないね」

梨絵はいつものように茶化のではなく、真剣な目をしていた。

「…」

「直情的で、義理人情に厚いのがノリちゃんの良い所ですよ。」

それをうじうじ何悩んでいるんだか…答えが見つかってから動くんじゃなくて動きながら探してみたら？」

冷たくも感じるが、温かい言葉だとも思った。俺は梨絵の言葉を聞いてすっと心が軽くなったような気がした。

そつだ…悩んでいる場合じゃない。

動かないともしっかり後悔するかもしれない。

「ありがとう…」

俺はどこか吹っ切れて、頭の中も心の中もすっきりした。

すると梨絵は照れくさそうに頬を赤らめていた。

「あのさ…ノリちゃん」

梨絵が話しかけようとした瞬間、目の前にいる人物にはっとお互い目がいった。



## 26話

長い黒髪の女性。背は小さく年は俺らと同じぐらい。頭を垂れていて長い髪の中に隠された顔ははつきりと見えない。

そして特徴的なのは俺らの学校の制服を着ていること。

真っ先に気がついたのは梨絵の方だった。

「え？あ…の…武井…さん？」

そうだ。

そこには行方不明になってたはずの武井このみが無気力な生氣のない顔で骸のように立っていたのだ。

そんな馬鹿な。こいつはこでぶに食われたんじゃないのか？

自分の目を疑ったが、そこにいるのは紛れもなく武井このみそのものだった。

肌を突き刺すような悪寒を感じる。俺が最も嫌がるあの感覚だ。

こいつ…何か変だ。

俺は禍々しい雰囲気を身に纏い、死んだような目をした武井に近づけないでいた。

対面しているだけで体が硬直してしまっている。拒否反応ってこ

となのдарうつか？

しかし梨絵は本当に心配していたのdarうつ、何の警戒もなしに不用意に近づいていった。

まずい。

「おい！」

俺は思わず梨絵を彼女から遠ざけるように間に割って入ったが、その刹那、腹部に激しい衝撃を感じた。

「が…あ…」

痛みを感じるまでに数秒の時間を要した。そして何が起こったのか理解できるまでに更に数秒掛かった。

ゆっくりと自らの腹部を見ると硬い金属が入り込んでいるではないか。じわじわと血がにじみ出てくる。

まじかよ！

腹部に刺さった凶器が包丁だと理解したのは武井が手を離してその柄が見えたからだ。

俺は包丁が刺さったままその場にどすんと両膝をついた。

それを見た梨絵は叫び声を上げようとしたが、武井の空いている手で喉を押さえつけられ寸でのところでそれを防がれた。

そしてあろう事か武井はそのまま片腕で梨絵を持ち上げていた。めきめきと首に掛かっている手に力が入っているのが分かる。

梨絵の表情が苦痛で歪んでいた。

やばい…このままでは梨絵の首の骨が折られる。

腹部の痛みで頭は働かなかったが、体はどうにか動いた。梨絵を助きたい一心で。

やりたくはないが腹部から刺さった包丁を強引に抜いて、無我夢中で武井に切りかかっていた。

すると、武井は梨絵を抱きかかえるように両手に収めると大きく跳躍した。

そのまま猫のように足音をさせないように民家のブロック塀の上に立った。

人間の動きではない。

ぐらりと体が傾くと急に眩暈がしてきた。刺された箇所からは大量の出血。致命傷だな…こりゃ…

梨絵を見ると一連の流れで気絶してしていた。

「おい…梨絵をどうする気だ？」

弱弱しい声で吠えてみたが、相手に対して威嚇にもなっていない。武井はまるで人形のような表情で俺を見下した。

「お前はそのままここで死ね…お前の存在そのものが邪魔だ…」

武井の言葉がだんだん聞こえなくなってくる。意識がもう持たない…

視界が狭くなり瞼と体は自然と落ちてしまった。

そして耳の奥にはびゅびゅという風の音だけが聞こえていた。

## 27話

どうして武井が…

そのことばかりが深い闇の中でずっと連呼される。

俺は死んだのだろうか？

思考回路だけが残っている感じで、真っ暗な世界をさまよっている。

俺の…体は？

これが死後の世界って奴か？

思えば俺という人生は両親よりも短かったな。まるでゲームのバッドエンドだ。

どこで選択肢を間違えたのやら…そんな文句を言いながら無限に広がる闇を思考で感じていた。

このまま終わりなのだろうか…

弱弱しく先の展望も見えないまま落胆していると、

どくんどくと脈打つように熱いものがゆっくり流れ込むような感覚が闇全体に伝わった。

まあ、体はそこにはないのだからこの表現は適切ではないのかも  
しれない。

しかしまるでこの闇そのものが俺の体内のような触感ではある。

俺の血が…薄まる…汚される…

俺の生まれながらの血が、肉体がそれを叫んでいる気がした。

止める止めると新たな物が肉体に入り込むのを阻止しようとして  
いる。

漠然と感じ取ることしかできない。それでもはっきりと別のもの  
が自分を寝食していくのが分かった。

これは…何だ？

すると声が聞こえた。

「おい…おい…」

これは現実なのか？夢なのか？

「起きろ！こら！」

誰だ俺を呼ぶ奴は…

真つ暗闇だった目の前が次第に明るくなっていく。

すると自分の体がそこにはあるように感じられた。

指先は…動く…

そのまま俺は重たい目を開いた。するとそこには聖夜の顔が見えた。

頭には温もりを感じる。

俺は聖夜に膝枕をされて介抱されていたのだ。

辺りを見回す余裕などなかったが、天井を見ただけで俺の部屋だということが認識できた。

「お…俺は…」

頭が痛くて、体もすぐには動かせなかったが、あの傷がどうなったのか確認する必要がある。

俺は恐る恐る自分の腹部に視線を移した。しかしそこには俺の予想に反した結果があった。

全くの無傷だ。

包丁で内臓をえぐられたはずで、多量出血していたはずなのに、その片鱗すらない。

「どっとうことだ？」

俺は起き上がって、聖夜に聞いた。

事情も説明していなかったが、聖夜ならば状況を見て全てを理解しているだろうと思った。

すると聖夜は俺に落ち着けといった様子で静かに話した。

「無理するな…成功したのはラッキーだったのだからな」

「成功だ？」

相変わらず意味不明なことを口にする。

「この傷のことを話す前に…徳人、お前呪者に会ったんだな？」

やはり俺の怪我を見て分かったんだな。聖夜は険しい顔でこっちを見ていた。

「まったく…お前には探知能力があるのだから、敵が近づいてきたのなら逃げればいいものを…」

「悪いな…そこまで意識を集中させていなかったし連れがいたからな。」

それに思いもかけない奴に遭遇したから頭が真っ白になっちゃったよ」

「思いがけない奴だ？」

「ああ…あの行方不明になっていたはずの武井このみだ。お前も知っているだろう？俺はてっきり殺されたと思っていたがな」

その名前を口にすると、聖夜はなるほど一人で納得した。





「あいつが暴食の呪者だったのか…」

「え？それはこでぶだろ？」

「お前の話を聞く限り…あの教師は替え玉だ。本当の黒幕は武井このみ」

「何を根拠に…」

信じがたい話ではあるがそれを完全否定できる材料が俺にはなかった。

「あの教師は、最も重要な呪者の根源とその目的の話をしなかった。まるで俺とは別の立場のような話しぶりだ…」

自らの欲望を満たしたい、ただそれだけ…」

そう言えば、こいつが呪者の根源とも呼べる僧侶の話をしたときに理解していなかったような気がする。

初めて対峙したときのこでぶの様子を思い出した。

「そして意識不明者。これは武井このみがやったものだ。あの教師なら真つ先に肉体も貪るだろうからな…」

本来呪者はそこまでする必要はないが、操られし者は自我が崩壊している。

欲のままに目の前の餌を貪欲に食い漁る。そして最初の被害者は武井が試しにやってみたようなものだ。

それから次第にエスカレートする…被害者の人数が増え、そしてここから姿を消すだろう」

「どうして…あの気の弱そうなあいつが…」

「少なからず、あいつと向かい合ったお前なら感じたはずだ。

あの教師とは比べものにならない、人ではない憎悪に満ちた心の闇を…

それが呪者特有の雰囲気なのだからな。お前の肉体はそれを忌み嫌う。血筋でそれを否定してるのだから」

俺が武井このみと顔を合わせたとき、正直気持が悪くなった。それと同時に嫌悪感も感じた。

そう、聖夜と初めて会った時と似ている。

俺が学校で眩暈を起こしたのも、きっと武井が学校内に潜んでいたので違くない。

だから…あの日、こでぶを餌にしたのかもしれないな。

「あいつは…どうしちゃったんだ？呪いってのはこんなにも唐突にそれでいて簡単に訪れるものなのか？」

脂汗を滲ませ、頭の痛みを抑えながら俺は聖夜を見た。

「人の強い欲望の先にあいつは必ず現れる。そして欲を満たす術を与えた…」

聖夜にも力を与えた僧侶のことを話しているのだろう。過去の自

分を重ねていた。

「そいつは不死身なのかよ？聞くだけでも最低四百年以上は生きてるぞ」

「あいつは人ではないのかもな。

ま…俺も似たような存在だが、他の連中がどうやってその力を手に入れたのかは見ていないから知らん。

でもな…きつとあいつが絡んでいるはずだ。それよりもまずは目の前のことだろ？」

話を元に戻すように聖夜は俺に言って聞かせた。やはり何でもお見通しなんだな。

「ああ…梨絵が連れて行かれた。すぐに動かないと奴の餌食になるのは明白だ」

あの時の光景を思い出したくはないが、嫌でも目の前に浮かぶ。

力のない無力な自分が何も出来ないで倒れている。

「分かった。それならすぐに向かおうか…それでお前の体のことが…」

聖夜は今までのような流暢な話しぶりから一転した。

まあ…言いづらいもの分かる。俺の傷がこれだけ治癒したってことには絶対に裏がある。

それに暗闇の中で感じた違和感はこの件とは無関係とは言えない。

だからある程度の覚悟もしている。

しかしそれを全て覆すかのように聖夜はそこで踏み止まった。

「いや…止めておこう。お前が自ら知ったほうがいい」

とんだ寸止めだ。身構えてしまった分だけ損をしてしまった。

体の力が思わず抜けてしまった。しかしこいつは意味のないことを話さない。

だとしたら自分で気がついた方がいいのかもしれない。

そんな安易な考えで全てを済ませようとしてしまった。

だが何にせよ、体が無事なのはありがたいことだった。生きている限り次に繋がるのだから…

「武井このみは…ここから数キロ離れた廃墟のビルにいる。お前が気を失ってから三時間。まだ間に合うかもしれない」

それが聞ければ十分だった。

俺はそのまま後先を考えないで動いてしまった。



私を取り巻く世界は醜く、閉鎖的で、私を拒絶する。それを知っている。だから絶望を何度も繰り返した。

誰も私のことを分かってなぐれないし、みんな私の事が嫌いなんだ。

私はどうしてこんなに醜いのだろうか？

顔は地味でブスで見るのも嫌になる。しかしそんな顔よりも体の方がもつと嫌だった。

足が太い。人と比べてどれだけ太いのかなど、とうの昔に分からなくなっていた。

しかし深層心理に深く刷り込まれたのは、私の足がすごく太いということだけだ。

こればかりはどんなに頑張ってもどうにもならなかった。食べる量もそんなに多いわけでもない。

間食をすることないし、全く動かないわけでもない。

小さい頃、回りから離したてられた。

お前の足は太い、下半身デブだと。何も言えない私はただ黙ってその屈辱に耐えるしかなかった。

地味で勉強もそこそこ出来ていたから周囲の人間は嫉妬まじりで私をけなした。

冗談のように笑い飛ばしていたが、それを軽く流せるほど心は広くなかった。

私の心の奥底には常に憎悪の火が灯っていたのだ。

好きでこんな体になったんじゃない。

生まれつき骨格が太い私にはどうすることもできないんだ。

何で…こんなにも自分の存在を否定されなければならぬんだ。

ちくしょう…ちくしょう…

嫌いだ。嫌いだ。嫌いだ。嫌いだ。みんな大嫌いだ。

何よりも醜いこの体が嫌いだ。

生まれ変わりたい。誰もが認めるような痩せた細い体に。誰も馬鹿にしない体に。誰もが羨む体に。

私は日々追い込まれていた。外面は普通に見えたかもしれないが、内面は自らの器を越えるほどの負の水が溢れ出しそうになっていた。いつ決壊してもおかしくない。

だから私はあんな有り得もしない願いを望んで、自らの欲望に素直になってしまった。



俺は聖夜に従って全力で後ろを走っていた。目的地はそう遠くない。走れば十分もあれば着くだろう。

しかし今までにないほどの焦りと不安が襲い掛かっていた。

梨絵が心配だった。

それは本心で、後先も考えないで動いている自分がそこにいた。

殺されることがあったら、俺の心は折れるか潰れてしまいかもしれない。

好きという感情かどうかは知らない。きっと翔太が同じ状況だったとしても気持ちは一緒だろう。

目の前で大切な人がいなくなるのは耐え難いことだ。

そんな熱い気持ち俺を動かす原動力になっていたが、いつものような感覚が失われていたことにその時は気がつかなかった。

聖夜に迷いはなかった。真っ先に武井このみのいるであろう場所へ俺を誘導していった。

そこに疑問は感じなかったが、若干の違和感は感じていた。

「ここだ…」

立ち止まると、暗闇に包まれた廃墟のビルがぼつりとそびえたっていた。

築三十年、鉄筋コンクリートでできた高さ十数階のその建物は人の気配というよりも物の怪の類を引き寄せているのだろうか？ 黒い渦が大気を伝わり周辺に流れているようだ。

「感じたか？」

「ああ…以前よりも…その…鈍い感じで伝わるがな。空気がまるで違うな」

それを聞くと聖夜はそうか、と安心したように入り口を目指していた。

そこはまるで俺たちを飲み込むかのような飢えた獣が大口を開けてやがる。

中に入ると、水滴が滴り落ちる音が反響して鳴り響いていた。

当然電気も通っていないければ水道も止められている。

冷たく圧迫感のあるビル内は、閑散としてはいるものの色の変わったダンボールやら書類で足場が悪かった。

「気をつけるよ…」

聖夜は慣れた様子で暗闇の中、障害物を避けて歩いていた。これが経験の差と言う奴だな。

俺は幾度となく突っかかりながら先を急いだ。

エレベーターは使えない。だから階段で上へと進むしかなかった。

どこにいる…

俺の探知能力が上手く働かなかった。四方八方に飛び散っているような感覚で、この建物にいるという位しか把握できない。

しかしそれとは対照的に聖夜は武井の場所が分かっているかのよう  
うに屋上を目指していた。

それから駆け足で屋上まで到着すると、目の前にあった分厚い金  
属製の錆びた扉をゆっくりと開けてみた。

するとそこには、星空を背景に武井このみは空ろな目をして屋上  
のど真ん中に立っていた。

### 30話

そこに梨絵の姿はない。

まさか…

咄嗟にこでぶの話したことが思い出され寒気がした。

「慌てるな…梨絵は奴に食われてなどいない」

俺の心を読んだかのようににはやる気持ちを聖夜が制止した。

「武井…このみ…だったな。お前がこの町の一連の騒動の首謀者だという訳か？」

聖夜は武井にゆっくりと近づいていく。俺はそれから数歩遅れて後をついていった。

「契約したのだな…あの僧侶と。あいつはどこに行った？」

武井は無言を貫き通すばかりで、聖夜の質問には一切答えなかった。

長い髪の毛でその表情は分からない。

いきなり仕掛けてくるかもしれない。

「おい！梨絵をどこにやったんだよ！」

俺は耐え切れなくなつて感情的に怒鳴つた。すると武井は少し反応した。

「し…死んだはずじゃ…」

無傷の俺を見て驚いているようにも思えるが、未だに感情を見せようとしない。

「あいにく様だ。俺は生きている。さつさと梨絵を返せよ」

ここで引き下がることなどできない。俺は今まで直視することのできなかった化け物をはつきりと見た。

すると武井は肩を震わせて笑っていた。

「くくくくく…どうして？どうして？私は思い切り刺したはずだよ？肉を深く貫いた感触をはつきりと覚えている。

ずぶつとね…だから…だから…生きてるのはおかしいよ！」

こいつ…梨絵のことを答える気はなさそうだ。

「邪魔だよ…あなたは邪魔なんだよ…あなたさえいなければ…」

武井はゆらりと糸の切れた操り人形のように動き出したかと思つと、思い切り地面を蹴り上げロケット弾のように飛び出した。

聖夜にはわき目の振らず、俺を標的にしていた。

「し…」

俺が襲い掛かる物体を武井だと認識した頃には先手を取られていた。無防備のままに後頭部をしなやかな蹴りで打ち込まれた。

「かはっ！」

その衝撃は女のものとは思えない程の威力で、鉄筋で殴られたかと勘違いしてしまうほどだった。

大地を踏みしめてから繰り出された直線の動きは、ムエタイの動きによく似ている。

しかし、武井にそんなスキルはないはずなのにどうしてこんな力を持っている。

飛びそうな意識のままそんなことを考えていた。

頸椎が砕けたか…そんな感触すら感じられた。

俺は崩れそうになったが、踏みとどまり彼女を睨み付けた。

「ぐ…ぶ…」

目の前がちかちかして頭はくらくらした。気を失う一歩手前といったところだろう。

武井はそのままふらつく俺のから空きの胸部に掌底をどすんと打ち込んだ。

体の外側に痛みが通り抜ける。それと同時にふわりと俺の体は浮き上がり、後方のコンクリートの壁に叩きつけられた。

「が…」

肺が潰されたのか？呼吸ができないし声も出ない。

胸骨は数本折れているだろう。

俺はそのままずりりと壁を背に崩れた。

ぱちぱちぱちぱち…

乾いた拍手の音が響いていた。

「すごいね、あんた…呪者でありながらもここまで身体能力を引き出せるなんてね」

俺から視線を代え、聖夜をぎろりと睨み付けた。

俺との戦闘など準備運動にもならなかったのだろう、呼吸は乱れていなかった。

「普通、呪者はさ…体に襲い掛かる欲望で生まれたばかりでは体をそこまで上手コントロールできないものなんだけどね…」

「…」

「まあいいさ。それにしてもあの教師を囿に使うなんて用意周到と  
いうか何というか。」

しかしその甲斐あって徳人の能力を先に知ったんだな。こいつの血には呪者を葬るに足りる力があるのだからそれは脅威だ……だからこそ血が掛からないように包丁で腹部を刺したり、今のように打撃で攻撃をした」

武井の表情に変化は見られないが、どこか怯えているようにも見えた。

「な…何故？こいつは包丁で刺したのに生きている？」

「それか…それならすぐに分かる」

聖夜は俺の方を見ると指で指した。

そんな俺はというと、体をぐつと起こして立ち上がった。

体の痛みがほとんどなくなっていた。

内臓の幾つかは潰れて、胸骨も頸椎も粉碎されたはずだ。それなのに体が動く。

それを見た武井はそんな馬鹿なといった様子で声はあげなかった。

「く…俺の…体はどうしちゃったんだ？」

自分でも良く分からなかった。あれだけの重傷を負わされて二度も生きているのだから。

もしかしたら死んでしまっただけで霊体になっただろうか？



思い当たる可能性はゼロで、答えが見つからことはなかったが、今はただ立つことだけしか考えなかった。

「徳人…お前は俺と一つの生命体になったんだよ」

「え？」

「こいつに包丁で刺されて死に掛けていたお前を見たとき、俺は動転してうつかりお前の血に触れてしまった。

それがあんなことになるとはな…」

### 31話

三時間前

大量の出血を流していた俺は意識を失っていた。

人通りの少ないこの路地ではあるが、数分もすれば誰かに発見されるだろう。

しかしそれよりも先に俺の命が持つかが問題だ。

倒れている俺の腹部からは血があふれ出すように流れていた。

コンクリートの地面は真っ赤に染まり、側溝にまで流れ落ちていた。

その時聖夜は息を切らして生きているか死んでいるか分からない俺の元へ走ってきた。

「ち…嫌な予感はしていたが…こんな時に限って気をきかせて失敗だったな。」

それにしてもまさかあの武井このみかな…」

梨絵と二人で帰らせたことを言っているのだろうか、

イラつきながら俺の体を探っていると、聖夜は落ちていた包丁に気がつき拾い上げた。

「う…」

血のせいで手が滑って下に落としてしまった。その際に掌が切れてしまった。

赤い血が聖夜の掌にべっとりついていていた。俺の血液と聖夜の血が混ざり合ってしまったのだ。

次の瞬間、雷に打たれたような衝撃に襲われた。

「ぐあああああああ」

体の芯からくる痛みは味わったことがないようだった。

痛みを声に出すほど弱い奴ではないのに、感じたことのない痛みに耐えられなかった。

引きちぎられそうなそんな感覚は、聖夜の五感をめちゃくちゃした。

自分の体に何が起こっているのか理解できるほど冷静でもなく、ただただこの痛みが終わるのを待つことしかできなかった。

汗が滲み、体はがくがくと痙攣を起こし、視界はぐにやぐにやに曲がり、耳鳴りが鳴り響く。

立っているのか、座っているのか判断できないほど三半規管は麻痺していた。

「く…そ…」

徳人の持つ血液の能力でこのまま死ぬのだろうか？

それすら覚悟をしてしまったが、その痛みも数分で治まった。

「はぁ…はぁ…はぁ…」

がくりとその場に座り込み、気持ちを落ち着かせることに没頭した。

心拍数も下がり、頭痛もめまいも次第に薄れていく。

視覚は元のように正しく機能をしていたが、さっきと違う光景がそこにはあった。

「徳人…」

俺の体から絶え間なく流れていた血液が忽然と姿を消していたのだ。

それだけではない。腹部の傷も塞がっていた。

「何が起こったんだ…」

聖夜は未だに震える手で恐る恐る俺の体に触れた。

しかし何も起こらない。

俺の体を見回し、丹念に調べてみたがこれと違って見て取れるような変化はなかった。

人目につくのも厄介なので、そのまま俺を背負うとアパートに連

れて行った。

聖夜は自らの体の違和感をどのように表現したらいいのか分からず困惑していた。

いつもの感覚と何かが違う。俺同様に見たために変化はないのに体がいつもとは別物に思える。

俺を布団に寝せながら一人でぶつぶつと考え事をしていた。

俺は外傷もすっかり消え失せ、大量出血のショック症状も出ることはなかった。

血までもが体の中に戻ってしまったようだった。

「こいつのこの状態は…まるで俺だな」

穏やかな寝顔を見ながら不思議そうにそう呟いた。

しばらく静かな時が流れ、俺の寝息だけがその場に聞こえる。

十分、二十分…ただ刻々と時間が進むばかりだが、

聖夜は、はっと思いつくかのように咄嗟に懐に忍ばせておいたクナイを取り出した。

「まさかとは思いが…」

「ぐくりと喉を鳴らしてから、鋭利な金属の先端を指先に当てた。

そしてすぱっと数ミリ傷を付けてみた。

そこからは赤い血が、じわりとほんの一滴だけ出てきた。

じっとその血液を眺めて数分。

何も起こることはなかった。

それから聖夜は寝ている俺の指先をそっと持ち上げると、同じようにクナイで傷つけた。

するとどうだろう。聖夜とは違い、俺の傷はすぐに塞がり出たはずの血液も戻っていった。

それらを見たことで聖夜は思っていたことを確信してしまった。

「徳人と俺の体の構造が…入れ替わった」

そう考えるしか先ほどの不可思議な問題に答えは出せない。

そもそも何故このようなことが起こったのだろうか？

その原因もすぐに分かった。

聖夜が俺の血に触れてしまったからだ。少ない状況ではそれ以外に有り得なかった。

そして聖夜は自らの呪いも解けてしまったのだろうかと思っ  
てしまったが、そればかりは、はっきりと答えが出せなかつた。

しかし俺の呪いをそっくりそのまま徳人が引き継いでしまっ  
たのだろうか？

分からないことだらけである。

だからこそ俺が目覚めているんなことを調べてみないとその  
ことを立証するまでには到達できない。

そのまま聖夜は黙って俺が目覚めるまで体を休ませてあげよう  
としたが、三時間も経つと流石に痺れを切らす。

無理やり俺を起こした。

### 32話

「反転したんだよ。不死の能力は徳人に引き継がれ、俺は普通の体に戻った。だから今の徳人は無敵だ」

「何だと…」

武井はそんなことを口にしたが、俺も同じ気持ちだった。

呪いをそっくりそのまま俺が引き継ぐなど思ってもみない結末だ。

これで短命な親族の中でもダントツの長生きが更新されるって訳だ。

「そんなの…嘘だ…嘘だ…嘘だ…」

武井は目を見開いて、薄ら笑いを浮かべていた。

「私は…ここでお前らを殺さないと、また以前の私に逆戻りだ…そんなの嫌だ。そんな屈辱は耐えがたい」

がちがちと奥歯を鳴らしながら見えない何かに怯えていた。

「武井…お前どうしちゃったんだ？」

自らの保身の事しか考えない人とも化け物とも呼べない哀れな生き物に俺は聞いた。

「し…知らない。知らない。あの人は私を満たしてくれるといった。抑えきれない欲求を…それに従っただけ。ただそれだけ…」



外見は無傷なのに精神は傷だらけだ。言動が定まらない。

「あいつって…それで何をされた？お前は何を望んだんだ？」

「醜い私は…生きてはいけないの。あのまま生きていてもみんなに馬鹿にされるだけなの。」

そうなりたくない。それだけなの…だから私は食らい続けなければならぬ。

太っている食欲ばかりの人間の魂を…食欲は憎い…憎いけど食わなければ私は死ぬ…」

支離滅裂だ。こいつは良心の呵責に耐えられなくなってここまでおかしくなったのか？

俺はそれ以上の言葉が見つからずちらっと聖夜を見た。

「こいつは責めあえいでいるのさ。本能と理性の中でな…しかし次期にそれも失われる。」

本能に忠実になるのさ…本能は理性をゆっくりと溶かしていく」

苦しんでいる武井にゆっくりと近づいていた。こいつは今は不死ではない。

殺されるかもしれないのにそんなことお構いなしだった。

「あの僧侶が与えたものは人間の根源に限りなく近いものだ。そう簡単に押さえ込める代物ではない。」

だから遅かれ速かれ人を止めることになる…まあ、例外はあるがな」

自分のことを話しているのだろう。こいつは人の魂を喰らわない。そもそも存在自体が呪いそのものなのだ。

だからといって他の者に比べて軽いとは言いつてもいい。他の奴らは行くところまで行き着いたら自害ができる。

しかしこいつにはその理論は当てはまらない。

精神崩壊を起こそうが、どうあっても生き続けなければならないのだ。四百年という長い年月が苦痛そのものだ。

「あ…あなたと私は違う…私は…人の魂を喰らわないと死ぬ。でも…死ぬのは嫌。

何も満たされていないんだもの…それが分かるまで死ぬのだけは嫌…」

「くくく…これが呪者だ。満たされない未来を与えられ、永久的にそれを求める…」

そうすることであらゆる欲を持った人間が消えていくんだ」

とんでもない話だ。欲を持たない人間はいない。何かしらいずれかの欲を抱くつてものだ。

僧侶はそれを駆逐するために呪者を作ったのか？

この世界で生き残れるとしたら、赤ん坊か、精神の崩れた人間しかない。

「だから、俺が残らず始末してやるよ。そうしないと呪いは解けな

いらしいからな。幸いお前らは不死身ではない。

それならば、肉体を壊して葬り去るさ……」

強い言葉に殺意も込められていた。俺も肌でそれを感じ、いつ聖夜が飛び出すのかはらはらして見ていた。

「お互いを……無視すればいいのに……そうすれば我々はずっと望んだ世界で生きられる」

武井は俯きながら懇願にも似た言葉でその場を濁した。しかし聖夜は視線を武井から外すことなくそんな陳腐な言葉を一蹴した。

「お前らはそれで良くて、俺が困るんだ。普通に死にたいんだよ……俺は！」

戦闘開始の合図が出された。

聖夜の右手からはクナイが既に三本放たれていた。

瞬きも終わらない出来事に武井はもちろんのこと、俺までも時間が止まったかのように感じた。

黒い金属の塊は銃弾のように眼に留まることはなかった。

「ぐっ！」

がきんという硬い衝撃音が三発響いた。そしてその場にクナイが三本落ちた。

そこでようやくとクナイが投げられたと判断できた。

武井を見ると、彼女は半身に構え、右腕を真っ直ぐ立てて盾のよ  
うに頭部、胸部を守っていた。

「弾かれたか…よもやとは思っていたが、あの教師と同じ能力か…」  
それを確かめるためにクナイを飛ばしたのだろう。しかし武井の  
攻撃を考えれば納得できる。

あいつから受けた攻撃は鉄骨で殴られた感じがした。

五体を硬質化できるものと判断するのが無難だ。だとすれば、こ  
でぶの時のように薬品を使うのだろうか？

そもそも考えるよりも早く聖夜は動いていた。

大地を蹴り上げ、飛び上がると接近戦に挑もうとした。

### 33話

無謀だ。クナイですら弾く体に肉弾戦など無意味に等しい。

武井も当然、応戦する。

近づく外敵に鉄の鞭を全力で振るった。しなやかで速い蹴りは空気を切る音すら聞こえる。

聖夜の腹部をかすめると、そのまま返しの後ろ蹴りを放った。

聖夜はそれも見切り、横に半歩ずれた。

こいつには恐怖つてもものがないのか？直撃すれば下手すれば一撃であの世行きなのに平然とそんな行為をやったのけた。

そして武井は打撃もその中に組み込んでいく。

拳を無駄なく一直線に聖夜の胸部、頭部に向かわせていた。

空振りが三度も繰り返されたが、四度目には武井の拳は聖夜の胸を捉えた。

いや、触れただけだ。

聖夜は触れるか触れないかのぎりぎりの瞬間を見極めて、そのまま体を半回転させ攻撃自体を流した。

捉えた感触に勝機を見出し、打ち抜こうとした矢先の出来事だっ

たので、武井の体は大きくバランスを崩した。

聖夜はそれを待っていましたとばかりに、仕込んであった液体を武井のから空きの背中に向けてぶちまけた。

じゅつうううううう

焼けたような音と共に煙が立ち上がった。

俺はこでぶとの戦いをまた思い出す。あの時かけた超酸と同じものだろう。

だとしたら武井の皮膚は焼かれ、致命傷に至るかもしれない。

そんな淡い期待はすぐに裏切られた。

武井がその程度で悲鳴をあげること、態勢を崩すこともなかった。

逆にそんなことを諸共せず、聖夜に追撃を仕掛けていた。

大地を踏み鳴らすような震脚は、全身に力を伝える初動操作のようなものだ。

地面に亀裂が入りそのままその力を片腕に集中させる。

幾多もの関節を伝わった力は通過することに力を増幅させ、掌に到達した頃には数倍に膨れ上がっていた。

咄嗟のことで防御をすることで精一杯だった聖夜の右腕に掌底と言つ名の爆弾が炸裂する。

「ぐう！」

衝撃を流すことも吸収することもできなかった右腕はもろくも粉砕され、

そのまま四十キロ以上ある体を軽々と後方数メートル先まで吹き飛ばした。

綺麗な弧を描くように体は空を舞い、屋上の端の手すりに激突した。

金属製の柵状の仕切りは、何本か飴のようにひん曲がり、その衝撃の大きさを表した。

「く…そ…」

聖夜はそのまま意識を失ってしまった。

まずい。あの衝撃では下手すれば内臓までいってるかもしれない。

不死でもない体のあいつがそれほどの重傷を負えば死ぬかもしれない。

「くくくく…私の方が…強い」

背中から立ち込める煙をこれといって気にしていない武井は聖夜の崩れる姿を見て喜んだ。

「お前の体には肉体を溶かすほどの酸がかかったはずだ…」

こでぶと同じ結末を迎えるものだと決め付けていた。

しかしそんなことは起こらない。武井は聖夜から視線を俺に移した。

「私の体は…あらゆる物理を跳ね返す。例え気体でも液体でも…」

物理だと？原子、分子、電子を拒絶するのだとしたらこいつを殺す術が存在するのかわ？

所詮こでぶは二番煎じだということだったのか…

こいつの前ではこでぶがかすんで見えそうだな。

「だとしても…お前を殺す術はある」

俺は思い出すかのように武井を真つ直ぐ見た。

しかし武井の表情に焦りはなかった。逆に心の底から高笑いをしていた。

「はは！新道くん…あなたの血液のことを言ってるの？私は見ていたんだよ。全てを…」

それを承知でやれるならやってみたらいい」

マジかよ…そこまでお見通しなら対抗策があるっていいのか？

未熟な俺はすぐに動揺してしまう。聖夜が気を失っている今、一人だけでやるしかないのにこんなことではまずい。



気持ちの段階で押し切られている。

悪霊に憑依されたような武井の放つ独特の空気は俺を浸食してく……  
ぎりぎりの境界を保つことが嫌になった俺は何も考えることをし  
ないで、

自らの手を切り、血を流すとそれをべっとりと刃にこすり付ける。

一連の動作を見せても武井はまるで動かない。俺を待っているか  
のように立っていた。

ちくしょう。

それで火が付いた。

もやもやした気持ちを吹き飛ばし、唯一の武器を握り締めると俺  
は武井に向かっていった。

地面すれすれまで上体をかがめて、相手の懐に三步で潜り込んだ。  
そして右手に握った小太刀を斜め一線に下から上へと一気に振り  
抜いた。

その線に迷いはなかった。しかし肉体に触れたはずなのにまるで  
切れた感触はなかった。

「っ……」

そんな不可思議な触覚を味わうと、次に待っていたのは死を彷彿  
とさせる衝撃だった。

武井が槍の一撃のような鋭い横蹴りを俺の腹部にめり込ませていた。

「がは…」

体がくの字に折れ曲がる、そしてそこから息もつかせない追撃を四撃。

一呼吸で四発の正拳突きを体の部位を選ばず喰らわせた。

石の飛礫を至近距離でぶつけられた感覚に体中の骨が軋み、悲鳴を上げ、そのまま吹き飛ばされた。

### 34話

「はは！はは！…私は…強い」

仰け反る俺を見ると歓喜の声を上げ、そのまま勢いに身を任せて突っ込んだ。

「新道くん…これは警告だよ。私を二度と襲わないって言うね。痛みを知れば、私に係わりたくないって理解できるでしょ。」

だから…どんな凄惨な光景が待っていても怨まないでね」

にやりと口元を引きつらせると、俺の事を圧倒的な力で解体したという意思をむき出しにした。

ぞくり…

背後にその欲望を感じると、俺は生きたまま地獄を見せられると分かった。

だが、そんなことを黙ってさせるわけにもいかない。俺は吹き飛ばされた体にブレーキをかけるように足で踏ん張ると、

目の前に迫った危機を全力で回避しようと目を見開いた。

先ほどまで鈍っていた呪者を憎む俺の血は無意識の中で徐々に体に働きかけた。

すぐ目の前にあった抜き手は俺の肉体を恐らく貫くほどの威力だろう。

しかしそれを直感だけでかわした。

服を僅かに切らせるだけで済ませると、反撃の一撃をお見舞いした。

狙うのは眼球。

いかに物理を跳ね返す力があるうともそれが不可能な場所がある。

眼球、耳の中、口の中である。なぜならそこがそんなもので覆われていたら目は見えないし、聞こえない、言葉も発せないだろう。

奴の能力の対象になっているのは外皮だ。硬質化した皮膚で全てを守っている。

もしも瞬きでもしたらこの攻撃は失敗に終わるだろう。

軌道に乗った切っ先は、標的である眼球を反れることなく捕らえていた。

このまま数十センチ突き刺せば脳内まで刃は到達し、機能を破壊することができる。

そのまま力を抜くことなく思い描いた目標物を目指した。

が、俺の武器がそこに到達することはなかった。

がきん

目を閉じやがった。微笑を浮かべて俺の行動を分かりきっていた

かのように勝ち誇った顔をしていた。

しかし…

そこに俺の本当の目的があったのだ。

弾かれた右手と逆の左手には隠された千枚通しが握られていた。

それは相手に見えないようにずっと手の中に忍ばせていた。この機会をずっと待っていた。

長さ十センチ程度の暗器が武井の右耳の穴に滑り込んだ。

相手は目を瞑っていたからこの攻撃を見ることはできなかった。

ずん…

左手に痺れと共に軟らかい感触が響いた。

三半規管を貫き、脳内までかき回したかは分からなかったが、武井は反撃することもままならず、がくりとその場に膝をつくことになった。

俺はその場から離れて距離をとった。

慎重に相手の動きを見るためだ。

両膝を付いて正座のように座っている武井は頭を垂れていたので、

生きているのか死んでいるのか分からなかった。

じつと武井を見ていたが、動く様子はなかった。

それならば、梨絵を探さなくては、それに聖夜の体の状態も気になる。

元々不死だと言っても無茶をしすぎだからな。

屋上内を見渡し、梨絵の隠されていそうな場所を探した。

ここにあるのは、巨大な貯水タンクしかないが…まさか、そこなのだろうか？

古びた金属の梯子がかかっている先には直径数メートルもある大きなタンクがあった。

廃墟だったので当然水も入ってないだろう。

そう思い俺はそこを覗くことにした。

すると、背後から忍び寄る影がそれを制止した。

まさか…

振り向くこともできずに咄嗟にそこから右に大きく離れる。すると遅れてコンクリートを貫く音が聞こえた。

間一髪だった。そのままそこにいたら背中から串刺しにされていただろう。

素手の槍という武器に。

「く…」

振り返って確認すると、やはりそれは武井の仕業だった。

「お前…まだ…」

きつと相手を睨み付けると、武井は生気のない顔で俺の事を恨めしそうに眺めていた。

耳穴からはどくどくと血液が流れ出て未だに止まらなかった。

三半規管を破壊した効果があったのだろう。体が大きく傾き、膝はがくがくとしていて真っ直ぐ立てないでいた。

あの時手ごたえは十分だったが、残念ながら俺の持っていた武器は頼りない物だ。こんなこともある程度予測していた。

しかし何をこいつがここまで動かす。

しぶとさというよりも執念や怨念といった念に近かった。人の心の奥底に潜む黒い闇のような意思。本能。

それは肉体を凌駕して不可能を可能にさせている。

あの傷では動けない。しかしこいつは動いている。

「…ここで…終わったら…私は…何のために生まれてきたのか…」

ずりずりと引きずるような音が聞こえる。

「武井…」

いくら呪われているとはいえ、こんなクラスメイトの姿を見るのは苦痛だった。

いつそのこと動かないでほしかった。静かに死んでほしかった。

「私を…馬鹿にした奴らを見返して…それで、それで…もっと私は痩せるんだ…」

痩せるだと？

まだそんな望みを抱いているのか？体がそんな状態で…

「止めるよ。いい加減…」

俺は耐えられなくなり諭すようにやさしい口調で話しかけた。

「お前の行き着く先には何も無い…そんなこと分かるだろうが。もう、人ではなくなつたんだ。お前は…」

「そんなことはない！だって…生き続けていれば私の…望みが叶う。一番の理想の私の姿が完成される…私は…私は…それを求めて…」

くそ…有りもしない完成形を追い求めている。痩せて、痩せて、それでどうなる？その次は何を求めるんだ？



所詮は完成された姿など存在しないんだ。

武井は体を震わせながらゆっくりと俺に近づく。今までのような俊敏な動きとは変わって、スローモーションのようだ。

壊れた玩具の人形のようにバランス悪く体がふらつき、転んだ。しかしすぐにゆっくりと立ち上がる。それを数回繰り返した。

「諦める…」

武井は血にまみれながらも涙を浮かべていた。そして泣きながら何かにするように歩き続けた。

「諦めるよ…」

二度目の説得にも耳を貸さない。そこに何かを見出そうとするようにまた一歩、俺に近づいた。

### 35話

そんな姿を見て俺は腹立たしくなってきた。そして咄嗟に叫んだ。

「止めるよ！馬鹿！」

今まで目を合わせられなかったが、その一瞬にはつきりと武井の目を見た。

こいつ…

苦しいんだ。

それがやつと分かった。

理想を求めて歩き続けていたが、それが何か自分でも分からないことを知っていた。

だから涙を浮かべた顔は、苦痛の表情で歪んでいたのだ。体の痛さではなく、心の痛さで…

「武井…悪いな。俺って馬鹿だからさ、こんな簡単なことしか言えないけど…」

そこまで話して俺はすつと小太刀を構えた。宿命という奴からは俺も逃れられない。

狩る者狩られる者の立場上このままって訳にもいかない。

だから…

「もつ…いいだろ？」

そして目の前にいた武井の頸動脈を躊躇うことなく突いた。

あの能力なら貫かれないかもしれなかった。しかし武井はそれを自ら解いていたのだ。

脱力していて刃はよどみなく肉体を切り裂いた。

「あ…は…あ…」

か細い声にならない声をあげ、武井はそのまま目を瞑ると、死を覚悟した。

さらさらと足の先から塵へと姿を変えてしまった。

こでぶの時と同じ現象だが、そんな光景に慣れるはずもなく、クラスメイトの最後を見るのは気分が悪い。

非現実的なことが起こっているのは、俺の運命が招いた出来事。しかしそんな必然の出来事をすんなりは受け入れられなかった。

武井は…欲に負けたのかもしれない。

自ら命を絶つのが速いかも分からない。しかしどこか空しい。

同じ人として、無欲を貫くのは無理だからだ。そんな欲を利用した見えない存在の僧侶が憎くも思えた。

いろいろ考えている内に聖夜は目を覚ました。

俺が気付くよりも先に自分で体を起こして、頭を押さえていた。

「おい、大丈夫か？」

俺はその様子を見て、すぐに側まで走り、容態を確認した。

「これぐらいどうってことない。まあ、不死の時と違って体の痛みが取れないことに慣れないがな…」

逆にこんな痛みは新鮮にも思える」

痛みがすぐになくなる肉体ならではの会話だった。

聖夜は痛みを受け入れ、それで生を実感していた。俺には到底無理な話だ。

「徳人：ありがとう。お前がここまで潜在能力を引き出せなかったら逆に俺の命は奪われていた」

正直に自らの気持ち을露呈して、俺に感謝してくれたが、喜ぶ気にもなれなかった。

「ここからだ…お前はもう後戻りできない。仮にもクラスメイトだった人間を葬ったのだからな…」

それは心に重くのしかかる。

「分かってる。それよりも今は、梨絵が心配だ。多分…その貯水タンクの中だと思うが」

俺はそう言って、巨大な鉄の塊によじ登ろうとした。

しかしそれよりも先に聖夜は自分の持つ脇差のような刀で金属をくりぬくように斬りつけた。

まさか…

金属は紙でも切るかのように四角い形にずれて落ちた。

そしてぼっかりと穴を開けたのだ。

するとその中には気を失っている梨絵の姿があった。

まるで卵の殻の中に閉じ込められてような状態で膝を折り曲げ、目を瞑っていた。

「梨絵！」

それを見て、真っ先に走り出し、彼女の元へと向かった。

四角い穴からどうにか中に入ると、すぐに梨絵の体を見回した。しかしどこにも外傷はない。

それに息もしている…命に別状はないようで安心した。

下手すれば肉体ごと食われたかと思っていたので、最悪の状況だけは避けられほっとしている。

例え魂を奪われていたとしても武井が死んでしまったのだから、

戻るはずだ。生きている姿を見てそんな風に樂觀視もできた。

俺は梨絵をその中から出してやると、膝と肩に手を滑り込ませて持ち上げた。

こいつ…意外に軽いんだな。

そんなことも考えつつ、再度、無事を間近で確認した。

「ここから離れた方が良さそうだ」

背後から聖夜は声をかけた。

「そうだな。事件続きの中、梨絵の両親も心配していると思うしな…」

そして俺たちは、そのまま静かに眠る廃墟ビルを出ることにした。

### 36話

春とはいえ、深夜の風はとても冷たかった。

風は吹き荒れていて、折角咲いたばかりの桜の花びらも舞い落ちていた。

誰も立ち寄らない工場跡地は、買い手も見つからないまま何ヶ月も放置されていた。

手入れもされていないので、草木がすぐに生えてきていて、ちょっとした原っぱだった。

不況の煽りを受けて年々、廃墟や看板の置いたままの土地が増え続けていた。

そんな昔の繁栄の象徴の場所を風情の一言に変えてしまった寂しい土地に一人の男は立っていた。

その男はこの禅寺のお坊さんのような格好をしていた。

しかし頭は丸坊主でなく髪の毛はぼさぼさの長髪で、髭もつつすらと生えていた。

街の明かりの方を見ながら一人、何か考え事をしていた。

「人の文化の光と…影か…」

男の目に写る、眩しく光るネオンの街の様子は自らの気持ちを萎

えさせるばかりだった。

「無限に広がる人の欲…これはいつになったら潰えることだろう。私には…それがいつか知るための義務がある…」

そのまま男は風に紛れてどこかへ消え去った。

武井このみとの死闘から一時間。

梨絵が目覚めたので、家まで送ってやった。

両親は流石に心配していて、警察に電話をかけようとしていた。しかしそれも寸での所で事なきを得たので、胸を撫で下ろすことになった。

目覚めた梨絵には事情を説明した。

武井が俺を刺したのを目撃していたので、まずあれは大した傷ではないことを説明。

それから気を失ったので俺の家で休ませていたことにした。

俺は病院に行き治療をしてもらい、それから梨絵の元に返ってきてと順序立てて話した。

そして当事者の武井このみは逃げてしまったことにした。



刺された原因は、俺の事を怨んでいたということにして自ら泥をかぶることにした。

そうすれば全てが丸く収まる。

「あれで良かったか？」

俺は聖夜に思わず聞いてしまった。

すると聖夜は徳人にしては口が上手かったと冗談ぽく褒めた。

「そうか…しかし気が重い。あんなことがこれから続くと思うとな…回りに迷惑をかけてしまうからな。」

なあ、武井はどうして契約を結んでしまったんだ？同じ呪者同士なら何か分かるんじゃないか？」

目の前のコーヒークップを眺めながら聖夜に聞いてみた。

「あいつは…太るのが嫌だったんだ。ずっと太い足の事でいじめられていたんだろ。」

だから痩せたかった。誰よりも誰よりも…」

「痩せたくて契約を？それって、矛盾してないか？暴食の欲を持つ魂を食い続けなければ望みが叶わないんだぞ？」

何か…痩せるのに太っている奴を食うだなんて…」

「奴には太っている者が許せなかった。昔の自分と重なってな。だからそれを一つ一つ消せる楽しみをどこかで感じていた。」

最初の獲物は操られていたあの教師だ。きつと笑いながらあの教

師の魂を喰らった。

そして抜け殻の体を操ったんだ…人の欲って表裏一体だ。なりたくないものを心のどこかで実は望んでいるんだ…」

「そういうものなのか？だとしても欲を抱かない人間はいない。知識が増えればそれだけ欲は出てくる」

「そんな人間があいつは嫌いなのさ…」

そう言っであの僧侶のことを思い出した。

「そいつに会えれば何か分かるんじゃないのか？こんなくだらない争いも止めにできる」

「そんな簡単なことなら俺だってやっている。四百年もこの国を駆け回ったのに探せなかったんだぞ？

それを今更同じことを繰り返せるか」

聖夜はそう言つと昔を思い出したのか、少し寂しい表情になった。

「悪い…そうだよな。俺が思いついたことなんてお前はとっくにやっっているよな」

「別に徳人が悪いわけじゃない。それでも俺は今嬉しいんだ。生を実感できているからな。しかし残念な出来事が一つある…」

そんな言葉に俺は身構えてしまった。するお聖夜は俺の様子を伺うこともなく話を再開した。

### 37話

「俺とお前の体が完全に繋がってしまった」

「は？」

「つまり…命を二人で共有してると言うことだ」

「それって…その…お前が死ねば俺が死ぬみたいなことか？」

「そうだな。反転と共有。これは血が混ざったことが原因だろうな。徳人の血には呪いをかき消す能力が備わっている。

それに私が触ってしまったのが原因だ」

「それなら、最悪お前だけが消滅するんじゃないのか？」

呪者の定義はよく分からなかったが、俺の血液が有効なのは立証済みだった。

しかしそんな安易な発想だけでは、確証には迫らないと聖夜は言った。

「俺は存在自体が他の呪者と違う。それにお前とは血縁者だ…同じような効力は期待できずに反転の作用が働いた」

「なら…俺の呪者を探知する能力が鈍ったのも…」

「そうだ、俺がそっくりその能力を受け継いだ。おそらく呪者を殺す血もな…」

ただ、完全に全てが反転したと言い切れない部分もある。

例えば治癒能力だが、これは少しだが俺にも残っている、先ほどの戦いで右腕を粉碎骨折させられたにもかかわらず、

今はほぼ完治しているからな…だから分からないことも多少はある…」

声が出ないほどの衝撃を受けた。それが本当なら立場が逆転し、俺自身のために呪いを解かなくてはならないということになる。

しかも聖夜が死ねば俺も死ぬというおまけつきでだ。

俺の能力を聖夜が受け継ぎ、聖夜の能力を俺が受け継いだ。

これはこれで大変なことだった。

「しばらくはじっくりこないだろうな。でも、徳人…嫌でも慣れてもらわないと困るぞ。」

呪いを解く前に俺が殺されれば、あっさりと全てが終わる」

それはそうだ。俺だって何もしないで殺されるのはご免だ。

だから素直に聖夜の話聞き入れていた。

そして俺は自分で入れたお茶をすすると、ほっと一息ついた。

聖夜も同じように湯飲みを手に取ると、飲んでいた。

一瞬だけが緩和された空気が流れて、少し落ち着いていた。

目まぐるしく動いたこの数日は俺の人生観を変え、運命も肉体も

変えた。

そんな中でこの静かな時間は、安らぎを与えてくれた。

お互いにその余韻に浸りつつ、しばらく黙っていた。

壁にかけられた時計が時刻を刻む音だけが聞こえたが、そんな中で自分のこれからのことも考え、聖夜に意見を求めた。

「なあ…俺はこのままこの街にいてもいいのか？」

これだけの大規模な事件が起こったんだ。

これからも迷惑をかけるんじゃないか？そんなことばかりが浮かんではしまう。

罪悪感からそんなことを話してみたが、聖夜は恐ろしいほど冷静だった。

「このままでいい…」

「え？でも…」

「俺たちは変わらずにしばらく振舞ったほうがいい。いいか、急に俺たちがいなくなったらそれこそ事件だ。」

この街の一連の事件に係わっていると疑われてもおかしくない。それならほとぼりが冷めるまでじっとしている方が得策だ…」

妙に説得力があり、俺は言い負かされているようだった。

「心配するな。事件の根回しは俺が警察関係者にしておく。武井このみはこのまま失踪者として扱われるだろうがそれでいい…  
犯人にもならないし、こんな現実離れた話をしても誰も信じないのだからな」

「未解決事件のまま真相は闇の中ってことか」

「そうなるな。でも知らなくてもいいことってのは必ずある。  
そんなもので世の中は溢れかえっているんだ。だから今回の事件も数年すれば時と共に忘れ去られるさ」

「そういうものか…しかしそんなものかもな。」

人の目に映る事件や事故というものは当事者でなければどこか客観的で、そこまで固執しない。

数年すれば、そんなこともあつたな程度だ。

「しかしやり辛いのは否めないな…」

「俺はそうやってずっと生きてきたがな」

「お前と一緒にするな」

「大層な言葉だな…相変わらず。いいか、ふて腐れて不登校とかになるなよ」

「はいはい…」

それから俺らは後片付けを済ませて、寢床についた。

聖夜を追い出しても朝には人の布団に入り込むので、俺が逆に寝袋で寝た。

まったく…何で家主がここで寝るんだよ。

冷たい床を背中にしてごろんと転がりながら眠れない夜を過ごした。

## 38話

### 一週間前

白い煙が立ち上げながら、一人の男は一息ついていた。

張り詰めた空気を変えることができた報酬という訳でもないが、男は煙草を大きく吸い込んで至福の時を味わっていた。

じりじりと煙草の先が真っ赤に燃え上がり、吸い込む息の強さすら感じさせる。

「ふう…ここの治安の悪くなったものだ」

男が暗い路地裏を見回すと、そこには五人の鍛え上げられた男たちが死んだように倒れていた。

「て…てめえ」

倒れている男の一人が、そいつに向かって力を振り絞って何かを話しかけようとした。

しかしその男は、煙草を吸い終わるとそいつを見ようともしなかった。

「自分の立場をわきまえな…それにな、年上はもっと敬うもんだ」

そのまま暗い路地裏から出て、夜の街を歩き出した。



その男は身長百八十センチと背が高いが、やせ型で威圧感のようなものは存在しなかった。

温和な空気が流れていそうな、穏やかな表情の持ち主で、無精ひげを生やして、ダークスーツに薄手のコートを羽織っていた。

年は三十代半ば、まだ青年の面影が残るような童顔の持ち主だったが、煙草の吸い方は手馴れた感じで実に自然だった。

どこかそこら辺の人間とは違い、身に纏う空気が違った。恐怖を凌駕した余裕さえ感じさせた。

そんな不可思議な風貌とは打って変わって、軽口をぶつぶつと叩いた。

「ったく…どう計算したら、ビール一本が二万ってことになるんだよ」

そんなことを言いながらネオンに照らされ何人もの人間とすれ違った。

歩く速度は速く、ずんずんと進んで歩いていく。そんな中で不意に足を止めるような群衆が目の前に広がっていた。

「何だ？」

そう思って、男も群衆を掻き分けるように進んでみた。

すると、そこには救急車が来ていて、路上に倒れていた人間を運ぼうとしている最中だった。

何事だろうとただ見ている男の耳には嫌でも回りの噂話が耳に入  
った。

「これで二人目？嫌だなあ…」

「ここも物騒になったものだ」

「誰の仕業か検討もつかないんだろ？」

何を言っているのだろうか？そんな程度で黙って話を耳の中に入  
れていた。

「しかし分からないよな」

「ああ…外傷なしで意識不明だろ？まるで魂でも抜かれた感じだな」

「そうかもな…」

その言葉で男は体を大きく反応させた。

そういうことか…

ふむ、と自分の中で、勝手に納得してしまうと、そのまま目的を  
見つけたかのように動き出した。

すると背後から男を止める声があった。

「あれだけのことをしておいて、無事で済ませられると思うのかい  
？」

そこには十人のいかにも喧嘩なれしたような男が勢ぞろいしていた。

「恥かもしれないがな、このまま黙って帰す訳にはいかないんでな。こつちにも面子つてもものがある。舐められれば終わりなんだよ」

先頭の男がこいつらを連れてきたのだろう。

手に凶器を握るものは存在しなかったが、先ほど気を失わせた人間よりも腕が立つと男は思った。

異様な空気に包まれたその場は、野次馬の視線も変えてしまった。

救急車の次は俺か…そんな風に半ば呆れながら薄ら笑いを浮かべていた。

「ははは…あんたら…すごいね…」

そんな状況に怯えることもなく、実に自然に構えていた。そしてどうしてこんなことしかできないのだろうう程度に、ため息をついていた。

「いいから、こつち来いよ！てめえ」

イラついた一人の奴が勇んで前に出ると、男の胸倉をいきなり掴んだ。

しかしその瞬間にその男は何もされていなのに地面に思い切り叩きつけられた。

「が？」

男はどうしてそうなったのかも理解できない。

ほお骨を強打したことにより、頭蓋を大きく揺らして脳震盪まで引き起こしていた。

それはごく自然に力の流れを利用しただけだった。相手の向かう方に自らの力を載せるだけ。

たったそれだけだが、与えるダメージは大きい。

それが硬い地面やコンクリートなら…

そんな無様な男の様子を見るなり、その場にいた全員が行動をすく移した。

「おいおい…」

一度に九人も猛者がたった一人の男に一度に襲い掛かる光景はそうそう見られない。

様々な格闘技を経験した者達が体の線の細い男に容赦なく自らの鍛え上げられた技をかけようと迫っていた。

だが、そんな目論見は泡へと返された。

全ての体術において超えられない領域というものがある。

それは攻撃を全く受けない人に触れさせないということだ。

複数に襲われれば退路は塞がれ服もつかまれるかもしれないし、体にも接触はする。

それを皆無にすることは達人でも無理だ。

攻撃を受けて、それから反撃。だが、その間に隙は生まれるのだ。

しかしこの男の反応速度は人の域を超えていた。先ほど不可能だと話した行為を平然とこなしていた。

まるで全身に目がついているかのように交差する腕、足、体をかいくぐりながら確実な一撃を加えていた。

たった一撃。そう話してしまえばそれまでだが、その男が狙っているのは急所だ。人は繊細に出来ている。

ほんの些細な攻撃ですら行動機能をしばらく奪われる。

分かりやすく、次々とその場にいた者達が地面に倒れていった。

そして最後の一人を残した。

「ねえ…もう止めにしない？こんなこと。だってさ俺だって、金はまるつきり払っていないってわけではないしさ、

別にいいじゃないか。無益な争いは本当に好まないんだ。こと、人間に関してはね…」

たった一人残った男は何もできないで立っていた。しかしその言葉が怯みそうになっていた心を焚きつけた。

何も考えず拳を固めて呆れ顔の男の顔面を殴ろうと走っていた。

空手専門だったのだろう。迷った拳句には何度も繰り出していた正拳突きを胸部に向かって一直線に放っていた。

結果は同じだった。かすることすら出来ないままに目の前は真っ暗になっていた。

地面に倒されていたのだ。

「だから言ったのに……しょうがないか……」

全員の男が地面に倒れたのを見ると、男は再び懐から煙草の箱を取り出すと、すっと一本だけ引き抜いた。

「こんな境遇うんざりだねえ……」

口にくわえると、マッチを擦って先に火をつけた。

そしてそのまま見物客を見ることもなく、白い煙を巻き上げながらその場から消えていった。

### 39話

ドタバタ騒ぎから一夜明けて、複雑な心境のまま学校に向かった。

聖夜の昨夜の言葉がなければ、俺は休む気でいた。

梨絵を巻き込み、更には武井このみをこの手で殺した。このことを誰に話せる？

親友の翔太でもそればかりは無理だ。

自然と外界と断絶したくもなる。

聖夜は俺よりも先に学校に向かった。それから少ししてから家を出たが、いつもと変わらず翔太はそこにいた。

「よお！今日はまた一段と暗いな」

翔太…

こいつの顔を見るとどこかほっとする。唯一、自らの世界で普通なのだから。

そのまま俺たちはいつものように他愛もない話をして、学校に向かった。

教室に入ると、梨絵の姿はない。

まあ…その原因も昨日の俺だが…

暗い気持ちのまま何も考えられず、ぼーっと席に着いた。

すると担任が教室に入り、ホームルームを始めた。昨日と何も変わらない。

以前と変わらず警戒態勢を緩めないように、部活動は一切禁止。五時以降は全員学校を出る。

そんな決め事にはもう意味のないことも分かっていたが、口にはできなかった。

俺の一日は特に目新しい出来事も存在せずに終わっていた。

帰り道、俺は梨絵の様子を見に行こうと思った。

あれだけ目の前で衝撃的なことが起きたのだ。トラウマにでもなっていないだろうか。

見た目はがさつで強気な女だが、それでもあいつの根の部分は弱いことは十分知っている。

こう見えても付き合いが長い方だからな。

さて…何か差し入れでもしたほうがいいよな。

そう思いながら商店街を歩いていた。甘いものが良いだろうと勝手に判断して、和菓子屋の前で立ち止まった。

するとそこには何人かの客が並んでいた。ここは隠れた名店で、知る人は知っている。



使われている小豆が他とはまるで違うのだ。軟らかい甘みが後を引き、渋いお茶によく合う。

それを知ってか、いつも数人の行列にはなる。俺の前には主婦と三十代ぐらいの男、中年のおじさんが並んでいた。

たい焼き、一個六十円。中には餡子がクリームか…

あいつは餡子が好きだから家族の分も入れて五つくらい買ってあげば丁度いいかな。

焼かれている鉄板を眺めながら考えていると、すぐに自分の番が回ってきた。

小銭ばかり入っている財布から、じゃらじゃらと三百円を取り出し、支払を済ませた。

紙袋は温かく、香ばしい匂いが鼻の奥まで広がった。

そして梨絵の家を目指そうと思い、進路に向かって歩き出そうとした時、一人の男が道を塞ぐように目の前に立っていた。

「こここのアンコって本当においしいねえ」

にこにこしながら話しかけたそいつは、さっき俺の前に並んでいた三十代の男。

身長は百七十五センチある俺よりも高い。痩せ型で無精ひげを生やしていて、ダークスーツを着こなしていた。

しかしシャツの首元のボタンを開いてどこかだらしない感じだ。

「何か、用ですか？」

俺は見知らぬ人間に合わせて話が出るほど器用ではない。だからどこか警戒していた。

「ごめんごめん…こんな寂れた和菓子屋に並んでいる若い男っていうのが気になってさ。でもここのたい焼きは格別だね。

今まで食べてきた中で一番美味いよ」

「それは…店主に言ってあげたらどうです？俺は寄るところがあるんでどいてくれませんか？」

そのままぶつかると同時にその男を無視して突き進んだ。

すると、その男が去り際にぽつりと話した一言が耳に残った。

「君は…人間かい？」

え？

驚きながら振り返ったが、すでにそこには男の姿はなかった。

どうしてだ？

まさか…呪者なのか？

しかし呪者特有の反応はなかった。俺の能力が反転していても感じる能力は聖夜と同じ分だけある。

あれぐらい接近していればそれも感じ取れるのだ。だが、何も感

じなかった。

どう見ても普通の人間だ…

もやもやした気持ちを残したまま、俺は梨絵の家を再び目指した。

## 40話

何度も行き来している道だから俺にとっては苦でも何でもない。

目の前には当たり前前のようないつもの風景のように一軒屋がそびえ立っている。

梨絵の家は普通の家だ。

金持ちでなければ、それ以下でもない。

何を普通と判断するのは俺にも分からない。

でも大きな借金もなく子どもをそこそこ養っていける能力があればそれで十分だ。

ドアホンを鳴らすと、梨絵の母親が軽く挨拶をしてきた。

昨日の礼もされたが、こちらが巻き込んだ形だったので申し訳ない気持ちで一杯だった。

それから梨絵の部屋まで通された。

ベッドに寝ている梨絵を見た。するといつものような表情に戻っていた。

少し安心した。

「わざわざ来てくれたんだ」

「まあな…その…昨日のことは俺にとってもお前にとってもかなり

シヨックな出来事だったからな」

「そうだよ。これまで生きてきた中で一番衝撃的で最悪…まさか目の前でノリちゃんが刺されるなんてさ…」

でも、本当に大丈夫なの？お腹の傷は…」

珍しく人の心配をしてくれる。流石に茶化す元気までないようだな。

俺はそんな梨絵を見て、いつもと違うので少し心配にもなった。

「ああ…医者にも言われたけど、そんなに深く刺さらなかったらしい。

その…あれだ、脇腹をすり抜けたみたいな…感じ？」

でまかせを話した。しかも俺は嘘をつくのが下手だ。だからどこか言葉が所々で詰まってしまふ。

そんな俺を変だと思ったのか、梨絵も探りをいれてきた。

「そう？私には突き刺さったようにも見えたけど…」

「混乱してたからそう見えただろ？実際に俺は、ほれ、この通り何にもなっていない。

もし重傷ならここに来ることもできないだろ？」

「まあ…それもそうね…でもさ、何であまり仲良くない武井さんに恨みを買ったの？」

まさか、知らない間にノリちゃんがちよっかい出していたとか？」

「止めるよ。その変な想像。そんなことあるかよ。第一お前は俺の今までの恋愛情報を全て握っているだろうが。」

あいつは…誰でも良かったんだ。きつとな…そんな場所にたまたま居合わせた俺らの運が悪かったって事だ」

そう促すことで梨絵も徐々に頭の中で整理することが出来てきた。

本当に嘘をつくのって難しいな…少ししか話していないのにどつと疲れが押し寄せてきた。

「まあ、元気出せよ。たい焼き買ってきたからさ」

紙袋を側にある机の上に置いた。机の上はごちゃごちゃと物があって崩れそうだった。

しかし梨絵はその紙袋を見るなり、すぐに反応した。

「あ！それって塩屋のたい焼き？うはあ…お姉さんは嬉しいねえーノリちゃんがこない子に育ってくれるとは…」

いつもの梨絵の調子に戻ってきた。

「はいはい…姉さん。あんたの好きな餡子ですよ」

「クリームじゃないって所が良く分かっているね。

しかも五個ってことは…えっと…私が三個で後はお父さんとお母さんか…これまた中途半端な数で…

どうせなら九個買ってくれれば一人三個になるのにさ」

「あのな…それを言うなら、六個だろ。何で一人三個食べること前提なんだよ！」

「ここら辺がノリちゃんの甘いところだよね」

ここまで減らず口を言えれば完全回復の兆しが見えている。

そんな梨絵の言葉にイラつくこともなく、逆に安心した。

「こんだけ元気になれば、もう大丈夫だな。明日からは学校に来いよ」

俺は長居する気はなかったので、そのまま帰る支度を整えようと置いてあった鞆を手にした。

すると、梨絵は思い出したかのように話を切り出した。

「あのさ…双葉さんのこと…」

とても小さな声だったので梨絵が何を話そうとしているのか聞かえなかった。

そして聞き返すと、何でもないと言ってそのままはぐらかされてしまった。

変な奴だ…

そう思いながら梨絵の母親に挨拶をして家を出て行った。

## 41話

時刻は七時近くなっていた。辺りはすっかり暗くなり人気もほとんどない。

事件発生以来こればかりは仕方のないことだが、俺にももう関係ない。

自分のアパートを目指す間に何度も警察に呼び止められて早く帰りなさいと促された。

それを聞いている振りをしながら、家の鍵を空けるとそこには聖夜が待っていた。

しかも居間で何かやっている。

テーブルの上にクナイを並べてやすりで研いでいた。

それに暗器のような手に収まる武器の類もそこには出されていた。

「何してるんだ？」

黙々と作業している聖夜に向かって話しかけると、聖夜は一度手を止めた。

「見れば分かるだろう？武器の手入れだ。俺の体にはたくさん武器が仕込んである。

その一つ一つきちんと手入れをしなくては、何かあったときに使えないだろうが……」



そういうことか。しかしどうしてこんな古臭い武器ばかり使うのか疑問だった。

俺はそのまま向かい合うようにどっかと床に腰を下ろした。

「拳銃とか手榴弾とか使わないのか？ そうすればもっと簡単で威力もありそうに思えるが…」

「うわぁ…言うねえ。徳人がどんどん物騒になっていく。まさかそんな発言が飛び出るなんて…」

聖夜はふふんと嬉しそうにからかっていた。

「うるさいな！ ただそう思っただけだ。

お前ぐらいならいろんな所にあてがあるからそういった武器だつて入手は簡単だと…」

「ま…それはそうだな。徳人の言うことも正しい。拳銃の方が殺傷能力も高いし、手入れも簡単。

いくつも持つ必要もないからな。だけど、これは俺の昔からのスタイルだからな。

四百年変わらないものの一つだ…クナイなんて武器は時代はずれもいいところだ。

しかしこれはこれで思い入れがあつてな」

「思い入れ？」

「ああ…なら少しだけ俺の昔話をしてやるつか…昔々のな…」

聖夜はクナイをことりとテーブルに置いて、俺を真っ直ぐ見た。

「俺の生まれた村はな、暗殺を目的とした忍者集団の村だった」

忍者：あの甲賀流や伊賀流があつて、戦国時代に暗躍した奴らのことか？

予備知識があまりないので漠然とそう思っしかなかった。

それを口に出しても聖夜は否定することなく、こくりと頷いていた。

「貧しい時代でな。そういった役職だけで食っていけるわけではなかったが、

懐を肥やそうとしている悪人を成敗するのはすかつとしたもんだ」

まるで時代劇だな。

しかしテレビの中の世界ではなく、生身の人間が目の前で血しぶきを上げて斬られたりしている現実の世界だ。

「物心ついたらずーっと暗殺の稽古ばかり付けられていた。それでその時に毎日握っていた武器はこれ……」

くるくるとクナイを回しながら見せた。

「落ち着くんだよな。これを握っていると。

時代がどんどん変わっても、あの時に生きていたことを忘れることはないし、戦う時の力になる。」

それに、お前も助かったろ？あの時俺が貸した暗器でさ……」

武井このみを殺したあの武器のことを話している。

そうだ。あの時、俺は聖夜に渡されていた武器を握っていた。掌に隠れる程の小さな武器を…

威力はさほどないが、接近戦においてあの武器は効力を発する。拳銃だとそうはいかないだろう。武器が丸見えなら対処はしやすい。

「武器にも魂は宿る。それが拳銃だろうが、刀だろうが、ましてやこのクナイや暗器でもな。

使った分だけ、ただの道具にも不可思議な力が備わるんだ。まあ、言葉では形容しがたいがな…

だから俺は今までずっと使っているだけだ。これからもそうだ。どうだ？納得したか？」

「はいはい、分かったよ…」

そのまま俺は立ち上がると、夕食の準備をしようとした。

「梨絵の家には行ったのか？」

流石に俺の行動はばれている。聖夜は視線を変えることなく黙々と武器を磨いていた。

「行ったよ。昨日の今日だからな。心配だったし、巻き込んだことも事実なんだからな」

「ふーん…それで？」

「精神的にも落ち着きを取り戻していた。」

いつもの調子で何で他人に怨まれるようなことしてんのよって散々怒られたがな……」

冷蔵庫から買い置きしておいた食材を次々と取り出し、何を作るか考えた。

「でもさ、武井このみは仮にも俺を刺したことになるから、殺人未遂ってことになる。

これって両親が知ったら悲しむよな」

トマトと水菜とレタスを袋から出して、まな板の上に置いた。

「今更何を……もう踏み込んではいけない領域にあいつは入ってしまった。だからこの程度で済んだのは良い方だ。

それに殺されそうになった相手の心配をするなんて徳人も人が良いつていうか、馬鹿っていうか……」

「馬鹿って言うな！」

包丁で野菜を切る手が止まってしまった。

「万人にやさしいだなんて考えは捨てた方がいい。そんな世界は存在しない。偽善と傲慢以外の何でもない」

こいつ……哲学者かよ。しかし人生経験がものを言っているのだから説得力もある。

野菜を切り分けて皿に盛り付けた。そしてそのまま豚肉を取り出した。

「あ、そついや…今日、変な奴に会った」

あの和菓子屋での出来事をふと思い出して話すことにした。

「三十代ぐらいの男でな、俺を見るなり、君は人間かい？って言われた。

でもよ、呪者ではないんだ…あれって一体…」

フライパンに切った豚肉を入れてピーマンと玉ねぎと一緒に炒めた。

「そいつ…どんな感じの風貌だ？」

気になったのか聖夜は俺の話に乗ってきた。

「え…つとな…爽やかな背の高い男？みたいな感じか…」

「ふーん…」

じゅうじゅうと肉は音を立てて焼きあがった。もう一枚の皿にそれを盛り付けた。

そしてサラダとしょうが焼きを食卓に運び、ご飯も盛り付けた。

「それで…さっきの話の続きだが、聖夜は知っているのか？」

食べる前に聞いた。

「心当たりは…まあ、ある…」

「そうなのか？まさか、それってかなり危険な奴ってことなのか？」

「うーん…それはないが…俺は好かない奴だったな」

「それってどういう意味だ…」

「これ以上話しても無駄だ。それにあいつとは嫌でもこの先会うかもしれないからな。」

「だからもう一度出会ったら直接あいつに聞け」

「おいおい…無責任な話だな。ここまで話しておいて…まあ、害がないならいいがな」

そしてそのまま夕食を食べ始めた。

聖夜はどこかむっとした様子でご飯を食べていた。

あの時に出会った男…聖夜とはどういった関係なんだろう？

## 42話

あれから数日が経った。

日常は少しずついつもの世界に戻りつつあった。

武井このみは失踪者。

しかしそれと同時に意識不明者は出ることもなく、逆に意識を失っていた者は意識を取り戻していた。

それに伴い警戒態勢は解け、警備の数も緩んでいくことになった。

梨絵は俺が訪問した次の日から学校に出ていた。

聖夜も変わらず優等生っぷりと変人ぶりを兼ね備えてクラスメイ  
トと仲良くしていた。

学校は平和だった。

武井このみと小松という教師を除いて…

「なあ、ノリ」

休み時間に翔太が俺の席まで来た。

「突然だが、花見に行かないか？」

「花見だ？」

「ああ…この街も警戒態勢が解かれた訳だし、いろいろ遊びに行けるだろ？」

「そりゃあそうだが…何で花見なんだよ。もっと別の遊びがあるだろうが」

友人の顔とは似つかわしい発言に疑問を持った。

「花見は日本の心だろ。それに俺さ、絶景ポイントを発見したんだよ」

「絶景ポイントねえ…まあ、俺は翔太が決めてくれるなら何でもいいぞ。しかし二人だけで行くのか？」

「いやいや…既に梨絵には声をかけてある。あいつはイベント好きだからな」

「まあ、妥当な選択だな」

「それと、双葉をさ…お前誘ってくれない？あいつ面白そうだし、話してみたいからさ。」

仲いいんだろ？一緒に暮らしているし…」

「ど！どうしてお前がそれを知ってるんだよ」

思い切り取り乱した。

「あのねえ…俺の実家は君の家主ですよ。それぐらい把握してますっつば」



「家主でもそれはおかしいだろうが！まさかストーキング行為ですか？俺の家に盗聴器など？」

「違うって。この前、お前の所に母さんがいつものように家賃の集金に行ったら、双葉聖夜がいたんだよ」

二日前か…そういやあの日、聖夜が一人で家にいたな。

「あなたは誰？って母さんが聞いたらしいんだけど、しっかりと名乗って遠縁の親戚だと説明したらしいぞ。

何でもここに越してきたばかりで困っていたからしばらく厄介になるんだとも話していたそうだ…」

遠い親戚…それは間違いではないが、これはこれでまずいのではないか？

「それで…お前の親は何て？」

「ノリ君のことだからほっとけないんですよ。

だってさ…それにさ、二人で暮らすのに狭いならもっと広い所紹介しようかだって…」

「おいおい…どこの親が不順異性交友を認めるんだよ！

若い男女が一つ屋根の下にいるだけでそこは否定するだろうが！それでも家主か！」

「あのねえ、お前だからだよ。人間性と信用ってのはやっぱり重要だねえ…」

「そうは言ってもなあ…寧ろ怒られた方が気が楽なのにその対応っ

「何だよ…」

急に力が抜けてしまった。

「そう言うな。所詮は冗談なんだからよ。しかし女つ気のないお前がこんなことになるのは俺も楽しいがな」

「この野郎…他人事だと思いやがって」

「悩め悩め…俺よりも先にそんな経験をするんだからな。だからだ…お前は双葉も誘えよ。」

遠縁とは言え頼ってきた仲なんだろ？それなら受け入れてやれよ。お前のことだから突っぱねようとしてるだろ。」

自分の領域を侵されたくないってな…昔っから変な所で気難しいからな」

どこまでこいつは俺の心を見透かしているんだ？確かにそんな性格を俺はしているよ。」

それでも他人がそこまで分析できるなんて、俺も分かりやすい人間ってことになるな。」

軽い自己嫌悪に陥ってしまった。

「俺もな…お前のその何でも悟った感じがかなりム力つくがな！」

俺も負けじと言い返してやったが、翔太には鼻で笑われた。

「はいはい…用件はとりあえず伝えたからな。今週の日曜に商店街の外れの公園十時集合。」

よろしくな…早くしないと桜が散ってしまう」

お前は気象予報士かよと突っ込みそうにもなったが、翔太は自分の席に軽やかに戻っていった。

付き合いは長いが、聖夜のことまで知られてしまったのはどこか恥ずかしい。いや、付き合いが長いからこそだ。

隠し事はしないつもりでも今回は状況が状況だ。

いろいろ悩んでみたが、解決策など見つかるはずもなく、帰ってから聖夜には素直に今日の出来事を話すことになった。

すると…

「はは！楽しそうだな。桜は俺も好きだ。それに息抜きにもなるだろう？」

「は？」

「お前のだ…ここ数日のお前の表情は酷いぞ。ここいらで息抜きも必要だろ？」

「お前と過ごして息抜きになるのかよ」

悪態をついてしまった。

「そんなことよりも、どうして翔太の母さんと会ったこと話してないんだよ！」

「別に…いちいち報告することでもないだろ？何なら同棲してます

って言ったっていいんだぞ？」

「ふ…ふざけんなよ！どこの世界に血の繋がった人間と同棲する奴がいんだよ！」

「あのなあ、血が繋がっているから問題ないだろ。それとも同棲じやなくて、同居の方がいいのか？」

「そんな言葉の違いはどうでもいいんだよ！俺はお前がもっと俺のことを気遣えって言うんだよ！」

大体、俺の今までの生活を考えろよ。どこの世界に同い年の血の繋がりのある人間が同居しているんだよ。  
複雑な家庭環境がもろに出ているだろうが」

「そんなに世間体って気にするものか？」

「お前が気にしなさすぎだ！」

翔太は口が軽い奴ではないからこのことは自分たちの中で収めているに違いない。しかし俺は気分が悪い。

聖夜の考えのなさに…

正直隠し通せるものなら隠してほしかった。だが、結果はものの数日でネタバレだ。

まるで推理小説を最後から読んだ気分だ。

「翔太だっけか…俺はあいつは結構好きだぞ。裏表がなさそうだし、素直だし」

「好きってなあ……」

「人間的にすばらしいじゃないか。大きな欲も抱かず、全うな学生生活を満喫している」

「そついうものか？」

「ああ…若者に珍しく物欲やら性欲を感じない」

聖夜の翔太分析は的確だった。俺もそう思っていたからだ。

「まあ…そこは俺も否定しないが。そんなことよりもこれからも軽率な行動はくれぐれも控えるよな」

こいつには毎日振り回されっぱなしで疲れる。しかしこいつはそんな俺の忠告も聞いてやしない。

「それで、いつ行くんだ？」

かなり乗り気だ。

## 43話

三日後の日曜日。

俺と聖夜は翔太の指定した場所に歩いていた。

そこは駅前の公園だった。

この街の大きな駅の周辺は他の土地と違い、緑に囲まれていた。田舎という訳ではないので、すぐ先には高層ビルの群れが見えている。

しかしそんな都会と田舎の調和が見事に取れているような場所でもある。

緑とコンクリートが交錯するかのような景観はどこかほっとする。

駅の周りを取り囲むように大きな公園が広がっているのが、この街の魅力の一つでもあるのだ。

初めてこの土地を踏むものは例外なくまず驚く。

俺は元々この場所に住み着いていたので、そんな驚きもなく日常を過ごしていたが、何度見ても好きな場所の一つでもある。

時刻は十時五分前を指していた。

俺は自分の腕時計を数回見ながらそこまで移動していた。

遅刻は嫌だった。だから寝起きの悪い聖夜を連れてくるのは大変だった。

まったく…どっちが男か分からない。まさか反転の効果は性別も変えてしまったのかと思ってしまっぐらいだ。

目を擦りながら聖夜は俺の後をついてきた。

指定の場所に着くと俺は辺りを見回した。すると駅前の噴水の前に梨絵が立っていた。

「お…」

少し小走りになり、梨絵の元まで移動した。

向こうもこっちに気づき軽く反応を見せた。

「早いな…」

「まあね。私はどちらかというと、人を待たすのが嫌いだからさ。いっつも一番乗りなんだ」

「へー…良い心がけじゃないか」

「それよりも双葉さんと一緒に来たの？」

ちらりと聖夜の方を見たが、あいつは欠伸を大きくすると、やあ、とにっこり微笑むだけだった。

「あ…っとほら、たまたま途中で一緒になったからさ…」

うーん。苦しい言い訳かな？

梨絵にも俺と聖夜の関係は正直に話すことはできない。できれば隠し通しておきたい。

「双葉さん。こんにちは…話すのは…その初めてだよね」

「ああ。そうだな」

軽い挨拶から入り、お互いを探り合うような談話がしばらく続いた。

そうしているうちに、きっかり十時になったら翔太が姿を見せた。

「よお！みんな揃ってるね」

集合時間きっかりに全員が揃っている。

正に生真面目な人格だな俺たちは…模範生徒のような自分達に笑いそうになった。

「さてと…行くか！」

翔太が先陣を切って歩こうとしたが、俺らは行き先を聞いていなかった。

そのことを問いただすと、翔太は黙って着いてこいとか言わなかった。



それから歩くこと二十分でその目的の場所に着くことはできた。

風が気持ちよく抜けるその場所は小高い所にあった。坂道の住宅街の頂上にある小さな公園。

街を一望できるような高い場所だ。

そこには桜の木がほんの数本並んでいた。

しかし数本とはいえ、稀に見るような見事な枝振りだった。

包み込むような温かさと儂さ、そんなものを溶け込ませた風情を確実に持ち合わせている不思議な空間がそこにはあった。

俺は柄にもなくその場の雰囲気酔いしれてしまった。

風に舞う桜の花びらはまるで雪のよう。

綺麗だ…

その一言しか浮かばない。

「どう？良い所だろ？」

翔太の声が我に返した。

「あ…ああ…」

俺だけではなく、梨絵も聖夜も言葉を発することを忘れていた。

「どうしてこんな場所を？」

「俺もたまたまなんだけどな…散歩がてらにここにきたんだよ。そしてたらたまげたよ。」

まさか街を一望できる桜の名所が存在するなんてな。

ここは手入れされていないから草も荒れ放題だろ？でもそれもいいんだよ。自然が溢れている」

コンクリートとアスファルトだらけの世界に生きている俺たちからすれば、こんな世界は逆に真新しいのかもしれない。

しばらくこの風景を楽しんでいた。

「お前もたまには良いことするよな…」

「たまにはってなあ…俺はこう見えても人の喜ぶことは好きなんだぞ」

照れくさそうに話していたが、それは本心だ。

「しつつかし翔太は昔から一歩先を行ってるよね」

梨絵が横から口を出した。

「あんた何でも出来て、気が利くのになんてどうしてモテないんだろね」

「それは余計なお世話だ。ま、今日はゆっくりしようぜ。お前もその作った性格で毎日疲れてんだろ？」

梨絵の方を見てにやりと笑った。



## 44話

「な…何を…」

「知ってるんだぜ、俺とノリはな…猫かぶって他の奴らと話すのも  
疲れるだろ？端から見れば気持ち悪いがな」

「余計なお世話よ。たく…こんなに早くばれたら転入生の双葉さ  
んも引くじゃない」

聖夜のことを気にしていたが、俺はその心配はないと思っていた。  
聖夜はどの人間にも対応できる許容範囲の広さを持っているのだ  
から。

案の定、気にした素振りも見せずに対応していた。

「俺なら大丈夫だよ。梨絵、普段どおりに接してくれよ。こいつら  
もそうなんだからさ」

そんなことをいきなり言われてもすぐには切り替えることも出来  
ずに梨絵は少し戸惑った。

「え…と…」

だから俺も手助けをしてやった。

「こいつなら大丈夫だ。遠い俺の親戚だが、なかなかしたたかな奴  
でせよ。」

女というよりは男に近い存在だ。気にしなくてもいい」

良い機会だから全てを教えておこうと思いつつ代弁するように話したが、梨絵の表情はどこか曇っていた。

「素朴な疑問なんだけどさ。ノリちゃんて…遊びに来るような親戚いたっけ？。私の知ってる限りだといなかったけど」

鋭いところをついてくる。流石は成績優秀者。しかしそんなの俺のでまかせでどうにでもなる。

「母方の親戚で、こいつの両親が仕事の関係で海外に行くことになったんだ。」

高校生の途中で留学つてのも大変だからってことで、唯一知っている人間の俺の元を尋ねてきたんだよ」

「え？でもさ、この学校に転入したばかりの時に何も話してくれなかったじゃない。」

それに最近知り合って仲良くなったような感じもするけど…」

またまた鋭いところをついてくる。俺は言葉を捜すことで必死だったが、今度は聖夜が話した。

「俺もさ…恥ずかしかつたんだよ。だってさ、学校で同い年の親戚だなんて普通避けたくなるだろ？噂になるっていうかさ。」

だから徳人にも頼んだんだ。学校では知らない振りしろって…こいつにも迷惑かかるし、これからやりにくくなりそうだから。仲良くなってからゆっくりと話せば周りも理解してくれるだろ？」

すらすらとありもしないことを話したが、実に説得力がある。逆に自分の言葉足らずを反省させられる。

「そうなんだ。なるほどで。それで、今はどこに住んでるの?」

梨絵は気を良くしたのか聖夜にタメ口を話せるようになっていた。その様子を見ていて一安心したのもつかの間、聖夜の口からは問題発言が。

「こいつんち…」

おいおい！それはいくらなんでもストレートすぎるだろ。今まで柔らかくしていた話がぶち壊しじゃないか。

何のための前振りだったんだよ。

ここは、嘘でも違う場所を口にするだろうが！

心の中で行き場のない怒りが飛び交い、どうなるのだろうかとはらはらどきどきしていた。

梨絵は分かりやすく、取り乱していた。

「あ…あの…ノリちゃんって一人暮らしだよ。っていうことは…二人きりであそこにいるってこと?」

「まあ、そうなるな」

そんなにさらっと…無警戒すぎるだろうが！

「転入する前からそこにいたってこと?」

「いや。つい数週間前からだ。こいつがあまりにも拒むからせ…」

「はは！入れろって何度も押しかけてようやく一段落したところだ」

「…」

聖夜以外の者たちは言葉を失い、そこには吹き荒れる風だけが音を支配していた。

このままではまずい。友人全員に誤解されたままこの先学校生活を送らなくてはならない。

それだけは駄目だ。俺は全力で思いつく嘘を話した。

「あ…いやさ。困っているのは事実なわけで、新しい住居が見つかるまでの間だ。」

もうそろそろ見つかりそうなんだよな。おい！」

聖夜を睨みつけながら、合わせると無言の指示を出す。

「あ…う…そ…そうだな。もう少しで見つかりそうかな。ははは…」

全く…あの馬鹿。始めは良かったのに、どんどん酷い状況に話を進めやがって。

あれじゃあ、翔太も梨絵も俺と付き合い辛くなるだろうが。

「翔太も頼むよ。俺にしてくれたかのように、こいつにも物件紹介してくれよな」

翔太にそう頼んだが、本人は面白おかしく俺をからかった。

「別に今のままでもいいんじゃない？」

「あの人…お前が思っている以上に俺はきついんだよ！」

友人の肩をつかんでがくんがくんと揺らした。

「うそ、うそ。からかってみただけだ。心配しなくてももう頼んであるって…」

「本当か？」

「ああ。だから今日ぐらい楽しめ。なあ、梨絵も双葉も」

「聖夜でいいよ」

「なら、聖夜もな！」

言いように翔太のペースに乗せられたが、俺らはこの場所で昼飯を食べることにした。

それぞれ用意してあった。まあ、聖夜の方は俺が用意したのだが…

重箱をどんと出すと、三人は、おお！と感嘆の声を上げた。

「そこまで期待すんなよ。余りものいれただけなんだから…」

他の二人もそれを皮切りにパックやら菓子やら飲み物を出した。

こうしてビニールシートの上にはたくさんの食べ物が並んだ。

「さあ、食べるか」



そして和やかな昼食が始まった。

## 45話

わいわいと騒ぎながら俺たちはそこにあるものをつまんでいた。

「試験そろそろだけど、梨絵も翔太もどうしてる？」

普通の学校の会話だった。俺も自然といつものように話していた。

「ああ…今回は範囲もそんなに広くないし、二、三回復習すれば余裕じゃないか？」

「余裕って…」

「悲観的にならない。ノリちゃん是要領が悪いのよ。だから何度も何度も見て覚えようとする…」

簡単に言うが、そんなの出来る人間の発言だっつーの。記憶力は人によって差が出る。

「それって普通じゃないのか？俺からすればお前らが特異な感じに思えるけどな」

「私も翔太も授業で大体把握してるよ。集中力の違いだよ。ノリちゃんだっていいもの持つてるのに残念だね」

まるでやれば出来る子なのに発言だな。どこか肩身の狭い思いをさせられた。

「はいはい…俺は授業の半分は寝てますよ。正直向かないんだよな

…勉強は…」

「またあ言い訳して…ねえ、聖夜さんはどうなの？」

急に聖夜に話を振ったので俺は驚いてしまった。そして聖夜もその質問に普通に思ったことを口にしていた。

「俺は…一通り終えたってどうか。何度も繰り返しているってどうか…」

「え？」

「まあ、その…今更かなって感じ…」

「そうかぁー…自分でたくさん勉強したんだね。偉い偉い」

「お前らそんな余裕でいいのか？きつとこいつならお前らの揺ぎ無いその栄冠を奪い取るかもよ」

俺はちよつとでも動揺させてやろうと意地悪のつもりで言ってみたが、逆に火をつけてしまったらしい。

「望むところよ。敵が多いほうが燃えるからね」

梨絵は人一倍の負けず嫌いだ。だから怯んだ対応などできなく、受けて立つといった構えの姿を見せた。

「はいはい…頑張ってください」

俺は他人事のように梨絵を煽るだけ煽ってやった。どうせ自分は

この争いには参加できないのだから。

翔太はというと相変わらず余裕の態度で、二人を見守っていた。

「何かその態度むかつく…」

そんな翔太を見た梨絵は標的を瞬時に変えた。

「今度は翔太も負かしてやるから。覚悟していてね。そうそう…ちなみに私に負けたら一日召使いになってね」

「は？」

「ご褒美よ。あんたんち金持ちじゃん。それなら一日お姫様もいいかなーって…」

それぐらいの報酬があったら燃えるじゃない」

「相変わらず勝手だな…そういつお前が負けたらどうするんだよ？」

そつだそつだ。俺も心の中で叫んでしまった。

「私が…負けたら…そうね。逆にお金が掛かる以外のことなら何でもするわよ」

「それじゃ釣り合わねーだろーが！」

「そんなことないでしょ。こんな可愛い女の子が目の前にいたら、あんなことやこんなことしてみたいって…」

まるで誘つかのよう色っぽい仕草をして見せたが、逆効果で俺

と翔太は引いてしまった。

「思わねーな」

即答で梨絵は撃沈した。

「でも、面白いな。それ。色気はともかく、その生意気な態度を改めてもらういい機会だ。

よし、乗った。もしも俺が負けたらお前は一日お嬢様。

お前が負けたら従順な下僕にでもなつてもらおうか…ははははは

…」

「ふふ。それなら契約成立ね」

良かった。こんなことに巻き込まれないで。

俺はほっとしていたが、そんなのは束の間で、

「ノリちゃんも当然参加ね。それと聖夜さんも…」

「お…お前ふざげんなよ！どうみてもこっちの分が悪いだろうが。

点差だけでも毎回五十点以上付けられているんだぞ？勝負になるかよ。そんなのは、頭の良い者同士でやりやがれ。

対象外は巻き込まなくて結構だ」

柄にもなくふて腐れてしまった。すると梨絵は聖夜に同じように話を振っていた。

「俺は…どっちでもいいぞ。楽しそうだしな。それに負けるのは何でも嫌だからな。やるなら勝つ」

何勝手に燃えてるんだよ。こつちにも負けず嫌いがいたか…くそ…  
しかし俺は関係ないぞ。負ける勝負など受けない主義だからな。

そのまま沈黙を保っていた。

「あれあれ…三人参加なのに、ノリちゃんはやらないの?」

何とでも言いやがれ。俺にはそんな無謀な賭けはできない。

「じゃあ、あのことはらしてもいい?」

「は?」

あのこと…どのことだ?

こいつは俺の知られたくないことをたくさん知っているからな。

嫌な予感はしていた。すると梨絵はそのまま嬉しそうに天性のサ  
ド属性を發揮した。

「くくく…口にするのも残酷な、中学生時代の酷い仕打ちを…」

え?まさか…あの俺の人生の汚点と呼べるべき出来事をこいつは  
知っているのか?

そんなまさか…俺は誰にも話していないぞ。あんな恥ずかしい話  
親友の翔太にすら…

しかし…こいつならどこから情報が入ってくるか分からない。

まさか、あの当時の同級生から聞きだしたのか？

いろんなことを考えてしまい、俺は血の気が引くように背中が寒くなっていた。

「あ…あの…」

「いいんだよ。別に。私はさ…」

「ノリ、何だそれ？初耳だぞ？」

「教えてあげようか？」

「俺も気になるな…」

聖夜まで割って入ってきやがった。

「あのね。実は、三年前の中学二年生の時にね…」

その瞬間俺の中で何かが弾けた。

「わーーーーーっつたよ！やればいいんだろ？分かったよ。お前ら覚悟しとけよ。」

俺がお前らに勝ったら絶対に容赦しないからな！」

勢いで宣戦布告をしてしまった。

「これで全員参加だね。面白くなりそう」

悪魔だ…こいつは呪者と違った要素を持っている。



## 46話

そこで盛り上がった話は落ち着いたが、梨絵は声のトーンを少し下げ、真面目な顔をしだした。

「テストの話ついでなんだけどさ、気になる話があつてね」

「何だよ。さっきの馬鹿話はどこにいったんだよ？」

「馬鹿はノリちゃんだけだから……」

否定のしようがない。俺は口を噤んでしまった。

「新陽大学って知ってる？」

「知ってるも何も…偏差値六十後半の頭の良い私立大学だろ？」

県でも一番の大学だ…確か医学部も入ってたよな。それがどうかしたのか？」

「あのね、数日前にその生徒が何人か行方不明になってるんだつて。

テスト前に忽然といなくなる…これって不思議じゃない？」

「新陽大学って言ったら、ここから駅で二つほどしか離れていないよな。

この前の事件といい、最近物騒じゃないか？」

俺と聖夜は今の話を聞いてどこか引っかかった。

同じ気持ちになったのだろう。

まさか、呪者の仕業ではないのだろうか。

しかし行方不明者が出ている度に気にしていたらそれこそ全国を渡り歩かなくてはならない。

だからまさかな…と思う程度で胸の内に収めておいた。

「出掛ける素振りもなかったらしいから、これって神隠しかな？」

「神隠しってなあ…非現実的な…理由もなくいなくなっただけで、決め付けるのは速すぎるだろ。」

借金でもして逃げてたんじゃないか？このご時勢トラブルは日常茶飯事だ。

人がいきなりいなくなっても何ら不思議じゃないぞ」

「ごもつともだ。翔太の話していることは現実味がある。」

俺も呪者という存在を知らなければ同じ事を考えていたはずだ。

「そうだよね。行方不明だったって、あちこちにカメラが着いているから」

自殺でもしない限りしばらくすれば発見されるよね」

「ああ、そうだな。しかしそれも何かの事件に巻き込まれてなければの話だがな…」

物騒な世の中であるに違いないのだから、俺たちも気をつけなくちゃな」

「特にお前はそう思うぞ。金持ちなんだから」

俺は補足するように言っただけだ。

「嫌味な言い方するな。こう見えても俺の家はセキュリティ万全なんだよ」

売り言葉に買い言葉のように怯まずに言い返してきた。

「でもお前は歩く身代金みたいなもんだからな。」

そっちのセキュリティも管理した方がいいんじゃないか？」

「一昔前の漫画みたいなこと言いやがって。むかつく……」

「まーまー…そんなことはもう置いておいて、別の話しよ！聖也さんの話とかさ……」

そのまま俺らはふざけあいながら、数時間ここで過ごして一日が終わった。

俺らが花見をしてから数週間。賭けの対象となっていたテストは無情にも開始された。

結果は…

言いたくもないが、格好よく啖呵を切ったからと言って、決して

思い通りになるはずもなく、

四人の中で最下位だった。

それでも今までの俺の成績の中では一番良かった。百八十人中七十番なのだから。

しかし天上人の人間は違う。

余裕で上位三番までの栄光を勝ち取っていた。

「はは…」

結果を見た俺は笑うしかなかった。

今の俺に学問って必要なのかな？

不死身になって、呪者と戦わなければならぬ俺にとって…

皮肉たっぷり普段は何も思わないテスト結果に悪態をついてしまった。

「お…結果が出たね」

そんな俺の元へ魔女、いや、諸悪の根源が登場した。

梨絵は自分の順位を見て浮かぬ表情を見せた。

「二番か…」

いやいや、それでも十分ですから。そこでため息をつく理由も分

からない。

俺が凡人だからか？

しばらくすると、そこに一番と三番の奴が姿を現す。

張り出された紙を見るなり翔太は、がくりと肩を落とした。

「うあ…やばいな…こりゃ」

そう言っただけをぼりぼりとかいていた。結果は三番。それで何故、こんなに落ち込むんだよ。

そして次に聞こえたのは喜びの声だった。

「やった。俺が一番だ」

あろうことが、転入早々に聖夜が学年トップを勝ち取ってしまった。

お前も年の功があるなら、少しは若い奴に譲ってやろうとする懐の厚さを見せろってんだ！そう心の底から思った。

しかしそんな感情も僻みでしかない。俺は他の三人にやっぱりねといった勝ち誇った顔で見られていた。

「お…俺がびりなのは最初から分かっているって言ったろが。もう、お前らの好きなようにしろ！勝手にしろよ！」

負け惜しみにも聞こえることを話したが、容赦などするようない

中ではない。

差し迫る恐怖を少しずつ味わうことになった。

## 47話

口火を切ったのはやはり梨絵だ。

「なら…私は、私のために一週間働いてもらおうかな？」

好きなときに現れて、好きなことをしてくれる。そんな従順な下僕に…」

目が笑ってないぞ。

「それなら俺は、実家の手伝いでもしてもらうかな？家賃の集金を頼むわ…」

流石親友、軽めの罰で助かる。

「最後は俺か…最近刺激的なことが少ないからな…よし…なら…俺の体を…」

その先を言う前に俺は聖夜の口を塞いだ。すると、もぐもぐと口を動かすばかりで何も聞こえなかった。

「何？」

他の二人はその先が知りたくて俺の方を見たが、こいつにこれ以上この先を言わせるわけにもいかない。

すると聖夜は俺の手を振りほどいた。

「何すんだよ！」

「いや…お前のことだから、ろくでもないことを言うんじゃないか  
と思っただけだ。俺なりの配慮だ。」

「言っとくけどな、お前は年配者だろ？それなら多めにみるぐらい  
の器量があってもいいだろ？」

ひそひそと他の二人に聞こえないように話した。

「でも…俺だって、何もしてないわけじゃないんだぞ？がんばった  
褒美ぐらいは欲しい」

「頼むよ。お前の世界と俺らを一緒にするな。経験浅いんだから無  
理やり同じ土俵に乗せないでくれ」

譲歩に応じて欲しかったが、それもままならないのも分かってい  
た。

だが、俺のこの先のことを考えたら、どうしてもこいつに折れて  
もらうしかなかった。

するとそんな淡い気持ち伝わったのか、聖夜は眉間にしわを寄  
せて悩むと、振り返って苦渋の決断をした。

「分かったよ…俺は…その…何もいらない」

その言葉を聞いたときに他のメンバーは、え？という表情を見せ  
た。

「双葉さん、何も望まないの？ノリちゃんなら何でもしてくれよ。  
単純でお人よしだから」



何だつて？

「ついでに馬鹿だ」

言いたい放題だ。

「そこ！二人。う・る・さ・い！」

ぎろりと二人を睨んでみたもののどうにも迫力には欠けてしまう。  
翔太も梨絵も別に怖くないといった様子だ。

「でもさ、このままだと双葉さん気の毒だよ。それなら私かシヨウ  
にお願ひしたら？」

一番なんだしそれぐらいの特権があってもいいんじゃないかな？」

梨絵がそのように第二の策を打ち出してくれた。

翔太もそのことに異論はないらしく、いいよと話した。

すると聖夜は素直に喜んだ。がんばったご褒美がないのはよほど  
がっかりしたのだろう。

いい年なのにそんなことで顔色をころころ変えるのはどうなのか  
と思っただが、こいつは別の意味で単純なのだ。

「本当か？何でもいいのか？」

聖夜は確認するように二人に聞いたが、二人は出来る範囲のこと  
ならと話した。

すると聖夜は考えていたことを悩まずにすつと口にした。

「それなら、梨絵。お前は買い物に付き合ってくれ。  
俺には最近の流行が分からないから服とか：小物を選んでほしいんだ」

「そんなことでもいいの？」

「ああ：それと、シヨウ。お前は最近この町に起きたいろんな事件を詳しく調べてくれないか？」

「どんな些細なことでもいいんだ。事件にならないような街角の喧嘩だったりな…」

「ここいらの地主ならいろんな情報が入ってくるだろ？」

「まあ：そんなことでよければ…」

「もっと法外な要求をされることを覚悟していただけに出鼻を挫かれた感じだった。」

「俺もそれは同じ考えで、聖夜ならもつと有り得ない頼みごとをするものだと決め付けていた。」

「どうしてそんなことを知りたいんだ？」

「疑問に思った翔太は不思議そうに聖夜に尋ねた。」

「俺さ：事件オタクなんだよ。いろんなことを調べたりするのが好きだから、勝手にやってるんだ」

「変わってるな、お前…」

「趣味の範囲内でやっているから誰にも迷惑はかけていない」

聖夜はさらっと嘘をついたが、振り回されている俺は何も言えなかった。

「それで終わりか？」

俺は確認の意味で聞いてみたが、聖夜はこくりと頷くだけだった。

「そうか…それなら今話したことでみんな納得したということだ…」

その場は妙な展開で最後は上手くまとまっていた。

しかし俺が一番不幸だということを知りながらも誰にも気づかずにいた。

## 48話

あれから一週間。

俺は奴隷のように働きまくっていた。

あるときは梨絵に呼び出されて荷物もち。あるときは翔太の実家の手伝い。

あるときは梨絵の買出し。あるときは梨絵の部屋掃除。あるときは……って梨絵の雑用ばかりじゃねえか！

くそお……翔太は気を使って少しの雑用で済ませてくれているが、あの女は本当に容赦ない。

電話一本で俺を気軽に呼べると思っていたいやがる。宅配サービスなのか？ そうなのか？

自分の存在意義を考えながら黙々と梨絵の部屋の掃除をしていた。

まったく……あの馬鹿。もっと窓拭きを丁寧にやれよな。手垢と埃がついているじゃないか。

変な所に目がいってしまつ。

梨絵の部屋は何度か来ているのでなれたものだ。どこに何があるのかも大体把握している。

ついこの前も見舞いに来たばかりなのも幸いしたのだろう、実際に手際よく窓掃除とゴミの分別作業が済んだ。

部屋が片付くのは嬉しいものだ。

自分で綺麗に片付けることのできた部屋を見ると達成感がある。

こんな小さなことで幸せを感じられる俺も器が小さいな…

「ノリちゃん、終わった？」

タイミング良く梨絵は入ってきた。

「ああ…とりあえずな。それで、お前さ、雑誌を溜め込みすぎだからまとめて捨てた方がいいぞ？」

嵩張るし、部屋の統一感を損なう不安材料になる。ま…あとはCDとDVDだな。

これもラックでも買ってまとめた方がもつとすつきりするぞ」

偉そうに講釈をしていると梨絵は感心した。

「ノリちゃん、すごいねー…」

「え？」

「ここまで部屋の中をすつきりさせられるんだからさ。

それにバランスも考えて家具の置き位置も考えている……こういうの向いてるんじゃない？」

そこまで意識したことはないが、俺は確かにそういうことは好きだった。

でも、それは生活からにじみ出た行為でもある。

狭い部屋をいかに有効に使うか、そればかりを考えていたからな…

「就職するなら、まず、空間デザイナーだね」

にこにこしながら自分で入れたであろう渋いお茶を俺にすすめた。

「あのな…俺が考えつくことぐらい、ごまんといえるもんだ。

褒めてくれるのは嬉しいがな、まずは自分で身の回りのものを片付けられるようになってくれよな！」

「何言ってるの？そのためのノリちゃんじゃない」

こいつには言葉では勝てない…昔からそうだ。

「大体…少しがさつなんだよ。女なんだから身の回りのこともつと気にしろよな。

服もシワが出ないように畳む。もしくは掛けとけ。それからCDは対を成すようにケースに入れてくれ。

一つずつ、ずれて入っているから、元に戻すのに大変だったぞ」

「うわぁ、細かいねー…」

「お前、絶対家政婦さんとか周りにいないと駄目になるだろうな…  
ばりばりのキャリアウーマンとかになって私生活は適当ってな具合にな…」

将来の梨絵のビジョンをつい想像してしまった。

「おあいにく様…私はそういったものを嫌がらない相手を見つめます」

梨絵はべーっと俺に舌を出してからかった。

「はいはい…そんなお人よしの奴がお前を好きになってくれるのが、最大の疑問なんだよ…」

入れてもらったお茶を飲んで梨絵をちらりと見た。

すると…

「いればいいけどね…」

ぼつりと悲しそうな目を一瞬だけ見せたような気がした。

しかしすぐに切り替えるかのように大きな声で、

「はは！私と付き合っしてほしい人はたくさんいるのよ？よりどりみどりで。」

それなら条件に見合う人もどこかにいるのよ！」

「どっからその強気な発言ができるのかはしらんがな…くれぐれも付き合う相手は殺すなよ」

「ちよっ…それどういう意味よ！」

側にあったクッションを投げたが、俺はそれを避けた。

「へっへーん。残念！…ん？つて、ぐあ！」

しかしその後には投げられたハードカバーの本は避けられなかった。

硬い角が容赦なく俺の額に直撃する。

「相変わらずの馬鹿ね」

ちくしょう。こんなことなら最初のクッションを避けなければよかった。

激痛の走る額を押さえた。

「いてて…お前…本はまずいだる。仮にも優等生だろうが…勉強の道具を粗末にするな」

「はいはい…」

俺の気遣いなどまるでなかった。強気なこの女はふんつとそっぽを向くように俺から視線を外した。

やれやれ…

俺は俺で痛さを緩和させることで手一杯で、会話もなくそのまま無言の時間が数秒流れた。

そしてそこから話題を一変させるかのように梨絵がぼそつと話した。

「あのさ…ノリちゃん。私に隠し事してない？」

正直どきんとした。その言葉にいろんな意味が含まれているのだから。



俺は曖昧に返事をしたが、梨絵は引き下がらなかった。

「以前とどこか雰囲気が違うよ。言葉では表現できないけど…  
その…双葉さんが転入してからなのかな…」

どう言ったらいいのか分からないといったようだが、俺はそんな言葉を遮るように切り出した。

「俺は何も変わってない。あんな、どこが変わったって言うんだよ。そりゃ、聖夜みたいな訳の分からない奴が突然俺らの前に現れたから、

今までとは違う感じかもしれないけどな…」

どうにか誤魔化そうといろいろ考えてはみたが、上手くはいかない。

「はつきり聞いてもいい？」

「え？」

「双葉さんのことどう思ってるの？」

梨絵は今までのような茶化した感じではなく、真っ直ぐした目で俺に何かを訴えかけるようだった。

「それは…お前も知ってるだろ？遠い親戚で住まいがみつかるまでの間、世話してやってる関係だ。

それ以上でもそれ以下でもない」

今の現状を嘘ではあるが、そのまま伝えた。

「私には…そうは見えないな」

どういうことだ？

「その話もどこか嘘っぽい。双葉さんが親戚かどうか分からないし…」

もし嘘だとしても、ノリちゃんはほっとけないんでしょ？昔から男だろうが、女だろうが人の頼みを断れないからね」

「あんな、何を根拠にそんな話をしてるか分からないけど、困っている奴がいたら助けるのは普通だろ？」

それぐらいはお前だって分かっているじゃないか」

「それは…そうだけど…」

俺は次第にいらいらしてきた。梨絵の煮え切らない態度と嘘をついている自分に…

「いいだろ…もう…これ以上話してもお前は、俺のことを信じてくれないだろ？それなら何も話したくない」

そのまま立ち上がると、帰る準備を整えた。

梨絵もどうしていいのかわからずに、そのまま黙っていることしかできなかった。

「今日はもう帰る…」

そして部屋のドアを開けると振り返ることなくそのまま締めた。

途中で梨絵の母親に会ったが、いつものように軽く挨拶を済ませて外に出た。

「何だよ、あいつ……」

聖夜のことばかり目の敵にした会話にどこか引っかかっていたからだ。

## 49話

夕方六時前には俺は自分のアパートに帰っていた。

すると聖夜がぱらぱらと雑誌を見ながら待っていた。

俺はそんな姿を無視するようにどすどすと歩いて、着替えを済ませた。

それから夕飯の準備をしようと冷蔵庫のドアを開けた。

そのまま凝視してしばらく考える…だが何も浮かばない。

無理やり今までの経験からレシピを引き出すと、入っている野菜を一通り取り出した。

はあ…

ため息ばかりが出る。

「お前は何を怒っているんだ？」

背後からいきなりそう言われた。

勿論、声の主は聖夜だ。

俺だって素直に答えられれば答えられるが、こればかりは話せるはずもなく、はぐらかしてしまっ。

「梨絵の家に行ってきたんだろ？喧嘩でもしたか？」

その言葉に思わず黙ってしまった。

「まあ、付き合いの長い腐れ縁みたいなものなんだろ？それなら明日には仲直りって感じだな」

何も知らないで、お気楽なことばかり話している。

しかし俺もそのことをいつまでもうじうじと考えたくもなかった。だから極力その話題には触れないように別の話をした。

「そういうお前は何をしてたんだよ」

「俺か？買い物…」

「買い物だ？」

見れば部屋には見慣れない紙袋が多数並ぶ。

靴やら、服やら、アクセサリーといったところだ。

こいつがここに来てから買い物などしたことはない。初めての出来事だ。

「誰と買いにいったんだ？」

興味本位で聞いてみた。すると惜しげもなく答えてくれた。

「クラスの男。何でも俺に興味があるんだとよ。まあ…暇つぶしにもなるからな。」

それでどんなものが今の男の好み合うものか聞いている買った。買った。

なあ、見てみるよ、これなんか結構いいかなって思ったりもしてな」

聖夜は立って、買ったばかりの服をひらひらと俺に見せた。

笑顔でその日一日を有意義に過ごせたことの証しでもあった。

しかし…

「はは…どこの物好きだよ…それ…」

「え？」

俺の心の何かが弾けていた。

いらいらが募ったこともあったのだろう。抑えていたはずなのに自然と感情的に話してしまった。

一度口にしてしまうと歯止めがきくはずもなく、そのまま思っていることをぶつけた。

「それで、似合うものは見つかったのか？」

大体：四百年も生きているお前が、何着ようが変わり栄えることとはないと思うがな…」

いつものように柔らかな表現ではない。どこか冷たく侮辱的な言葉がぶつけていた。

俺が忌み嫌う行為そのものを聖夜にってしまったのだ。

そこで俺は我に返ってしまふ。

「あ…」

だが、聖夜は何も語らず黙って俺の話聞いていた。

ふざけた様子など微塵も見せないで、どちらかといえば俺の事を見透かしている。

止めてほしかった。そんな目で俺を見るのを…俺が…小さな人間に思える。

詰まる言葉を必死に吐き出そうとしたが、一度やってしまった行為をなかったことになどできない。

聖夜の目を見ることができなかった。

「ガキだな…」

全てを一蹴するかのように聖夜は吐き捨てた。しかし異様なオラが背後には漂っていた。

やはり…怒っているのだろうか？

聖夜の表情からは何も読み取れない。こいつはそれだけ独特の雰囲気を持っている。

「俺だってお前の言葉に左右されるような年齢じゃないが…それでもな。ムカついた!」

飛び上がって俺の上に乗った。

「何を！」

「年なんか関係ないんだよ！俺だって大人気なく腹も立つ時はあるんだよ。殴らせる！こらあ」

そう言っつて拳を俺の顔面に既に叩き込んでいた。

これでは殴らせるではなく、殴ってしまったの間違いだろ。

二、三発殴られて俺の意識はそこで飛んだ。

「馬鹿……」

そんな言葉だけがぼっかりと頭の中に残っていた。

どの位の時間が経ったのだろうか？

目が覚めると、そこには本を読んでいる聖夜の後姿があった。

「あ……」

起き上がると聖夜も俺に気がついて振り向いた。

「何だ気がついたのか……ほんの十分しか経っていないのにな。流石は不死の体だ。」

それにしても……俺の攻撃も鈍ったもんだ。

以前なら誰であろうとも天上界を覗かせるぐらい軽くできたのにな……」



拳を握って不満そうに呟いていたが、それは困る。しかしそんなことよりも俺はまず謝らなくてはならない…だから素直に頭を下げた。

「聖夜…その…済まなかった。さっきは言いすぎた」

唐突の俺の謝罪に聖夜はふっと軽く笑った。

「別に気にはしてない。俺も大人気なかったな」

俺に握手を求めるかのように手を差し出してきた。

何だ…許してくれるのだな。それに俺の思い過ごしか。もっと腹を立てているのだと思っていた。

つつい俺も差し出された手に反応して、自らの手を差し出した。が、二度目の衝撃が顔面に響いた。

「あ…」

あろうことが、聖夜は油断させて俺に追撃を仕掛けていたのだ。

そんなことを俺が予測できるはずもなく、目の前は真っ暗になった。

「俺は…怒ってんだよ」

そんな一言が今度は脳裏に響いていた。



夜な夜な闇の中に動いている怪しい影は、街の中をすばやい動きで徘徊していた。

人の目にはそれは映らない。

影は影なのだ。影から影へと移動を繰り返し、獲物を見つけると、そいつの影に成りすます。

そして…獲物はそのまま影を背負って餌食となる。少しでも自らを覆うような暗闇に入った瞬間にその肉体を貪られるのだ。

肉片も骨も何も残らない。

そんな暗躍している闇の使い魔を一人の男が見つけた。

「あらあら…」

拍子抜けするほど緊張感がない。そしてそんな影に気付かない人々を平和な奴らだなとも思っていた。

このまま見過ごすこともできずに、男は走り出す。

そう、今正に影が獲物を見つけて憑依したのだ。

狙いは二十代前半の若い女性だった。ミニスカートを履いて、化粧もばっちり決めている。

明るい繁華街を歩いているのはまだ良かった。しかし暫く歩くと外灯のない路地に差し掛かった。

それを見るなり男は焦って、立ち塞がるように目の前に飛び込んだ。

「な…何？あんだ…」

女は目の前に現れた男に驚いて足を止める。

勧誘かナンパかと思い嫌悪感をむき出しにしていた。

「いや…その…君さ…最近体がだるいとかそういうの？」

「はあ？何言ってるの？」

「だってさ…こんなもの背負ったらまずいでしょ！」

「え？」

男は懐から銀の杭を取り出すと背後の影に向かって打ち付けた。硬い地面なのに感触は泥に腕を突っ込んだような軟らかさだ。

金属音が響き渡ることもなく、ずぶりと艶かしさが手の中に残る。

「キイイイイイイイイイイイイ」

刹那、甲高い泣き声と共に女の背後で何かが弾けて消し飛んだ。

ぼとぼと黒い塊は周辺に撒き散らされ、その様子を見た女は驚きのあまりに言葉を失った。

「うーん…思ったよりも手ごたえのない連中だな」

ため息混じりにそう話すと、懐から煙草を取り出す。

「ねえ…君さ。もう少し明るい所を歩きなよ。ここらは普通の人間が出歩くような場所じゃない。それに…」

訳の分からないことを話されて、女は混乱していたが、目の前で起こったことでまいっていた。

だから男の話も半ばでそくささと立ち去ってしまった。

「あれ？まだ話の途中何だけどな…しょうがないか」

そのまま持っていた煙草をくわえると火をつけた。暗かった路地が一瞬だけ明るくなる。

男は煙を吐き出しながら革靴の先で地面をがりがり削っていた。

そして…再び身構えた。

「ほらほら…早く出てきなよ。たくさんいるんだろ？」

闇に向かって話しかけた。

すると、ぞわぞわと湧き上がるように大きな黒い影が男の周りを取り囲んだ。

「じついつのはさ…手っ取り早く頼むよ。俺もねいろいろ忙しいしさ…って話しても理解はできないか」

独り言のように話しているのを聞いているのか聞いていないのか、影はどんどん大きくなる。

膨れ上がって一旦その動きを止めた。

「それで全部かい？」

一連の流れを見て男は確認した。その表情には余裕さえあり、こんなものでいいのかい？と言っているようだった。

「それならこちらも大体完成…したかなっ…っ…」

こんこんとつま先を地面に叩きつけた。

するとそれが合図になったのか、黒い影は男を飲み込むように津波のように覆いかぶさった。

黒い波が肌にも触れたらその身を削ぎ取られるだろう。そんな恐怖心を感じているのか、

それとも楽しんでいるのか分からなかったが、男はにやりと笑みを浮かべた。

「そうこなくっちゃ…」

肌に触れるか触れないかの瞬間、男は煙草の火を真下に落とした。

ゆっくりと火種は男の足元に落ち、作り上げたものがその効力を

発揮した。

まばゆい光が男の体を中心に天空へと突き刺さる。光の柱は暗い夜の空を割り、その力は不純なものを一瞬で浄化する。

男は足で魔法陣を書き上げていたのだ。靴底に仕込んである石灰石で綺麗な円形模様が描かれてた。

そして最後の仕上げが、煙草の火だ。これが発動減となるスイッチのようなものだった。

男を飲み込もうとしていた影は姿を残すことなく消え去ることになった。

全てが今までどおりに戻るのを確認すると、男は再び懐から煙草を取り出した。

「さて…と…」

火をつけて大きく吸い込むと何かを考えていた。この影を操つて首謀者のことだ。

呪者の仕業だということは大体分かっているが、今までの経験上、こんな三下を使って空腹を満たす行為を見たことはなかった。

ここ数日この街を暗躍する不穏な空気を感じ取っていた男は、その首謀者の場所を特定しようとしていたが、なかなか足取りを捕まえることが出来なかった。

煙を吐き出して、周囲の様子を伺ってみるものの手がかりなど一切ない。

操られていた雑魚は所詮は使い捨てに過ぎない。消滅したらそれまでで、主人に繋がる痕跡は何もないのだ。

「ぼちぼちあいつにも会える頃かな？」

懐かしい人物を思い浮かべながら、その男はそのまま裏路地から消えていった。



## 51話

季節は五月も半ばに入り、過ごしやすい日が続いた。暑くも寒くもない。

梅雨に入る手前のこの時期は俺が最も好きな時期だ。

変わったことと言えば、行方不明になっていた例の大学生の話だが、未だに見つかることはなく、事件に発展していた。

翔太は聖夜に言われたように情報網を駆使しているんなところからこの街の変わった出来事を集めてくれたが、そこにその事件に係わり合いのあるものは存在しなかった。

「大した事件はないな…」

つまらなそうに聖夜は学食でジュースを飲んでいて。その目の前には空の皿が三枚。

あろうことが、こいつは昼食で焼きそば、カレーライス、炒飯を食べていた。

それにしても炭水化物が多すぎるだろう。

「あのなあ双葉は何を期待しているんだ？」

翔太は聖夜の態度を見て、どんな情報を望んでいるのか分からなかった。

「いや…未解決事件的な？そんな感じのものかな…」

「お前な…最初と言ってることが違つたろう。そんな事件なら俺が調べなくても記事になつてゐるって…」

翔太の話していることも良く分かる。こいつはそう言う奴だから。

「気になつてゐるんだけど、聖夜さんさ…何がしたいの?」

梨絵も興味を示して聞いていた。こちらも目の前に空の皿が二枚とどんぶり一つ。

「こいつらどんな胃袋してゐるんだ?」

「ただの趣味だ。知り合いにそういうのが好きな奴がいるから…」

「それって聖夜さんが好きな人とか?」

梨絵は突っ込んで聞いてきた。こいつは恐れ知らずだな…

聖夜は表情を変えることもなく、想像に任せるとしか言わなかった。

それにしてもこいつら買い物に行つたりしているのに、どこか壁を感じるよな。

まあ、当然といえば当然だ。年が四百も違つ。

不思議な同級生を眺めながら俺は無言を保っていた。

すると梨絵は話題を変えた。

「大学生の話はどうなったの？」

「あれか…どうも事件になったらしいぞ。失踪した三人の内の一  
人の右手が見つかったらしい」

「右手？」

「これは聞いた話だからはっきりと言えないがな、隣街の裏路地  
で見つかったらしい。

切り取ったというよりは削ぎ取られた感じだと…こんな人の技  
では無理なんだってさ」

「何故その話を先にしないんだ！」

聖夜は翔太に噛み付いた。

「おいおい…落ち着けよ」

俺はなだめた。

「双葉…お前新聞読んでいないのか？この事件、数日前に載って  
るテレビでもやってる。

だから話さなかっただけだ。知ってると思っただけだからな」

「悪い。徳人の家には新聞がないんだよ。それにテレビは最近壊れ  
た…」

だから現代から取り残されている状態なんだ」

はっきりと聖夜はそう言ったが、俺のせいではない。不可抗力と  
いう奴だ。テレビを救う力など俺には存在しない。

「お前…テレビ壊れたのか？」

「ああ…ブラウン管の分厚いテレビデオがな」

「テレビデオって…ノリちゃん、今はDVDの時代なんだよ。それはそれで凄いいけど…」

「まあ、いい機会だと思うがな。デジタルに変わるんだしよ。今ならテレビも安いだろ」

「そうだが…まだ買い換える気はないんだよ。金も使いたくないし、それにそんなにテレビは見ないんだよ」

「そんなもんかねー…もし良ければよ、家にある古いテレビ持って行ってもいいけど、どうする？」

「ありがたいお誘いだ、俺は運ぶことを考えると気が進まなかった。」

「なければなくてもいいのだから…しかし聖夜の視線が妙に痛い。」

「すぐにもらえー…もらわなかったら殺すぞというオーラが出まくっていた。」

「こいつは…」

「変な汗が出てきた。だから次の言葉を余儀なくされる。」

「あ…それなら頼むかな…」

そう話すと聖夜の顔は明るくなった。四百年も生きていてテレビっ子というのもどうも納得がいかない。

見飽きてくるものだと思うが、肉体が変化しないと心も若いままなのだろうか？

勝手な想像をしつつも俺たちは談話を続ける。

「さっきの話の続きだけど…その事件は今の所どんな風になっているんだ？」

「進展なし。警察も手がかりは一切発見できないらしい。怪事件っていいたらそうなるんだろっな。

しっかしここらもすっかり物騒になったよな。ついこの間の意識不明者の出現やら武井の失踪。

これも時代の流れなのかねえ…」

「お前、おじいちゃんみたいだな」

「そう？双葉もおばあちゃんみたいだぞ」

俺はその言葉でどきっとした。

「だってさ、俺らと比べたら全然落ち着いていて大人な感じだ…」

全て悟っているっていうか、見透かしているっていうか…上手く表現できないけどな」

翔太は翔太なりにこいつのことを分析していた。しかしそれは非常に的を射ている。伊達に学年トップではない。

「へえ…見ていないようでみているんだな。シヨウ。俺のこと気になるのか？」

そう言ってるで誘惑でもするかのような態度で強調するかしないかのように胸元をちらっと見せた。

何をしてやがるんだこいつは…

すると、翔太も目線を外さざるを得なかった。

「べ…別にそういう訳じゃねえーよ。ただ個人的見解だ。深い意味はない」

「うぶだねえー…こいつ同様にさ」

くすくすと俺を見て笑ったが、こちらからすれば笑える話ではない。

「おい！何かあったみたいだな発言にすんなよ！」

濡れ衣を着せられたままではまずいと否定したが、発言者は…

「梨絵…今日も買い物に付き合っつて」

「いいよ」

「無視かよー！」

そのまま場の雰囲気めっちゃくちゃのまま昼食の時間が終わりを告げた。



## 52話

春の終わりを告げ夏の始まりを感じさせようとした頃、大学生が失踪した事件は転機を迎えていた。

自首した人間が出たのだ。

しかし事件の証拠は皆無に等しかった。だから名乗りを上げた人物が犯人かどうかなど立証は難しかった。

だから警察もからかっているのか、それとも名前を取り上げてほしいのか、その程度にしか扱わないで帰した。

ただでさえ、迷宮入りしそうな事件なのにこういった類の邪魔は数回入る。

そしてその事件の内容はこうだ。

大学の同じゼミの人間三人は研究室の中でも仲良しだった。

そして事件当日の日は大学に行った後に居酒屋に飲みに出掛けた。

数時間その居酒屋で過ごし店を出たが、そこから消息が分からなくなったらしい。

駅構内でその姿は目撃されておらず、人目のつく場所でも確認はされていない。

と言っても人の話だからそれは曖昧なものでひょっとしたら見過ごしていることも多いはずなのである。



いなくなっただけから一週間後にその中の一人の人間の腕が路地裏で発見される。

削ぎ取られたような切り口は人の業では不可能とも言われていた。

「そんな感じだが？」

翔太は俺と聖夜と梨絵に聞かせた。

「どこからそんな情報を仕入れたんだ？」

こいつの情報網はどうなっているんだ？

聖夜も裏の世界で生きてきた人間だからある程度の警察内部の介入はできるが、それよりも早く調べてきた。

「俺の叔父さん、警察関係者だから…少し聞かせてもらってね」

「おいおい…一般人にそんなこと教えていいのかよ」

「別に…そこまで重要な話じゃないだろうが。」

容疑者と思われる人間の名前を口にしていく訳でもないし、新聞に載っている部分に少し付け足した程度だ」

「まあ…その自首した奴ってのは不思議だね。」

人間業ではない行為を自分がやったなんて言い張るんだから…  
頭おかしいんですって公言しているようなものでしょ」

「同じ大学の奴だっけ。気の弱そうな学生で僕がやったのかも…  
っつてずっと話していたらしい。」

でも確たる証拠なんてありもしないんだからな、ただの誇大妄想  
だろうってことで…」

「お帰り願ったわけね」

「そう言うこと。警察も忙しいんだぜ。いちいちそんな与太話にも  
付き合ってもらえないだろう？」

その通りだ。警察もそんなに暇ではない。

「他には自首してきた人って出てきたの？」

「あー…と電話で数件。神罰が下ったのだ、それは私の力だ。

とか、俺がやってやったーお前らみんな死ねんじやーといった現  
実からかけ離れたものばかりがな…

これってどうよ」

「どうもこうも、全く事件と関係なさそうだ。やれやれ…少しは進  
展したかと期待してみればこの有様か」

聖夜は頭をかきながら悩んでいた。

「こんな現状な訳だから早期解決は難しいだろうが、まあ俺たちには  
関係ないよ。

隣町の出来事だし、至って健全な生活をモットーにしているし…」

「あんたのどこからその発想がでるの？」

梨絵は半ば呆れ顔だったが翔太はすぐ逆襲に出た。

「お前が一番健全とかけ離れている」

翔太は指差したが、俺も同調することにした。

「夜な夜な誰かを殺す算段とか立ててそうだ」

「こいつなら完全犯罪をやりかねない」

すると翔太ははっと何かを思い出した。

「まさか…昨日俺の買ったはずの菓子パンが消えたのも…」

「梨絵の完全犯罪だな」

「それなら、俺のノートにどこの絵心ない奴が描いたのか分からないぐらい、

下手くそなクマの絵が全面に描かれていたのも…」

「それもだ」

「家のトイレが詰まったのも…」

「無論…」

二人で調子に乗っていると、梨絵は仁王立ちをして俺らを眺めていた。

「いい度胸ね…このやるおうー!」

そして翔太をターゲットにして、ヘッドロックを極めていた。

「ぐああああああ」

屋上に翔太の叫び声が響き渡る。

まるで万力で押しつぶされるかの勢いで、ぎりぎり頭が潰される。

「おいおい…」

俺が背後から梨絵を止めようとすると、あいつは翔太にヘッドロックを極めたまま俺に後ろ蹴りを食らわした。

「おう！」

鳩尾に入った。悶絶しながら俺は崩れ落ちる。

そして梨絵はそのまま翔太の頭を投げ捨てるように離れた。

「ば…馬鹿野郎！頭が潰れるかと思ったぞ。この怪力女。

文科系のお前がなんでこんなに力を持って余しているんだよ」

「ま…全くだ…このゴリラ女め…プロレスラーにでもなりやがれ」

呼吸もままならない状態で俺は微かな抵抗を試みた。

そんな俺らを聖夜は静観しているだけで、助けようとはしない。自業自得だと目で訴えかけていた。

まあ、俺らが悪いといえばそうだが。

「なあ、翔太。その大学に一般人は入れるのか？」

聖夜は痛がって起き上がる翔太を気遣うこともしないで質問した。

「ん？ああ…大学の講義には一般人も混ざっている。

特に申請もしないで入れるオープンキャンパスだ…」

「そうか…」

「何だ？その大学にでも探偵気取りで行くのか？」

「ああ、少し気になることがあるからな。梨絵、創立記念日で休みの金曜日に付き合えるか？」

「良かったら一緒についてきてほしい」

素直に梨絵に頼んだが、断られることもなくすんなり承諾してもらえた。

「それなら金曜の昼にでも…」

ばいばいと手を振って先に教室に戻っていった。

## 53話

駅前で二人は待ち合わせをしていた。時間に揃うとそのまま電車に乗り込んだ。

電車内はがらがらで誰もいない。

平日の昼間では当然のことで、狭いはずの車内がいつもよりも広く見えるくらいだった。

梨絵はワンピースを着ていて、一見お嬢様風。涼しげな感じがして周囲の景色に同化しているかのような透明感すらある。

一方、聖夜はジーンズにTシャツといつも通りのラフな私服だ。

本人曰く、動きやすい格好が一番とのこと。

何のために梨絵に付き合ってもらったり、知り合いになった男に進められて服を買ったのか未だに理解できない。

「なあ、どうして俺の誘いに乗ったんだ？」

電車が、がたがたと揺れて外の景色は流れてく。電車の窓は一枚の風景画のようだった。

「別に…大学に興味もあつたしね。それに双葉さんの行動は気になるし…」

「ふーん。興味本位って奴か。でも感謝してるよ、俺一人だと動き

づらい部分があるからな…」

「ねえ、双葉さん。前から聞きたかったんだけど、ノリちゃん何かに巻き込まれてる？」

がたんがたん和電車の音は鳴り響く。

しばらくの沈黙が流れる。

「何故？」

「これは直感だから説明できないけどね。いつもと雰囲気が違うな  
って思っただけ…」

その目は真剣そのもので、聖夜が何か知っているのではないかと探りを入れているかのようだった。

しかし聖夜はそれを否定した。

「何言ってるんだ。そんなことあるはずないだろ。どっからどうみてもいつもと変わりにないだろうが。」

あいつは元々天然野郎だから、こころ気変わりするんだよ。そ  
ういや、昔遊んだ時もそんな感じだったな…」

嘘を悟られないように慎重に言葉を選んで話してはいるものの、  
その一つひとつを梨絵は観察していた。そして明るく切り返して  
きた。

「まあ、そうよね。私がいくら幼馴染だからって相手の気持ちまで分かるはずもないからね。」

「ごめん、ただの思いつきで話してみただけだからさ…  
ノリちゃんもほんと、何考えているか分かんない奴だから困るよ  
ね。」

「双葉さんも親戚付き合いで苦労してるでしょ」

「あのさ…その双葉つての止めよう」

「え？」

「俺たちさ友達だろ？なら聖夜って呼んでくれよ。そっちの方が親  
しみがあつて話しやすい」

「今まで気になっていたのかそのように話したが、梨絵はきよとん  
とした顔で聞いた。」

「いいの？」

「ああ…徳人や翔太や梨絵だけ下の名前で呼んでいるのに、俺だけ  
苗字つてのモナ…」

「それなら全員名前で呼び合った方がいい。」

「それにさ…梨絵は苗字で呼ぶことで一定の距離を置こうとしてい  
ただろ？」

「そんなもの取っ払えよ。今更お前の本性を知らないわけじゃない  
んだからな」

「まず…私の心見透かされていたね、こりゃ。確かにそうだわ…」

「私、双葉さん、いや、聖夜と距離感を保ちたかったのかもしれない。  
い。」

「でもさ、話していくうちに踏み込んでみたい心境にはなってい  
んだ。」



ただそのタイミングがね…」

「お前らしくどんだん切り込めばいいじゃないか。徳人と翔太にしているのと同じようにな…」

「ありがと、これじゃあ、クラスの女の子に話しているのと同じになつてしまふ所だったね。」

取り繕った自分の姿…」

窓の外を眺めると、次第に目的の隣町が見えてきた。

ここは大学があるだけに、巨大なビル群もショッピングセンターもない。

コンビニ数店とあちこちに存在するそれぞれの用途に応じた店。そして飲み屋街だ。

学生の住めるようなアパート、寮も多数存在したが、どれもそれなりの年数を現している。

それだけ歴史のある場所でもある。

歩いている人の数はそう多くない。

学生の街だけあって年齢層はぐつと若くなるが平日の昼間にはほとんど人がいないのだ。

「寂しいとこだな…」

「大学がある場所つてのはそういったものよ。」

何でもかんでも大学の側にあつたら、大学に行きたくなくなるでしょ」

「へー…そういうものなのかね」

ここには来たことがないので、聖夜は初めて目に映る景色をゆっくりと眺めた。

「さ…行くよ、聖夜」

梨絵は今までのような距離を置いた話し方を止めて、親しい相手にしか話さないような話し方で聖夜を導いた。

## 54話

大学がある場所は比較的山沿いの方で、周囲は木々に囲まれているた。

広い土地を必要とする大学は、こういった安い土地を選ぶのだから。

敷地面積はかなりのもので、全てを見渡すことができない。

「どこから入るんだ？」

聖夜は入り口を探していたが、それらしきものが見つかるのには時間がかかりそうだった。

この大学は医学部、文学部、理工学部、教育学部と大きな項目で四つに分かれていた。

どの学部も全体の人数が五百人以上いた。だからこの大学だけで二千人以上の人間がいるということだ。

高校とは違った空間がここには存在し、規則やら校則といった面倒なものが取り払われ、自由そのものだった。

ばらばらとあちこちを歩いている学生が見え、それぞれ好きなようにくつろいだり、勉強したり、談笑したりしていた。

梨絵はそこら辺を歩いている男に入り口を聞くと快く教えてくれた。

「あっちから中に入れるらしいよ」

「そうか…」

二人は並んで芝生の上を歩いていた。

「あのさ、聖夜の目的は何？ただの興味本位で動いているような感じがしないんだけど」

梨絵は今まで見てきた聖夜の行動を自分なりにまとめていた。この女性は普通の人と違う何かを持っている。

そして徳人もそれに絡んでいる…そう思っていた。

だから聖夜の自ら取る行動には必ず意味があり、漠然としたものはそこにはない。

憶測でそのように考えてもいたが、同じように肩を並べて歩いているとそれが確信に変わりそうだった。

この人だけ、どこか違う…

近づけば近づくほどそのことを肌で感じた。

「そうだな…はつきりと言えば未解決事件の糸口が知りたい。

まあ、そう話してもそれを知ってどうするのかと梨絵は聞くだろう？なら教えとくよ」

質問攻めに会うことを覚悟していたのだろう。だから聖夜は自ら口を開くことにした。

「お前は察しがいいからもう感じていると思うが、俺は普通じゃ

ない。

はつきり言うとは…人の枠組みから外れている…」

やはりか…そう読み取れる表情を梨絵は見せた。

「しかし元からそうだった訳じゃない。そうならざるをえなかったんだ。

だから…今は元に戻るための努力をしている所だ。でもどこら辺で気がついた？

俺が普通じゃないってことに…」

「ノリちゃんが武井さんに襲われた辺りかな。

あの日を境にノリちゃんを取り巻く環境が大きく変わった気がした…」

ふふつと聖夜は含みのある笑いを見せた。

「ここまで話したが、どうする？気味が悪いなら俺に近づかなければいいし、このまま別れてもいい。

ただ、俺は学校からいなくなることはしない…だから同じ空間にはい続けなければならぬ」

聖夜ははつきりと自らの意思を伝え、梨絵に選択権を与えた。

梨絵は平静を保っているように見えるが、心の中はそうではない。まさか、そんな非現実的なことを否定もせずに話されたことに動揺はしていたのだ。

自分の世界観を覆されるような出来事だったが、現実が起こっていることを受け入れなければ先には進めない。

それを知っていたから聖夜の話を信じた。

二人は立ち止まり、梨絵の発言待ちの状態になってしまった。それから梨絵はうーんと頭を右に左に揺らしてしばらく考えると。

「やっぱり私の性格上、無視はないでしょう。なかったことに全てをするなんてね」

きっぱりと答えた。

「それに聖夜が嘘でそんな話するような人じゃないからね。だから正直に話してくれてありがとう。」

こんな話を私からしたら嘘くさく聞こえるかもしれないけど、私は気味悪がったりしないよ」

聖夜は何も返さなかった。ただ黙って梨絵の話を聞いていた。

梨絵の様子を伺っていたのかもしれない。その言葉に嘘がないのか。

しかし四百年も生きてきた自分にとって、こんな出来事は初めてではない。

だからそこまで深刻には考えていなかった。去る人間は自然と自分の前から去るものだと言っていた。

「分かった。それなら今まで通りでいいか…」

あ、先に断つとくが、俺が人と違うと言っても別に手が何本もあるとか、変身するとかそういう類ではないから…」

「あ…そう…」

「それなら行くか…俺の目的は歩きながら話してやるからな」

今度は先に歩き出し、梨絵がその後を追う形になった。

## 55話

大学構内はこれまた広がった。

高校とは収容人数が一部屋辺り違うので当然といえば当然だが、あらゆる面で梨絵は新鮮な風を体に受けていた。

古いところもあればリフォームして綺麗な場所もある。正に新旧が融合した建物だった。

「思ったよりもすごいな…大学って…」

優等生の梨絵からしたらしっかりと見るところは見て将来につなげることも考えていたのだろう。

「さっきの話の続きだが…」

聖夜はそんな広い大学構内を珍しいとも思わないで、ぶっきらぼうに話した。

「大学生が失踪した事件には、俺のような人ではない者が絡んでいる可能性がある」

長い通路を歩いていると幾人もの学生や教授とすれ違った。

「あいつらは人を襲う…そうしなければ生きられないから…だからそれを止めなければならぬんだ」

「それで、手がかりがないか大学に潜入捜査ってこと？」



「ああ…もしも関係者がそこにいれば、俺は気配でそれを察する」  
とができる」

「見つけてどうするの?」

「さあ…ここからは企業秘密かな」

ふざけて話しているように思えるが、梨絵はそれ以上詮索はしな  
かった。

「ねえ…ノリちゃんも絡んでるの?」

梨絵にとってそこが一番聞きたいことだったのかもしれない。こ  
の質問のときだけ、声のトーンが若干変わった。

「絡んでる…」

これ以上隠す必要もないので、素直に話したが、梨絵は目を丸く  
して驚いた。

「ちよっ…どこまで?」

詳しく聞きだそうとした矢先に聖夜がぴたりと足を止めた。

「しっ…」

気配を集中させて周囲の空気を感じ取る。

いろんな雑音が渦巻く中で、何かを必死に探しているようだった。

「ちょっとここで待ってる…」

そう話すと、聖夜は梨絵を置いてそこから動いた。

徳人と体のバランスが逆転することで得ることの出来た呪者の探知能力。

それが働いたことは紛れもない。しかしそれが微力の反応ゆえに聖夜は未だに断定することはできなかつた。

体は惹かれあうようにその微かな反応の原因を追っていた。

構内を駆け足で走り、中庭へと進んだ。

ここだ。

そう思って噴水の周辺を見回した。

するとそこには数人で話をしている大学生の姿があつた。

きつと他愛もない話をしているのだろう。ふざけあっている声や笑い声しか聞こえてこなかつた。

聖夜の足取りは非常に慎重だつた。

もしも相手が呪者ならばこちらに気付いた瞬間に襲い掛かってくるかもしれない。

張り詰めた緊張感を漂わせながら、聖夜は相手の動向を伺つた。

しかし相手はこちらに一向に気がつかない。

もしも呪者ならば、数メートルまで近づけば嫌でもこちらの存在に気付くのだ。

思い過ごしか？

そう考えながらもしばらく相手の様子を観察することにした。

聖夜が目をつけていたのは、一人の大学生だった。

性別は男で、どこにでもいそうな平凡そうな外見だ。

眼鏡を掛け、痩せ型、どこか頼りなさそうで、それでいて優しそうな雰囲気を持っているような男だった。

四人の仲間に囲まれて話をしているが、その男は黙って話を聞くだけだった。

特に変わった様子もなく、和気藹々としている……こんな呪者からしたら有り得ない行為だな。

数年も生きていて人を餌にしようとしている奴がこんなに溶け込んでいるのもおかしい。

そう聖夜は自分のことを棚に上げて思っていた。

これ以上の詮索は意味もなさそうだと、自分で見切りをつけると聖夜は梨絵の所へ戻ろうとした、

すると、後ろから声がかかった。

「君…この大学の人？それとも高校生？」

聖夜が振り返ると先ほどまで談笑していた一人の男が話しかけてきた。

四人いた中で比較的軽そうで、明るい男だった。

「見学に来てたのかな？もし良かったら、案内するけど…」

気さくな感じで女と会話するのが慣れているのも分かった。

「え…と…」

わざとじらすような素振りで男に次の言葉を出させようとしていた。すると男は、次々と話した。

「「めんめん…いきなりこんなこと言われてら警戒するよね。」

まあ、気が向いたらでいいんだけど、困ってたら言っ

聖夜はじつくりと男の言動の全てを分析していた。

すると、梨絵が待たされていらついていたのか聖夜を追ってここまで来ていた。

「いつまで待たせんの…勝手にいなくなるしさ」

今までのように取り繕った性格は霞んでいるかのように、梨絵本来の地が出てきた。

「あれ？君はこの子の友達？」

男は梨絵にも目をつけて声をかけた。すると梨絵もその男の方を

見てから聖夜に話した。

「誰？この人たち……」

「この学校案内してくれるってさ……」

そのことを聞くと梨絵は男をじろじろと見回してまるで品定めでもしているかのようだった。そして、

「ほら、行くよ」

聖夜の手をぐいっと引つ張ると無視してそのまま行くこととした。

だが、聖夜は抵抗して梨絵の手を振りほどいた。

「え？」

一瞬梨絵の表情が曇り、聖夜が何をしようとしているのかわからないといった様子だった。

そして聖夜は涼しい顔をして男たちに話した。

「案内してもらえます？」

先ほどまでの警戒心はどこへやらといった感じで、わざとらしくも見えた。

「ちよっ……」

梨絵はそんな聖夜の行動に驚き、小声で話した。

「どういふこと？どう見てもナンパされてるでしょ…」

「ナンパ？何言ってるんだ。ただ案内してくれるって言うてるだけだ  
る。」

俺はこのまま行くけど、嫌なら梨絵は好きにしたらいい…」

梨絵は正直どうしていいのか分からなかった。

聖夜の意思も尊重したいが、このままついて行ったらどこか不安  
だと思った。

だから聖夜の身を案じる上で、ついていくことを余儀なくされた。

そのせいで見ず知らずの男と歩くことになった。

しかし幸いだったのは残りの三人の男はついてくることもなく、  
その場で別れたことだった。

ぞろぞろと歩く姿は恥ずかしさもあり、避けたいことだったので  
梨絵は内心ほつとしていた。

三人で構内を回るようになったが、男は親切丁寧に案内をしてく  
れた。

偏差値の高い大学だけあって学んでいる内容も高度で高校生レベ  
ルでは理解できない専門的な科目がたくさんあった。

最初は嫌がっていた梨絵もいろいろな教室を見て回るうちに関心  
が高まり普通に見学をしていた。

自らの大学生活を思い浮かべて我を忘れているのだろうか、梨絵

は聖夜以上に男の話を熱心に聞いていた。

これでは立場が逆転してしまっている。

聖夜も無邪気な梨絵の姿を見てどこか憎めなかったのだろう、ふふつと笑っていた。

そして大体の所を見て回ると、本題を切り出すように男はごく自然に話しかけた。

「その…もしも良かったら、俺の友達と今度遊ばない？」

このままお別れっていうのも寂しいし、はつきり言つとまた二人に会いたいんだ…」

次に繋げるために約束をさせようとしていた。梨絵はこころ辺はしっかりしている。

即座に断ろうとしていたが、聖夜がまたしても割って入った。

「そうか…それなら今度の日曜でも構わないが？」

あっさりと男の要求を飲んでしまった。しかも携帯番号まで教えられていた。

聖夜は携帯など持っているはずもなく、男の番号のみをメモでもらった。

「ありがとう、次の日曜を楽しみにしているよ」

しつこくするわけでもなく、軽く手を振りながらあっさりとその場からいなくなった。

がつがつしない性格は爽やかそのものだが、聖夜はその全てをじつと冷静に観察していた。

「どういうこと？あんなさつき会ったばかりの男の誘いにあっさりと乗ったりして…」

梨絵は聖夜の一連の行動を全く理解できなかった。

自由奔放な性格だというのは分かっていたが、扱い方が難しいことを実感したのだ。

そして遠縁にあたる徳人も気の毒にとிரらない心配までしていた。

「さあな…ただの気まぐれだ。俺だっているんな男を見てみたい。

それに、お前はどうかんだ？決まりきった間柄ばかりでは刺激がない。

そんな毎日はいずれ飽きが来てしまう」

恥ずかしげもなく、はっきりと自分の意見を通したが梨絵はきっぱりと否定した。

「見境いのない人付き合いは、将来を駄目にする方が多いわよ…」

「ちえっ…頭堅いんだな、お前…」

「あんたが節操なしなのよ」

まるでどちらが年上か分からないように梨絵は説教染みたことを話した。

しかし聖夜は聞く耳など持たなかった。



「何言われても俺はあいつらと会うから別にいいよ。お前は、お前だから…」

諦めてそのまま目的も果たしたと勝手に判断し、大学を出ようとした。

「ちょっと…待ってよ」

足早に進む聖夜を追うように梨絵も駆け出した。

## 56話

日曜日

待ち合わせ場所はこの町の駅前だった。

聖夜は相変わらずの格好で、デートなどとは無縁のただ動きやすさを求めた軽装だった。

そして珍しく待ち合わせ時間前にはその場所にいた。

天気は快晴で、気温は平年並み、吹く風も穏やかだったので正に行楽日和と言ったところだろう。

そんな天気誘われた人たちが午前中からそろそろと歩いているのも見て取れる。

午後になればもっと込むのだろうと、想像しながら聖夜は人ごみを嫌った。

「それで…お前が何でここに？」

聖夜は腕を組みながら冷ややかな目線で隣を眺めた。

視線を浴びせられた主は不機嫌な様子で、私の勝手でしょといった感じだ。

「別に…あんたが心配だから来ただけ。ノリちゃんも居候の身勝手な行動は好まないでしょ。」

何かあっても困るから監督役ってことで」

そんな梨絵の発言を受けて、聖夜は大きくため息を一つつく。

「素直じゃないな。来たいなら来たいって言えよ。まどろっこしいんだよ…」

「だから、あの男には興味ないっての…聖夜の企んでいることを知りたいただけだって」

「企んでいる？」

すつとぼけた顔をしていたが、梨絵も愚かではない。

今までの聖夜の行動には訳があると思っていた。

だから今回の遊びにも何かあるはずだという勘が働いたのだ。

梨絵は怖いもの見たさというか、どこか肝が据わっていた。

だから聖夜の突拍子もない自らの暴露話も受け入れた。

「しらばっくれるなら別にいいけどね。今日一緒にいれば何か分かるでしょ」

深く追求してこない梨絵の性格は非常に聖夜向きだった。

ふふつと笑みを浮かべるとそのまま二人で男たちを待った。

男たちは五分と経たない内に集まった。

全部で二人。声をかけた男と、聖夜が気になった男のみだった。

「やあやあ、待たせたかな？」

軽い挨拶をして登場した男は普段よりも人目を惹く様にぐっとおしゃれをしていた。

聖夜に最初に声を掛けた男は、木城智也という。大学三年生で、医学部に所属していた。

そしてもう一人の男は、漆戸霧唯で智也と同じ科である。

この男は別段に服を普段と変えている様子もなく落ち着いた雰囲気を出していた。

二人の距離感を見てもそう仲が良さそうには見えない。

そんな二人がどうしてここにいるかというと、単純明快で聖夜が指名したからだ。

この間のあなたたちの友達の眼鏡を掛けている人も誘って頂戴と…

智也はきつと他の奴を誘いたかったのだろう。

物静かな霧唯とは馬が合わなさそうで、空気のように扱い、聖夜たちにべらべらと話しかけているのがいい例だ。

「やっぱりこの前のお友達も一緒だね。えっと…鎌田梨絵さんだったよね」

梨絵は名乗りもしないのに相手が名前を知っていたので、聖夜がああ後に電話で話したのだと解釈した。

だから会釈をして簡単な自己紹介をした。

「それで、こいつが双葉さんの気になっていた霧唯ね…お前も自己紹介しろよ」

智也に煽られて背中を押されるように霧唯は済まなそうに静かに前に出た。

「えっと…その…漆戸霧唯です。今日は…あの…よろしくお願いします」

「お前なあ…もっと、はきはきしゃべれよ。そんなに固い話し方だと引いちゃうだろ？」

全くこいつはといった感じのため息をついていた。

霧唯は自分に自信がないのか、責められても言い返すことができなかった。

ただ言いなりのように、うんうんと頷くばかりだった。それから智也は話題を変えるように切り出した。

「まずは、少し話でもしたいからどこかでお茶しようか…」

実に慣れた様子で女性陣をエスコートした。

不慣れた男ならどこに行くか悩み、相手に意見も求めようものなのに、行き先も告げずに俺についてきてと歩き出した。

そして駅から数分歩くと、三人の目の前には西洋作りの古びた喫茶店があった。

アンティークが似合う店内は物静かで、そして独特の雰囲気をもし出していた。

照明は薄暗く、香を焚いているのかコーヒーの匂いと混ざり合っ  
て気分を落ち着かせた。

木製の椅子に四人が腰を下ろすと、店長が雰囲気壊すことなく  
静かに注文をとりに来た。

すると智也の勧めで四人はホットコーヒーを頼むことになった。

注文を受けてからしばらく時間が掛かるので、話をしながら待つ  
ことにした。

## 57話

「君達は錬道高校だよね。」

「だとしたら、うちのの大学に入るのも十分可能なわけだけど、進路はいろいろ考えてるの?」

「妥当な話の降り方をしてきたので、聖夜は相手に負けじとさらっと答えた。」

「まだ今の段階ではなんともね…」

「でもいろんな大学を見て回ってそれで刺激を受けられたらいいかなって…」

猫をかぶっているこの姿は梨絵以上の逸材の持ち主だった。

「凄いいね…俺は高校生の時にそんなにしっかりと考えていなかったな。」

「鎌田さんも同じ考えなのかな?」

「いや…その…私は…法律関係に進みたいんで、法学部を希望しています」

「え? 将来は検事か弁護士になりたいってこと?」

「まあ、そうですね。弱者を助けるっていうか、正義の名の下に人を救いたいです」

「これもまた嘘である。話す言葉がどこか芝居臭く、熱がこもっていた。」

「へー…これもまた立派だ。是非、優秀な法律家を目指してほしいね」

話に区切りがつくと、ちょうど良くコーヒーが運ばれてきた。

良い香りが鼻の奥を刺激した。

それぞれがカップを持ってひとすすりすると全員の顔でコーヒーのおいしさが分かった。

「あの、二人は医者を目指しているんですか？」

梨絵がお返しにとばかりに話題を提供した。

「ああ…まあ、いずれはね。」

どの分野にいくのかは悩んでるけど、俺は親が医者だからうるさいんでね…お前もだよな、霧唯」

「うん？ああ…そうだね…」

「親が医者だけど、正直俺は同じ道は進みたくないだよな。」

それでも生きるには医者というステータスは大きい。だから捨て去るわけにもいかないさ…」

現実を見ているのだろうか、どこか気弱な言葉とも思えた。

「あの…この前の事件なんだけど…」

聖夜はそんな智也の発言はお構いなしに切り込んだ。



「あの失踪したって記事のこと？」

そうだと口にする、智也と霧唯は顔を見合わせた。

「同じゼミの奴だけど、そんなに親しくもなかったんだ…」

でもさ、周囲の人間がいきなり消えてそれで殺されたのかもって  
言われればいい気分はしないね」

「僕も…その…同意見かな」

「その三人って仲が良かったの？」

どんどん聖夜は踏み込んでいた。そんな聖夜を見て、梨絵はなる  
ほどと分かった顔をした。

それから数分の談義が続いたが、事件にあった三人については二  
人はあまり分からなかった。

学生の数が多いので全てを把握するのは至難の業だ。

唯一分かったことは教授から推薦状をもらえるかどうかで争って  
いた仲だということだけだった。

コーヒーを飲み干す頃にはそんな話も終わり、他愛もない趣味の  
話や好きなテレビの話、ファッション、音楽と変化していた。

そして場所を移動し昼食を取った。

これも智也の選んだ店で、安くておしゃれなレストランだった。  
何から何まで計画的な男なので二人は感心さえしていた。

一方、霧唯はそれにただ従っただけの男で、いるのかいないのか分からないほど存在が薄かった。

物静かで、話す言葉はぽつぽつと…そんな態度に智也は苛立ちを見せる場面が多々あった。

聖夜と梨絵はそんな霧唯の態度を気にすることはなかった。終始、静観して話を合わせていた。

「双葉さんと鎌田さんって、お付き合いしている人とかいるの？」

食事を終えて、一息ついたときにそんなことを智也は話した。

「いや…いないけど」

聖夜は即答だった。そして梨絵も同様の意見を述べた。

それを聞くなり智也の表情は少し明るくなった。

「そうか…それは良かった。なら、今度また遊ぼうよ。俺たちはとても楽しいしさ…ねえ、どうかな？」

「うーん…考えとく」

ぶっきらぼうに聖夜は答えた。梨絵は無言を通していた。

そんな二人の反応を見て、智也はまずいと思ったのだろう。瞬時に話題を変えた。

「門限とかある？なかったらこれからカラオケでも行かない？」

門限：そんな言葉が聖夜には結びつかなかったが、それでも待っている人間はいる。

ふと徳人のことを思い出したのだ。

だから丁重に断っていた。

流石に智也も無理強いはさせなかった。あっさりとそこで納得して引き下がった。

それから誘いの話題には触れずに、勉強の話やら他愛もない話を一時間ゆっくりと話した。

時刻は三時過ぎとまだ早い時間ではあったが、四人は駅前で解散した。

思い通りにいかない部分が多少はあった智也は少し機嫌が悪そうだった。

隣にいる霧唯のことなど気にしないで先に駅の構内にさっさと入ってしまった。

やれやれ…

そういった様子で聖夜は遠めで二人を眺めていた。

「それで、何か分かったの？」

背後から梨絵が声をかけた。

「お前に隠し事はできなさそうだな…」

敬意を込めた皮肉を言ったが、梨絵には賞賛の言葉に等しい。

それから観念したかのように聖夜はあっちで話そうと公園まで誘導した。

三時過ぎの公園には人はまばらに存在する。主に子どもが多い。

うつとおしい感じもするが仕方がないと、ベンチに腰を下ろすと聖夜は口を開いた。

「俺の直感では先日の大学生失踪事件に今日会った奴が絡んでいる

「思ったんだ」

「え？智也さんのこと？」

「いやいやと首を振った。」

「霧唯さんが？まさかあ……」

「直感だつて言つたら。あてになるものか。だから間近で見話して核心が持てるか知りたかつたんだ」

「ふーん……でも意外だね。寧ろ智也さんの方だと思つたけど……」

「あいつはただの単純な自信過剰野郎だ。霧唯を誘い出すための餌に過ぎない」

「まあ、私も好かない感じだつたけど、そこまで分かるもの？」

「梨絵は男に関しては鈍感なんだな」

「聖夜はこころ辺が若い女だと安心した。」

「あいつは優しい男を演じていただけだ。」

「親切、丁寧に、女が好む理想像を描いてな……俺は逆に気持ち悪かった」

「智也の本性が見抜ける辺りが年の功といったところだ。どんな男も聖夜から見たら小僧に過ぎないのだ。」

「付き合うわけでもないから、別にいいけど。それで？霧唯さんを

選んだ理由は？」

「言葉に表現するとどう言っているのか困るが、その…あいつの回りの空気が淀んでいるんだ。そう感じた。でも…違った。」

今日会って話したりしたが、そんなものは感じられなかったんだ。この前は一瞬だけそう感じたからな…俺の勘違いだったのかもかもしれない」

「そうですね…それは安心したわ。まさか目の前で殺し合いを始められても困るからね」

「無駄足だったか…」

ため息をついて肩をがっくりと落とした。

「ノリちゃんは今回のことは知ってるの？」

「いや…まだ話していない。あいつを巻き込んでばかりも…その…悪いからなあ…」

聖夜なりに考えるところがあり、徳人の安否も気にしていた。

梨絵はそんな気遣いが嬉しかったのだろうか、ぼろっと自らの提案を口にした。

「それなら、私が協力するよ。ノリちゃんよりは頭がいいからいい案も浮かぶと思うしね」

にこにここと笑ってはいるが、どんでもないことだ。一般人が人の

枠組みを外れた者の中に入ろうとしているのだから。

「梨絵、お前って本当に前向きなんだな…でも止めとけ、殺されるかもしれないぞ。」

この前の武井このみの一件で怖い目を見ているだろう？あれの比じゃない…」

身を引いてほしくて優しい言葉を口にしたつもりだったが、それが逆に仇となる。

「見くびらないでほしいわ。私はそんなに弱い女じゃない。」

確かに…怖い。武井さんの時も怖かった。

でもさ…身近でがんばっている仲の良い人間がいたら助けるのは当然。見て見ない振りはできない」

凜としている姿には流石の聖夜も掛ける言葉が見つからなかった。

こいつはどうしてここまで捨て身になれる。まだ怖さを知っていないからだろうか？それとも徳人のためか？

様々なことが頭の中を過ぎっていた。しかし梨絵の申し出を強引に突っぱねることもできない。

実際に聖夜は八方塞になっていたのだ。

この地に来て、徳人と知り合うことで反転の作用が生じた。そして自らも一部が弱い人間になってしまったのだ。

一人では呪者にとっては何の脅威にもならない。情報量も少なければ、地形すら頭に入っていない。

戦況では圧倒的に不利なのだ。

自分が弱い存在になったら、情報量が不可欠。相手の裏をかけるほどの…

一人でやることには限界があるのも自分で薄々感づいてはいた。

だからかもしれない。

迷いながらも以前の自分なら絶対に受け入れない梨絵の申し出を受けてしまった。

「良かった。これでみんなの輪に入れた感じがするわ…」

「言うておくが、危険と察したら真っ先に逃げろよ。お前の尻拭いまで面倒は見切れない。」

それに、俺が死ぬ可能性もあるっていうことは覚悟してくれ…」  
引き締めるためにも、いや自分に言い聞かせるつもりでそう言った。

だが、梨絵も決して遊び半分ではないことを聖夜に伝えた。

「当面…女二人どこまでやれるか、やってみましょう!」

勢いに身を任せて梨絵は士気を高めるような行為で聖夜を盛り上げた。

そして聖夜もここで、はっきりと鎌田梨絵なる人物を受け止める



ことになった。

## 59話

二日後

梨絵の携帯電話に智也と名前が表示されて、鳴り響いた。時刻は昼休みの真っ最中だった。

「もしもし…」

梨絵は少し不機嫌に電話に出た。

「あ…先日はどうも…」

あのさ、君達がああの事件のこと気になっていたらしいから少し調べてあげただけど、聞きたい？」

それは願ってもいないことだった。

まさか、聖夜が気にしていたあの事件のことが分かるのだろうか。そんな淡い期待が一瞬胸を躍らせてしまった。

「本当に？」

声が微妙に上ずってしまったが、相手にはそのことは悟られなかった。

「ああ…大学内の友達に声を掛けてね。もし良かったら夕方、駅前で落ち合わない？」

的確に用件だけを話した会話だったが、梨絵にはありがたい電話だった。

辺りをきよるきよる見回したが、ここは教室ではなく廊下だ。聖夜の姿はなかった。

だから同意を求めようにも求められなかった。

それならば自分で決めるしかない。そう思って電話口の相手に合う約束をしてしまった。

「それじゃあ、五時に……」

そのままぶつりと電話が切れた。

この男は本当にまめなんだなと梨絵は再認識しながらぱたんと携帯電話を閉じた。

それから午後の授業に戻り、優等生ぶりを発揮していた。

待ち合わせの時刻までは少し早かったが、梨絵は駅前に駆け足でたどり着いた。

息を切らせながら駅前の壁掛け時計を見る。

五時十分前だ。

「私にしては早いな……」

ぶつぶつと独り言を言いながら鞆の中を探ってお気に入りの小説を取り出すと、側のベンチに腰掛けてそれを読み始めた。

梨絵は読書家だ。月に三冊は本を読む。

ジャンルは統一性がない。ミステリーだったり、哲学書だったり、史実だったりと分野が幅広かった。

ちなみに今日読んでいるのは、『部屋の片隅で体育座り』という訳の分からない自叙伝だった。

十分間、物思いに耽りながら本を読んでいるとすつと足が目の前に見えた。

「え？」

それに気がついて見上げると、木城智也がそこに立っていた。

大学帰りらしく落ち着いた格好で、右手にはバックをぶら下げている。

「待った？」

「いえ：今来た所です」

「それなら良かった。なら喫茶店で話そう」

休日に行った喫茶店に場所を変えると、前回とは違った席で向かい合って座った。

梨絵は多少なりに警戒心も持っていた。智也をそこまで信用していなかったのだ。

もしも嘘でもついて会おうという態度ならこちらにも考えがあるという態勢で話しを聞くことにした。

「あの事件のことは、双葉さんの方が気になっているんだろ？君はただ付いてきているって感じしかしなかったし、

彼女は事件の事をやたらと気にしていたからさあ…正直ショックだったよ」

「そういう訳じゃ…」

「会える口実は何でもいいんだけどね。でもこちらも何かしてあげたいってのは本音だよ」

「なら、どうして聖夜に教えなかったんですか？」

「彼女携帯持っていないでしょ。電話が掛かってくるのを待っているのも出来ないんで」

「それで…」

「でもさ、君の事も気になっていたのもある。

俺がこんなこと言っても嘘臭く聞こえるかもしれないけど…」

梨絵は甘い言葉を平然と並べるこの男に次第に慣れてきた。

「本題に入ってほしいんですけど」

「悪い悪い…えっと…ならまずは失踪した連中だけど、名前は新聞に出ているから知っているよね。」

それで、そいつらの関係だけど、あんまり良くなかったみたいだよ。

教授の推薦状を争っている仲だけに互いの成績を気にして、行動を気にして、この数ヶ月は常にけん制し合っていたらしい…表面上は何も分からなかったけど、そのメンバーと親しかった奴が、エスカレートしていく観察行動を垣間見たらしい…」

「垣間見た？」

「一人の奴が、別の友達の鞆に盗聴器を仕掛けるのを見たんだってさ…」

「そこまでするの？そんなに推薦状って大事なんですか？」

「うちの大学は教授と病院が太いパイプを持っていてさ、最新医学や腕の良い医者の下で学ぶためには推薦状が必要なんだ。」

まあ、癒着って程ではないけどね…

それで、その推薦状があれば医者としての将来は約束されたようなものなんだ。

腕次第っていうのもあるけどそれには環境が必要でしょ？

その環境を惜しみなく与えてくれるっていうのは医者冥利につきる。だからそれをみんなで争うんだ」

「それが、今回の事件と関係が？」

「盗聴器を仕掛けるまでするってことは、身内の犯行とも考えられないかい？」

二人殺して残りの一人は何食わぬ顔で出てくるとかさ。もちろんいなくなつた言い訳も考えてね…」

「それってかなり無理ありません？」

「自らが犯行に巻き込まれていることにすれば、疑いから目を背けられるって考えたのかもね」

「浅はか…そんな目立つ行為をしたら疑いが自分に向くだけだし、推薦自体がなくなつてしまいます」

「ま…そうでしょ。だから考えられるもう一つ。第三者が殺してその後釜を狙う…」

ちなみに同じゼミで次に候補者に有力だった人間も分かつてるけど？」

智也は良く調べていた。おそらく彼も触発されて自らの意思でいろいろ調べたのだろう。それが態度で分かる。

梨絵もそのことには感謝しつつ、続きの話を聞いた。

「笹田っていう男だけど、彼は彼で事件に巻き込まれた三人を妬んでいたらしい。」

頭脳では俺が一番だと豪語していたからね。しかし自ら頭が良いっていう人間もどうかと思うけど…」

梨絵はどきつとした。それは私事です。心の中でそう叫んでしまった。

「これが俺の調べたことだけど、大体分かったかな？」

「はあ…ありがとうございます」

気のない返事に智也もあれ？という表情を見せたが、気を取り直して、

「ついでに、これから晩御飯でも食べに行く？」

「いえ…遠慮します」

はつきりと断るあたりが梨絵らしかった。彼女は受け付けない人間に対してはとことん正直だった。

ましてや異性だとそれが露骨に表れていた。

「また連絡するよ…」

かつこよく立ち去る智也だったが、こいつはこいつで自分が嫌われていることを理解できていない。

だから梨絵は先ほど話していた笹田という人物と大差がないのではないかとも思っていた。



## 60話

梨絵は帰路の最中に悩んでいた。

このまますんなり帰るか徳人の家に行つてこのことを報告しに行くか。

徳人とも合いたい気持ちは正直にあった。

徳人が聖夜とどこまで係わりあっているのか知りたかつたし、武井このみの出来事を詳しく聞いてもいなかった。

「さて…どうしようかな」

ぶらぶらと時間を潰すのは性に合わない。だからすぐに立ち上がつて行動に移すことにした。

自然と足の向かった先は徳人のアパートの方角だった。

時刻はすでに六時を迎えようとしていたが、事前に家には電話を入れておいた。

梨絵の母親も徳人君なら大丈夫ねと余計な詮索もしなかった。

だが梨絵は正直戸惑っていた。

久し振りに行く徳人の家で、聖夜がそこにいるということにだ。

らしくない…

何度も何度も心の中で呟きながら歩いていった。

日は沈みかけて闇が辺りを支配しようとしていた。

「はぁー…」

いろんなことを考えてため息がこぼれてしまった。

今まで平凡だった自分の日常が変化することを自ら望んだはずなのに、それを受け入れられない自分がどこかにいる？

そんなはずは…

ぴたりと歩く足が止まってしまった。

静かすぎる路地が余計にいろんなことを考えさせてしまうのだろうか。辺りには人の気配すらない。

夕暮れ時の哀愁漂う雰囲気は梨絵の体の一部にでもなっているかのようにだ。

そんな風情に身を任せていると、ひたりひたりと迫る異質な存在を体を感じ取った。

それは闇からずりずりと音を立てて這いずり回る奇怪なものと表現するのが相応しかった。

梨絵の体は硬直する。

後ろを見ることができない。

音はしないものの存在感だけが膨らんでいる。

ここで動かなければそいつの餌食になる。

そのことだけは体で分かっていた。

武井このみと出くわした時に徳人が刺されたのを目の当たりにして意識を失った。

そんな風に簡単に目先の恐怖にすくんで同じ事を繰り返せばこの先生きてはいけないだろう。

そんな環境に飛び込んでしまったのだ。

だから自らの恐怖心に打ち勝つことを必死で選択した。

鎖で繋がれたように重たい四肢を無理やり引きちぎるかのように動かした。

すると全身が開放されるかのように体が自由になった。

しかし勢い余って前のめりに倒れそうになったが、踏みとどまり後ろを振り向く。

そこには大きな影がまるで生物のように蠢いていた。

「これは…」

気配だけで見ることでできなかった物の正体を見た。

これは現実なのだろうか…

そんなことを考えている余裕など存在しない。

その影は夕暮れの暗闇を利用してどんどん大きくなっているようだった。

闇を利用しているのか…

そのことを理解した頃には周囲を囲まれた。

絶体絶命の窮地に立たされて気の利いた策など思い浮かびもしなかった。

しかしいろんなことを考える前に体が一瞬ふわっと浮いた。

「え？」

梨絵が気がついた時には体は宙を舞い上がりその場から大きく離脱していた。

梨絵は何者かに抱え上げられていたのだ。そしてそのまま優しく地面に下ろされた。

全てを把握するのにはしばらく時間が掛かりそうだったが、目の前にいる人物が悪い奴ではないのは明白だった。

この状況を理解し、自分を助けているということとは私同様に関係者なのだということも推測した。

「こんな夜にもならないうちから活動とはご熱心だねえー…」

梨絵の前に現れた人物は三十代の男で、戦歴を雰囲気だけで漂わせている感じだった。

そう、徳人も会ったことのある例の人物である。

## 61話

「君：ここは逃げた方が身のためだよ。厄介なことには巻き込まれたくないでしょ。」

それに俺も見るからに普通な感じじゃないでしょ？」

決して目の前の恐怖から逃避しているわけではない。絶対の自信があるから出る軽口である。

梨絵はそう認識しつつ、その男の動きを伺った。

男が梨絵が逃げるかどうかを判断する前に例の影は大量に膨れ上がって男に向かって襲いかかるうとしていた。

「おいおい…人が話をしている最中だろうが！」

男は懐から取り出した銀刀で影の一部を斬り崩した。しかもほとんど相手のほうを見ていない。

斬られた闇はぼたぼたと落ちるとすぐに繋がった。物体とは違う奇怪なものはまるで液体だ。

それを見るなり男はやれやれと次の策を用意した。

銀色の液体を小さな瓶から振りまくとそれは生き物のように空中に飛び出した。

銀の金属は細く細く長い糸のように広がりたちまち円を描く。

まるで魔法陣を描くように不思議な紋様を作り上げていた。

「はい、闇に帰って下さい」

ぱちんと指を鳴らすと紋様を土台とした円柱の光が上から下へと解き放たれた。

それは浄化の光そのもので、生きた影はそのまま消滅することを余儀なくされた。

眩い光は神々しくも思えたが、その場にいた男は警戒心を解くことはない。

しっかりとその先の出来事を見て全ての闇が消え去ることを確認していた。

そして梨絵はその場を動くことをしなかった。

逃げるのが本来取る行動であるのなら、それは今の私には不必要な行動だと抵抗しているかのようだった。

光がゆっくりと失われると辺りの景色は元の通りに戻っていた。

何もなかったいつもの路地。

その場にはぽつりと二人の人物が立っているだけだった。

「終了つと…」

顛末を見守り何事にもなかったことに男がほっとしていた。

「あの…あなたは…」

梨絵はその男に臆することもなく話しかけた。

「あれ？逃げなかったんだ…君ねえ、ここは、きゃーとか言って立ち去るのが定石だと思うんだけど…」

腰でも抜かした？それとも興味本位でいたとか？」

男は頭をぼりぼりとかきながら少し不機嫌そうだった。

自分に係わらないでほしいといった所から出た態度の表れなのだろう。

そのまま梨絵を無視しながら煙草を取り出して火をつける。

「私の周りにも変わった奴がいるから…きっとこれもそいつに係わっていることだと思います」

その言葉を受けて、男もなるほど納得した様子で観念した。

「ふーん。そうかい…そこまで知っているなら、その人も俺の知り合いかもしれないな。

でもさ…君はどこまで踏み込んでいるんだい？ただの噂話程度なら今から抜け出した方がいいと思うよ。

それが君のためだ」

男はそのように促したが、梨絵は素直に聞く性分ではない。自分で何でも決めてきたのだ。

だからそのことをはつきりと相手にも伝えた。

「意思が固そうだな…ま、君の好きなようにしてくれ」



男も説得を試みることもせず、梨絵のことを認めた。  
そしてそのままその場から立ち去ろうとしたが、梨絵がそれを引き止めた。

「すみません、あなたは何者なんですか？普通じゃないことは立証済みですけど…」

名前ぐらい教えてほしいんですけど」

そこまで言われると、男も無視するわけにもいかずに振り返った。

「行き当たりばったりなら名乗る必要もないと思ったけど…君にならいかな」

ふつつと白い煙を吐き出して、梨絵を真っ直ぐに見た。

「真払樹開…」

「まばらい…じゅかい？」

「変な名前だろ？だから名乗るのは嫌なんだよな…」

照れくさそうに髪をいじくっていた。

「さて、俺はこのまま行くけど、君もせいぜい命を落とさないように気をつけてくれよ。」

可愛い子には長生きしてほしい」

「可愛い子って…」

恥ずかしげもなく、そんなことを言われるとは思わなかったので

梨絵も戸惑った。

そのまま男はそこから姿を消したが、梨絵は後を追うこともせず  
にただ立っているだけだった。

がくん…

無意識に梨絵の膝が落ちた。

「う…」

張り詰めていた糸が切れてしまったのだ。

もしもあそこで真弘樹開に出会わなければ無力な自分は殺され  
ていただろう。

その現実を今、はっきりと感じた。

怖い…そのことがゆっくりと体を伝わりふるふると震えてしまっ  
た。

「はあ…はあ…」

大きく息を吸い込んで呼吸を整えて立ち上がると、もやもやした  
自分の意識をはっきりとさせようと頑張った。

このままではいけない。もう、こればかりは避けて通れない道な  
のだから。そう言い聞かせてもいた。

それと同時に自分の無力さもはっきりと知った。このままでいいのだろうか？

自分は足手まといなのではないか？そのことが引っかかっていた。だから考えた。

生き残る術を自分なりに見つけ出そうと、自分を守るようにもつと強くなるう…と。

安っぽい考えが現実になるように梨絵は梨絵なりに今まで悩んでいたことなど吹き飛ばして踏み出していた。

## 62話

「それで？その男は…そう名乗ったと」

「ご飯をもごもごと口いっぱいに入れながら聖夜は話した。

さきほどの梨絵の身に起こった一連の流れは隠すことなく話していた。

だからといって聖夜が動揺することはなかった。

あっそ…その程度で片付けていた。

「ところで、ノリちゃんは？」

部屋を見回しても徳人の姿はどこにもなかった。

一体どこへ？

梨絵は徳人にも話を聞いてほしかったのだ。

間接的に聖夜から梨絵も不可思議な出来事に係わっていることは知らされているだろうとは思うが、

自分の口でそれは話していない。

「んあ？…多分スーパーだ。買い忘れがあるって言ってたからな」

我が物顔でここに居座る野蛮人にも妙な苛立ちを感じる。

「それで、あなたの意見は？」

何一つ自分の質問にまともに答えてもらっていない。梨絵は冷めた目で聖夜を睨みつけていた。

「俺の見解か？ そうだな… まあ、その襲い掛かった影は紛れもなく俺と同じように粹組みから外れたものの仕業だな。

そして… それを操っている者もどこかにいそうだ」

「それなら、あの時近くにいたってこと？」

「さあな。話を聞いただけでその距離は測ることはできない。

遠距離かもしれないし、短距離かもしれない…俺がその場にいたらはっきりとわかるがな」

徳人から受け継いだ、呪者を探知する能力を使えば容易なことである。

「それで、梨絵を助けた男。真払樹開…腐れ縁に等しい奴だが、ここまで迫ってきたか。

まあ、奴の能力そのものが俺に等しいのだからな」

「知り合いなの？」

「簡単にそう言ってしまうばいいんだが…あんまり話したくない」

「それってずるくない？そこまで話しておいて…」

話を途中で終わらせようとした聖夜に突っ掛かった。だけど聖夜は話す気はさらさらないと態度で表した。

「何でもかんでも話すのは嫌なんだ。お前だって俺の世界を少し覗

いたに過ぎないんだからな。

まあ…それでも命を奪われそうになって、それでも踏み込もうとする勇氣は買ってやる…」

どんぶりを持ち上げ、格好良く話したが説得力はない。

「ご飯つぶ…」

じとつと聖夜を見ながら呆れ顔でつぶやいた。

「徳人にはこの話はするな」

「え？」

「当面は二人で乗り切る約束だろ？」

「まあ…そうだけど…」

「お前の話しに出てきた怪しい大学生のことだけど、それはそのまま調べてくれ。」

俺はお前を襲った影の情報を探す…くれぐれも何か知ったからといって一人で動くなよ」

釘を刺すように言ったが、梨絵も百も承知だった。

興味本位で軽率な行動を取れば命を失ってしまうことを身を持って体験したばかりだ。

「ならいい…」

「それにしてもノリちゃん遅いね」

「もう遅いからお前も帰れよ」

「あのねえ…家主でないあんたがそんなことを言うのは筋違いじゃないの？」

「俺も家賃は払っている。だから俺も家主ってことになるだろ？それに…徳人に会って何を話すんだ？」

くそっ…こいつ…

このまま話していても言いくるめられるか、はぐらかされることは目に見えている。梨絵はぐっと拳を握り締めた。

「分かったわ…今日はもう帰る」

玄関まで歩いて靴を履くと振り向き様に、

「早く新しい住居を見つけなさいよ！」

強い口調で言い残すと、ぱんとドアを閉めた。

「何怒っているんだ？あいつ…」

夜風が荒々しく吹いていた。そして雲は時折満月を隠していた。

梨絵と別れてから漆戸智也はそのまま帰るのもなんだと思い、ふらふらと時間を潰していた。

街の中を歩きながら数人の適当な女性に声を掛けてみた。

すると三人目で自分と飲みに行ってもいいと言ってくれた女性が見つかった。

「え？ほんと？やった！」

梨絵にも肩透かしを食ったので、上機嫌で居酒屋に入ると二人でたくさんの酒を飲み交わした。

智也は女性を一気に口説き落とすことはしない。

徐々に責めていくのが信条だったので、その場はただ盛り上げて次に繋げることを考えていた。

相手の女性もそんな智也の性格が気に入ったのか、携帯番号を交換しすぐ次に会う約束を承諾してくれた。

時刻は十二時を過ぎていた。

終電まではまだ間に合うな…女性と別れた後にすつと腕時計を確認する。

今日は有意義な一日だったとニヤニヤしながら駅を目指していた。

駅までの長い真っ暗な路地を優越感に浸りながらゆっくりと歩いていると、



ひたひたと背後から何かがついてくるような感覚がした。

「ん？」

暗い路地には誰も歩いていなかった。

足音もしないのに誰が自分の後ろについてきているのだろうと、振り向いてみた。

しかし誰もいなかった。

思い過ごしか...

そう思い再び歩き出そうとするが、背後から忍び寄る悪寒は消えなかった。

自然と歩く足も速くなっていった。

静かな路地には自分の足音だけが響いて、息切れもしていた。

目指す駅までは数百メートルある。

しかしあそこまで行けば、きっとこの得体の知れない感覚から解放されるだろうと信じていた。

しかし...

ぐんつと体が引つ張られた。

「う...」

ぴたりと体がそこで止まってしまった。身動きができなかった。

「どうしたっていうんだ…どうして俺の体が動かない？」

恐怖と焦りから必死に体を動かすが指先の一つも動かなかった。

まるで自らが生きた彫刻になってしまったようだった。

もがき苦しんでいると背後から誰かがすつと現れた。

はつきりとその人物を見ることができなかったが、

「え？あ…助け…」

藁をもつかむ気持ちで誰かは分からないその人物に助けを求めようとした。

しかしその先を言い終わる前に智也の首が鋭利な刃物で切り落とされてしまった。

ぼとん…じろじろじろ…

頭はボーリングの玉のように路地の片隅まで転がってしまった。

そして胴体はというどぴたりと動きを止めたまま噴水のように血を撒き散らしていた。

たった数秒の間に道は真っ赤に染まっていったのだ。

その人物が立ち去ると、遅れたかのように頭のない胴体はその場

に崩れ落ちた。

次の日になると、智也の昨夜の出来事がニュースでやっていた。

世間ではまたか…といった様子で嫌気が差していたに違いない。しかし起こってしまったことを変えられるわけにもいかないのが、身の回りに危険が及ばないようにするしかないと納得していた。

駅に程近い場所で起きた惨劇だったので発見も早かった。

そして使われた凶器もナイフのような鋭利な物と判断し、警察は怨恨の線で知人を洗い出すことにした。

通り魔殺人ならこんなむごいことはしない。

よほどの恨みがなければ首を刎ねるという行為まで至らないだろうというのが警察の考えだった。

大学内は取り調べの警察がうろろしていた。携帯の中に登録されていた人物には片っ端から連絡がいった。

当然、梨絵にもその連絡は来た。そして夕方に警察が自宅に訪問してきた。

当日智也に会っていたので、警察も疑いの目を掛けないわけにもいかない。やんわりとではあったが、アリバイを聞いた。

梨絵には自宅にいたアリバイがあるし、それを証明してくれる両親もいた。

「もしも何か知っていることがあったら教えてください」

そう言い残すと警察は早々と立ち去った。

「まさか、あなたの知り合いが殺されたの？」

母親は心配で梨絵に尋ねた。

「うん。少し前に知り合ったんだけどね。大学を訪問していたら、案内してくれた人なんだ」

「そう…気の毒に…」

「ちょっと私出てくる…」

梨絵は聖夜と話がしたかった。

母親が昨日の今日で家から出ることを反対したが、梨絵は適当に言いくるめた。

聖夜はそんな梨絵の行動を読んでいたので徳人の家の前で待っていた。

「あ…」

その姿に梨絵が気付くよりも先に聖夜はアパートの階段を下りていた。

「来ると思っていた…」

不敵な笑みを浮かべて梨絵を歓迎しているかのようだった。

「携帯持ってよね。面倒くさいんだから」

「あんなもの嫌いだ。あんな小さな機械に生活縛られてお前ら馬鹿なんじゃないのか？」

戸籍のないような聖夜が携帯など持てるはずないが、そんな基本的なことではなく電話を持つことに抵抗を感じているようだった。

「馬鹿で結構…それよりも本題に入りたいんだけど…」

聖夜の関係ない話には耳を貸さないで、憮然と振舞っていた。

「はいはい…黙って聞きますよ」

聖夜も観念して大人しく口をつぐんだ。

それから今までの経緯を分かりやすく説明した。

それを聞くなり聖夜も頭の中でいろいろ考えていた。

「智也の話を昨日の内におけば、何か手を打てたかも…」

「あのねえ、あの時は命狙われて動揺していてそれどころじゃなかったのよ」

「分かったよ…それならその話は置いておいて、智也の話だ。

はつきり言えば…あの大学の学生は怪しすぎる。中に殺した奴がいるかも…」

思いつめた表情を見せて、夕焼け空に目線を移していた。その張り詰めた空気を梨絵も肌で感じ取っていた。

「でも…殺され方が違うんじゃない？」

今まで失踪した人はあの影に飲み込まれるように死んだと思うけど…他に別の人でもいるの？」

「そうかも…でも首を一撃で刎ねるなんて行為も普通じゃない。確実に俺らの周りで動き始めてしまったな…」

「ごくりと梨絵は唾を飲み込んだ。

「ねえ、そいつらを止めるにはどうしたらいいの？」

細い体から熱気のようなものが湧き上がっていた。それは梨絵が許せないと本能で感じたからだろう。

「止める方法は…本体を叩くしかないだろうな…  
影を操っているなら、その間本体は無防備なはずだ。しかしその本体が分からない」

「木城さんが話していた、後釜を狙っていたって人は？」

「その線もあるだろうから、明日にでも直接調べに行く。お前は無理するな。」

もう二度と一人で行動したりするなよ」

「え？ちょっと待ってよ。私も行くから」

「お前にはもうできることはない」

厳しい口調で話したが、これは聖夜なりの心遣いでもある。

昨日の今日で梨絵を危険に晒すのはご免だと思っていたのだ。

「もう、家に帰れ」

そのまま追いついてしまった。

梨絵も納得がいかない様子でふくれっ面のまま帰ってしまった。



## 64話

聖夜は一人で悩んでいた。

何故殺し方が違うのだろうか？

犯人が別の可能性もあるが、今までの流れからそれはないと思っ  
ていた。

大学に係わっている人物を狙っているのは明白。しかしそんな狭  
い人間関係ならいずれはばれるだろうに…

そんな心配もしていた。

呪者って奴はよく分からないと自分のことも含めて一人で頷いた。

きつと殺された奴らが特定の欲を人並み異状に抱いていたから食  
われたのだろうな…

そうも考えていた。

大学の中での争いから考えられる大きな欲と叫びたら嫉妬か強欲  
か…まあ、いずれにしても誰でも抱くな。

教授の推薦状争いに巻き込まれているからその時の抱いた欲も人  
並み以上…呪者の好む味になっただけか…

あれこれ考えながらも確実に呪者に近づいていることだけは核心  
していた。

あと数日もすれば出会えるはずだ…

そんな聖夜の予測とは裏腹に不測の事態が起ころうとは思いませんでした。

智也が殺されてから三日後、類似するような事件が勃発していた。

同じ市内ではあったが、外れの場所で惨殺死体が発見されたのだ。

二体の死体はいずれも鋭利な刃物で切り刻まれたものだった。

発見者はそれが人かどうか判断するのに困惑したらしい。

それが人形と勘違いでもしてしまうぐらいにあちこちに体のパーツが散らばっていた。

「これはどうということ?」

梨絵は聖夜を責めるように新聞の記事を見せていた。

昼休みののかな時間にこんなスプラッターな話もどうかと思っていたが、梨絵は聖夜の意見の弁解がほしかった。

「どつって言われてもなあ…」

「明らかに手口が一緒でしょ。智也さんが殺されたのもこれと同じ」

犯じゃないの？

だとすれば、あなたの探している人物とは別なんじゃないの？」

そんな梨絵の見解は聖夜を困らせた。

今朝、ニュースを見たときにまさかと自分自身が思っていたのだから。

しかしそれをすんなりと認めたくないのも心のどこかにあり、

「はっきりと断言はできない。同一犯の可能性はまだある……」

とあくまで強気に振舞うしかできない。

「まあ、同一犯だとしても何とかならないわけ？」

このままだとこの街が異常犯罪者のたまり場みたいに思われるわ……」

何もできない歯がゆさを梨絵は感じていた。だから自ら動いたらどうかと提言してみた。

しかし聖夜は無駄な労力を行使するほど人ができていない。あっさりとは断った。

「そういうえば、推薦状争いの後釜を狙っていた笹田っていう人のことはどうなったの？調べに行ったんでしょ？」

話を切り替えてみたが、聖夜のやる気のない態度は相変わらずだった。

「あー…あれか？予想通りの男が出てきたよ。プライドの高そうな、

それでいて気の小さい男がな…」

「会ったの？周囲から情報を集めるとかじゃなくて？」

「面倒くさいだろ？直接会って話したほうが速いっての…それでな、会って話したんだよ。」

そしたら君のような無粋な女とは話してられないとかってあっさりとその場から退散されたよ…」

「あんた何を話したの？」

とりあえず話した内容を知りたくて梨絵は確認の意味で聞いてみた。

「大したことじゃない。お前は推薦状が欲しくて他の奴らを蹴落としたのかって聞いたんだよ」

その言葉を聞くなり梨絵は硬直した。

「…初対面の人間に対していきなりの爆弾発言ね…」

「当然、何のことだって話しになって揉めに揉めた…」

「それで？」

「ぶっ飛ばしてみた」

「え？」

どういうことだ？梨絵の頭の中が真っ白になってしまった。

しかし悪びれた様子もなく聖夜は話を続けていた。

「そうすれば分かりやすいだろ？」

この女は…梨絵は呆れることを通り越して逆に感心してしまった。

「まさか、殺してないでしょうね」

「それは大丈夫だ。見た通りの男だったから助かったよ。軽い一撃で気絶した」

威張って言われても困ると梨絵は付け足した。

「俺も核心が欲しかったんだよ。間違いでないかのな…」

こう見えても、ここ最近の俺の能力が上手く定まらないから苦労してるんだよ」

そんな野蛮な行為を行った聖夜ではあったが、笹田という男に会った時にこの男は違うという感覚はしていたのだ。

対峙しても呪者を感じる能力が全く働かなかった。だから普通の人間にしか思えなかった。しかし自信もなかったのだ。

「訴えられないことを祈るわ…」

まるで他人事のように振る舞い、話の軌道修正をした。

「なら、こっちの異常犯罪者は？」

「手がかりなし。今日知ったばかりで分かるはずもないだろうが…」

「そうですね…」

梨絵と聖夜は一人でため息をつきながら、屋上で空を見上げていた。

## 65話

### 放課後

梨絵は聖夜の忠告を無視して、再び大学を訪れていた。

何か見落としているのではないかという好奇心もあったが、いつまでも公然と殺人が行われている現状に嫌気がさしていたのだ。

自らの能力を過信するわけではないが、頭の回転数を利用するならこういったところではできないと思ひ、いろんな人に話を聞いて回って自分なりに整理しようと思っていた。

それはエゴに近かったが、大人しくいられる少女ではないのは自分が一番よく分かっていたからの行動だ。

大学内は人もまばらで、帰宅をしている学生が何人もいた。

前回にこの大学を訪れていたので、ここの地形はほとんど把握していた。

そして医学部の学生もすれ違い様に確認できるほどの観察眼を梨絵は持っていた。

梨絵の持ち味は、記憶力と観察力そして推理力だった。これは年の功の聖夜も持ち合わせていない。

そして目に入った智也たちと同じ学部的女性に声をかけた。

「すみません…木城智也さんのことでお聞きたいんですけど…」

「え？」

質問された当人は明らかに不快な表情を見せた。

それもそのはずで、初対面でおかつ殺された人間の事を聞くなど無礼極まりないからだ。

マスコミなのではという警戒心を抱きつつ目の前の少女に身構えてしまった。

「私…彼には生前お世話になっていた者なんです。

いきなり智也さんが理不尽な殺され方をして納得できなくて…

それに…警察の方も何も教えてくれなくて、彼が何か事件に巻き込まれていたか知りたいんです…

別に怨まれていたらそれでも構わないんです。どうして殺されたのか理由が知りたいんです…」

まるで悲劇のヒロインを気取って見せたが、全ては演技だった。

梨絵のそんな三文芝居を見せられて、その女性はそれならばと思いつくことを話した。

「彼がそんなに人に怨まれたってことはないけど、まあ…友達を細かく虐めていたのが気になったぐらいかな？」

でもそれって殺される根拠には至らない程度だと思っけど…」

「虐められていた？」

「いや、からかっている程度だよ。いつも同じグループで行動して



いたからさ…

その中の一人があまり話しないからちよっかい出している感じかな？」

その話を聞いて真っ先に思い当たる人物がいた。

「それって、漆戸霧唯さんですか？」

「よく知ってるね。そうよ。彼は頭がいいんだけど、あまり目立たないからね。」

智也君は目立ちたがりだからそういう真逆な存在が嫌いなのかも…でも、今でも漆戸君も普通に学校来てるし、彼はこの事件には関係ないわよ」

それ以上、特に有力な情報も聞き出すこともできずにその女性と別れることになった。

梨絵は漆戸霧唯のことを考えた。

そういえば、真っ先に聖夜が疑ったのも彼だった。しかし何もな言い張ったのだ。

それはそれで何かあるのではという概念が頭の中に残った。

だからこそ、視界に入る同学部の生徒に漆戸霧唯の話を聞いて回ったのだ。

一時間で話が聞けたのは、ほんの三人だったが、そこそこの内容を得ることはできた。

霧唯という男の存在はその名のよう、自らの存在を霧に隠しているかのようだった。

本音を見せない、本性を見せない。どちらにも当てはまる人物と言った方が速いのだろうか？

際立った感情の浮き沈みを見たことがないという見解がほとんどだった。

梨絵も初対面のあの時から、霧唯の存在を思い出し分析してみたが、何一つとして印象に残っていなかった。それは空気というべきなのだろう。

だが、そんな人間はたくさんいる。話すのが苦手だったり、人を拒絶したりと…

しかし彼はそんな邪念そのものを取っ払ったかのように無心だった。

「彼さ…嫌なことされても、全然動じないんだよね。普通さ、耐えているんだったら表情にでるでしょ？」

それが、表情が全く変わらないから読めないんだよね」

そんな意見も聞いていた。

その通りだと梨絵も思っていた。

そして他の話で興味深かったものも幾つかあった。

「そう言えば、夜中に一度だけ彼の姿を見たことがあるけど、別人のようだったことがあるわ…」

能面のような彼が表情を豊に表していたの。気味が悪かったけどね…」

「私が見たときは、卑屈な顔をしていて全てを怨んでいるように何か呟いていた…」

いろいろな顔を見せている霧唯がいるということだった。

これはこれで何かあるのでは？そんな気にさせてしまう。

梨絵は話をまとめて、一つの結論に達した。

彼は学校を出た後に何かしているのではないか…

そして梨絵はすぐにそのことを聖夜に報告することにした。

すると聖夜は漆戸霧唯の学校を出た後の行動を観察してみようと言った。

## 66話

次の日に大学の前で張り込みを行っていた。そこにいるのは聖夜一人だった。

流石に二人で行動するのは、ばればれで隠密行動が得意なのは聖夜だからこの役を買って出たのだ。

霧唯は相変わらずの孤独で、一人寂しく大学の門を潜っていた。

時刻はまだ四時前だった。

暗い表情で、俯きながら歩いて人ごみの中に紛れ込んでいた。

彼の住まいは事前に調べておいたので、分かったが、駅のすぐ側にあった。

学生の住むような安いアパートが建ち並ぶ中の一つに彼はひっそりと生活をしていた。

年は若いはずなのにかもし出される雰囲気は初老のようだった。

聖夜は数十メートル離れながら尾行していた。

こんな尾行はお手の物で数々の死線を潜り抜けた聖夜にとってはお遊びのようなものだった。

幸い相手も鈍感な人間で周囲を全くと言っていいほど気にしなかった。

そして思わず、どうしてこんな奴を怪しいと思ったのか自分にも疑問を投げかけてしまった。

霧唯の生活は規則正しく、毎日同じ時間には帰宅するらしい。体内時計が正確なのだろうか？時間にきちつとした人間らしい。

だから四時前には家に確実にいた。これは梨絵の得た証言で把握していた。

若いんだからもっと遊べよ、と聖夜は主張したかったが、そんなこと言っている場合でもない。

霧唯の姿を見失いように極力その場の風景に成りすましていた。

予想通りに四時五分前には住まいの安アパートに入っていた。

「本当に話のままの奴だ……」

口にしなくてもいいのに、そんな言葉がぼろっと出てしまった。

それからアパートの前でしばらく張り込みを続けていたが、部屋から出る気配はなかった。

これでは、何の手がかりにもなりはしないな……

そう判断して六時頃には聖夜も帰宅することを決断してその場から離れた。

一日では何も分からない。だから毎日同じ事を繰り返してみた。

しかし一人の力では限界もあるので、梨絵にも協力をしてもらい

交替で霧唯の行動を観察することにした。

一週間が経とうとしていたが、未だに進展はなかった。恐ろしいほど時間に正確な霧唯の行動には頭が下がる思いだった。

二人とも諦めかけた八日目に遂に固まっ他歯車がゆっくりと動くこととなった。

いつもと違う時間に帰宅することになったのだ。

大学のゼミが長引いたせいもあったのだろう。だから四時前の帰宅が、六時近くになっていた。

しかしいつもと数時間しか変わらない時間なのに、霧唯の様子は少しおかしかった。

うな垂れてとぼとぼと歩く姿がいつもの様なのに今日は、ぶつぶつと独り言のように文句を言いながらしゃんと歩いていた。

今日の見張りの当番は梨絵だった。

二週間見張って何もなかったら諦めようという約束を交わしたばかりにこの微妙な変化は嬉しくも思えた。

あんなに感情的にならない霧唯が腹を立てている光景が斬新に思えた。

しかも今まで周囲に全く気を配らないはずなのに何度も辺りを確認して警戒していた。

明らかにどこか違う…

梨絵は視線に入らないように慎重に動きながら細かい動向を伺っていた。

霧唯はそのまま帰路に着いたが、すぐにアパートから出ていた。

「どづいづいと？」

出不精であるはずの彼がすぐに身支度を整えて出てきたのだ。

それを確認するなり、聖夜へと連絡をした。

聖夜は携帯を持っていないので、徳人経由ということになるのだが、その経緯は伝わった。

電話口で聖夜は続きは俺が見張ると言い出したが、梨絵はついていくと行ってきかなかった。

## 67話

時刻は午後七時を回っていた。

霧唯は電車に乗って聖夜たちの住む町に移動していた。

その行動は梨絵に聞いていたので、駅構内から待ち伏せをするこ  
とに成功していた。

聖夜はそのまま梨絵から引き継いで、先に霧唯の尾行をすること  
にした。

「あいつか…」

電車から降りて構内をうろろろする霧唯を発見すると聖夜のボル  
テージも上がっていった。

構内を出ると周辺はすっかり暗くなっていた。

そんな中、仕事帰りの会社員でこった返す駅周辺は人の波だった。

聖夜も気付かれないように人ごみを利用して霧唯の様子を伺った。

彼は暗い表情のまますたと繁華街に向かって歩き出した。

待ち合わせなのだろうか？友達と飲みに行くとかそいった類か？

そんな想像を膨らませながら、彼とは十分な距離を取っていた。

しかし霧唯は一向に店屋には入ろうとしない。ただうろろと繁  
華街を歩くだけだった。



正直な気持ち、どこかに入ってくれよというのが聖夜の素直な気持ちだった。

かれこれ一時間も何もしないでぶらぶらという行動が続いていた。

時刻は八時過ぎ、いいくらいに酔っ払った人間も歩き始める時間帯でもあった。

ネオンの光を背に浴びながら、たくさん人間が飲み屋の前を歩き来していた。

中にはすっかり出来上がって、大声を上げて話すものもいた。

いい加減、何もない状況に痺れを切らしそうになっていた聖夜は自分も酒を飲みたい気分だった。

こいつらは…能天気飲んで、話して、いいご身分だ。

そんな皮肉を抱きながらすれ違う人物を横目で見ていた。

「どっ?」

背後から声がして振り返るとそこには梨絵がいた。

ついてくと言ってきかない彼女に少し苛立った聖夜は、無視してやろうと思っ、

行き先も告げずに単独行動していたのを見つかってしまった。

梨絵は行動範囲を絞って探し当てたのだ。

時間と歩いて移動できる範囲は大体決まっているので、この街の

地形を考えながら移動していた。

このことには聖夜は逆に感心してしまった。探偵にでもなればいいのに…

そんな馬鹿なことを考えていると、霧唯の姿を一瞬見失ってしまったのだ。

「あ…」

ついつい梨絵に意識を移してしまったことが仇となり、聖夜は焦って霧唯の姿を探した。

だが、見つからなかった。

あいつは…どこに行った？

逸る気持ちもあったが、必死で抑えて周囲の様子を伺う…

ぞくり…

遠くからあいつの気配がする！今まで感じたことがないのに何故、急にこんなにはつきりと？

それはいつもの感覚に近かった。そう、いわずと知れた呪者を感じる能力だ。

徳人の能力を受け継いだ今、その能力が生かされたのだ。

やはり、あいつは呪者なのか？

まさか…

そう思いながら梨絵をその場に置いたまま裏路地へと急いだ。

すると…

そこには何もなかった。

「えっ？」

拍子抜けとはそのことで、有り得ない姿を自分は追ってしまったということを目の当たりにしたのだ。

「はぁー…」

ため息も思わずこぼれてしまったが、背後に忍び寄る影に瞬時に反応した。

ぞくり…

懐から短刀を引き抜くと、コンマ一秒に満たない間に背後の相手と渡り合える戦闘態勢を作り上げていた。

が…そこにいたのは、予想していた霧唯ではなかった。

「えっ？」

三十代半ばのそれなりの雰囲気を身に纏った男だった。こいつはふてぶてしくも緊張感も漂わせずに煙草をゆっくりと吸っていた。

聖夜の攻撃を見ても反撃も防御もする気はないといった様子だった。

「あ！あなたは…」

聖夜の後を追って走ってきた梨絵が真っ先に声を上げて、その男を指差した。

そう、ついこの間に襲われた時に助けしてくれた男だったのだ。

「やあ！」

にこにここと梨絵に向かって無邪気に手を振る男の名前は真弘樹開…  
なかなかお目にかかれない名前だったので梨絵もはっきりと記憶できていた。

「ふうー…」

樹開は大きく白い煙を吐き出すと、焦ることもせずじっと聖夜の姿を見た。

その空気の重いことといったらないだろう。

張り詰めた緊張の糸がいつ切れるか分からないほどに引っ張られているのだ。

「お前…」

口火を切ったのは聖夜だったが、どこか浮かない表情だった。

「よっ…久し振りだな、聖夜」

反対に樹開は軽い挨拶をして見せた。

その姿を見た聖夜は早々に警戒心を緩めなかった。厳しい表情のままじつとその男を睨んでいた。

「おいおい…まさか、俺の顔忘れたってオチじゃないだろうな…」

無言で樹開を見る聖夜にいつものようにふざけた様子はなかった。それを横で見っていた梨絵も二人がただならぬ関係だということ把握する。

そして何も話さない聖夜に分かったよと諦めた。

「お前と俺は引き合う運命なんだよ。」

これは昔から変わらない…俺から逃げて新たなパートナーを探していたのか？」

梨絵は思わずびくりと体を反応させた。しかし梨絵のことを話しているわけではなかった。

「会ったぞ…あの少年に…正直驚いたよ。まさか新道家の生き残りとは…凄い奴を側に置いたものだ。」

あの一族に流れる血は俺以上だというのに…」

ふふふと意味深な笑いを見せると、煙草を落としてもみ消した。

「今分かった…何故この界限に呪者が集まり始めたのか…」

聖夜が皮肉を含んだ口調で話した。

「俺のせいかい？」

「ああ…」

「はつきりと言うねー…ま、嫌われているのは慣れっこだからそういうことにしておくよ。」

それで、新しいパートナーの話だけど、彼にも気をつけた方がいい…

新道家の本性を考えれば聖夜の取った選択は危険だ。

あ…それから、ここにいる人間だけど、残念ながら助けられなかった…

俺も気がついた時には…な…」

床に落ちている片方の靴を指差してそう言った。

それから樹開は、助言程度にさらっと話を済ませると、そのままその場から立ち去った。

そして去り際にまたなと一言残していった。

「あいつ…」

聖夜の目はどこか憤りのない怒りが秘められているようだった。

そんな水入りがあり霧唯の尾行もそこで終了となった。

「ねえ…」

重い空気の聖夜に梨絵は聞かざるを得ないことがたくさんあった。

「ここに人がいたってのは本当？」

目の前の状況を詳しく知りたかったので、始めに聞いたのはその質問だった。

その質問には間違いないだろうと聖夜も樹開の意見を肯定した。

「霧唯さんの仕業？」

「断言はできないが、そう考えるのが自然だろ？お前を襲った影にでも取り込まれたんだろ…」

「そんな…」

梨絵は、いたはずの人間のことを気にかけたが、聖夜はそれどころではなくどこか上の空だった。

「聖夜…聖夜！」

二度の呼びかけでようやく正気に戻ったような感じだった。一旦この暗い路地を抜け出し、帰る方向へと歩き始めた。

「あのさ…」

帰り道に梨絵は聖夜に踏み込んでいないとは知っていてもあの男の話をした。

すると、聖夜はぐつと押し黙ってしまった。

「悪い、話したくない……」

それっきりだったが、梨絵もしつこくする気もなかった。

そのまま二人は無言のままの帰宅となってしまうた。



## 68話

翌日

昨日とは打って変わったかのように元気になった聖夜は梨絵に霧唯の話をした。

こんなに切り替わる人間に出会ったこともないので、正直戸惑っていた。

しかし後腐れがないような感じにほっと胸を撫で下ろす自分もどこかにいた。

それから今後の打開策を話したが、聖夜の目先は怪しい方向に向いていた。

「霧唯がかなりの確率で標的だと分かった。後は力づくで聞きだして滅するぞ……」

滅する…それは殺すということだ。

梨絵にはこの言葉の重みがよく伝わった。聖夜がその言葉を口にしても軽々しい気がしなかった。

百戦錬磨の武人のような彼女が時折見せる本気の目は怖かった。自らを人の粹組みから外れた人間と言っただけあるのだ。

それから聖夜は梨絵の安否を気遣い、後は一人で大丈夫だと二度目の宣言を試みさせた。

しかし梨絵はどこか腑に落ちない点があったのだ。霧唯が果たして聖夜の探していた標的なのだろうか？

行動がおかしすぎると思った。

時計の針の生活のような人間がたまたまの外出であの惨劇に遭遇しただけかもしれないのだ。

早合点しすぎてもいけないと思い、梨絵は再び独自で調べることにした。

その日、聖夜は放課後に霧唯に会いにいった。

だが、対峙すれば分かる呪者の探知能力もまるでこの男には働かない。

そんな馬鹿な？

徳人の能力を受け継いだのだから感知能力は以前の数倍なはずだ。それなのにやはり以前のようにはほとんどというか、全く感じられない。

「何か？」

呼び出されてどうしていいのかわからない霧唯が聖夜に問いただ

した。

「ここまで来てひるむことなどできない。真正面から昨日の話をした。」

「お前、昨日何をしていた？」

「え？昨日かい？…え…と…その日は街に買い物に行って返ってきた…けど」

「買い物だ？」

「ああ…この本をね」

そう話して本を取り出して見せた。そこにはごく丁寧にレシートも挟まっていた。

「ここまで正直に話す奴もいない…どう切り替えたらいいのか分からず、聖夜は悩んだ。」

だから思い出したことを聞いてみた。

「あのさ、同じ大学の失踪した事件で、警察に自首したっての…あなたなの？」

翔太が聞き出してくれた情報にも当てはまるのはこいつしかいなかった。だからここで白黒はっきりしたかった。

しかしその質問にもはっきりとは答えようとしなない。

相変わらず気だるそうにため息をつくばかりで、まともな返答をする気はなかった。

こいつめ…

何もかもはつきりしない状況に痺れを切らしたのか、聖夜の考えがごんごん物騒になっていった。

いつそのこと襲い掛かって実力を計るか？

そつも考え重心がぐつと傾いた。

今すぐにも飛び出せそうな態勢だった。

だが、

「ご免…僕やることあるから帰らなくちゃならない…」

そんな戦闘態勢ばりばりの聖夜をよそに、霧唯は時計を見るなりそのまま足早に自宅のアパートへと向かった。

「お…おい！」

とんだ肩透かしだ。

聖夜は何も出来ずに相手の背中を見ることができなかった。

冷静に考えてみたが、この男には殺気の類の気配もなければ、昨日のアリバイもある…

それに殺しに出掛ける奴が本なんか買ったと正直に話すか？

その場に一人残された聖夜は告白して振られたような切ない状況

にも似ていた。

「やり直しってことか？」

空回りした数日間を返して欲しい気持ちもあったが、ここはぐつと堪えた。

同じ日、梨絵は大学内を聖夜に会わないようにこっそりと調べていた。

それは霧唯のことについてだった。

何か見落としていることがあるのではないかと、思っの行動だった。

昨日はどうしていつもよりも遅く帰ったのか、そこがまず第一に知りたかった。

「昨日の漆戸くん？そう言えば居残りさせられていたね…」

実験の失敗したかで、教授に怒られて後片付けさせられていたはず

…」

「彼が遅く帰宅することってあるんですか？」

「うーん…彼は宿題も持ち帰ってやるタイプだから今まで最後の講義が終わると真っ直ぐ帰っていたはずよ」

だとすれば、昨日は珍しい出来事だったのだと悟った。

「唐突ですけど、彼の経歴が分かるものって何かありますか？」

梨絵は彼の本質が見えないだけに過去のこととも知りたかった。

しかし仲の良い友達がないということはそれも難しいことだった。

「え？経歴？それは流石に…個人情報だから無理なんじゃないかな

！…

それに人付き合いの下手な人だから詳しく知ってる人もいないと思うよ…

嫌々集団に属してるって感じ？彼は根っからの一人好きなんだよ

…」

そんな霧唯の性格分析を聞いて、ますます彼の経歴が調べたくなつたのが本音だった。

そこで梨絵はまずいとは思いつつも大学内のパソコンを動かして、生徒の書類を盗み見るといふ荒業に出た。

元々理系の彼女にとってこんな簡単な暗号解読はない。

大学内の履歴書などは特に厳重に保管されているわけでもなかったのも幸いした。

四桁の数字の解除コードなど、ないに等しかった。

かたかたと軽快にキーボードを叩くと、

ものの数十分で梨絵の目の前には全校生徒の履歴と成績表が惜しげもなく白日の下に晒された。

満足した表情で画面を眺めると、漆戸の苗字を早速見つけることができた。

漆戸霧唯…年齢二十一歳。医学部。両親はいなく施設育ち。

ん？そう言えば最初に遊びに行ったときに医者の子息だという話をしていたが、あれは嘘だったということか…

梨絵は会話のほとんどが嘘だということを見て納得した。そこまでするってことは、自分の過去を悟られたくないってことか。そう判断しながらも内容を読み進めていた。

成績は中の上。得意科目は数学。苦手科目は体育。趣味は読書。アルバイトはしておらず、奨学金と今まで貯めたお金で生活費を捻出している。

典型的な苦学生だが、頭が良い分だけまだましだと思える部分もある。

梨絵はマウスを操作しながらほんの数ページしか書かれていない霧唯の半生をざっと見ていく…

すると目に留まった項目が一つだけあった。三ヶ月前に交通事故に巻き込まれて一ヶ月入院という記述だった。

これは、巻き込まれた事故のようで、居眠りの自動車が歩いていた霧唯に突っ込んだという不運なものだった。

命に別状はなく、数日昏睡していたが、すぐに目を覚まし体は右腕の骨折と左足の捻挫程度で済んでいる。

しかし梨絵はこの男は気の毒の連続だと思わず同情してしまった。

生まれながらにして施設暮らし、性格も暗く友達はできない。寧ろ使われて、利用されるといつても言い過ぎではない。

それに加えて人身事故など…回りの人の負の象徴を背負って歩いているのだろうか？

そう考えざるを得なかった。

そこまで画面を眺めると、思い立ったかのようにパソコンの電源を落とした。

ずっとここには怪しまれてしまう。そう判断するのが早いから梨絵は大学の講師が見回りに来る前には部屋にはいなかった。

経歴で見れたのはその位だったが、何だかかわいそうになったのが事実で、これ以上の詮索をどうしようか悩んでしまった。

一方で聖夜は先走った行動の結果を見つめなおしていた。

それぞれで今後の展開を想定できないままにその日は無情にも過ぎ去っていったのだ。



## 69話

この街に蔓延るどす黒い人の欲望の塊は今日も人を殺していた。

その人物が現れるのは決まって夜中十二時を過ぎた時刻だった。

漆黒の闇の中から現れると、高らかに笑い声を上げていた。

そいつを目撃した人は常軌を逸した人物の行動に恐ろしくなりその場から逃げようと試みたが、

ことごとく行く手を阻まれていた。

そいつは狙った獲物は決して逃がさない。

自ら持つ鋭利な武器を空気を切り裂く音と共に振りぬくと、その五体をばらばらに変えてしまったのだ。

走っていたものがその場にブロックが崩れるようにぐしゃりと肉片になって動かなくなってしまった。

これで四人目だ。

手馴れた様子になってきた殺人鬼も殺しの楽しみ方が分かってきたらしい。

どうすれば相手が怖がるのか。

どうすれば相手は戦意を喪失するのか。

どうすれば相手が壊れるのか…

そいつは人の持つ防衛本能を楽しんでいた。人の脳は脆い。恐怖を与え続ければそこから逃れるように防衛本能が働き、無垢な赤ん坊に代わってしまふことだってある。

だが、それはじっくりと恐怖を与え続ければ叶わないことだ。突発的な恐怖では人の見せる反応には限りがある…それを知りながらそいつは試していたのだ。

じわじわといたぶる時間が自分にはない。だから短い時間で自分をもっと楽しませてくれよと…

五回目の凶行を成し遂げるために深夜の徘徊は行われたが、それもある男に止められることになった。

ざり…

アスファルトの地面から一転した、工事中の一画の車道には誰の姿もない。

ただその人物の靴音だけが響き渡っていた

対峙する二人の人影は、月明かりすらない暗闇の中でその動きをけん制しあっていた。

初めて向かい合って普通ではないことを実感したことの表れでもあるが、

互いの空間に張り詰めた空気が流れることもなかった。

「あんたは？」

口火を切ったのは連続殺人犯の人物ではあったが、逃げる素振りも、いきなり戦闘を仕掛ける気配も見せなかった。

自然体のままで緩やかな口調で相手に話しかけた。

「お前…呪者だよな…」

確かめる意味でそう聞いた季節はずれのコートに身を包んだ人物の正体は、あの真払樹開だった。

慣れ親しんだ煙草を口にくわえながら横目で相手を伺った。

彼は殺人鬼を目の前にしてもいつものような態度を崩さない。

取り乱すことは流儀にでも反するといいたいのか、

それとも恐怖心が端からないのか分からないが、彼は独特の静の雰囲気を持っていた。

「それを知って何になるの？その様子から察するに、あんたは退魔師の類つてどこか…」

「快樂のために何人殺した？」

「面白いこと言うね…でもさ、殺したって発言は私好きじゃないな…それよりも遊んだって方が正しいんじゃないかな？まあ、結果は死んじやっただけだね…」

まるで殺すつもりはなかったとでも言いたかったのか、そいつは悪びれた様子もなく楽しそうに話していた。

「お前の中にどんな境界線があるのか知らんがね…お前は危険すぎる…」

「ええーあなたは、好みじゃないんだよなあ…いかにも痛みに強そうじゃない。そういつた奴はつまんないんだよ」

無邪気な子どものように振る舞い、体から力を抜いてため息をついた。

まるでやる気はないといったことを全身で表現しているかのようだった、しかし

そんな緩んだ空気の矢先に耳の奥に響き渡るような風切り音が響いた。

殺人鬼は攻撃を仕掛けていたのだ。やる気のない会話で油断させていて、そのまま攻撃に転じていたのだ。

すぱっ…

樹開のくわえていた煙草の先が切り落とされた。

「くっ…」

樹開には見えていた。

何もしなかつたら首を落とされていたが、一步後退していたためにそれだけは避けられた。

奇襲にも係わらず大きく取り乱すことなく、ゆっくりと相手を見ながら斬られた煙草を地面に投げた。

「やる気まんまんって訳かい…」

樹開は軽口を叩きながらも余裕がいくらかはあった。得体の知れない相手の攻撃を分析できたわけではない。しかし自らの能力を信じていたからこそ、絶望は味わうことがないのだ。

「いいねえー…あんたのその反応の良さ…私とやりあうのには相応しいってことか…」

この程度で殺されてはつまらない。そんな様子で樹開の品定めをしていた。

そこに計算などは存在せず、純粹に戦いを楽しもうとする狂気に近い、高ぶる気持ちの抑揚があった。

「焦るなよ…俺だってまだ本調子じゃないんだからな…」

そんな相手の気持ちを汲んで、樹開はまあ落ち着けよと示唆した。

「お前…この前の影の奴なのか？俺ともう一人の女の子を飲み込もうとした…」

そいつ全く姿も見せなかったが、お前と雰囲気似ているんだよ」

「はあ？何それ…私がそんな根暗に見えるわけ？私は堂々と殺す奴の前には出るよ。」

殺しの最高の舞台を楽しまないでどうする」

胸を張って堂々と殺人予告をしてみせたが、その会話だけで樹開もこいつは以前であつた奴とは違うのではないかと判断した。

「そこまで言い切れれば上出来…イカレてるな…」

「欲望に忠実だと思つてよ。誰しも抱く残虐行為はその大きさを必死で隠しているだけなんだ。

些細なことでもこれはいつ飛び出すか分からない…そんないつ爆発するか分からない爆弾を抱えていてどうなる？

ここは、なるようになれ、素直になるのが一番なのさ」

「だから呪者なんだよ、お前は…人は欲望を抑えることで生きながらえているんだ。

それを奪い去ったら人と同じようには生きられない」

「一般論を説くな…私みたいな人間がいるからこの世が成り立っているのも事実なんだ」

「お前と哲学の話をするつもりはない。人間に危険だと思われる奴は例外なく排除する」

「あらあら…楽しい話もここで終わりつてことか…」

でもさ、あんたみたいな退魔師は私みたいなのを殺すことで優越感を持っているんじゃないの？

本当は人でやってみたい行為を代行してさ…それって大義名分の名の下に好き勝手やってるってことじゃない？

「この偽善者め！」

その言葉で珍しく冷静な樹開の心に火が付いたのだろうか。

体が自然と動いていた。

踏み込む速度は肉体の極限状態で、行為そのものの動作を感じ取らせない流れる動きそのもの。

話し半ばで目の前に現れた樹開にそいつはワントンポ反応が遅れた。

そして懐から取り出した銀杭で右の掌を貫かれた。

「ぐう！」

痛みで何かが刺さったということは分かったが、何が起こったのかは頭の中で理解できなかった。

銀杭は壁に深々と突き刺さりその身を磔のようにした。

身動きが取れず、もがいたが樹開は追撃の準備を整えていた。まずいと判断した殺人鬼は苦し紛れで最初に放った斬撃を浴びせた。

樹開を襲った斬撃の正体はよく分からなかった。

ナイフや刀といった武器ではなく、黒く硬化化した何かが鋭利な刃物に姿を変えて飛んでくるのだ。

すぐにその場を離脱して追撃の手を緩めることを余儀なくされたが、賢明な選択ではあった。

もしもあのまま追撃を仕掛けて懐に飛び込んでいたら樹開の体は



ばらばらになっていたのだ。

態勢を大きく崩して地面に手をつく顔を上げた。

どこにそんな余力を残しているのだと、呆れながら相手を睨もつとしたが、等の本人はそこから姿を消し去っていたのだ。

銀杭だけが固いコンクリートの壁に残っていたが、血痕は暗闇の中に続いていた。

無理やり引きちぎって逃げたのが見て取れたが、そんな簡単に行える行為ではない。

骨も肉も貫いていたのだから痛みも相当なはずだ…それを躊躇せずに行われるとは、常軌を逸しているとした表現できなかった。

「はあ…逃げたか…よりによってあんな凶悪な奴を…」

樹開は自分の爪の甘さを悔いていた。あそこで仕留めなくてはならないのにその機会を逃してしまった。

殺し合いの中でチャンスという奴はそうそう転がっていない。

殺せる時には確実に殺さなくては、逆に殺されるのがこの世界の定義なのだ。

次は自分が窮地に立たされることを覚悟しなくてはならないと樹開は自らに言い聞かせていた。

とりあえず気持ちを落ち着かせようと、いつものように煙草に火をつけていた。

「ほんと……すれ違いばかりだな……俺……」

自分の境遇の不運さを認めつつもどこか納得いかないといった様子で寂しい顔を垣間見せた。

## 71話

梨絵は昨日の話を聖夜に聞かせた。それと同じように聖夜も自分の行動を話した。

二人は浮かない表情でため息をつくばかりだった。

しかし漆戸霧唯を完全に容疑者から除外することはできないのが事実で、梨絵は彼のことについて語り始めた。

「私なりの見解だけど…彼は普通じゃないと思う」

「え？」

聖夜は素直に驚いた。どちらかというとなり梨絵が否定的だと思っていたからで、自らの軽率な行為を叱られることを覚悟していた。

「生活のリズムがともかく一定で、乱れるのは予想外の出来事ではないの…」

そして、彼は事故にあってから行動が少し変なの」

「後遺症とかそういうやつか？」

「分からないわ…でも、回りの話を聞く限りでは、あの事故以来夜で歩くこともしばしば会ったみたいで、

彼を夜見かけた人は口々にこう話した。彼らしくないと…まるで別人だと…」

「それはまた…どういうことだ？」

皆目検討もつかないといった様子で聖夜は頭を悩ませていた。

「知らないわ…でも、彼のあの日取った行動はいつもの法則から外れたのは事実。」

だとしたら時間と何か関係があるのかもしれない。あの日は唯一帰宅が遅れた日だからね」

「お前もお前なりにいろいろ調べたんだな。」

しかし…お前の強心臓には呆れるね。あれだけ踏み込むなって言ってもお構いなしなんだからさ」

「はいはい…もう聞き飽きたわその台詞。それが、私の良さでもあるのよ」

まるでいい女を演じているかのようだったが、そこに嫌味はなかった。

「あなたが取った軽率な行動は置いておいて、彼をこれらも警戒するのにはこしたことはないと思うけど…どう？」

聖夜は自分のミスを少しは恥じていたが、霧唯のことは絶対に何かあると決め付けていた。

これは直感としか言えなかったが、すんなりと引き下がる気は毛頭ない。

だから梨絵の提案にも乗った。

「このままでは済ませたくないからな…俺なりのけじめはつけるぞ」

「その根拠のない直感止めてよね。いろんな人に迷惑かかるから」

梨絵は現実主義だから根拠のない発言を認めなかった。

しかし現実では計り知れないことが起こっているのを認めている時点でそんな考えは矛盾している。

「私なりの仮説だけど、事が起こるとしたら夜ね…」

それと、いつもの生活リズムが崩れた日も関連していると思う。だから夜の彼の様子を重点的に伺うことにしよう」

「そこに依存はない。だけど、これはお前の両親も心配するから俺がやる。」

昨日の件もあるからな、黙って待っているのは性に合わないんだ…」

自発的にその役を買って出た聖夜だったが、梨絵は拒むこともしなかった。それで彼女の気が晴れるのならばと譲ってくれた。

しかし隠し事はなしだということをつけ加えていた。ここまで係わった以上、黙って傍観できるほど人ができていない証拠だ。

「分かったって…お前をのけ者にはしない。」

ここまで協力してもらったんだ、最後まで付き合ってもらおうさ」

聖夜もにやりと笑みを浮かべて梨絵の気持ちに応える姿勢を見せた。

数日間、事件も事故もないままひと時の平和のように時が過ぎ去っていたが、一つの転機が訪れた。

それは梨絵から聖夜に連絡が入った。普段四時前に帰宅する霧唯の生活に変化が起こったと…

それを聞くなり聖夜は早速深夜に動いた。

そこにどんな真実があるのかは分からなかったが、確かめずにはられない。

そんな想いが体を突き動かしつつ、聖夜は暗闇の中を颯爽と駆けていた。

生ぬるい風が体を包み込み、夏の匂いのような青い草の香りが鼻腔を刺激した。

幾度となく通いつめた道は、目を瞑っていても歩けるほどだった。

聖夜の気持ちは高揚していた。今日、何かあるのだろうか？

そんなことを予感させるような、自らの体の細胞の高ぶりに困惑していた。

徳人の血が混ざり合ったことで、以前とは違う体の感覚や能力が時折姿を現す。

呪者を探知する能力の他にも、呪者を殺すことに対する喜びに似た感情を抱くようになった。

実際にはまだ殺してはいないが、殺したい…滅したい…そんな気

持ちが膨れ上がっていた。

それが今日成就されるかもしれないと思うだけで、興奮が収まらないのだ。

俺はおかしくなってしまったのだろうか？

わくわくする気持ちを必死で抑えながら頭の中ではそんなことを考えていた。

そして目の前には霧唯のアパートがあった。時刻は夜の十二時を過ぎていた。

電気は消えていて、恐らくは眠っているだろう。

しかし…何かが起こりそうな予感だけが警告音のように体に鳴り響いていた。

はは…どうしたんだ？俺…

しばらくすると、そんな自らの体に起こる非科学的な数々のことが、現実になるかのようにアパートのドアがゆっくりと開いた。

咄嗟に姿を隠して物陰からドアを開いた人物を見た。

そこには漆戸霧唯の姿があった。

ぞくり…

しかし雰囲気は全く違う。能面のような男に表情が…出ている？

暗くてよく分からなかったが、どこか嬉しそうな感じであった。

霧唯の足取りは軽く、ふんふんと鼻歌を歌っているかのようにだった。

昼間からの霧唯と違うことは明白になった。聖夜はそのまま尾行を続けたが、

迷いのないその動きに自分の存在を気付かれたのだろうかとも思いつながら警戒をしていた。

一体どこに行くんだ？

終電が終わってしまったこの時間でずんずんと突き進む霧唯の後姿を見失いように必死で追いかけた。



## 72話

三十分程歩くと閑静な住宅街にたどり着いた。

時刻は十二時半を過ぎていたので、辺りを見回しても人は歩いていない。

こんな場所では靴音も響き渡ってしまうが、聖夜は幸いスニーカーだったので靴音は全くと言っていいほどしなかった。

しかし革靴の人間やヒールのある靴を履いている人間は違った。

かつ… かつ… かつ…

遠くから靴音が響いていた。この音はハイヒールの音だというのが聞いて取れた。

女性がこの近くを歩いているのだろう。そう判断すると、霧唯は既に動いていた。

獲物を見つけた肉食獣のようにひたりひたりと気配を殺しながら動いているのが分かった。

音の主と距離が徐々に縮まって行くが、それと同時に殺気が膨れ上がるのが遠くから見ても察することができた。

やる気だ… あいつ…

絶対に女性と鉢合わせをさせてはならないと判断した聖夜は咄嗟に動いた。

おそらく霧唯のしている視線の先の曲がり角、あそこから女性が現れる…その前にあいつを止めなくては…

距離は十数メートル離れていた。

三秒あればあの無防備な背中を捉えることはできるはず…

頭の中で計算し、実行に移すことを覚悟した瞬間、何か鋭いものが眼球目掛けて飛んできた。

「う…」

振り返って暗闇から飛んできた何かをどうにか避ける。そのせいで、大きくバランスを崩した。

手を地面に付いて霧唯の姿を確認するために前を見ると、

惨劇の行為が…血しぶきが舞い散る中に悪魔のように笑っている霧唯のおぞましい姿が網膜に焼きつく。

「あ…」

聖夜は間に合わなかった。

予測していたように角から現れた、若い女性は数十個の肉片に解体されてしまったのだ。

それも一呼吸で…

血まみれになった霧唯はもはや人の形相ではない。血の味に飢えている殺人鬼そのものだった。

「くそ……」

救えなかった自分に腹を立てつつ、体をぐつと起こすと、未だにこちらの様子に気がつかない霧唯の背中に向かって走り出した。

すらつと懐から刀を抜くと、一步二歩で大きく飛び上がった。

こいつは明らかに呪者だ。

そう断定したことで、迷いなどない。高々と飛び上がった空中から霧唯の背中に向かって片手で無数のクナイを投げつける。

クナイで先制攻撃、そして止めをこの短刀で刺すというのが、聖夜のシナリオだった。

以前の自分は呪者を殺すことはできなかった。しかし徳人と反転した今の自分なら殺せるかもしれない。

そういう試みもあったので、いつも以上に力も入った。

弓矢にも匹敵する速さで標的に真っ直ぐと向かう鋼鉄の武器に狂いはなかった。

だが、寸でのところでその全てが弾かれた。

しかも霧唯はこちらを向いていない。

何故？

そのまま勢いで短刀を突き刺そうとしたが、逆に何かに足を貫かれた。

太ももに何か根深々と突き刺さった。

痛みでそれが分かった聖夜は機動力を奪われ、攻撃に繋げることもできずに、がくりとその場に膝をついた。

「あぶないなあ……」

くるりと向きを変えたその人物はやはり霧唯本人だった。しかし雰囲気がるで違う。

血に染まった顔、髪、衣類を全く気にせず、聖夜をはつきりと見た。

「あらあら……よく見るとかわいい顔している。何の用？」

まるで初対面のような話し方に聖夜はおかしいと思った。それにあの話口調は何だ？まるで霧唯ではない。

「お前……俺の事を覚えていないのか？」

痛む腿をぐつと押さえながら止血をした。するときよんとした顔をして、

「え？どこかで会ったっけ？」

思い出すようにうーん、うーんと呻って見せた。

その間にも聖夜はTシャツの袖を裂いて、包帯代わりに腿をぐるぐると巻きつけた。

「お前は霧唯なのか？」

質問を変えると、逆に饒舌になった。

「私？私は…霧唯じゃないよ。花梨だよ。体は男だけど、ここは女性だよ…」

頭を指差して見せたが、聖夜は混乱していた。今の状況をどうまとめたらいいのか分からなかった。

「花梨だ？じゃあ、霧唯はどこにいったんだ？」

「あいつは、寝てるよ…」

「どう見てもお前は霧唯じゃないか…もしかして多重人格者って奴なのか？」

それ以外に考えられないと判断してみたが、半分正解だと花梨と名乗るそいつは答えた。

「私は私…体は借り物かもしれないけどね、この時間は私の時間なの…活動時間短いけどね」

「それを別人格と言うんじゃないのか？」

「違う違う…私たちは別の性格がそれぞれの時間を確実に生きているの。」

これは別人格ではなくて、一個人として活動しているの……」

「罰人格はそう主張する。だいたい体は霧唯のものだろうが！主導権はあいつにある」

「そうか……そうだね。確かに今はあいつにあるよ。でも与えられた時間は平等なんだ。

あいつを中心に八時間おきに体の所有者が変わるんだもの……」

「八時間おきだと？」

「そう、もう一人いるってこと。私はよく知らないけどね。

そしてもう一つ教えてあげるけど、私やそいつが衝動的な行動した時には

霧唯には偽りの記憶として夢のように残っているらしいんだ……」

## 73話

「まさか…」

そのことを聞いたことで、いろんなことが頭を過ぎっていた。

四時前に必ず帰る理由、街で目撃された時にいろんな表情を見せていたこと、殺され方の全く違う失踪事件と殺人事件。

三人の人格が入っていればそれも納得がいった。

「俺が街中で尾行したときにいた奴は、お前とは違う奴ってことか…」

あの時のことを思い出した。もしも今のこいつなら殺し方は違っただろうし、聖夜を見たときに何かを感じるはずだった。

それが全くの初対面ということは、あの時には会っていない証拠になった。

「そうだね。だけど、一つ間違いがあるよ。殺し方は違うけど…多分使っているものは同じだよ」

「何だと?」

「これって呪者特有の能力でしょ。あんたが私を襲えなかった理由もその一つ…」

そこまで話すと、ずらずと黒い影が花梨の体を這っていき、手のところまで行くと固形物に変化した。しかも鋭い棘のように…

「影が…」

そうか、影を使った攻撃はこいつ以外の奴もそうだった。聖夜は影に飲み込まれた死体を咄嗟に思い出す。

「そう、正解。私たちはさ…影を自由に操れるんだ。

こんな風に固形物にしてみたりね…そうそう、無防備な状態で襲われても自動的に身を守る便利な機能もあるから気をつけてね」

にこりと笑って見せたが、全然笑えない。

厄介な機能が付いているとは…しかもあれを切れるのか自信もなかった。

影の武器など聞いたこともみたこともないのだから…

聖夜は戦況の悪さに気付かされた。

「何故、呪者となった…誰が契約した。お前か？それとも霧唯本人か？それとも残りの奴か？」

「良い所に気がつくね。契約者はもちろん霧唯本人だよ。何を望んだのかは知らない。

そうそう…ちなみに私たちが生まれたのって最近の話なんだ…三ヶ月くらい前位のね」

「どづいつことだ？」

そこまで話すと陰から新たな靴音が聞こえた。



聖夜も花梨もその音の先を見ると、そこには真弘樹開の姿があった。

「む…あんたか…」

樹開を見るなりため息交じりで花梨は話した。

「漆戸霧唯は…彼は恐らく呪者の契約を大学入学前に結んだんだ…前任の呪者からな」

「前任だと？」

「ああ…嫉妬という大罪の呪者。そいつは俺が追いかけていた。しかし三年前を境に忽然と姿を消した。呪者が自ら滅びれば新たな人間がその罪を受け継ぐのは知っているだろう。」

呪者は、呪者にしか完全に滅ぼせないからな。いや…罪そのものといった方がいいか。

だから漆戸霧唯は、願いの選択をどんな形かは知らんが受けた…」

「何の願いを？」

「あいつの成績を中学から見てみたが、医学部に入るには絶望的だ…」

それが高校三年になって急に飛躍的に伸びた。これは何を意味する？

それを見ても不自然だろ？明らかに契約を結んだ者…」

聖夜も花梨も何も話さなかった。黙って樹開の話聞くだけだった。

「彼の行動はそこから不自然には行われぬ。生きながらえるために多少の犠牲は払っていたらう。」

だが、こんな派手な動きは見せなかつたようだが…」

花梨のことを指し示しているのであるが、当の本人は知らん振りをしていた。

ふてぶてしいというか、完全な子どもだ。

「三ヶ月前に何があつたのかは知らないが、複数の人格の出し入れができるなんて、危険な存在だな…」

能力もばらばら、性格も頭脳もな…」

真剣な眼差しで聖夜に向かつて話しかける樹開にふざけた様子など微塵もない。

その独特の世界に引き込まれることを止めることなどできない。

「お前は誰だ？もう一人いるみたいだが、霧唯が全ての主導権を握っているのか？」

もつと心の奥深い所の誰かが握っているようにも感じるが？」

樹開は複数の人格の中から本当の霧唯を探せないで困惑していた。

花梨はそんな霧唯の体事情を話されてもぴんとはこない。どうだつていいじゃないという素振りだった。

「そんなの私には全然関係ないよ…楽しめればそれでいいんだからな…」

人を解体するのも大分手馴れてきたでしょ。最初の奴は頭を切り

落とすので精一杯だったけどね。

でもさ…霧唯もこれを望んでいたよ。あいつ…邪魔だなあってね。傲慢だし、嫉妬深いし、欲にまみれているって…だからその感情の高ぶりが私に育つきっかけを与えてくれたんだけどね。

今では立派に独り立ち。ほら、霧唯に関係ない人でも殺せるようになってるんだから…」

側に飛び散っている肉片を指差した。

聖夜もそれを見る気にはなれなかった。

死体は幾度となく見てきたが、こいつに乗せられことが我慢ならなかったのだ。

「惨いことを…」

樹開は死体に向かって儀式のように軽く印を結んでぶつぶつと念仏のような言葉を呟いた。

そして

「浄!」

と大きな言葉を発すると、ばらばらだった肉片が元の形に戻っていった。

体は元の姿にまき戻しのようになり、女性の姿がそこには出来上がったかのようだった。

しかし息はしていない。死体は死体のままだったが、このままでは不憫だと樹開が術を発動させたのだ。

「へえ…あんだ変わったことできるんだ。せめて綺麗な形で死なせてやりたいってことかあ…」

感心していたが、そこに心がこもっているはずもなく、白々しいことをと樹開は睨んだ。

「早速やる？私は全然余裕だよ」

そんな樹開の気迫に煽られて、再び人を解体したいと疼いていた。

だが、樹開はそんな花梨の予測とは裏腹の行動を取った。

「え？」

聖夜を抱きかかえると、真っ先にその場から撤退したのだ。

「くっ…この卑怯者！」

それを見るなり花梨は樹開の後を追った。

## 74話

聖夜を抱きかかえているのにも係わらず樹開は羽でも背中についているかのように軽々と塀を、屋根を登って距離を取る。

「お前…何考えてるんだ？」

抱きかかえられながら恥ずかしそうに聖夜は樹開の行動の説明を求めた。

「あんな狭いところでいきなり殺し合いもないだろう？」

折角元に戻してあげたあの体もばらばらにされたら嫌だしな…」

そうか…亡くなった女性のことを気遣ったのだと納得した。しかしそれだけではなかった。

「それにお前も…この怪我では無理だ。ここは逃げるのが一番…」

そう言っているうちに花梨は真後ろに迫っていた。その距離数メートル。

花梨からすれば攻撃の範囲内だった。

影があれば、それだけで十分。

聖夜に食らわせた攻撃のように影を槍のようにぐうんと伸ばし樹開の背中を狙った。

「突き刺されえ！」

楽しそうにその切っ先を眺めていたが、

ぎゅん！

軌道が大きくずれた。いた、反発したという表現が正しかった。

樹開の体から強制的に離れざるを得ないように見えた。

「これは…」

そんな馬鹿な。あいつは何もしていない、それなのにどうして背後からの攻撃を避けられる？

そんな疑問があったが、それを消し去るように続けて攻撃を試みた。

その数は十。

先ほどの十倍の攻撃を浴びせるように空中を這わせた。

そして漆黒の槍は退路を塞ぐように樹開に襲いかかった…だが、結果はまたしても同じ。

ぐにゃんと切っ先が歪むと軌道は大きくずれてしまうのだ。

「くそ！」

影が伸びすぎて細くなる。一度戻さなくては…花梨はその場に立

ち止まり影を自らの体に戻した。

そしてそれとは対照的に樹開の姿はどんどん小さくなっていった。

これでは追いかけるのは無理だと諦めると深夜の追跡劇はそこで終わってしまった。

聖夜は公園で下ろされた。

あれだけ走ったのに樹開は息一つ乱さない。

心肺機能の一つを取り上げても尋常でないのが明らかだが、  
聖夜はそんな樹開のことをこれ位できて当たり前のように扱っていた。

「あんたね…登場するならもっと早く来いよ。それに敵を目前に逃亡するとは…」

「悪い…遅れたのは謝る。あいつさ、多重人格のせいか、呪者のくせになかなか感知できないんだよ。」

お前も同じだろ？ だけど逃げたことは別に悪いと思っていない。

お前…あのままなら殺されたら？ 怪我したまま殺せるほど楽な相手じゃないことぐらい知っているだろうに…」

「何で、俺が殺される？ 俺が不死なのはお前も知って…」

「馬鹿野郎！ お前が不死でなくなったことぐらい知ってるんだよ！」

こいつ…どこまで知って…そんな表情を聖夜はしたが、樹開は全く気にしていなかった。

「新堂徳人…あいつと血を交わらせたことで起こってしまった対極反応。それは禁忌にも等しい…」

「禁忌だと？」

「ああ…俺のような退魔師の系譜でありながら祖先は呪者なのだからな…」

「邪悪な物を滅ぼす血液…その血が直接混ざり合えばどんなことが起こるか想像できるか？」

「下手すればお前はお前でなくなったのかもしれないんだぞ？」

「不死のお前が見境なしにでもなってみろ、世の中は大混乱だ…」

「一つ一つ冷静に話すが、それは間違いではなかった。しかしあの事態は不測の事態だ。だから自分に非はないとも思っていた。」

「正直…あの少年と係わるのは止めると言いたいが…反転してしまったことによつて繋がってしまったんだよな…」

「これでは引き剥がすことも不可能になってしまった。厄介なことをしてくれたな…」

「お決まりのように煙草を取り出し火をつけた。自分を落ち着かせるように大きく煙を吸い込んでいた。」

「どうして…そこまで知って…」

「聖夜は全てを見透かしている樹開に驚きを隠せなかった。」



「ははっ…今更の質問だ。俺は呪者に大して鼻が利く…体の流れだつて手に取るように分かるさ…」

お前は特にな。あれだけ一緒にいたのにな…そんなことも忘れちゃったのかよ」

その言葉に、どくんと聖夜の体が反応した。

「俺は…お前のことをずっと待っていたんだ。まあ…勝手にだけだな…」

それでもあの日のことは忘れられない…十七年という月日はお前にとつても短いものかもしれないが、

俺には相当なものなんだ…」

今まで見せたことのないような寂しい表情を垣間見せた。

聖夜はそのことに何も答えることは出来なかった。

「お前はいろんなことを拭い去ろうとしていたのかもしれないが…俺は受け止めてほしかった…  
それも今は叶わないかもしれないが」

「それは…」

「そうそう、あの呪者だが、殺すなら霧唯の時の方がやりやすいかもな。

あいつは自らが呪者だということを知らないのだから、あっさり殺されてくれるだろうさ…」

話題を瞬時に摩り替えられて聖夜は言葉を返す余裕もなかった。

樹開はそのまま助言を続けて霧唯の影についても話した。

「あいつが夜しか人を殺せないのは、闇を味方につけているからさ…  
昼間の奴はただの抜け殻だ。光当たるところで戦えば勝機は見えてくる…まあ、確実に殺せる…」

だからやるんだろ？ そうしなければお前は進めないのだからな…」

含みのある言葉を口にするなど聖夜も感じ取ってはいたが、あえて無視をしていた。

「しばらくは傍観者を気取ろうかとも思うが、お前が逆境の時には駆けつける…そういう約束だったからな」

樹開はそのまま煙草をもみ消すとどこかにふらりと消えてしまった。

暗闇の公園の中にひとりぽつりと残された聖夜は拳をぎゅゅっと握り締めていた。

抑えきれない感情の高ぶりをそこで表現するしかなかった。

「くっ…」

不意に昔のことを思い出していた。忘れたはずなのに…そしてぎりつと奥歯をかみ締めて、夜空を眺めていた。

## 75話

悩む時間などあるはずもない。聖夜は寝ることも出来ずに一人で公園の片隅にいた。

時刻は六時半。

朝日は姿を見せていたがまだ早かった。

なぜなら例の呪者が姿を消して五時間しか経っていない。奴が元の霧唯の人格に戻るのにはあと一時間半必要だった。

夕方四時と十二時、朝八時で性格が変わるのは立証済みだ。

それならば、一番か弱い霧唯の時に殺すのが確実…樹開に言われた言葉が重くのしかかる。

腿に受けた傷はすっかり良くなっていた。

武井このみとの戦いでもそうだったが、折られた右腕も数時間経てば治っていた。

治癒能力は以前とは比べ者にならないぐらい遅くなってしまったが、それでもないよりはましだ。

しばらくじっとしていたが、これ以上この場所に留まっているのも自分の性分に合わなかった。

朝日がこれだけ出てしまえば、影を使う能力も半減だろう…そう思いこの場から動くことを決意した。

多分：自宅のアパートに戻っているかもしれない。当てはないが歩き出した。

昨夜と何も変わらない住宅街。

しかしその片隅には女性の死体の一つ転がっていることを考えると、この地区の人間に少し同情する。

聖夜は花梨と名乗る霧唯の中にいる住人を不思議に思っていた。

女：しかも十代の女性が体内に宿るとは…

もう一人はどんな奴が入っているんだ？

自分なりに推測をしていた。

考え事をしながら歩いていると、一時間ほどで例のアパートの前にたどり着いた。

八時になるまであと二十分というところか…一体奴はどんな変化を見せるんだ？

しかし八時を過ぎてもアパートの様子は変わらない。ひよつとしたら帰っていないのだろうか？

そうも考えて聖夜は部屋の中を覗くことにした。

武器はあらかじめ用意し、不測の事態に備えられるようにした。

奴がドア越しに襲い掛かるのならそれもいいだろう。それよりも

速く、体を引き裂いてやる…

頭の中でシミレーションを済ませると、ゆっくりと階段を上がった。

ドアの側まで行くと、壁に背中を這わせてゆっくりと進む。決してドアの前には立たなかった。

それから軽くノックをする。

反応はない。

居留守を使っているかもしれない。

ごくりと唾を飲み込むと、ドアノブにそっと手をかけた。

かちやり…

鍵がかかっていたいなかった。ゆっくりとドアは開いた。

壁を背にしたままドアを開いたので、ドアの先が見えるはずもない。

しかし部屋の中に人の気配はなかった。

警戒心を解かないまま開いたドアの前をすっと横切るが部屋の中には誰もいないのが、一瞬で分かった。

「ここには帰っていないのか…」

そう思い、部屋の中を見ることにした。

ひょっとしたら漆戸霧唯という人間が分かるかもしれない。

土足のまま中に入ると、まず目に付くのは小さなテーブルだった。そこにはノートが一冊置かれている。

それから部屋中を見回すが、物がほとんどないに等しかった。ベッドと勉強に必要な教科書、参考書の類が散乱しているだけだった。

テレビもないとは…そう呟きながら目の前のノートを拾い上げた。中をばらばらと捲ると、これは日記のようだということが分かった。

「これは…」

読むと内容は自分の体の異変のことについてびっしりと書かれていた。

『事故以来、多少の記憶の錯乱が見受けられる…』

どうもあれから四時以降は体がだるくて、眩暈もする。

幸い学校は三時過ぎには終わるからいつも通りに帰れば問題はな  
い  
『』

そんな冒頭から始まり、少しずつ変化する自分の体に戸惑っているようだった。

『夢をたくさん見る。よく知っている人間も多数だが、自分の嫌いな人間ばかりだ。』

学校の連中は他人を蹴落とそうと考える奴ばかりだ。

自らの出世のため、将来のため…他人に嫉妬する人間もたくさんいる。

僕はここで潰れはしないだろうか？』

日付はだんだん最近に近づいていく。

『夢なのか現実なのかよく分からない時がある。』

自分の手で人を殺してしまったような感覚…それに罪悪感やら優越感がごちゃ混ぜになっている。

もしかして、最近の大学生失踪事件と自分は関わりがあるのだろうか？』

その文面を見て、この後霧唯が自首しに行ったのが分かった。

しかし警察は証拠もない人間を逮捕することなどできない。ましてやあれは人の業ではないのだから…

『夜出掛けると、自分が自分でないような感じだ。記憶があやふやで他人の記憶のような気もする…』

それに自分の嫌いな人間が次々に死んでいく…木城智也。あいつは本当に邪魔な人間だから死んでせいせいした』

そこから一気に霧唯の体の中の暴走は始まった。

『事故以前の記憶が時々頭の中を過ぎる。誰か大事な人間を失った気がする…』

でもその人間は近くにいるような気もする…ああ…頭が痛い。考

えるのも嫌になつてくる…』

そして昨日の日付で最後の日記となった。

『そうか…みんな僕の側にいたんだね。僕はもっと素直にならなきゃ駄目なんだ…』

簡単なことじゃないか。あの事故のせいで、僕は記憶を失う代わりに大事なものを取り戻せたんだ。

これからは、本能のままに…』

そこで文章は途絶えていたが、ノートの最後のページには一言書かれていた。

『花梨、高谷先生ごめんなさい…』

その名前を見た瞬間に聖夜は理解した。

霧唯は己の中にいる人物に気が付いたのだと…そしてもう一人の人物は高谷という人物がいる。

記憶が戻ったのだとしたら、呪者として目覚めてしまったのかもしない。

だとしたら非常に危険なことだ…

メインの体の霧唯が体の内に潜む別人格の能力をフルに活動できたらこれ以上の脅威はない。

それに…彼自身が持つ能力も分からない。

「どうやって霧唯を探す…」



アパートを出て周囲を見回して見るもののそこに霧唯の姿はない。  
気配を探そうにも彼は探しづらい体質の持ち主だ…

とりあえず、顔を知っている梨絵に危険が迫ってはまずいと判断し公衆電話から電話をかけた。

「もしもし…梨絵？」

数回のコールで出てくれたのでほっと胸を撫で下ろした。

「こんな朝早くから電話ってことは、何か分かったの？」

梨絵も察してくれた。それなら話は早いと思い忠告した。

「霧唯が現れたら真っ先に逃げろ。あいつはやっぱり普通じゃなかった…」

知っている人間に危害を加える可能性もある…だから俺が行くまで奴を見かけても近づくな…」

詳しい経緯など話している時間はない。

自分も守りに行かなくてはならないと思いい用件を手短に話すと隣町へ急いで戻ろうとした。

## 76話

梨絵は学校に行く最中だった。

聖夜の電話口から聞こえる話しぶりからするととんでもないことになっているのが分かった。

しかし自分は何もできない。

梨絵は梨絵なりに対抗策を練ってはいたが、自信などなかった。

何もないことを願いつつ、極力人ごみの中に紛れようといつも通る道よりも遠回りをすることにした。

その選択が奇しくも、悪い方向へと誘う悪魔の囁きだったのかもしれない。

梨絵は知らなかったのだ、普段通らない道は工事中で塞がれていることを…

「え？」

気が付くと狭い路地の方に嫌でも進まなくてはならなくなっていたのだ。

引き返すか？いや、このまま突っ切ろう。

嫌な気分のままそう判断したが、そこで最悪の鉢合わせをすることになる。

「やあ、梨絵さん…」

にこにここと笑っている霧唯がそこに立っていた。

能面のような男が自らの感情を露にしている…その様子が不気味でならなかった。

梨絵の体は硬直して動けない。

叫べば一瞬で殺されるかもしれない。

「僕さあ…気付いたんだよ…」

ゆっくりと梨絵に近づくその姿は、以前の知っている霧唯ではない。

ゆらゆらと背景の景色が歪んで見えるぐらい常人ではない威圧感を放っていた。

何かされることは明白だ。梨絵はいち早くそのことを判断して、こっそりと手を後ろに回すとバックから何かを取り出す。

「何に気付いたんです?」

正直怖かったが、黙っていたは何も進まない。梨絵は強がって見せて話を広げようとした。

すると、霧唯はその返しを喜ぶかのようにべらべらと話し始めた。

「過去の自分と…うじうじと我慢していた自分にさ…この三ヶ月…

いや、それ以前の自分もまるで自分ではなかったからね。  
だから素直になるうって決めたんだ」

「あなたが普通じゃないのは分かります。以前も私を襲いましたよね…」

「正確には、別の人なんだけどね」

「え？」

「体は僕だけど、中身は違うって奴だよ。多重人格…みたいな？  
僕の中にはどうやら二人の別人格が存在するみたいなんだ。

しかも人格だけではなく生きているかのようにね…まあ、そのことがはつきりと分かったのはつい昨日なんだけどね。

それで…そいつらも全部ひっくるめて僕という存在を探し当てたんだ。

今までの自分は別の人格だったんだ…これが本当の自分って訳…」

「要するに今までのあなたは、全く違う人間ってことなの？」

「分かりやすくいえばね。でもさ、実に清らしい気分なんだよ。

偽りの自分を二十年あまり生きてきたことから決別できたのだから。

僕という人間は、本来こういう人間だって言うことなんだよ…

性根っていうのは生まれ持っているものなんだよ、きつと…生粋の殺人衝動を持つ者は必死に隠しているかもしれないが、

必ず存在するんだよ。いずれは衝動を抑えられなくなってほんの些細なきっかけで人を殺す…

だってさ、それが使命なのだから…」

人を殺すことに理由をつけたかったのかは、分からないが霧唯は実に落ち着いていた。

しかしそんな吹っ切れた様子の霧唯に負けじと梨絵も踏ん張っていた。

「殺人を公言して偉そうに言えるところが凄いですけど、私はそうは思わないです。」

人は愚かかもしれないけど、自分なりに生きようと、自分の証を残そうと…必死に探して生きているのだから。

そんな簡単な言葉で片付けられて欲しくくないです」

追い詰められる立場でも言いたいことは言っておきたいという梨絵の性格が出たのだろう。

しかしその言葉は霧唯を逆撫ですることに繋がない。そういう考えもあるのだと黙って聞いているだけだった。

「面白いことを言うね…君は…しかしね。はっきりと言えることだけはある。弱いものは駆逐されるっていうことだよ！」

怒らせてはいない。これが彼の持ち味でもあるのだろう。

平常心で人を殺せる。

会話の半ばで霧唯は自らの影を梨絵に向かって這わせた。

それはまるで梨絵が襲われた再現のようだった。

## 77話

黒い影の波は飲み込むようにぞわぞわと寝食するかのよう膨張し、周りを取り囲んだ。

「う…」

流石に強気でいられた精神も崩壊しかかる。だが、どうにかそれを必死で堪えた。

ここで心が折れたら死ぬことは確実…それなら…

腹をくくっていた梨絵が取った行動は、後ろ手に隠し持った反撃の武器の使用だった。

さっと電球のついている小さな傘のようなものを目の前に差し出すと、かちりとスイッチチを入れる。

カッ…

眩い閃光が辺りを埋め尽くして、網膜に白い光が焼きつく。

「ぐっ…」

霧唯はその光を真正面から受けた。当然の如く、視界は奪われ身を丸くした。

呪者といえども体は生身の人間同様だ。反応も人間と同じだった。瞬間的な光は閃光弾と同じようなものだったが、普通の人間には買えるはずもないので梨絵が自らその代用品を作ったのだ。

閃光電球。それはカメラ屋が撮影の時に用いるものだ。それを利用して眩い光を一瞬で出すことができたのだ。

そしてその効果は抜群で、霧唯本人と操っていた影の二つに影響を与えていた。

光は影を遠ざけ、操っている本人も予想外の展開に戸惑うだけだった。

「うう…」

霧唯は体に痛みも感じていた。

目が見えなくなっただけに部位の特定に判断が鈍る…

どうして腹部に痛みが？

探すように腹部をゆっくりとさすると、指先に何かがぶつかり、そこには何か突き刺さっていたことを理解した。

「あ…」

矢が刺さっている。そのことを認識するのに数秒を要するほど五感が鈍る。

人は視覚と聴覚を奪われるとまともな判断ができなくなる。

だから奇襲にも似た梨絵の行動は大成成功だったのだ。そして梨絵は閃光と同時に攻撃も仕掛けていたのだ。

あの武器は、閃光を放つのと同時にボウガンのように直線状に弓矢も放つものだった。

だから防犯対策程度にしか思っていなかった霧唯には不意をつかれた攻撃だろう。

まさか、こいつが攻撃などしないと念頭にあっただから…

そんな思い込みが判断を鈍らせ、状況を悪化させていた。

梨絵は既にその場から離れていた。

追撃もせず逃げるのが賢明だと判断したのだ。しかしそれは正解だった。

もしも怯んだと思って追撃をかけていたなら確実にあの影の餌食になっていた。

徐々に霧唯の視界もはっきりとしてきた。そして数分前の光景とは違ったものがそこにはあった。

梨絵の姿はない。自らは負傷してしまった。

はっきりとそれを確認できると、ふるふると体を震わせ、声が思うように出ないという感じだった。



それから搾り出すように間を置いてから叫んだ。

「く……くそつたれがああああああ」

怒りの咆哮は周囲の状況など全く関係なしに響き渡る。

自らよりも下に見ていた存在の生物にしてやられたことに腹が立っていたのだ。これは本能だった。

自分が主導権を握っていたはずなのに……そのことばかりが頭の中を過ぎり、悔しかった。

腹部の一撃は致命傷ではなかった。

所詮手作りのできるボウガンにも限界がある。

殺傷能力はそれほどもなく、肉を数センチ貫く程度で終わり臓器には損傷がなかった。

刺さった矢先を引き抜くと、梨絵の逃げた先をぎろりと睨んだ。

このまま終わらせてなるものかという、執念にも似た殺気を体中から漂わせていたのだ。

下手すれば真昼間から無関係の人間までも巻き込んで大量殺人が繰り広げられるかもしれない。なかった。

しかし霧唯も少し落ち着かせようと思いとどまった。深呼吸を一つすると、意外にも冷静になれた。

ここで自棄になってどうする？ただの馬鹿ではないか……

「はは…」

自らの未熟さを今一度かみ締めて冷静になったのだ。

走りだそうと重心が傾きかけた体もその場にどうにか踏みとどまっていた。

それからは静かに時が流れていた。

ぼつりとその場に取り残された霧唯が余韻を楽しむかのようににやりと笑っていた。

「学んだよ…梨絵…君は愚かな食われるだけの弱い人間ではない…寧ろ好敵手だったことだ…」

## 78話

梨絵は必死に逃げていた。

私が例え全速力で逃げたとしてもあの悪魔はきつと追いつくだろう。

全身からそんな襲い掛かるようなまとわり付く感覚が抜けないのがそれを表している。

呪者と触れ合うことで、梨絵自体の感覚も敏感になっていたのは事実だった。

死線を潜り抜けてしまった者は、類稀な能力を見につけてしまうこともなきにしもあらずだからだ。

「はあ…はあ…」

元々文科系の梨絵に体力などない。

人ごみに紛れようかとも考えたが、異常なぐらいに高ぶった彼なら無関係な人間も見境無しに殺すのではないかという最悪のシナリオも頭の中で描いていた。

だから人ごみを避けざるを得ない。

あれほど嫌っていた路地裏を駆け足で突き進む。

とりあえず身を隠せる場所まで行かなくては…それだけで頭が一杯だった。

迷路のような入り組んでいる住宅街の裏の顔は梨絵の想像を超えていた。

多少の混乱もあったので、思い描いた道筋を探せずにいた。

「……」

袋小路にぶつかってしまった。

急いで引き返さなくては…焦る気持ちだけがどんどん募っていく。

振り返るとそこには、逃した獲物を必死に追いかけた獣が一匹存在する。

「あ……」

流石の梨絵もこの時ばかりは、確実に迫る死を覚悟した。全身が凍り付いて動くことすら出来なかった。

「はあ……はあ……」

霧唯は息切れをしていた。

漫画などでは涼しい顔をして追いかけてくる悪役もいるが、全く別のものだった。

生身の人間であることには変わりないし、何よりも負傷していたからだ。

しかしそんな姿がより恐怖心を煽っていく。

「見事だよ…ストロボを利用して尚且つ攻撃にも転じているとは…」  
霧唯は素直に梨絵のことを褒め称えた。

だが、梨絵は嬉しいはずもなく、顔を強張らせるだけだった。

「だが…やるなら一回で決めるべきだった。

あの弓矢がもっと鋭く大きかったら…心臓を確実に貫いていたら…僕は…あそこで終わってたんだ…」

何も言えずに黙って霧唯の話を聞くことしかできなかった。

「僕的能力も見せず終いつても嫌だろ？だからさ…君には特別に見せてあげるよ」

そこまで話すと霧唯の体がぼこぼこ動き始める。

それから自らの影が体を覆いつくすと黒い鎧に全身を覆われたように姿になった。

皮膚の部分も多少は出ているが、ほとんどが真っ黒で、しかも左右対称に均整の取れた姿と変化した。

刺青のようにも見えるが、幾何学模様が全身を覆っているようにも見えた。

「どう？格好いいだろう？影で全身を覆っただけだけど…そんな生易しいものじゃあないんだな、これは…」

顔もほとんど黒く覆われていたのでその表情がよく分からない。

しかしただ事でないのは見てわかる。梨絵の全身からは汗が流れ出ていた。

「生きた甲冑：触れたものを全て飲み込み、取り込む…  
当然苦手な光にだって対応はしている。光が当てられても自動的にその部分を別の影が受けに回れる。」

影つてのは光の当て方によっていろいろな形、大きさが出来上がるんだ。

全ての影を奪うことはできない…そしてこれも知っていると想像ど、いろんな影を利用できるから注意してね」

まるで取り扱い説明書の事項を読み上げるかのように説明口調で淡々と話した。

そして殺す気満々なのがはっきりと伝わり梨絵も少しびくついた。

「さっきの装置はもう打ち止めなの？」

にじり寄る霧唯の雰囲気完全に飲まれていた。梨絵は動くことすらできなかった。

それを察して霧唯もいやらしく梨絵のことを挑発する。

「さっきまでは、どうにか戦える姿勢を取れていたけど、策がなくなればこんなもんだよね。」

でもさ…僕としてはもう少し楽しみたかったよ…」

真っ黒い右手をゆっくりと梨絵に向かって伸ばしていく。生物を飲み込んでしまうであろう異界へと通じるあの黒い塊…

ここで私の人生は終わってしまったのだろうか？死を覚悟してしまつた梨絵にはそんな諦めにも似た萎えた考えがふと浮かぶ。

だが…

「ここで終わらない！」

大声を上げながら大きく後ろに下がると、硬直していた体を開放するかのよう前傾姿勢で霧唯を睨んだ。

そこに殺気など微塵もない。自らが生き残るための生命力だけが体を突き動かしていた。

退路は絶たれている。

しかし何もしないでこのまま殺されるのは真つ平ごめんだという梨絵の生きる中での信条が咄嗟に働いたのだ。

死ぬ時だつて理不尽な死よりも自ら選ぶ死でありたいと梨絵は考えたのだ。

そんな気持ちを霧唯も無碍には扱えず、多少なりの感心は見せていた。

「いい度胸だ…それでこそ、僕に一太刀入れた者に相應しい…でもね、だからと言って甘やかさないけど…」

霧唯は右手でそつと堀から飛び出していた木の枝をつかんだ。すると枝がその場から忽然と姿を消した。いや…体に飲み込まれたのだ。

残された枝の先が削ぎとられたかのような不恰好な形で残っていた。

そして元の枝先についていた葉も枝同様に姿を消していたのだ。

「君もゆっくりと飲み込んであげるよ…そう、時間を掛けて、ゆっくり…ゆっくりと…」

蛇が獲物をゆっくりと飲み込んで消化する様を想像させる。

霧唯は正直、楽しんでいたのだ。

梨絵はいつでも殺せる…それならこの獲物をゆっくりと弄んでやろうと…

それが彼の本質なのだから。

実際梨絵には反撃のチャンスなど残されてもいない。体を動かすことは出来ても、逃げることしかできない。

もつさっきのような奇襲攻撃はできないのだから。



## 79話

正面に立つ霧唯との距離は三メートル半。

道幅は二メートル半、脇にある塀の高さは一メートル七十センチ…  
全ての地形の情報を梨絵は頭の中で整理する。

抜け道は存在するのだろうか？

じつと観察してそれを探した。

目の前の霧唯を突破できれば、逃げ切れる自信はあった。

何故なら今まで通った道は全て把握しているし、隠れられる場所も瞬時に頭の中を過ぎっていた。

それなら、行動に移すしかない。もう少しすれば聖夜だって駆けつけてくれるかもしれない。

それを信じて、梨絵は狭い立方体の空間を全速力で霧唯目掛けて駆け出した。

「おお！」

向こうから向かって来るとは思わず、関心しながらも戦闘態勢だけはしっかりとっている。

自らの右の方向に駆けつけた梨絵をしっかりと目で捕らえると、  
真っ黒い右手が横から振り出され、その細い体を掴もうと迫った。

殴る必要はない。掴めばその瞬間に決着が付く。

大降りにもならず、梨絵の脇腹を一直線に目指していた。しかし霧唯の右腕は、無駄に空を切るだけだった。

梨絵は直前で逆方向の左に横っ飛びになる形で進路変更していた。

「あ……」

霧唯の右側に意識を集中させて、逆の方向にスペースを無理やり作ったのだ。

そうすることで退路が出来上がる。アメフトの相手を抜き去る形にもよく似ていたが、効果はあった。

この勢いそのまま抜きされれば追いつけない。

梨絵はそう思っていた。

そして逃げ出せたら二度と同じ轍は踏まないと……

しかし抜き去るまであと数センチというところで靴が物凄い力で引っ張られた。

「う……」

反作用の効果で後ろに倒れそうになったが、それはなかった。

その場にぴたりと止まってしまった。

「惜しいね……」

足を止めたのは、霧唯の影だった。

細く体から伸びた影が梨絵の靴をべったりと捕らえていた。

梨絵は身動きなどできるはずもなく、その場に張り付いた足を必死に動かしていた。

「無理無理……こうなったら最後だよ。しかし、女の子なのに思い切った行動をするね。」

でもさ、君は右利きでしょ。それなら今の行動の逆を選択したらまだ良かったのに……

流石にあれでは、ばればれだよ。僕の影だって走っている人を捕らえることは難しいけど、

あらかじめ相手がどこを通過って逃げようか分かれば対策はできるんだよ」

ゆっくりと梨絵の靴が影に飲み込まれていった。

まるで溶解しているかのように思えたが、次は皮膚に触れるのだと思うだけで寒気がした。

「さあ、いよいよ触れるよ。気絶しないようにせいぜい頑張ってね」

他人事のように話すか、死刑宣告をされたのと同様だった。

「くう……」

か細い声が思わず漏れてしまい、目を瞑った。

現実を見たくないという衝動がそんな行動を取らせたのだろう。

そしてそれから焼けるような衝撃が全身を駆け巡った。

「う…あああああああああ」

皮膚がああ黒い生物の影に触れてしまった。

声に出さないなど無理な話で、回りの事など考える余裕もなく叫んでいた。

足の裏が鉄板の上に押さえつけられたかのように痛かった。

「まだまだ序の口だよ…ここから少しずつ飲み込んでいくんだからさ…そうなれば本当に壊れちゃうかもね…」

頭の中が真っ白になっていた。

梨絵は生きてきて今までこんな痛みを味わったことがなかった。これをゆっくりと何時間も続けられたら頭がおかしくなるだろう。

「どう？気絶しそう？まだ皮膚だけだよ。」

もっと頑張らないと…これから肉、骨って行くんだからさあ…」

今までの鬱憤を晴らすかのように梨絵の苦しむ様を実に楽しそうに眺めていた。そして説教も始めた。

「初めから…僕なんて言う人間に係わらなければ良かったのに…興味本位で近づいた君が悪いんだよ。ま…君の周りの人間は僕がおいしくいただくとするけどね…」

この男が言う嘘ではないのも、もう分かっていた。

しかし梨絵は後悔などしていなかった。

「わ…私が決めたことだから…」

「こんな状況になっても後悔していないと？」

「ええ…聖夜や、ノリちゃんが…後は…きっと何とかしてくれる…だから…力のない私が悪いだけ…」

痛みを堪えて悲鳴を上げるのを止めているのも腹立たしかったの  
だろうか、霧唯は無性に苛立っていた。

「これって絶望的な状況だよね？どうしてそんなことが言えるかな  
あ…」

これだけだと足りないのかなあ…それなら頭と手の先からも同時  
進行でいってみる？

時間掛けすぎてもあれだからさ…」

子どものように振舞う無邪気な悪魔は新たな影を梨絵の体に這わ  
せようとしていた。

しかし…

そんな黒い闇を切り裂くような鋭い銀の杭が霧唯に襲い掛かる方  
が先だった。

その数八本。

両の手の指の間から放たれる無数の攻撃に霧唯は後退する選択肢しかなかった。

梨絵のことなど考える余裕もなく、下がったせいもあり、影も梨絵から下がってしまった。

そのせいで、梨絵も尻餅をついてしまった。

「どうして避ける？お前の能力なら弾丸でも飲み込んでしまいそう  
なはずだが？」

梨絵の前に立った男は、そう真弘樹開だった。

本来の姿を現した霧唯と対峙しても動じることはない。いつもの彼の振舞い方だった。

「あんた…以前会った退魔師だろ？だったら無理な相談だよ。  
だって、あんたの武器には僕らを浄化する効果が含まれているん  
だからね。」

それを体内に大量に接種したらどうなると思ってるの？」

「死ぬかもな…」

樹開は、すつとしゃがむと梨絵の足を確認するかのように眺めた。

「大丈夫かい？全く…君も無茶をする。」

あれほど警告しているのに頑固なところは聖夜そっくりだ…」

梨絵の足は酷くただれていた。肉も少し削ぎ落ちていたのだろう。

ぼたぼたと血が流れていた。

「とりあえず応急処置だ」

樹開は懐から小瓶を取り出すと中から薬のようなものを取り出し、足に振りかけた。

それは液体で消毒液のようにも思えた。

「家に伝わる秘薬でね、体の組織をある程度なら復元できるんだ。他の細胞を使い活性化させて細胞分裂…元通りって訳。

ま、裂傷、火傷、程度なら完全に戻せるけど、失ったパーツは無理かな…」

薬をかけられてから梨絵の足の痛みは治まった。

血と液体が混ざり合うとじゅくじゅくと肉が、皮膚が少しずつ戻っていく変な感覚が足の裏に走った。

「それにしてもよく頑張ったねえ。君がもしも足止めをしてくれなかったらもつと被害者が出ていたかもしれない…」

今のあいつは本能に身を任せた無邪気な子どもだ。以前よりも危険極まりない…なあ、聖夜」

そう霧唯の背後に向かって話しかけると、聖夜が曲がり角から姿をすつと現した。

「間に合ったな…」

息を切らせて、ようやくここまで探し当てたといった感じで、背中では息をしていた。

「お前が覚醒してくれたお陰で、呪者特有の気配をはっきりと掴むことができた」

二人に挟まれて霧唯も少しは怯むかとも思ったが、そんな態度は見せない。

寧ろ喜んでいた。

「はは…嬉しいねえ…僕と係わっていた人間がこんなにも集まってくれちゃって…」

「お前をもっと早く始末できていれば、被害にあった人間も少なかったんだがな…」

もう見張りや追いかけっこはご免だ。ここでけりをつけよう」

樹開は抑えていた殺気を出し始めた。それは普段の姿からは想像できないほどの迫力だった。

「ちよつと待て…」

そんな樹開のやる気を削ぐかのように聖夜は割って入った。

「聞きたいことがある…」

聖夜は霧唯を見た。自分が見た最後の姿ではないことに戸惑いながらも殺す前に知りたかったことがあった。

「花梨と高谷先生とは誰だ？お前の知っている人物が何故お前の別人格になっている？」

それに…何を後悔している！」



その名を聞くなり、霧唯は今まで以上に大きな声で笑った。

「はははは…知ったんだ。その名前…はははははは…」

「何がおかしい…」

「笑わずにいられるかい…だってさ…漆戸霧唯が…良心の呵責で命を共存した相手なのだからね…くくくく…」

「命の共存だ？」

「ああ…でもね、この話を聞くには少し昔話になるけど？」

真実を知りたかったその場の者たちに異論はなかった。ただ黙って霧唯の昔話に耳を傾けた。

## 80話

四年前

漆戸霧唯は十七歳だった。

施設にいても何も楽しいことなどなかった。学校も同様だ。

どうして…自分はこのなにも惨めで不幸なんだ？

両親もいない、金も無い、頭も悪い。これでは将来なんてものは全然見えるはずもない。

他人が羨ましかった。他人が妬ましかった。

自分よりも優れている人間が心底憎かった。

「ちくしょう…」

がりがりと爪を噛んで気を紛らわしていたが、自分はいつか壊れてしまうのではないか不安でたまらなかった。

そんな霧唯の陰湿で思い込みの激しい性格もあって学校でも孤独だった。

幸いなことはいじめられなかったことだけだった。

こいつは不幸な人間だとみんなが決め付けていたからだ。金も無い、頭も悪い、虐めたところで面白くもないからだ。

所詮ぎりぎりの人間ってのは生殺しなんだと納得もしていた。いつそのことこれ以上に追い込まれて自殺したい気分でもあった。

そんな中で代わり映えのしない、いつものような自分にも意外な出来事が起こった。

「今日も一人で帰るの？」

夕日を背中に眩しいほど凜々しい女性がそこにはいた。

「え？」

弱弱しい言葉で声の主に反応した。

「霧唯、そんな暗い顔すんなよお。お前、今にも死にそうだぞ？」

まるで自分の心を見透かすようにその女は霧唯の心に入り込む。

「あの…誰？」

まともに女性とも話したことの無い霧唯にはどう話していいのかわからず、まず頭に浮かんだ言葉がこれだった。

「あのね…仮にも小、中、高って一緒なんだから覚えておいてよ。金井花梨だよ…まさか記憶にないってのはなしね」

その名前を聞いて霧唯はぴんときた。

「あ…金井さん…」

「そう、知ってるでしょ。クラスはほとんど一緒にならなかったけど、顔見ですぐ名前出してよお…」  
「テンション下がるでしょうが」

「う…う免」

花梨のペースに飲み込まれて霧唯は平謝りすることしかできなかった。

「そんなぺこぺこしないでよ。男なんだからさ…もつと堂々としたら？」

まあ…女らしくない私が女らしくしろって言われても無理なんだけど…はは！」

「それで…僕に何の用？」

「あかさ、用がないと話しちゃいけない訳？」

「いや…そんなことは…」

「話したかっただけ。仮にもずっと同じ学校なんだからさ…頭悪いもの同士仲良くなるっつ」

「それって、自虐的じゃない？」

「お！難しい言葉知ってるんだねえ。何それ？そんなのどうでもいいじゃん。」

あんたは幸薄そうだから仲良くなってやるっつて言ってるんだよ。くだらない体裁は置いておけてんだよ」

「そんな花梨の話聞いて、」

「何だ難しい言葉知ってるんだ…」

霧唯は思わず笑ってしまった。

「うるさいなあ。私だってそんな馬鹿じゃないんだよ…」

まあ…勉強なんてほとんどしないで遊んでる方が多いけどね」

照れくさく話している花梨は魅力的だが、霧唯には拭えない部分もあつた。

「ねえ…どうして僕に声を掛けたの？僕なんか無視しても構わない存在じゃないか」

自らの存在を好む人間など存在しないと思つての発言だ。自虐的になつていたのは彼なのだ。

しかし花梨はそんなこと気にしなかつた。

「あのさ…人の目ばっか気にしてたら疲れるよ。」

自分は自分なんだから…もっと自分を大事にしたら？」

そのままばいばいと手を降ると花梨は先に帰ってしまった。

どきん…

霧唯は生きてきて初めて胸の鼓動をはっきりと聞いた。

それは心臓の鼓動ではない。どこか…胸のどこかが痛いのだ。どう表現したらいいのか分からず訳のわからない胸の痛みを一人感じていた。

その日を境に花梨は、霧唯に話しかけるようになっていた。

自らの境遇と似ているせいもあってか、霧唯のことをほっとけなかつたのだろう。

花梨も両親が早くに離婚して、母親が女で一つで育てるが、母親は別の男を作っては変えの繰り返しで花梨は自らの居場所を見失っていた。

家においても自分のいる場所がない…そんな毎日を小学校から送っていたのだ。

だから、霧唯の雰囲気をも自分の境遇と重ね合わせて同じだと勝手に感じたのかもしれない。

花梨は不良に近い部類だったが、どこか筋を通して部分もあった。

煙草や飲酒、喧嘩も平気ですが、弱いものを決して虐めなかった。

喧嘩を売るのは常に強い相手で自分がどこまで通用するのか試しているかのようだった。

そうすることで生を実感していたのかもしれないが、彼女のそんな破天荒な学校生活では退学という二文字が常に付きまとう。



## 81話

「金井、漆戸…生徒相談室まで来なさい…」

霧唯の担任の高谷誠二は、ある日の放課後に二人を呼び出した。

花梨は別のクラスだったが、高谷は生徒指導員の立場だったので二人をまとめて呼び出したのだ。

薄暗い部屋の一室はテレビドラマでよく見る警察の取調室によく似ている。

「話は…君達は進路のことをどのように考えているかなんだけど…」

四十代の高谷という教師は、物静かで冴えない男だが、几帳面な部分も感じさせた。

気になる所は早めに処理しておきたい、もやもやして明日を過ぎたくないというのがはっきりしている性格だった。

だからかもしれない。霧唯、花梨の二人の対策をすぐに打ちたくて、呼び出したのだ。

本来なら高校二年生の春の時点で進路指導など行わない。しかし彼は心配で仕方がなかったのだ。

心を開かず、友達もいない、成績も良くない霧唯。素行が悪く、このままの流れでいけば退学の可能性もある花梨。

対極の存在ではあるが、将来的には不安なのは同じだった。



教師の立場でいろんな人間を見てきたが、高谷の目に留まったのはこの二人だったということだ。

「そこに腰掛けて…」

パイプ椅子に並ばされて二人は座るが、会話など存在せず、教師に言われるままにただ黙って従っているだけだった。

高谷は非常に温厚な性格の持ち主だ。だから頭ごなしに人を罵倒したり、批判することはしない。

二人を目の前にして、やさしく、ゆっくり丁寧に話した。

それは進路の事とそれに平行した学校生活の送り方についてだった。

比較的大人しい霧唯だったが、人付き合いの悪さと、成績の悪さが伴い問題児として扱われていた。

そして花梨だが、彼女は純粹に学校側に迷惑のかかる行為を頻繁にしているので呼ばれた。

大きな問題が起こっては遅すぎるので、小さなことでも事前に対処しておくことが今の教育社会では不可欠だった。

多感な時期は影響を受けやすく、自殺や人殺しを深く考えない人が多いからだ…

教師はそれらの責任を負わないようにするために日々、噂話に聞き耳を立てたり成績表とにらめっこを繰り返す。

「将来的に…その…何かしたいこととかはないのか？」

弱弱しい声で質問する教師に対して、花梨はあくまで強気だ。

「ないですねえ…だって、若いうちからそんな決められっこないじゃない。」

それに女は結婚して、子ども作ればそれまでみたいなの世間的な考えが強いし…」

高谷はそれに対して怒ることも反論することもせず黙って聞いた。

そして霧唯は、なかなかまともなことを言うなと、逆に感心していた。

しかし霧唯の番になると、どのように話していいのか分からず、指先を動かしたりして妙に落ち着かなかった。

それでも自分の意見をどうにか話すことはできた。

「僕は…頭も悪いし、金もないから…きっと何をやっても駄目だと思います。」

そのままの流れで暮らしていくんだと思います」

無言を保つことなく、珍しく自らの意見を話した霧唯を高谷は少し嬉しくも思っていた。

ほう…と一言だけ漏らすと、手元に置いてある成績表を眺めた。

「私からも話すが…いいかい？」

了承を得たが、二人は何も反応しない。高谷をただ見ているだけ

だった。

「将来つてのは確かに分からない。  
はつきりとしたことを断言もできないし、何がしたいのかも今すぐ決められることじゃない。」

それは大人だって同じだ。一旦就職してもそこに一生勤めるとは限らないんだ。

結局は転々として移り歩く場合もあれば、無職になる可能性も十分ある。それは、分かるよね」

「…」

「でも、何もしないのと何かをしてからとで同じ状況になった場合に大きく違うんだ。」

こいっつのは…まあ、私個人の見解のようなものかもしれないけど、

でも何もしないっていうのは生きることには大きな影響を与えるのは事実だ。

選択肢も広がるし、経験が良い方向に導くことも必ずある…

だから嫌でも自分に合う何かを見つけて欲しい…」

その言葉に上辺だけの体裁など存在しなかった。

はつきりと高谷本人の心からの叫びとして、力のこもった熱のある本音が二人には伝わった。

「先生面白いね…」

高谷の言葉に花梨はどこか心が動かされたのだろう。身構えていたはずなのにどこか砕けた様子に変化していた。

それは、高谷という人間が大人ぶって、偉そうな講釈をしなかったからだ。

大抵の大人は自分のような人間を否定し、頭ごなしに道筋を決めようとしたりする。

しかしそれは、そいつが自分の方が上だという驕りの発言にしか思えなかったのだ。

自分は確かに子どもだ。考え方も幼いし人生経験も浅い…

しかし他人の意見に屈服するのは嫌なんだ。これは一人の人間としての考えだ。年は関係ない。

そんな花梨の信念を受け入れる大人はそうそういるはずもなく、高谷という人間はその数少ない人間の一人となった。

「金井くん。君は女性が生きる道が閉ざされているように感じているが、それも違う。

完全な男尊女卑はなくなっただけではないが、実力があれば認められる時代に変化はしている。

しかしそれはあくまでも先を考えられる人間だけだ…

だから僕が二人に言いたいのは先見の目を持って欲しいということ。

ただ漠然と今を楽しめればいいという考えは自らの破綻を意味する…」

「先見の目？」

「言葉ぐらい聞いたことはあるだろ？こんな時代だ…

自分の生活も生き方も、もっと先を見て考えた方が何かと便利だつてことだよ。

些細なことが君達を支配してしまう年齢でもあるのだから慎重に

行動して欲しいんだ。

私は…教師をしていて何人もの生徒を見てきた。その中には、学生半ばで先を見ることもできない者もいた」

そこで昔を思い出して高谷のトーンも少し落ち着いてしまった。

しかしその言葉だけでもぐっと重みをその場に持たせることが出来た。

霧唯も花梨もぎゅっと膝に置いていた手を思わず握り締めていた。

「これだけは約束してくれ…自暴自棄にだけはなってくれな…」

ただほんの先自分をみつめて大事に生きてはくれないか？

そうすれば、少しは生きやすくなるのだから…」

高谷は押し付けることもはっきりとした道を指し示すこともなかった。

ただ、先を見て生きてくれと言っただけだった。このことは二人に大きな影響を与えた。

教師なのにそんな曖昧な自分の人生の哲学だけを述べる者などいないからだ。

「これで、終わりだ…後はそれぞれで考えて、次の進路相談の時は別の答えを待っているよ」

さらっとその場をまとめて二人を部屋から退室させた。

部屋を出た二人は、拍子抜けをした表情をしていた。

これで、終わり？そんな様子だった。

「高谷ってあんな奴なの？」

霧唯に聞いてきたが、霧唯も他人に興味を示さないのどのように答えていいのか分からず困っていた。

「いや…その…分かんない」

「あ…っそ…でもさ、私は嫌いじゃないな。ああいう大人…」

花梨は珍しく他人を認めた。しかも大人をだ。

彼女の生き方の中に大人はズルくて、汚くて、信じることに値しないと思っていた。しかしそれを崩された。

しかも教師にだ。

目の敵にしている教師が、あそこまで自らの立場にこだわらないのが花梨の心に響いたのかもしれない。

それに触発されたのか、霧唯も高谷のことを認めていた。

今まで出会った大人とは違うと。

それからその三人を交えて徐々に物語が進んでいくことになる。

## 82話

進路相談をしてから花梨と霧唯の距離も縮まっていた。

以前とは違い霧唯はそれほど緊張しなくても花梨と話したり接したりできた。

そして高谷とも談笑を交えるほど進歩していたのだ。

霧唯は自分でもそんな自分があったのが意外だと思っていた。

社交性がゼロに等しいと決め付けていたから数少ない人間関係が逆に新鮮に感じられたのだ。

毎日、高谷か花梨と会話をしして帰る日々が続いていた。

そのせいもあってか、少しずつ明るくなったと施設内でも話題に上がっていた。

それは喜ばしいことだ。

だから霧唯には他の子の手本になるようにもっと頑張ってほしいとも施設職員は願っていた。

あれから数週間が過ぎた初夏の頃…一つの転機が訪れた。

霧唯は、はっきりと自らが花梨の事が好きなんだと認識したのだ。

どうしようもない胸の痛みを誰にも告白することなどできなかつた。それが恋なのだという事も全く分からなかった。

これは自分の体なのか？おかしい…変な感じだ。

そんな日が毎日毎日続いたのだ。

花梨と話すとき妙に視線を逸らしてしまったり、体のラインを何故か目で追ってしまった。

その度にときどきと激しい胸の鼓動が止まらない。

どうなってしまったんだよ。僕の体。

抑えられない衝動が…自分を襲っているのが分かる…  
それに何とも思っていないはずの人間が…愛おしくも思える…

「何じろじろ見てんの？」

そんな霧唯の心を見透かすかのように花梨は何気なく話した。

「い…や…別に…」

霧唯は誤魔化すかのように視線を思い切り逸らして顔を赤らめていた。

どうしていいのかわからない…こんな訳のわからない感情に自分が流されるのか？

自分自身が分からなくもなっていた。

それは正しいことなのか、一時の迷いなのか、霧唯には理解できないはずもなかった。

しかし時は無常にも流れていく。



「漆戸君：最近の君は妙に明るくなったね」

高谷が切り出した言葉がそれだった。

場所は生徒達が飲み食いする学食の中だった。

そこに教師が出入りすることは珍しかったが、高谷はその安いうどんが好きだったので、

霧唯たちと顔を合わすことも頻繁だった。

「そうですか？」

自分では分からなかっただけに面食らった様子だった。

しかし霧唯の様子は以前とは明らかに違った。憑き物が落ちたかのように人を寄せ付けない雰囲気を持っていなかった。

「金井くんも落ち着いてきたみたいだし、私は嬉しいよ……」

「え？」

何が嬉しいのか分からなかった。自分は何もしていないのに……

霧唯は高谷の言葉の意図をすぐに汲むことはできなかった。しかし高谷はそのまま人の付き合いの話をした。

「私の言葉に少しでも耳を傾けてくれたのが嬉しい……」

とまあ、私がどうこう話して君達が変わったかなど分からないけど、これは…その…自己満足みたいなものだよ」

「自己満足ですか？」

「ああ…きつかけは何でもいい。変わったことが素晴らしいってことだ。」

後は私の勝手な思い込み…それでいいんだよ」

何が言いたいのか良く分からないかったが、高谷は柔らかな笑顔で霧唯を包み込んでいた。

「先生…」

花梨に次いで自分が初めて興味を持つ人間の一人だった彼は、本当に魅力的だった。

「どれ…前から話していた大学進学の話しだったけど、資料をいろいろ持ってきたよ」

高谷はいろんな大学の詳細の書かれた紙の束を出した。

「君の成績でも入れるところもある…」

あまり悲観的にならないで、これから少しでも成績を上げる努力さえすれば大丈夫だ。

問題はお金だが…奨学金を使えばそれも何とかなる。これに目を通しておいてくれ」

高谷がそのように穏やかに話すと、霧唯もどうにかなる気がしてきた。

そして高谷はそのまま食事を済ませると、ゆっくりと学食を出て行った。

一人でしばらく資料を眺めていると、花梨がやってきた。

「おす…」

軽く挨拶をするとそのまま目の前に腰掛けた。手にはカップに注がれたコーヒーがあった。

霧唯が資料をぱらぱらと捲っていると、花梨はそれに興味を示した。

「それ何？」

「ん…大学の資料。僕でも入れそうな大学を高谷先生が探してくれた…」

「へー…霧唯もいよいよ進路を決めたってことか…」

高谷と同じように花梨は笑顔で霧唯を包み込んだ。

それに対して霧唯は恥ずかしさのせい、花梨のことを未だにまともに見られなくなっていた。

「そういう…か…花梨は…どうなのさ？」

何気ない一言だったが、花梨は目を丸くしていた。

そして嬉しそうに話した。

「あ、今、名前で呼んでくれた？いやー嬉しいねえ。」

金井さんって呼ばれると気持ち悪くてさ…ようやく霧唯も腹をくくったかあ？」

「茶化さないでよ…ねえ、どうなの？」

「そんなに知りたいの、私の進路…」

「そりゃあ…興味が…その…」

いつものように、もじもじしているので、花梨は諦めた顔をして、

「はいはい、分かったよ。教えるからそんな態度を取らない…ったく。いい加減堂々と話してよね」

そんな風に自らの進路を話し始めた。

「え？…じゃあ、就職を考えてるのかい？」

高谷は素直に驚いた。

進路相談を受けて三回目。ようやく花梨は、はっきりとした答えを出していたのだ。

「それは…嬉しいね。漆戸君同様に、君までも進路を決めるなんてね…」

「どついう意味ですか？先生。私だっているいろいろ考えているんだから」

「うん…そうだね。君の喫煙も大分減っているみたいだし、夜遊びも落ち着いているようだ…」

どこで調べたのか知らないが、花梨の素行の話を細かくしていた。そのことを話されて花梨も珍しく子どもらしい表情を見せた。

「え？…ちよつ…どこでそれを？嘘でしょ？あちゃあ…まずいなあ…もしかして退学とか？」

今までなら教師に知られても構わないといった程度だが、花梨のどこかが変わっていた。

だから、高谷に知られたことを形容しがたいほどに焦っていた。

それとは対照的に高谷は落ち着いていた。彼の独特の静の雰囲気

を保ちつつ、温和な空気まで出していた。

「心配しないで…大丈夫。私の所でこの話は止まっている。しかし、この事を多めに見るつもりはないから、これは警告だとも思ってくれ。」

君が本気で就職を目指すなら私も全面的に協力する。だから…不利になる行為は少しでも除外すべきだよ。話している意味は分かるよね？」

花梨は一瞬どきつとしたが、すぐに元の顔に戻っていた。

「さて、話を変えよう。君はどこに就職してみたい？」

高谷はそれ以上に花梨の素行に触れることはしなかった。

彼は彼なりにくどくど話したり、説教することを嫌っていたのだ。だからかもしれない。

少ない言葉でも高谷の気持ちは花梨には、はっきりと伝わっていたのだ。

それから霧唯同様に高谷と花梨の関係もどんどん縮まっていったのだ。

三人の中での関係は次第に濃密になり、霧唯の心は、この二人の虜になってしまったかのようだった。

そして花梨のことを考えるだけで、ときどきする感覚は未だに続く。

「お互いに頑張ろうね」

花梨は進路相談で具体的にその道を決めた次の日そんなことを話してた。

花梨が目指す道がはつきりと決まったことは嬉しくも思っていた。しかし妙な気分もしていた。

このままでは、将来的には別々になってしまうんだな…

不意に頭の中に浮かんだが、それはまだ先の話だし、これからどうなるかまだ分からないだろうと、すぐに考えるのを止めた。

「霧唯…受験まで問題起こすなよ」

威張って自らのことなど棚に上げて花梨がそう話すので、霧唯もからかうように、

「花梨も人相が悪いんだから手が後ろに回るような行為はくれぐれも控えて…」

「なんだとお！この私がいつ警察の世話になっただって言うんだよ！それに人相が悪いだって？」

こんなプリチーな女の子見て欲情しないのか、おのれは！」

支離滅裂の会話である。

しかし霧唯は、花梨に急接近されると胸を顔に押し付けられながら首を締め上げられていた。

「ぐっぐっぐっぐっ…」

ぎりぎり徐々力を入れていく花梨に対して霧唯はただ受けることしかできなかった。

そんな中で、二人はこんな軽い冗談も自然に言い合える仲になっていることを互いに不思議に思っていた。

「ちょ…ちょっと待ってよ。これだと本当にさっきの話が…本当に…」

快樂と苦痛を一度に垣間見た霧唯の意識は遠のきそうだった。

白目を向く一歩手前で、花梨ははっと気がつきその手を緩めた。

「あ…悪い」

がくと首が外されて霧唯はそのまま床に両手をついた。

「軟弱者よのお…お主も…」

「あのさ…さっきから話し言葉めちゃくちゃだよ…」

首を押さえながら下から花梨を見た。

するとこの女はけらけらとからかって笑っていた。



霧唯はそんな花梨の姿を見て微笑むことしかできなかった。

それからまた数日が流れる。

霧唯の中で花梨の存在はどんどん大きくなっていった。

帰路の途中も、風呂に入っても、夕食後も寝る前も朝起きてからも…

考えない時間がない位になってきたのだ。

どうしてだ？どうしてだ？

気になりだすと止まらないとはこのことで、毎日が花梨のことで一杯になっていたのだ。

そして、ようやく霧唯が彼女と向き合おうと決心する日が訪れた。

それは些細な一言だった。

たまに花梨と一緒に帰宅する帰り道に彼女はぼつりと話した。

「ありがと…霧唯がいなかったら、私こんなに笑えなかったかも…」

「え？」

不意をつかれて、どう返答していいのか分からないのが現状だった。霧唯は考える余裕もなく次の花梨の話を聞いた。

「高谷先生にも出会えて、自分が一人じゃないってことを自覚でき  
たし、自分の将来も考えるようになった」

なんだ…そういうことか…

まあ、半分以上は高谷のお陰だとその話を聞いて少し嫉妬もした。  
それでも自分が花梨のために何か役に立っているならと嬉しくも  
思ったのだ。

そんな感じで流す程度で聞いていたが、

「でもね…やっぱり…霧唯と一緒にだったからそれも出来るような気  
がする。」

霧唯…あなたは私にとって…その…特別な存在よ…それだけは、  
はっきりと分かる」

花梨が発した言葉は、今までにない位に霧唯の心を揺さぶった。

全身を電流が駆け巡るかのように、体が硬直してしまった。

「う…あ…」

言葉も出ないで、花梨の表情を見ても少し俯いて別の顔になって  
いた。

いつも強気な大人の彼女の顔が、幼い子どもらしさの残る可憐な  
少女を思い出させる。

霧唯に上手い言葉は浮かばなかった。ただ黙っていることしか出  
来ずに、刻々と時が流れるだけだった。

そんな無言の間を感じ取ってか、花梨はすぐにいつもの自分に戻っていた。

「はは…そういう訳で卒業するまでよろしくーってことで、さいならー」

そのまま駆け足で先に帰ってしまった。

霧唯は黙ってその背中をみていることしかできなかった。

それと同時に何も言えない自分の不甲斐なさを切に感じていた。

## 84話

季節は真夏を迎えていた。

訳ありの進路相談からもつ三ヶ月が過ぎようとしていたのだ。

じりじりと照りつける太陽。みんなと蝉の声がうるさく鳴いている中、

高谷と花梨と霧唯の三人は学校にいた。いや、彼らしかいなかったといった方が正確だろう。

「さて…今日はだ。具体的な進路も決まって日々頑張っているということだから、

たまには補習もなしにしてみんなで何かしよう。いい案はあるかい？」

二人を目の前にそんなことを口にして、驚かせた。

咄嗟に振られて良い案が浮かぶはずもなく、霧唯はうんうんと悩んでいると、花梨は満面の笑みで答えた。

「はいはい。かくれんぼしようよ。こんな広い場所を利用しないわけにはいかないでしょ。」

「かくれんぼ？」

霧唯も高谷も少々面食らった様子だった。だが、花梨は考案したゲームの説明をする。

「ちなみに、三人が鬼をやって見つけるのが一番遅かった人が罰ゲーム。  
宝来軒のラーメンのおごりってことで…反論は受付ないんでよろしく…」

強制かよ！

そんなことを思いながら三人は、何年ぶりかのかくれんぼをすることになったのだ。

広い校舎のなかでのかくれんぼは正に至難の業だった。

そして最初に鬼になったのは、発案者の花梨だった。

隠れる時間は五分。これを過ぎたら鬼は所定の場所からスタートする。

「最短で見つけてあげるから覚悟してね」

ぼきぼきと指を鳴らすと、彼女は校舎を獣のように駆け巡る。その速さは神速…いや、それは言いすぎだ。

獣のような鼻と勘の良さで、霧唯、高谷をほんの十分で探してしまった。

「嘘…」

見つけた二人は同じことを言った。

そして次は高谷の番だった。

彼は四十を過ぎているのにも係わらず、子どものような顔をして必死に二人を探した。

結果、花梨の倍の二十分掛かった。

「さて…次は霧唯ね…二十分以上ならあんたのおごりね」

「はいはい…」

いまいち乗り気でないような霧唯だったが、楽しいのは事実だった。

まさか高校生にもなってこんなことするなんて…でもそれが逆に新鮮だ。

時計で時刻を確認するときっかり五分後に待機場所から出た。

「さて…」

体育会系ではない彼は花梨のように駆け巡ることはできない。だからゆっくり探すことにした。

静かな廊下をぱたぱたと歩いていた。

花梨は何故か高谷と同じ場所にいた。

場所は二階の教室の教壇の中で、隠れる段階で高谷の手を花梨が引っ張って強引に連れてきたのだ。

「どうして一緒に隠れる？」

高谷は隠れた場所でそう話したが、花梨はそつと話した。

「だってさ…黙っていれば霧唯のびりでしょ。だったらあいつにも花を持たせてあげようよ」

「なるほど…一緒にいれば一度に二人見つかるってことか。

でもさ、こんなのばれるんじゃないかな？わざとやったって…」

「大丈夫。あいつ鈍いからさ…」

隠れ場所探していたら、時間が迫って同じところになったって言えば納得するって…」

無理もあるが…そう思いながらも花梨の気遣いを無駄にはしたくなかった。

だから高谷はそれ以上何も話さなかった。

狭い空間で生徒と密集しているのも変な感じなので、高谷は教壇から出た。

「漆戸君が近づいてきたら側に行くが、それまではせまってくるしいから、出でてもいいだろ？」

「そっか…教師と生徒がこんなに密着したらまずいですもんね…」

しかし花梨の顔は何かを企んでいるかのようだった。

二人がひそひそと話していると、ぱたぱたと霧唯の足音が聞こえてきた。

「先生、来たよ！」

その音を聞いたかと思うと、花梨は無理やり高谷を教壇の中に引っ張った。

「ええ！」

高谷は強引に手を引かれたので、態勢を大きく崩して花梨に乗りかかってしまった。

「ちよっ……」

高谷の頭は花梨の胸に当たっているという、  
またまたべたな展開ではあるが、高谷は必死にこの状況を打破しようと考えた。

「霧唯が近づいてくるから静かに……」

そんな花梨の言葉に言いくるめられて、何も言えなくなっていた。

すると霧唯の姿は近づいて、その場をうろろろするものそのまま遠くへといなくなってしまった。

「お……おい……」



霧唯が離れたのを確認すると、高谷は焦って教壇から這い出した。

「何？先生。びっくりした？」

小悪魔のような花梨の態度は、高谷の今までの経験にないものだったのでどきどきが止まらなかった。

「あんまり…からかわないでくれ」

頬を赤らめながら、高谷は立ち上がるとその場から少し離れた。

「それにしても…霧唯見つけてくれなかったなあ…」

「あのね…この状況で発見されてもおかしなことになるだろう？そういう軽率な行動は控えてくれ…」

まんざらでもなかったのだが、ここは教師と生徒の立場だ。

はつきりさせておかないとまずいと判断した。そこは几帳面で責任感の強い彼なりの性格が露呈した部分だった。

花梨はつまらなそうにふくれつつらを見せたが、高谷はそれ以上何も言わないで別の場所に隠れると言い出した。

それから三十分、霧唯は二人を探し出すこともできず、いい加減隠れることに飽きた花梨が姿を見せて、時間切れを言い渡したのだ。

「結局、霧唯の負けか…」

どこかつまらなそうに話したが、霧唯の表情は曇ったままで暗か

った。

そんな霧唯の様子を見て、気にした高谷は自らが奢ると言い出した。

「え？まじで？先生が奢るのなら思いっきり高いもの注文しちゃうよ？」

花梨も始めからそれが期待だったのだ。お金のない二人にそんな高いものは奢れないからだ。

「いいよ…君達も頑張っているんだし、今日は久し振りに楽しかったからね。何でも好きなもの頼んで…」

にこにこして高谷は二人に話したが、霧唯の表情は未だに優れなかった。

「ねえねえ、霧唯…こうなったら好きなものじゃんじゃん頼んじやおうよ…」

私さ、あそこの店でフカヒレ食べてみたいんだー」

相変わらず人の財布事情など気にするような性格ではないので、高谷もやれやれと思っていた。

「霧唯は何にする？やっぱり贅沢ラーメン？あれもおいしそうだからねえー…学生の我々には手が出ませんよー」

花梨は嬉しそうに霧唯に話しかけるが、

「あの…その…」  
「…」  
「…」  
「免…僕…気分が…その…悪いから。もう帰る

…」

途切れ途切れの言葉をそう言い残して足早に二人の前から立ち去ってしまつた。

そんな霧唯の突然の態度に対応も出来ず、二人はその場に立つて  
いることしかできなかつた。

## 85話

霧唯は魂が抜けたように、ふらふらと一人で人気のない小道を歩いていた。

気分が優れないことは事実だったが、それは体調からくるものではなかった。

あるものを見てしまった。そのショックから心が折れてしまったのだ。

あの時霧唯は花梨たちの姿をはっきりと見ていた。黒板の脇にある鏡に反射して二人が抱き合っている姿を…

それは誤解だった。

花梨にそんな意思はなかった。あの時にすぐに説明していたらそんなことも笑って済ませられたろう。

しかしあの場から目を背けて、立ち去ってしまった霧唯にはただただ悪いことしか思い浮かばなかった。

何で？二人は…付き合っている？

僕の知らない間にそんな間柄になっていたのか？

そう言えば、この前花梨は高谷先生のことを好きだとも話していた…

些細な出来事も次第に大きなものになっていき、霧唯は自分を見

失っていた。

彼が生まれて初めて抱いた恋はその瞬間に途切れてしまったのだと勝手に解釈してしまった。

そっだよ…自分みたいな人間のことを好きだ何て誰も思ってくれやしないんだよ。

所詮は一人で勝手に盛り上がって、現実が見えていなかったんだ…

最初から期待なんてしなければ、こんな痛い思いもしなくてすんだのに…

進路相談のことを思い出し、あの時に自分を変えてみようなど思わない方が良かったと心の底から感じた。

「くそっ…くそっ…」

爪をがりがりと噛みながら歩き続けると、誰かが自分の前に立っていることに、はっと気がついた。

そいつは人とは違う気配を身に纏っていた。

一目で分かるのだ。普通ではないということが…

二十代の男で、体は大きくがっしりとしていた。しかしどこか目に生気がない。

疲れた様子でまるで助けを求めているかのようにだった。

いつもの霧唯ならその場からすぐに逃げ出したかもしれないが、

今回は絶望を感じたばかりでそれどころではなかった。

心と体がばらばらと言ったほうがいいだろう。

「お前：望みはあるか？」

初対面の男が話した言葉はそれだった。

当然霧唯は何のことを話しているのか分からず戸惑った。

「嫉妬の念をひしひしと感じる…誰かのことを激しく嫉妬し…それに憎悪も感じられる…それだけで素質は十分だ」

勝手にべらべらと話す男の顔からは汗が滲んでいてどこか辛そうだった。

それでも霧唯はその男に声をかけることはしなかった。

そのまま男の話は続き、自らが呪者であることを明かし、それがどういったものかその代償は何か、生き続けた経緯を簡潔に話した。

非現実的な話にしか聞こえなかったが、それでも霧唯は言葉を遮ることはしなかった。ただ黙って聞き続ける。

「俺は…もう…これ以上生き続けることが嫌になった。今のお前のように。」

しかしお前と俺では少し立場が違う。お前は未練を残しているんじゃないのか？」

どくん…

言い当てられたことで、心が動いた。

「この力を手に入れれば、気に入らない奴らも一層できる…ただ人ではなくなるがな」

悪魔の取引を正に今突きつけられたのだ。

霧唯の頭の中はもはや正常ではない。

先ほど花梨と高谷の抱き合う姿が何度も何度も頭の中に浮かぶのだ。

許せない…許せない…許せない…許せない。

僕を裏切った…

信じていたのに…

二人とも信じて、この先も生きていこうと思ったのに…

「悩むな…受け入れれば、お前の望みは全て叶うんだ…」

もう一押し、そう思って話したのだろう。

しかし効果は抜群だった。霧唯の心は傾いていたのだ。

このまま憎悪に身を任せていいのか？

いや…しかし…このままでは自らの世界に耐え切れなくて自殺して終わりだ。それならば…

ぎゅっと拳を握り締めたまましばらく俯いていたが、決断を下す時がきた。

「何をすればいい？」

男と対峙して初めての言葉はとても力強かった。

霧唯の表情を見るなりもう大丈夫だと男は確信した。

そして自らも救われると…

「お前の望むものを強く願え、後は俺が自らに眠っている力を送り込む…」

さっきも話したが、能力者になってしまったら定期的に食事をしなければならぬ。

これは避けられない道だ…」

「人の魂？」

「ああ…それも嫉妬心の強い奴を食わなければ生きられない。もしもそれを止めると…」

「死んでしまう」

「ま…そうなるな。しかしそれを続ければ永遠に生きられることも事実だ。注意点は一つ。」

人目を避けて行動しろ。もしも公になって警察やら自衛隊に出動



されてみる。

弾丸で蜂の巣にされてあっけなく終わりだ。能力以外は生身の体に違いはないからな……」

それから、これ以上言い残すことはもうないと判断すると、男は霧唯の頭に手をかざした。

「大した痛みはない……俺もこの力を与えられた時、どこが変わったのかは分からないほどだ。

あの僧侶の意思を今度はお前が継ぐのだ……」

「あの僧侶？」

その先を聞く前に霧唯の体の中には異物が流れ込むようにぐらりと立ちくらみのようなものを感じた。

そして一瞬だけ視界が暗くなったかと思うとすぐに元通りに戻った。

そこには誰もいない。

あの男は能力を自分に渡すと同時に塵となって消えてしまったのだ。

「う……」

指先がふるふると震えていた。

体が慣れるまでの辛抱だとも思ったが、その前に頭の中がぐちゃぐちゃになった。



半信半疑でゆっくり立ち上がると、壁に手をついた。

その時に目の前に小さな天道虫がくっついて見えた。

それが自らの腕の影に重なった瞬間、

じゅっ…

天道虫は跡形もなく消え去ってしまったのだ。

「これは…」

起こった出来事を凝視してしまった。しかしすぐに理解する。

自らの体に起こった異変と能力を…

「ふ…」

以前のような鈍い頭ではすぐに察することも出来なかったことも数倍の速さで解決の糸口を見つけられた。

影を自在に操り、それで獲物を捕食することができる…

それに…以前から抱いていた自分の奥底にある殺人衝動…

これが開放されつつあることもある程度予測がついた。

霧唯の気分は次第に良くなっていった。

それと同時に五感研ぎ澄まされ、自らの獲物になる欲を持つ者を遠くに感じていた。

これがこの能力を受け継ぐ者の宿命ってやつなのか。

それから霧唯は浮き足立ったまま施設に帰った。

そして次の日、夜を待たずに二人の人間がこの世界から姿を消した。

それが、最初の霧唯の殺人だった。

「そうして、霧唯は最愛の人間を二人とも飲み込んだって訳」  
実に楽しそうに自分の過去を話していた。

「まだ途中だろ？何故、取り込んだ人間が出てくる？  
それに…お前は何者なんだ？その話しぶり…霧唯ではないのか？」

別人格が出たり入ったりしているような霧唯の現状にその場の全員が、どれが本物か分からなくなっていた。

「その答えは…僕のことを調べればすぐに分かると思うけどお？」  
出し惜しみするかのようにすぐに教えることを躊躇った。

そんなふざけた態度に聖夜は痺れを切らしたのだろう。体全身の筋肉に力を入れて今にも飛び掛りそうになった。

しかしそれを梨絵の一言が止めた。

「三ヶ月前の…交通事故」

その言葉にその場が硬直する。それは霧唯も例外ではなかった。

だが、そのことを嬉しくも思っていた。気付いてくれる人間がいるというだけで。

「流石！君は頭のいい人間だから気付いてくれると思った。」

しっかし…大学内のパソコンにでもハッキングしたの？人の個人情報を知るなんて見かけによらずに悪いねえ…」

軽いノリで梨絵を責めてみたが、霧唯が話すと全てが冗談のように聞こえる。

「三ヶ月前の事故で…脳を少々やられてねえ。

今まで大人しく捕食活動をしていただけの霧唯君にも転機が訪れたんだよ…」

「別人格の出現か…呪者は食らった人間そのものの能力を受け継ぐことも可能だ。

だとしたら人格そのものがひょんなことから出てきてもおかしくない」

「そうそう…それぞれ。僕らは体は生身だからさ、脳なんかも普通の人間と変わらない。

ちよつとしたショックで故障もするんだよ。

そのお陰で、僕という霧唯の本心の顔がようやく日の目を見れたんだ…

いいかい、そもそも霧唯の心の中に強くあつたのは僕を入れて三人。

他の二人は言うまでもないよね」

「…」

「よほどの思い入れが強かったんだろうね。

事故のショックで五年前の人物が些細な拍子に出てきてしまうんだからさあ…

僕は意識の奥底でしか彼の行動を見ることはできなかった。長年

かけて彼がこつこつと作り上げてきた僕は、

取り込まれた二人と違ってはいよいよ顔が出せる訳じゃなくてさ…  
しかしその甲斐あって彼の想いや憎しみは伝わってきた。それから霧唯は、愛することと殺すことの定義を同じにしまった。

人を愛したままの自分を残すには殺すしかない。取り込むしかない…」

「身勝手な考えだな…そこに他人の介入する余地すらない」

「そうだよ…それが僕という存在を生み出した霧唯の本質なんだよ。それでも健気じゃないか…形はどうあれ二人を残そうと思っただんだから。」

結果…八時間という制限を設けて自由に行動できたんだからね」

「しかし、彼らは無邪気に殺人を楽しんでいる…それに記憶の食い違いは何だ？」

「呪者の力の影響もあるよ。それに殺人衝動は元来人間が持っている…生きるためにはね。」

だから彼らも本当の素顔…本能で行動していたんだよ。記憶の食い違いはそれぞれが夢をみている状態ってこと。

都合のいいようにそれぞれの行動が自分の行動のように形作られ、それを信じている…」

だからそれぞれの記憶は酷く曖昧で時間が経てば経つほど疑心暗鬼になっていく。

それこそが僕の望みだった…」

「お前という人格は、昔から霧唯の深層心理に潜んでいたのか？」

「まあ…話の流れからもそうなるね。彼は元々特異体質で、別人格

を作り上げるのが上手く、それに影響しやすいんだ。

だからどれが霧唯の人格かと言われれば、それは難しいね。いろんな機会にいろんな人格が飛び出していたからさ…

出ては消え、その繰り返しで僕みたいな存在は珍しいのさ」

「お前の存在の談義は置いておこう…霧唯はその事故以後にどうなっただ？」

「そうそう、大事なことを忘れていたよ。あるうことかさ…自らが呪者だということだけを忘れてしまったんだ。

だから自分は普通の大学生だと思ってる…傑作だと思わない？そんなこと本当は有り得もしないのにそれが普通だと思ってることにさ…」

霧唯の別人格は高笑いをして笑いを抑えるのに必死だった。

「しかしね、これもきつと自分の望んだ人格が飛び出した結果だと思っよ。

自らの罪から解放されたい…忘れたい…戻りたい…

くくくく…血みどろの道を選択しておきながら逃げたんだよ。

楽だよねえ…嫌なことは全部別のの人格のせいに行けるんだから」

「それである日記の内容という訳か…そして捕食活動は他の二人の人格が行ったと…」

「うーん…半分正解かな？それもそうなんだけど、彼らは霧唯の日常の影響をかなり受けていたから」

邪魔な奴や殺したい奴を真っ先にターゲットにしていたよ。

しかし霧唯の回りは嫉妬深い奴ばかりだからちよと良かったね。お陰で彼は知らない間にエリートのを約束されたようなものだ」



「教授の推薦状を争って死んだ者…そして智也も…」

「そうそう。霧唯も相当困惑していたよ。何せ記憶がないんだから。自然に自分の周りで起こる偶発的な人の死で恩恵を受ける自分が分からなくなっただはずだ…」

「誰しも身の回りでどんどん人が死ねば平然としてはられない。それが自らが邪魔だと思う人間が死んでいれば尚更だ。」

「ひょっとしたら自分が？そう思いたくなる気持ちも分かると絵梨も心の中で頷いていた。」

「霧唯のか弱い人格は崩壊。それでお前が遂に念願の主導権を握っているってことか？」

「そうなるねえ…で、どうするここで殺し合いをするかい？」

「ぞわぞわと自らの体に影を這わせて、戦闘態勢を取りつつあった。すると樹開は一步前に出た。」

「さて…数年ぶりだが一緒にやるかい？聖夜」

「聖夜の方を見て合図を出すと、言われなくてもやってやるよといった様子で、」

「自然体でありながらも殺気は膨れ上がっていた。」

## 87話

梨絵はもうこの場にはいられないと思った。しかしこの場を見届けるのも運命。

そう決め付けその場から離れなかった。

三人の間には数ミリの動きから緊迫感が伝わり僅かな動きから相手が飛び出す機会を伺っていた。

すると、一人の人間がその場につっかり入り込んでしまった。

たまたまだった。近所の住人の小さな女の子がそこを通りかかってしまったのだ。

視線は全員その子に浴びせられ、一番近かった霧唯は網膜にその子の映像が映るなり動いていたのだ。

ずっとその女の子を抱きかかえ捕獲すると、動くなとその場の全員に声をかけた。

「貴様……」

女の子は一瞬の出来事で理解できなかった。しかし自分の体が動かないことははっきりと分かった。

影がじわじわと女の子の回りを這っていた。

「人質にするつもりか？」

聖夜が柄になく少し取り乱していた。

「どうしよっかなあ…僕ってさ。別に武士道に乗っ取って一対一とか正々堂々って好きじゃないんだよ。

だって殺せればそれでいいから…」

こいつの性格ならまずそうであろう。卑怯という言葉は負け犬の遠吠えなのだ。

女の子の顔は引きつっており、今にも泣きそうだ。

「さあて…ここからはお決まりの儀式だよ。じゃあ、その男…黙ってそこに立っていて」

いきなり樹開を指差して指示を出した。

何をするのか分からなかったが、その表情で大体のことを察することはできた。

樹開はそれに動揺することも、恐怖心を抱くこともしなかった。いつものように静かに分かったよと話して指定する場所に立った。

「そのまま…そのまま…動いたら駄目だよ。見せしめに君を殺して見せるんだからさ。

怖いのは君だけ…退魔師は名ばかりという者もいるかもしれないけど、君の能力はかなり買っているんだ。

何度か対峙した時に奥底に潜んでいた僕だけはまずいと思っていた程だからね。

他の二人は問題ない。僕を殺す能力を持ち合わせていないからね

…」

梨絵同様に聖夜のことも軽んじて見ていた。それは樹開に比べたら脅威にならないということをはっきり感じ取ったからだ。

以前の聖夜だったら脅威になりうる存在だったかもしれない。しかし今は生身の人間だからそれも半減以下だ。

「邪魔も遠慮願いたいね。この子がどうなってもいいのならささやかな抵抗は認めてあげてもいいけど…」

聖夜と梨絵に忠告をするが、樹開以上の力の持ち主ではないので別に気にしている様子も無かった。

「さて…始めるよ」

ぞわりと周囲の空気が変化すると、霧唯の体から無数の影が具現化してタコの足のよう動き出す。

「これほど離れていれば、何かをしようと思っても無駄だよね…」

樹開と霧唯の距離は五メートルも離れていた。一方で聖夜は僅か二メートル。この差が霧唯から見た脅威の違いでもある。

「御託はいいから早くやってくれよ…」

樹開は自分のスタイルを崩さない。きっと死の危機に直面してもいつもこんな感じなのだろう。

諦めているわけでもなく、何かを期待している訳でもない。感情がそこにはないような素振りを見せてみせた。

さつさとやれよ程度で霧唯を煽ると、彼も少しイラついた。

「分かったよ！まったくつまんない反応だなあ。じゃあ、行くよ。そうそう…散らかしちゃうから後片付けが大変かもね」

意味深な言葉を口にする、そのまま待機させていた黒い触手を一斉に襲わせた。

直線ではなく、鞭の軌道のようにうねるように樹開の体に迫るその速さは肉眼で捉えられないほどではなかった。

それは霧唯のじらしたい欲望もあったのだろう。

お前がこの攻撃を避ければ、少女は死ぬのだぞという眼差しで樹開のことをじつと睨んでいた。

一メートルと迫っても樹開は何かする気配すら出さなかった。

目だけがちらちら左右にと動いているだけで体は微動だにしない。

つまらない…霧唯はそんな諦めにも似た感じで殺す覚悟を決めた。

が…

するり…

霧唯の攻撃は一切樹開の体に触れることはなかった。

まるで磁石が反発するかのようによ具現化した影は体から離れた。

「な…」

突き刺さると同時に切り裂くことを頭の中ではつきりと思い描いたはずなのにその結果はそこにない。

霧唯の頭の中でのこの先の展開は、少女も殺してその場の全員を怯まし、残りの二人も殺してやるうというものだった。

しかし…この男はそれを崩した。

余計な計算を立ててしまった脳内で進路変更をすることは難しい。

そんな迷いが隙となり聖夜が見逃すはずもなく動いていた。

すぱっという空気を切り裂く音が耳の奥の中に聞こえたかと思うと、霧唯の右腕はぼとんと地面に落ちたのだ。

そして相手が痛みを知る前に聖夜は少女を奪い去った。

聖夜の動きによどみはない。血を浴びることなく一連の行動を終えていた。

霧唯がその事実を知ったのは数秒後の出来事で怒り狂うことも想像できた。

しかし…彼は常人では計り知れない狂人だった。

「ははっはははっははっははっははっははっは」

途切れ途切れの高笑いをして、血飛沫を辺りに撒き散らしながら歡喜していた。

痛みを感じることも怒りを感じることもしない。ただこの状況を

楽しんでいたのだ。

そんな霧唯の行為に周囲の人間は絶句するだけだった。

「聖夜……」

樹開は聖夜を見てあっちへ行けと視線だけで指示を出す。

それを見た聖夜もとりあえず少女を安全な場所にといい、少女を抱きかかえながら塀を飛び越えその場から戦線離脱した。

霧唯はその後を追うこともしないで高笑いを続けていた。自分の感じたままに心の底から笑っていた。

実に数十秒は鳴り止まない警報音のようだ。

「はあ……はあ……ははっはは……あー……面白い」

そして延々と続くかと思われた霧唯の壮絶な狂気の祭典もそこで終わった。

「楽しいかい？」

その場を一步も動かない樹開が、遠目で霧唯のことを見つめる。

## 88話

「実にね…こんな傷みを感じたのは初めてだし、生きてるって実感を教えてもらったよ。」

「そうか…僕に殺された者はこんな感じになるんだね…最高だ。最高だよ。」

狂人は痛みを快感だと勘違いをしていた。それは防衛本能だ。痛みは快樂などではない。

しかしそう思える人間も存在はするのだ。

「みんな…こんなことを味わっていたんだ。それなら死んでも怖くないよね。寧ろ幸せだよ…」

「お前…」

流石の樹開も相手のペースには合わせられなかった。距離を置いて冷静な会話を交わすことにした。

そんな矢先、軽口を叩いていた霧唯も素に戻る。

「分からないことが一つ。どうして僕の攻撃が君に当たらないのかな？これで二度目だよ？」

馬鹿な会話から開放されるだけかもしれませんが、思った霧唯だったが、答えを出さなかった。

「さあな…」



「ちよつと…じらさないですよ。こんなに出血して負傷しているのにさ。冥途の土産だ」とか言って教えてもいいじゃん」

「お前の与太話に付き合っている暇はない。それにな…お前は…俺を過小評価しすぎだ。

何も分かってはいない」

「？」

その言葉が何を意味するか理解できるはずもなく、霧唯はけらけらと笑うだけだった。

「あつそ…まあ、答えたくないならそれでもいいけど。それにこんな怪我の内に入らないしね」

霧唯の腕は肩先から切り落とされていたが、出血はもう止まっていた。

そして呪者の能力の一部である影を使い止血及び、黒い義手を作り上げていた。

「修復は無理でもこうやって影で代用品は作れるのさ…つまり、僕は脳か心臓を潰さないと倒せないってこと。それに…」

話途中で自らの体に影を這わせて完全防備の態勢を取った。

これは、梨絵に見せた黒い甲冑のようなものだった。

「こうすることで、それも不可能。さて、これで第二ラウンド開始ってことで…」

だから君も自由に動いていいよ。もう人質はいないんだから。

でもさ…君が死んだら、その子の命は保障できないよ。  
どんな殺され方をするのかそれは後のお楽しみにとっておくんだ  
からさあ…」

梨絵は鳥肌が立った。

この場から逃げることも可能かもしれないが、それをすればきつ  
と真っ先に自分が餌食になることが分かっていた。

だから動けない。

「梨絵ちゃん。もう少しの辛抱だ。君は黙って動かないでいてくれ  
…」

そんな梨絵を気遣い樹開は温かい言葉をかけてくれた。そんな言  
葉でも梨絵はほっとしていた。

この男の言葉には重みがあり、自分を守ってくれる気がすると思  
じた。

そこらの男が口にする薄っぺらいものとは段違いなのだ。発する  
者の経験と人間性が言葉には出るのだ。

「いよいよだね…退魔師の君なら僕を満足させられる戦いをしてく  
れそうだ」

自分を満足させてくれる。そういう強い想いで霧唯は樹開に迫る  
うとした。

しかし本日二度目の予想外の出来事が…

「いや…それはない。もう終わりだよ。少女を聖夜が切り離してく

れたお陰で全てが整った」

そんな言葉を皮切りに樹開の仕込みの効果が発動する。

霧唯の周囲にある刺さっていた銀の杭が急に光りだした。

樹開は最初の攻撃の時に銀の杭を霧唯に向かって投げつけていた。それは殺傷することも目的に含まれていたが、それ以外の目的もあつた。

彼が得意とする封印の儀式の最終段階に突入していたのだ。

真払家には大きな封印術が三つある。

低級な霊などに憑依したものを無理やり引き剥がし消滅させるもの、

浮遊している特定のものに狙いを定めて遠距離から消滅させるものの、

最後は作り上げた一定範囲内の空間を全て浄化し消滅させるものである。

最後の封印術は霊だろうが、悪魔だろうが、人間だろうが、あらゆる対象物を飲み込む仕様になっているので、危険極まりない。

樹開もここぞという時に発動させる。

先ほどまでは目標は、罪のない子どもを人質にしていたのでこの技を使うことができなかった。しかし今は違う。

聖夜が切り離してくれた…

後は自分が…

等間隔に埋め込まれた杭が光りだすと、その点と点をつなぐように光の線が走り出した。

線で描かれたものは正八角形となり、まるで結晶のような形をしていた。

「く……」

余裕たっぷりだった霧唯の顔にそんなものはなかった。

動かない四肢に必死に力を込めていた。今までかくこともない汗をかいている。

術式は完全に完成していなかったが、ほぼ八割は出来上がっていた。

残りの二割は術者である樹開の起動合図である。

言葉と印を切ることで完成する。ほんの数秒で終わる作業だ。

しかし……

「僕は……死なない。絶対に……絶対に……」

執念にも似た霧唯の悲痛の叫び声が聞こえた。それと同時に彼の武器である影が膨大な量に増えた。

このまま影を増やして封印術を壊そうという考えらしいが、霧唯を覆う光がそれを阻止していた。

「くそ…こんな…こんなもので、僕の望みが砕かれてたまるか」

「望みだ？」

樹開もそんな言葉に止めを刺すのを躊躇った。

「そうさ…人間を殺して殺して、もっと僕の心を満たすんだ。

いらぬ奴らばかりのくだらない世の中なら、せめて…僕の心を満たす道具になってほしいんだよ。

そして…行き着くところまで行ってみたいんだよ」

「そこに何がある？」

「さあね…ひよつとしたら酷いことをしていた、何て自分は愚かなんだろうと改心するのもかもしれないし、

生き残っていい人間と死んでいい人間を分別して殺し続けるかもしれない。

未来なんてわからないさ…ただどうなるのかを知りたいだけだよ…他人は関係ない。

僕自身がどうなるのかさ…はは…はははははは」

「そうかい…それは想像の中で済ませてくれ」

それをきっかけに樹開はすつと片手で印を結ぶと標的に向かって指先を突き刺した。

これで終わりと最後の封印の言葉を詠唱しようとしたが、霧唯の悪あがきは相当のものだった。



地面の中に影を少しずつ飛び込ませ地面を破壊していた。

会話をしている最中にでもその作業を淡々とこなしていたのだろ  
う。

アスファルトに亀裂が入り霧唯の足元が盛り上がってきた。それ  
と共に刺さっていた杭が抜けそうになっていた。

「あの銀杭が一本でも抜ければ…この馬鹿げた術は解除できるでし  
よ?」

上からの力の圧迫に耐えながら、もう少しで自分の身が助かる安  
心から以前のような軽口を叩く。

そのまま一気に力を振り絞って、その場一面のアスファルトを引  
き剥がした。

「これで…僕は自由だあ!」

ばらばらと細かく飛散した石の塊と、突き刺さっていた銀杭が降  
り注ぐ中で霧唯は自由の身になれたことを確信した。

だが…

「舐めてもらっては困る…真払家の封印の技はそんなことで消滅し  
ない」

期待を裏切る樹開の一言。

「え？」

銀杭が抜けても尚、霧唯の体の圧迫感は消えなかった。寧ろ強まった。

「何故？」

理解できずに樹開の顔を見た。

「あれはきつかけの道具に過ぎない。光が結ばればそれでもう術式は完成しているんだよ。残念……」

そして最後の浄化を目的とする印を切り、一言だけ「穿」と強く言葉を発すると、

まるでピストルの弾丸のように樹開の指先から光がどん！と飛び出し、霧唯の心臓を打ち抜いた。

動けない霧唯にそれを避ける術など持ち合わせていなかった。無防備な状態で技を受けることとなりその場に声を上げることもなく倒れた。

光の魔法陣は消え去り、騒がしかったその場も元の閑静な住宅街に姿を戻す。

「あの…殺したんですか？」

恐る恐る梨絵は樹開に質問をした。

すると彼は壁際まで移動しながらポケットから煙草を取り出すと、



仕事を終えた一服をするかのように火をつけ、大きく吸い込んだ。

「いや…殺してはいないよ」

よく見てごらんと言われて、梨絵が倒れている霧唯を観察するが血が一滴も流れていないことに気がついた。

さつき確かに心臓部分を光の弾丸で打ち抜かれたはずなのに無傷そのものだった。

「不浄な力を奪い去っただけだよ…それに殺すのは俺の役目じゃないからね」

煙を吐き出しながら悶々と何か考え事をしているようにも思えた。

「誰が…殺すんですか？」

そんな話の最中に聖夜が戻ってきた。

「終わったのか？」

「ああ…」

一瞬目を合わせたか、樹開はそのまま壁にもたれ掛かりながら煙草を吸い続けた。

聖夜はそのまま標的に真っ直ぐ歩いていた。迷いなどなかった。

そしてぐいっと髪の毛を掴みあげると、懐からすらっと短刀を抜いた。

「まさか…聖夜が止めを？」

梨絵は取り乱しながら樹開に聞いた。

「そうだな…」

今更隠す必要もないので樹開は普通に答えた。

「でも…動けないのなら…」

「気がつけばまた同じことの繰り返しだ」

「樹開さん言ってたよ。能力を奪ったんならもう殺すことできないんしょ？」

「これは一時的なものなんだ…数日して回復すれば能力も戻るし殺人衝動だってこのままだ…」

残念だけど、という表情をして梨絵に優しく話して聞かせたが、聖夜は厳しかった。

「こいつはもう…人ではない領域に踏み込んでしまった。

そうなれば手遅れなんだよ。殺すしかない…あの武井このみがそうであったようにな」

「どっぴいっことっ」

梨絵は武井このみの件での真相を知らない。

「鈍いな…俺と出会って、この数週間…」

一緒に過ごしていたのなら頭の良いお前なら気付いてもいいと思っただけだな」

そんなことを考えもしなかっただけにショックは大きいが、更なる仕打ちを受ける。

「徳人が殺したよ…武井このみをね」

徳人という言葉と殺したという言葉が梨絵の心を押しつぶす。

「嘘…」

そして梨絵は、それ以上何も言えずにその場から立ち去ることしかできなかった。

「嘘でしょ…ノリちゃん…」

霧唯のことなど頭の中にはなかった。徳人が殺人を犯したことに對してどう判断していいのか分からず、無我夢中で走っていた。

「どっして…嘘までついて…」

## 90話

梨絵がその場を去ってから樹開は聖夜に声をかけた。

「荒っぽいな…」

「何がだ？」

「お前…これから自分が殺す場面見られたくないからあんなこと言ったのか？」

聖夜の気持ちを察してかそんなことを口にした。

しかし聖夜は一笑して、そんなことあるかと否定した。

すると気絶していた霧唯の目が覚めた。

「う…あ…」

ゆっくりと目を開いて、聖夜が目の前にいることに気がついてもすぐに立ち上がることもしなかった。

「き…君は…」

樹開の術のせいで記憶があやふやになっているのだろうか、先ほどまでの口調ではない。

大学生の霧唯の人格に戻っていた。

それから短刀を持つ聖夜を見て全てを理解した。

「そうか…僕は…もう終わりなんだね…はは。花梨にも高谷先生にも悪いことをした…」

「記憶が戻ったのか？」

「そうなるのかな…でも…断片的にしか分からない」

多重人格者では記憶の混乱も余儀なくされる。

これが自分の行った行為なのか、そうではないのか…  
しかし今の霧唯ははつきりと自分の中の違う人格を感じ取り理解していた。

以前とは違うのはその点である。

「なら、お前がこれからどうなるのかも分かるよな？」

「…僕が呪者になろうって決めた日からこんな日も訪れるのは知っているよ。」

あの僧侶の忠告にもあるようにね…呪者ってのは所詮、生き続けても地獄なんだね…」

何かを悟ったようにそんなことを話した。

しかし人の死を食らい続けた霧唯ならその言葉の重みが伝わる。

「そこまで知っているなら話が早い。…っとその前に聞きたい」

「花梨と高谷先生のことかい？」

「あいつらの本当の意思は伝わったのか？」

「ああ…彼らを取り込んでから今ようやく知ることができたよ…僕の些細な誤解だったことにね…」

「もしも…あの日に僕がもっとしっかりとしていたらこんな結末にはならなかったのかもね」

どこか吹っ切れていた。

今までのことを思い出してか、そんな情けないことを話したが聖夜は黙って聞いていた。

これが霧唯という人間の本性なのだから。

「僕は…幼い頃からいろんな人格を使い分けていた。

だからどれが自分なんだか分からなくなっていた…殺人衝動も嫉妬も自殺願望も…」

「どれが本当の自分なんだってね…でもね、全てを無に返されてようやく分かったよ」

「…」

「自分は…全部人のせいにして生きてきたってことに…本当…最低の人間だよ」

自分の死期をはっきりと今と感じたからかもしれない。今まで見えなかった彼の本当の姿が見えていた。

「だから…楽にしてくれよ…」

聖夜に懇願するかのようにつこりと微笑んでいた。

そこに迷いなどない。

自分でその道を選ぶことが正しいと分かったからだ。

「分かったよ…それなら…」

聖夜は変な間を入れることはなかった。短刀を構えると淀みのない動きで一気に心臓を貫いた。

ずん…

「花梨…高谷先生…ご免なさい…」

衝撃と同時にそんな言葉を漏らした。そして霧唯の瞼には涙が浮かんでいた。

それから武井このみ同様にさらさらと体は塵となって消えてしまった。

呪者の末路は決まっている。

塵となって消えるか、それとも罪を背負ったまま生き続けるか。いずれにしてもまともな選択肢はそこにはない。

僧侶は呪者で唯一七つの大罪に当てはまらない聖夜に人間に戻る方法を与えた。

それが何を意味するのか聖夜にも分からなかった。しかし霧唯は死に際にあの僧侶の忠告にもあるようにと話した。

ひよっとしたら聖夜以外の呪者はいずれにせよ駆逐される対象だということなのかもしれない。

「これで…残りは五人…か…」

傍観していた樹開が聖夜に近づいて話しかけた。

「ああ…」

ゆっくりと立ち上がって樹開を睨んだ。そこに心はない。

「なあ、もう限界じゃないのか？学校生活なんて送れないだろ？さっき梨絵ちゃんにも決別宣言をしたんだからな…」

「…」

「別に気にすることはない。お前の取った選択は正しいよ。

俺たちが深く係わりあえば他人が巻き込まれるのは必然だ。

それならそうなる前に姿を晦ました方がいい。以前の俺たちの関係に戻ればいいんだよ」

「それは…どういうことだ？」

「十七年前の事は気にするな…俺は何も気にしちゃいない…」

無然とした態度を貫く樹開には安っぽい計算などない。本心と自



信からなる重い言葉だった。

「新堂徳人も離れる…後は俺が何とかする」

徳人の名前を出されて、聖夜はそのまま冷静を保てなかった。

「それは無理だ…あいつを無くしてこの先を乗り越えることは…」

「俺とあいつ…比べてるのか？」

「そんなことは…」

「まあいいさ…お前の意思だからな。しかし俺はそんなのは望まない。十七年前と気持ちは同じだ…」

樹開はそれ以上話しても自らの説得に応じてくれないと悟り、身を引こうとした。

そして去り際に一言だけ、

「何度も言うが…新堂家を甘く見るな。お前が思っている以上に曲者だ」

徳人の家の話をするなりそのまま立ち去った。

霧唯という嫉妬の呪者が消滅してから数時間、世の中はそんなに簡単には変わらない。

梨絵は学校に行くこともなく、そのまま当てもなく彷徨っていた。

樹開は聖夜にいずれまたと言って別れた。

残された聖夜は一人で考える時間が欲しかった。

ここまで駆け足で走り抜いてきたが、気持ちが上がリ調子というわけではない。

今までとは違い、いろんな人間を巻き込んでしまっただけに今一度考えることが必要になったのだ。

何も考えないで突き進めるほど聖夜も無感動、無感情ではない。

人間としての痛みは…心でもはつきりと感じる。

場所を変えようと判断し、電車で何度も乗り継いで数時間…とある森の中を歩いていた。

そこは彼女の根源の場所…そう、自らの故郷だった。

四百年前は小さな村があったかもしれないが、今ではそんな面影もなく草原に変わっていた。

所々に石が飛び出していたが、その一つ一つを聖夜は懐かしく思

いながら眺めていた。

自分の歩んできた道を一つ一つ確認しているかのようでもあった。自らの過去に間違いはあったのだろうか？

そんなの決まっている…人生はそもそも間違いだらけなのだ。

間違いを埋めることで一生は終わっている。

しかし四百年という長い歳月の間違いは常人の何十倍。

罪悪感に捕らわれることばかりを繰り返し、取り戻そうとしても取り戻せないことばかりだ。

生きることが罪そのもの…

吹き荒れる風を受けながらそんなことも口にしていた。

転がっている石つころの元は墓石だった。

同士と呼べる仲間のもので、自らが手にかけた者たちでもあった。

長い年月で、元の形の数分の一にしかなくなっておらず、それに散乱してしまっは、

何にもない石ころに思われても仕方がないのだ。

「浦島太郎みたいだ…」

久し振りにこの場所に来ると、そんなことを思ってしまった。

聖夜は岐路に立たされていた。そう、今までにないぐらいの…

自らが人間に戻る日が近づいているので、それもそのはずである。  
死を幾度となく乗り越えてしまった彼女にはその定義は酷く曖昧なものになってしまった。

自らには訪れないもの…そして自分は無機質なもの…生物を超えて物体になってしまったようだ。

そんな自分が今更戻ってどうなる？

正直怖かった…

どうなってしまふのか…自分が分からなくもなっていた。

徳人と能力が入れ替わり生身の体になってはっきりと死を感じることも分かったのだ。

そんなことなど、今まで抱くことなく四百年という長い歳月を過ごしてきたというのに。

柄にもなく昔のことを少し思い出してしまった。

## 92話

十七年前

俺はいつものように町々を移動して、当てもない生き方を繰り返した。

生きる意味など昔に忘れてしまっていた。

僧侶が話していたことが本当に起こるのかも分からない…

もしもこのままだったらどうなるのだろうか？

頭がおかしくなりそうになったのは何度もある。しかし割り切って生きてきた。

だから簡単なスリルと遊びで気を紛らわせることで精一杯になっていることもある。

時代の流れに自分がついていっているのが、気味悪くも思うが、昔の考えばかりでは順応などできないのだ。

暗殺を生業としていた俺の得意な分野は、その環境に瞬時に慣れるということだ。

これは良くも悪くも自分自身に影響を与えていた。

今日は久々の依頼だった。

古くからの付き合いの警察OBから急に連絡が入ったのがきつかけだった。

「久し振りだ…」

その男は弱弱しい体で俺の前に姿を現した。

年は七十を過ぎ、以前のような屈強な肉体は存在しなかった。

少しでも押し倒せば大怪我をしまいそうだ。

「四十年振りか？」

招かれた場所は豪邸の中だった。

使用人に大広間に通されてどんなことをすれば、こんな所に住めるのだと思案していた最中だった。

「お前は相変わらず美しい…嘘だとは思っていたが、  
今、お前を目の前にしてその言葉の真意をはっきりと受け止められる」

「そうかい…お褒めの言葉と取っていいのかな？」

「まあ、そうなるな…さあ、そこにかける」

そのように勧められたので、言われるがままに高そうな椅子に腰掛けた。

「すぐに茶を用意させる。おい！」

老人は使用人に合図を出すと、そいつはすぐに奥へと引っ込んだ。

「羽振りのいい生活なんだな…」

「そうか？まあ…戦後から日本の自治関連には多大な貢献をしたからその代償だ…」

しかし私以上の財産を持つ者などごろごろする世の中だ。これを特別と思わないでくれ…」

「はは…そんな謙遜はいいんだよ。本題に入ってくれよ」

「久しぶりに会ったのに大層な言葉だ。まあ、お前が変わらないのは嬉しくも思うが…」

そこまで話すと、老人は紙の束を持ってきた。

「これがそうなのか？」

「落ち着け…もう少し違う話をしよう」

「何だよ…」

すると使用人台に乗せて、がらがらとティーセットを運んでくると、

その場で香りの良い紅茶をカップに注いだ。

その香りだけで、自分の焦る気持ちも落ち着いてしまうようだった。

「未だに信じられないが、不老不死と言うことで襲われたりはしないのか？」

「研究目的で捕らわれたりとか…」

「心配するな。口は堅いんだ。自分のなりをほいほいと気軽にはし

やべらない。

知っているのは死んだものだけだよ…それにな、興味本位で近づいたらそいつらは半殺しにしているよ」

「おいおい…まさか私も殺す気じゃないだろうな」

「ふっ…お前はもうじき死ぬんだろ？病気か？生きながらにして死臭が漂っているぞ」

俺は確実にそいつの死を感じ取っていた。だから皮肉ではない。するとそいつも観念したのか、

「お前には全てお見通しなんだな。全く…一目見て看破されたのは初めてだよ。

私が末期の癌だと…」

全てを白状して自分の境遇を話していた。

しかし俺の心には何も響かなかった。人の死は見飽きてしまったからだ。

子どもだった友人はどんどん自分を追い抜いて死んでいく…そんな四百年だ。

だからいつもものように対応してしまった。

「それで？温情を受けたくて俺を呼んだのか？  
まさかな…戦場でも屈強な戦士だったお前がそんなことをするはずもないだろ？」



昔のあいつを知っていたからそんなことを思っていたが、それを覆された。

「昔の話をするな…今の私を見る。どこにそんな面影がある？哀れな老人がいるだけだ！

何も変わらないのはお前だけだ！正直怖いんだよ…」

確かに昔の面影などなかったが、凜とした姿勢は今も健在だ。死と直面しても向き合っている…

しかし自分にはどうすることもできないのは当然で、温かい言葉なども無意味だと思っていた。

黙っていると、あいつも自分の発言がいきすぎたことを反省していた。

「すまないな…取り乱してしまった」

「気にするな…それよりも俺に何をさせる気だ？」

紅茶をすすりながら本題に入することを要求した。  
すると、あいつは最近起こっている無差別殺人の話をした。

「今月に入ってもう三件だ…どうやったらこのように人が死ぬのか分からないが、

強引に引きちぎられている死体が不規則に出ている」

「強引に？」

「引きちぎられた断裂面は器具のものではなかった…  
そしてそれは、人の力では限りなく無理に等しい」

「それで警察は？」

「犯人特定など出来るはずもない。こういう不可解な殺人はお前の専門だろ？」

俺の方をちらりと見た。

確かに俺の専門と言えば、専門に違いない。話を聞くだけでも明らかに呪者の仕業だ。

だとしたらどうする？

全ての呪者が揃ってからではないと、対峙する意味もないはずだ…揃う前に殺してしまえば厄介なことになるかもしれない。

しかし…興味があるといえはある。

自分以外の呪者に出会ったことがないからな。

そう思うと、合って決めてからでもいいような気分になっていた。

「どこまでできるかは知らないがそれでもいいんだな？」

「ああ…この馬鹿げた殺しを防いでくれればいい…」

「分かったよ…それなら報酬はここに振り込んでくれ。死ねない体でも金は必要だからな。」

失敗しても成功してもこの額は払ってもらおうぞ？」

すつと紙に口座番号とその金額を記していたものを渡した。

それを見なくても、あいつは分かったとすぐに承諾していた。

必要な書類を受け取ると俺は早速その事件に係わろうと決めていた。

折角いれてくれた紅茶も半分ほど残して、その場から退散しようとした。

「結果を聞くことはできないかもしれないが、よろしく頼む…」

帰り際にぼつりと話したが、俺はその言葉にどう返しているのか分からず、

「ああ…」

と一言だけ残してその場から去った。

そして帰り際に歩きながらいろいろ考えていた。

もしも呪者の仕業なら俺が動いているいろいろやれば、この場所では殺人が起きることはなくなるかもしれない。

しかし、きつとまた別の場所で起きるのだろうか…

だが、そんなことは依頼内容の中には入っていないかった。今の俺ができることをすればいいんだ。

それにしても…自分よりも若い奴がどんどん自分の年を追い抜いて死んでしまう姿は見飽きた。

好きな奴も死なせたくない奴も次々に自分よりも先に死んでしま…  
う…

これは避けられない道だと分かっている、何度も味わっている…  
だけど…未だに慣れないんだな。

どこか切ない気持ちであいつの昔のことを思い出しながら強気な言葉とは裏腹に自分の弱さを嘆きもした。

屈強な女戦士と何度も呼ばれたが、こんな様でどこがだと思いたくもなる。

そしていつものように建設途中のビル内に宿を拝借しに向かった。

依頼を受けてから数日後…  
殺人鬼の調査がてらに適当に街中をふらついていると、一人だけ  
雰囲気の違いが目に留まった。

その男は一般人に混ざって歩いている。  
会社員のような男で、スーツを着て鞆を片手にぶらさげていた。  
年は四十代だろう。

しかし外見だけで中身がない…それが正直な第一印象だった。

今までそんな奴を見たことがなかったので、興味が湧いたのは事  
実だ。だからかもしれない、その男を観察した。

男はオフィス街を歩き続けたが、一向に会社という場所には向か  
わなかった。

何かを探して徘徊しているといった方が正しい表現かもしれない。  
きよるきよると辺りを見回したくさんの人を見ていた。

それから通行人の若い男に声をかけていた。

近づきすぎてはまずいと思い、かなり離れていたもので、会話の内  
容まではわからない。

それから声をかけられた若い男は、その男についていった。

五分ほど歩いただろうか…

人ごみの中から一転して飲み屋街の裏路地を歩いていた。

こんな場所で何をする気だ？

ひょっとしたら客引きなのだろうか？

物陰から動向を伺いつつ、周囲の警戒も怠らなかつた。

そして男は歩きながら、若い男と何かを話し始めた。

「本当に俺の好みに合った子がいるのか？」

「ええ…しかも飲み物込みで一時間三千円です。もしも上手くいきましたら店外でもお好きにどうぞ」

「そういうこともありつてことなの？でも、やばい行為じゃないんだらうな？」

「心配無用…違法行為ではないです。あくまで、お客さんとの示談で決めればいいことなんで…」

向こうも気に入ってくれれば無料でご奉仕ということもあるかと…うちはそれが売りなんです」

なるほど…売春斡旋業者か。あの格好もカモフラージュってことなんだな。

そんなことも思いながら未だに決めない不穏な空気だけを頼りに尾行することにした。



## 94話

そしてコンクリの塀に覆われたゴミ捨て場のような場所までくると、男は立ち止まった。

「ここまで来ればいいか…なら、先にいただきます」

ぼそつと俯き加減で若い男に呟いた。

「え？金のこと？先払いなの？」

これから先に楽しいことが待っているのかと逸る気持ちを抑えつつ、男が財布を取り出そうとした瞬間、

「お前の魂だよ！」

若い男の顔付近まで一気に距離を縮めて、大きな口を開いて笑っていた。

よだれを垂れ流し、目は釣りあがっていた。

今までの男の表面とはまるで違う…こいつの殺意も欲望も急速に湧き上がっている。

近づいた男に若い男は「え？」と驚くことしかできなかった。

反応が明らかに鈍い。このままでは餌食になってしまうのが目に見える。



俺はクナイを懐から抜いて、標的に目掛けて殺す勢いで放つことを決断。

しかしその間を何かが遮る。

俺の目の前に更にもう一人現れたのだ。

目の前のコンクリートの塀の奥から飛び出して両者の間に割って入った。

しなやかに跳んだそいつは、着地と同時に土煙を巻き起こしながら後ろ蹴りを襲いかかるうとした男の顎先に放つ。

凶行に出た男はふわりと体が浮き上がると後方に跳ね飛ばされ、地面を転がった。

「あんな…逃げなよ」

何も出来ずに呆然としていた若者に向かってそんな助言をした。しかしそんな声をかけた主はかけられた男よりもずっと若い。

高校生ぐらいか…

「ぐぐぐぐぐ…」

跳ね飛ばされた男はすぐに立ち上がった。その形相は人のものではない。

卑屈にも歪んだ表情、垂れ流した大量のよだれ…そして眼球は赤々と充血しているかのようだった。

もはや肉食獣だ。

「死者よ…お前の魂はどこだ？何故動いている？」

獣のように鼻息の荒い男とは対照的に、そいつは冷静だった。

こういう状況に慣れているのだろう。年も若いのに感心してしま  
う。

ついついそいつの行動に更なる興味が湧き、そのまま傍観してお  
くことにした。

「貴様…何者だ？何故、俺の邪魔をする…」

ひどくしゃがれた声で、死者は話した。

「それが俺の使命だからだよ…それだけで十分だろ？」

「はは…年端も行かない小僧がこの俺に楯突くのか？」

「年は関係ねーよ！それよりも何を企んでる？空っぽのお前が一人  
で動くはずもない。黒幕は誰だ？」

「それをすんなり答えるとても？」

さっきの奴を逃したのは痛手だが、それは貴様の魂で補ってもら  
うでしょう」

随分と俺好みの展開になってきたな。

そう思っていると、死者は鋭い牙のような犬歯をむき出しにして  
男に襲いかかった。

「死んで後悔しろ！」

その速さは人間のものではない。正に獣そのものの瞬発力は犬に等しかった。

並みの人間ならその動きを目で把握して、行動に移すのは難しいだろう。

しかしそんな相手を目の前にしても、そいつは動くわけでもなくただ黙っていた。

噛み付かれる！そう思ったが、実際はそんなことは起きなかった。

何故か死者の体が舞い上がっていたのだ。

何が起こった？

俺が決定的な瞬間を見逃したのだろうかと思案している隙に男は、銀杭を懐から取り出すと、

跳ね上がっている死者の心臓に向かって躊躇することなく突き刺した。

「ぐ……あああああああ」

断末魔を上げると、そのままさらさらと姿を消し去ってしまった。

その場には服だけがそのまま残され、があがあとつるさいカラスの泣き声だけが響いていた。

あいつは何者だ？

俺もあの死者を普通ではないと感じて、後をつけたが、それよりも的確に相手のことを把握しているあいつは何なんだ？

まさか…俺と同じ呪者なのか？

あいつの戦い方をみるとどこか寒気がするのが本心だ。

このまま見てみない振りをしてその場から立ち去ろうかとも思ったが、それより先に声が掛かってしまった。

「おい…その物陰に隠れている奴出て来いよ」

男は俺の存在に気がついていていた。

ちっ…まずいな…

「さっきの奴の黒幕か？いずれにしても気配が普通じゃない」

見えない俺に向かってそんなことを話しかけたので、俺も逃げるわけにもいかなかった。

ゆっくりと姿を晒すことを決意した。

「女？」

そいつは意外だという顔をして見せた。しかし俺もはつきりとそいつを見て驚いた。

やはりどう見ても高校生だからだ。そんな若い奴がどうしたらあ

んな戦いができる。

「お前…何者だ？」

俺に向かつてそんなことを聞いてきたので、俺も聞き返した。

「その言葉そっくりお前に返すよ。どうして俺の気配が分かった？」

「質問に質問で返すなよ…」

「お前みたいなガキがどうしてこんなことができる？」

畳み込むように質問攻めにしたので、そいつも少々困惑していた。

「あのな…お前だって俺と大して年変わんないだろ？ガキはお互い様だ。

それに質問してるのは俺の方だ！」

そうか…俺の見た目は十七歳だもんな。誰も四百歳に近いなんていっても信じないか。

「はいはい…先に言っとくけど、さっきお前が殺した奴とは知り合  
いじゃないから。

俺はお前と同じようにさっきの奴が普通じゃないと思ったから後  
をつけたただけだ」

「ふーん…」

じろじろと俺の事を見て怪しんでいるようだ。

「ま…とりあえず信じてやるよ。だけど全部信じたわけじゃないからな…」

「疑り深い奴だな…それで…早速聞きたいがお前は何故俺やあいつを感じ取れる？」

俺から見てもお前は普通じゃない」

「あ…あの…得体の知らない奴に素性を知らせる義理はない。

しかもさっきの奴と同類の匂いをするのに…お前だって殺してきたんだろ？いろいろな人間を…」

その言葉は否定できなかった。

そのまま黙っているとそのいつはじゃあなと一言残して早々に立ち去ってしまった。

「何なんだよ…」

変な一日だと思いつつ、面倒には巻き込まれなくなかったのもすぐにその場から姿を消すことにした。

## 95話

数日後

新聞をぱらぱらと捲ると、例の事件は続いていた。

タイトルは歴史的惨殺事件未だ終わりを迎えず…だった。  
俺が依頼を受けてから更に二件死体が現れた。

やれやれ…昔は死体が数体出ても民衆には大した影響もなかったのに、時代が変わったものだ。  
敏感に反応している…

戦争で死んだ人数に比べれば少ないのにな。

そんな皮肉を思いながら朝食を済ませた。

しかしこの手の殺しはやはり人では無理だな。明らかに同業者と  
いうことが。

今の俺の日課は朝九時には起きて、市内を詮索、夜の十二時には  
帰ってくるの繰り返しだ。

俺と同じ気配がするならすぐに分かるが、未だにその気配を掴ん  
でいない。

この街の広さは半端ではない。田舎ならすぐに探せそうだが、人  
工百万人の地方都市では時間が掛かりそうだ。

しかもランダムに行われている殺人だから網を張っても効果が無い。当然警察も後手に回っている。

簡単に引き受けてしまったことを後悔したが、背に腹は変えられない。こんな自分でも金は必要だ。

適当に身支度を整えるといつものように市内をうろつくことにした。

歩きながら今までの事を整理していた。

最初の死体は今から一ヶ月前：それから一週間おきに一人、二人と増えている。ここで疑問が生じる。

呪者だとしてら、何であんなに人目につくような行為をしている。

普通ならばれないようにこっそりするものだが：それにあの死者も気になる。

どうしてあんな奴が街中を徘徊している？

考えれば考えるほど訳が分からなくなってしまった。

公園付近を歩いていると、ぴくりと何か体が反応した。

「ん？」

辺りを見回すが誰もいなかった。しかし遠くから何かを感じる…

自分の感覚を頼りにその発信源を一生懸命探すことにした。



すると、公園裏の野原の場所に誰かが立っていた。三十代ぐらいの女性だった。

しかし様子がどこかおかしい。

まるで以前会った使者と同じだ。

中身のない空っぽの人間。そうあの男が話したことと符合する。

あいつらは何者で、どこから生まれているんだ？

遠くから様子を伺っていると、その女性の元に一人の男が駆けてきた。

「やー…済まない。ちょっと仕事で呼び出されてさ。でももう大丈夫。これからすぐにも行けるから」

その男は普通の人間だった。しかし、太っていて着ている服も明らかにださい。女とは縁のなさそうな感じだ。

会話をしばらく聞いていると、二人は顔見知りではなく、どうやら女からその男に声を掛けたようだ。

所謂逆ナンというものだ。

「あの時と同じだ…」

俺は前回の死者が取った行動によく似ていると思った。

初対面の人間に声を掛け誘い込む。

まさか今回も人気のないところに連れ込む気ではないのだろうか…

自然と二人の後をつける形になろうとしたが、その前にあいつがやってきた。

またか…

そつだ。前回死者を葬り去ったあいつが、そいつらの側にゆっくりと近づいた。

「何だ？君…」

太った男は初対面のそいつに話しかけた。

すると、

間髪いれずにそいつは、男を殴って気絶させ、そのまま女の首筋に銀の杭を突き刺した。

「ぐあああああああ」

女は叫び声を上げながら、前回同様にさらさらと姿を消して服だけをその場に残した。

もう隠れる必要もないと判断して、俺はすぐにそいつの前に現れた。

「おい！」

俺の気配にも気がついていたのだろう。男は驚きもしないで、す

ました顔をしていた。

「何だ？」

「答える！お前は何者だ？」

「言つたる？お前に答える義理はないと……」

相変わらず嫌な奴だ。

だんだん腹が立ってきた。

「それなら力づくで聞くよ」

もう待ってなどいられなかった。大地を蹴り上げると、俺はそのまま真正面から殴りかかった。

しかし寸でのところで拳はするりと空を切る。

何だ？これは…かわしたというよりも、俺の体が避けたような感覚…

そんな違和感を感じながらも目の前に迫っていた男の反撃をどうにか避ける。

銀杭は俺の頭部をかすめて髪の毛を数本切り落とす。

この場においてはまずいと思い、後ろに跳び下がりながら俺は得意のクナイを同時に三本投げつけた。

「う…」

男が初めて見せる焦る表情。大きく仰け反りながら必死でかわした。

そのせいで体勢は大きく崩れ尻餅をついてしまった。

好機だ。

俺はそれを見るなりにすぐに反撃に移る。

短刀を抜くと、距離を詰めて立ち上がろうとする標的に目掛けて走り出す。

生半可な攻撃ではきつと読まれてしまうと思い、まずは鉄の鞘を匣に使うことを決断した。

男の肩先に向けて回転させてぶつけようと試みる。しかし相手はそれを避けた。

…いや、どうにかかわしたと言ったほうがいい。

その次に短刀でがら空きの腹部を切り裂く気持ちで逆回転で振り抜いた。

すぱっ…

相手の服が綺麗に切れた。

その時点で相手の力量が大体把握できた。こいつは戦い慣れていない。

最初の攻撃がさけられたのも偶然なんだ…

試しに鉄の鞘を真っ直ぐ相手に投げつけた。

当たれば骨が砕けるかもしれないが、そんなの気にしなかった。

びゅんという音と共に鞘は鉄の凶器となり相手に飛んでいった。

「くっ…」

男はそれを見て避けることはできた。

しかし…その後の行動まで予測はできなかった。

俺はぐいつと細いワイヤーを引っ張り鉄の鞘を引き戻したのだ。

空中でびたりと動きを止めると、元来た道に戻るように鞘は男の後頭部を目指していた。

男は俺の武器の短刀しか警戒していない。

次に起こる出来事など想像できていなかったのだ。だからかもしれない。

まともに後頭部に鉄の塊の直撃を受けることとなる。

「ぐは！」

鈍い音がすると男は、がくんと膝を付いてしまった。

そこで決着は付いた。俺は目の前に短刀の切っ先を相手に向けて見下した。

「これで終わりだ…」

ちくしょうという悔しい表情を見せたので、清清しかった。

俺のことを散々毛嫌いして、質問にも答えない。名乗らない。

そんな無礼な奴にようやく身の上というものを教えられるのだから。

しかし俺も子どもではない。感情に身を任せるほど幼くはないのだ。

短刀をしまつと拳を握り締めた。

「これで勘弁してやるよ！」

そのまま無防備な男の顔面を殴りつけようとした…が、またもや当たらなかった。

「え？」

するりと流れ逆に転んでしまった。

「くそっ…何だよ！さっきから…」

すぐに立ち上がって男を睨みつけてみたが、男はもう戦う素振りを見せず観念したようだった。

「生身の攻撃は俺には当たらないよ…」

「はあ？」

「俺の名は真払樹開…退魔師の家系に生まれし者だ」

突然の自己紹介に少々戸惑ったが、相手が素直に話してくれるのは手間が省ける。

「真払…どこかで聞いたことがあるな」

「陰陽道の流れから西洋の黒魔術も取り入れた融合型の退魔師の家系で数百年の歴史はある…」

「といつてもこんなこと知ってるのは、人じゃない者の方が多いがな」

「はは…だからか、死者を見る力を持っているってことか…」

「魔の存在もな…どう見てもお前は普通じゃない。

死者とは違う雰囲気を持ち、今まで出会った物の怪の類とも違う…初めて出会ったあの時も背筋が凍ったからな」

「凍った？そんな素振り見せもしないのか？」

「俺は表情にあまり出さないんだよ」

「ふーん…でもやけに素直になったな。あんなに頑なに拒んでいたのこれ」

「そりゃそうだろ…お前と俺は対極の存在。一緒にいれば滅ぼしたくなるのが俺の正直な気持ちだ。

でもお前は悪い奴じゃなさそうだ。それだけは分かったよ…」

「そうかい。それならついでに聞かせる。何で俺の攻撃が当たらない？」

「ああ…それが…俺の特異な体質のせいだ。

類を見ない能力らしいが、肉体に向けられる悪意の存在は全て撥ね退ける効果があるらしい。

だが…それは生身の攻撃に限る、武器は範囲外だ」



「だからか…鞆が後頭部直撃したのも…」

「あれは痛かった。まさか後ろから攻撃が来るとは予測も付かなかつたからな」

後頭部を抑えて先ほどの痛みを思い出しているかのようにだった。

「生身ってことは、肉体での一切の攻撃が聞かないってことか…  
そんなんじゃ女性とも触れ合えないんじゃないか？」

にやにやと冗談っぽく青い存在の樹開に話したが、取り乱すこと  
もしない。

つまらない…

「悪意がなければ問題ない。人を攻撃するってことはそこに悪意が存在するだろ？」

それを反発させる作用があるってだけだ…触れたり、キスしたりは問題ない」

「そこまで聞いてない…ま、それで納得したよ。物理攻撃に弱いつてことだろ。」

お前、素人丸出しの動きだったからな…若いのに凄いいし手かとい瞬どきつとしたが、安心したよ。

そんな存在は俺だけで十分だからな」

「それなら俺からの質問だ。お前は何者なんだ？」

何故同い年にしか見えないお前がそれだけのスキルを持ち、禍々しい空気を身に纏っている？」

相手が自らの手の内を晒してくれたのだ。ここで答えなくて黙っているわけにもいかにない。

俺は素直に今までの自分に起こった出来事、経緯、その目的を話した。

こいつなら話してもいいと思ったからだ。

どうしてかは分からなかった。

今まで何人かの男と僅かだが家族になったこともあり母にもなったこともある。

しかしそのどれもが現実とはかけ離れていた。

多分：相手の事がどうでも良かったのだろう。

数度と行われた興味本位での付き合い、出産：今思うと後悔していることの方が多い。

しかし数百年振りに自分の心を動かす人物が自然と目の前に現れたのだ。

ま…：一時の迷いかもしれないが。

俺も誇張表現する部分があるからこんな曖昧な感情はしまっておくことにしよう。

一通りの話が終わると、興味深い顔をして樹開は俺を覗き込んだ。

「俺と同年にしか見えないお前がね…」

「じろじろ見るなよ…俺は見世物じゃない」

「それなら、呪者つてのが最近の猟奇殺人に絡んでいるのか？

あれはどう見ても人の成せる技ではないからな…」

「お前、本当に鋭いね。でもな、俺も手を焼いているところだ。拳動が全く掴めない。

気配すら感じ取れない始末だ…そこで相談だが、お前…俺と組む気はないか？」

「はあ？」

「一人では限界がなって最近思っていてさ。

だから…生には合わないが、お前のような珍しい存在は利用しない手はないかなって思ってたさ…」

「随分なお言葉だな。俺はお前を滅ぼしたくてうずうずしてるって言うのに…」

「俺よりもそいつらの方が凶悪なのは分かるだろ？さっきの死者も絡んでいるかもしれないかしな」

「それで釣ろうつての？浅はかだな…」

「まあ…半分は俺のせいかもしれないから無碍に断るのもあれだな…」

「どういう意味が分からない。」

「半分は俺のせいだとあいつは話した。」

「俺の特異体質その二…魔の存在を引き寄せる」

「それって…」

「ここに集まってきたってことだ。お前を始めな…」

「俺はそうやってそいつらを集めて滅ぼしているんだよ。」

「自分が望まなくても集まってくるからうんざりしているがな」

「俺がここに来たのも必然だったってことか？」

「ま…そうなるかな」

「あのさ、初歩的な質問をしてもいいか？お前何歳だ？学生か？」

樹開の年がよく分からなかった。幼くも見えるし、大人にも見える…

そんな微妙な年頃だということは察しての質問だが、奴も大して気にしていないようで十七歳とあっさり答えた。

職業は退魔師一本で暮らしているらしい。

どうやったらこんなので暮らせるのかは知らないが、名家だからコネもあるのだろう。

俺同様に人の処理できない事件を闇で葬り金をもらっているに違いない。

「なら、俺からも聞きたいが、お前のその目的はまだ十七年後なんだろ？それならそれまで何をするんだ？」

「とりあえず、俺は呪者を殺せない。だからその時にパートナーでも見つけるよ。

それに他の呪者がどういう奴らなのか事前に知っておくのも手だろ？」

「まあ…危害を人間に与えないのならそれにこしたことはない。お前らで勝手に共倒れしてくれ」

随分な言葉だ。

まあ…俺のような存在が天敵ではしょうがないか…  
しかしこの男未だに出会ったことのないタイプだ。

十七歳にしては未熟な部分もあるが、俺らのような存在にとっては脅威な何かを感じさせられる。

「俺はこのまま死者の行方を追うが、お前とはこれっきりにしたいものだ…」

ため息混じりで俺の方をちらりと見た。それは俺も同じだ。

「ふん…せいぜい体術の方も磨きをかけとくんだな。

このままだとお前…自分の力に溺れて殺される」

その言葉に反論はされなかった。おそらくそのことを自分でも分かっているからだ。

そのまま樹開はそこからいなくなってしまった。

「あいつ…きつとこの先も出会っただろうな」

それだけははっきりと分かっていた。

それから彷徨う死者と猟奇殺人を繰り返す呪者の問題に挟まれながらまた数日が流れた。

「やれやれ…犠牲者減らないな…」

今日も新聞を見ながらそんなことを呟いてみた。

すると脇から俺に向かってそんなのんきなことを言わないでくださいと突っ込みが入る。

「いい加減、これをどうにか止めるのがあなたの仕事でしょ？  
そのために多額のお金をお支払しているんですから」

こいつは多田といって依頼主の側近の男だ。

「うっさいな…お前に言われなくてもいろいろやってんだよ！」

俺はいい加減に手がかりがなくていらいらしていた。この一ヶ月での行動が無意味に等しかったからだ。

「あいつ…予測不能な場所で次々獲物を物色しやがって…  
行動パターンを張っているこっちの身にもなれっていうんだ」

文句を多田にぶつけても仕方がなかったが、機嫌が悪いのでお構いしないでやってやった。

「旦那様は優しい方なので、結果を残せなくてもと話していますが、  
しっかり残して下さい。」

そうでなければ、旦那様の面子が潰れてしまいます…」

「分かったつての…しつこいなお前も…  
何度も経過報告を聞きに来ることもないだろうが。俺は自由にやるのが好きなんだよ」

「首輪は必要です。あなたのような危なっかしい存在には特にね…」

これまた嫌われたものだ。しかしこの多田という男はどこか抜け目のないしっかりした性格の持ち主だ。

主人を敬愛するからでの行動なのだと理解しているもの…  
付きまとわれるのはうるさくて仕方がない。

しかも俺の寢床なんてどうやって調べたんだよ。

「一週間以内に結果は出すから、文句はその後でな…」

俺は何の手がかりもないのに、そんなことを話してしまった。こ  
うでも言わないとこの男は引き下がらないだろう。

渋々ではあったが、多田はそのまま何かあったらすぐに連絡をと  
話して仕事に戻った。

暇人が…

しかしいい加減結果を残さないと信用問題にも係わる…  
だから俺はいつもにまして気合をいれてこの問題に取り組むこと  
にした。

さて…まずはいつも通りの日課を済ませよう。

街中を中心として円を描くように市内を散策する。しかし何も掴



めない…

しょうがない。使いたくはないが切り札を使おう。

俺が三時間ほどの散策を断念し真っ先に向かったのは、小汚いアパートだった。

木製の階段を上るときしぎしと音がする。思い切り駆け上がった穴が空きそうな勢いだ。

六部屋あるうちの二室の前に立つと、こんこんと軽くノックを試みた。

ドアはすぐに蹴破れそうな薄くて施錠の甘いものだが、そんな非常識なことをするほど馬鹿ではない。

部屋の住人はすぐにその音に気がついてドアを開けてくれた。

が…

開けた瞬間に俺の顔を見るなりボタンと閉められた。

「おい！開けるよ！樹開」

思わずドアの前で叫んだ。そしてがんとドアを叩いた。

アパートの住人は何事かと思って、ドアを開けるとちらちらとこちらを見ていた。

そんな状況に俺は頭にきて

「見てるんじゃない！」

と吠えまくってそいつらを威嚇した。すると小動物のようにすぐに隠れてしまった。

「おい！開ける！開けないとぶち壊すぞ！」

我慢できなくなって俺の言動もどんどん物騒になっていった。

しかし当の本人は無視を貫き通していた。

いいだろう…そっちがその気なら、こっちは実力行使だよ。

俺は拳を握りしめると薄いドアに目掛けて、全体重を乗せたロシアンフックを食らわせた。

が…

ぐうんと体が反発して跳ね返された。

「え？」

自分の放った力が自らに返ってきた。

弾き飛ばされて後頭部をもろに硬い壁に打ち付けた。

「つうううー」

激痛が全身に走った。まさかの反撃を思わぬ形で食らってしまった

た。

あの野郎。結界を張りやがったな。俺はすぐに立ち上がって再びドアの前に立った。

「おい…開ける。いい加減にしないとこのアパートごとぶち壊すぞ」

俺は本気だった。懐に仕込んでいる小型の爆弾を取り出すと不適な笑みを浮かべる。

そんな暴挙に出ようとした俺に呆れたのか、樹開はすつとドアを開けた。

「ガキみたいに腹を立てて破壊活動しなくてもいいよ…分かったよ。外で話してやるよ…」

渋い顔をしながら樹開はついて来いと話して近くの広場に案内した。

「それで？用は何だ？そんな様子だとただごとではないことが感じられるが」

そんな風に自然と話しやすい状況を樹開が作り出してくれたので、恥とは知りながらも、

自らの捜査に協力してもらおう話をした。

すると、

「ふーん…お前が俺と協力したいと…」

断られることも覚悟していた。  
乗り気ではない樹開の様子からは、きっとふざけるなという言葉が飛び出すのだろうか？

悪い方へと考えが傾いていたが、樹開はあっさりとその提案を受け入れてくれた。

「いいのか？」

確認するかのように聞いてみたが、樹開は、ああ、と覆すことをしなかった。

「俺もあの事件には遅かれ速かれ関わることには違いない。

今の不可思議な出来事も調べなくてはならないが、お前の話す事件も犠牲者が減ることはいいことだ……」

「意外と頭柔らかいんだな、お前……」

「利害関係が一致してるだけだ。俺にも足りないものが多いすぎるしな……格好つけてもしょうがない」

「へー……自分の力の限界を見極めてるのか？若いうちから諦めが早くないか？」

「無理なものは無理だろ？それなら自分の得意な分野を伸ばした方が得策だ。

諦めが早いんじゃないかって謙虚と言って欲しいがな」

謙虚な奴はそんなことを口にしない。

しかし樹開という男の考え方は同世代の男とはどこか違うのだけ

は、はつきりしていた。

まあ…退魔師なんてものをしていたら普通じゃなくなるのは当然だ。

しかし俺好みの存在であることには違いなかった。

「早速で悪いが、これから出れるか？」

俺は追い詰められていることもあって、急かせる形で樹開を誘った。

しかし彼はそれを不満一つ言うことなく了承した。

実にいい奴だ…

二人での呪者探しはここから始まったのだが、探し始めるにつれて樹開は困惑していた。

「気配が消えたり、出たりしていて不特定多数に感じる……」

「一人ではないってことか？」

「多分…お前の目的の人物以外の物もこの街にたくさん集まっているのかもしれない。」

「この前の彷徨う死者のように……」

「こいつはそういった人でない者の気配に敏感で、  
尚且つそういったものを引き付けるのだから、無理もない。」

「やれやれ…前途多難かもな。」

「だからなのか？外に出て数時間も経たない間に……この状態は……」

俺が周囲を見回すと、どこから現れたのか数人の人間と犬や猫、  
鴉といった動物に取り囲まれていた。

「どいつの目にも生氣はない。」

明らかに空つぽの奴ら…死者そのものだ。

「こちらの動向に気がついたか？」

樹開は懐から銀杭を出して身構える。

「まあ、そうなるな…でも、お前はちょっと離れてる…」

そう言つて樹開が前に出るのを制止したが、何だよ。と腹を立てた。

いい機会だから俺の実力も見せておく必要がある。ま…自分の力を過信している訳ではないが、こいつらに負ける気などしなかった。

気配でそいつの力量は大体分かる。雑魚がたくさん固まった所で所詮は雑魚だ。

動いたのは俺が始めた。

それに気付いた彼らはゆっくりとだが反応する。

真つ先に気がついた獣の初動は流石に速い。人のものを簡単に凌駕してる…

だが、俺にはそいつらにないものを持っている。

空間認識と曲線の動きだ。

獣はほとんど直線的な動きしかできない。しなやかで滑らか…これが俺の戦闘の売りだ。

切り裂く爪も食いちぎる牙も突き刺す嘴も全てぎりぎりで見切り、かわした。

その際に獣同士の衝突、そして混乱が生まれた。それを見逃すはずもなく俺は握っている短刀で一撃のもとに沈黙させた。

残る人間だが…男女問わず全部で十人存在する。そいつらもそれなりの能力はある。

人の潜在能力を引き出されているのだから、並みの人間の数倍の戦闘力を持っている。

と言つても馬鹿力しか脳がないがな…

軽くコンクリートを粉碎する打撃でも当たらなければ意味などない。

まずは左右に飛びかかる暴徒を拳で叩き落して体勢を崩すと、上から襲い掛かる獲物にはクナイを三発、真正面から襲う馬鹿な奴には五発食らわせた。

それだけで四人の死者が地面に倒れた。しかしそのまま終わるはずもない。

走りながら確実な止めを刺しつつ、残りの奴らに向かって打撃と斬撃を折り混ぜながら

流れる水のように触れることもさせずに倒した。

僅かな間ではあるが、静けさが周囲に流れ自分の無敵の様を誇らしげにも感じた。

結構やるだろう？と樹開に向かって振り返ろうとしたが、そこで



一喝された。

「馬鹿！油断するな」

倒した奴らは全員立ち上がったのだ。まるで無傷そのものように。

手ごたえはあった。

しかし死者は俺の力では殺せないということなのか？

調子に乗りすぎたと反省もしつつ…気持ちを切り替えようとした。

それからさきほどの再現が始まるかのように生き返ったゾンビたちは、

何の工夫もなく襲い掛かってきた。が…動きは俺に到達するまでもなく止まってしまう。

「これだけ時間があれば…俺の手の中だ」

樹開が額の汗を拭う…

「流石の俺も…こんな大人数初めてだがな。これも経験しろってことだろ？」

地面が光り輝いていた。

噂に聞く退魔師が使う魔法陣か…見事に東洋と西洋を癒合させた陣形だな。

描かれている円陣の方程式を見てそう思った。

俺も死者と同じ領域に入っているのだから、特別な術式か？

そう認識するが早いか、樹開が「崩！」と力強く念じ術を発動させると、

かつと閃光が周辺を覆いつくしその場にいた死者全員がばらばらっと崩れて消滅した。

俺も目を瞑ることしかできなかった。目を開いた時にはもう、樹開の姿しかそこには見えなかった。

「ぶっ…」

実戦で使うのは初めてだったのかもしれない。緊張感が解けてほっとしているのがすぐに分かった。

「今のは？」

見たことのない術に俺は興味があつた。陰陽道は知っている。

名のある祈祷師や陰陽師に出会つたこともあるのだから…彼らができる技には限りがある。

厄災を取り除く手助け、助言、そして靈魂に対する浄化などが主な活動範囲で、

実体化して直接人間に影響を与えられる稀な存在には弱いのだ。

多少の縛りは与えられても、消滅は難しい。

「真払家に伝わる退魔用封印術だ…西洋の魔法陣は異界の門を開くとも言える。

だからその術式を利用させてもらった。陰陽道が自然の流れを循環させ、魔法陣の発動でその力を増幅させる。

実体化した人の悪意や怨念は生半可なものではない。護符や祈祷で倒すことは容易ではないんだ…」

「つまり…オリジナルの術式で組み上げられた魔法陣ってことか…」

「しかし魔法陣とも違う。あれは、儀式的なもので召喚のための方程式が多い。

だから真払家は異界の門を開き、そのまま魔なる存在をそこに送り込むのだ…

そして異界から別の存在が出てこないように封をするのが陰陽道の役目にもなっている」

「つまり…陰陽道で魔法陣の力の増幅と制御をして、西洋魔術で異界の門を開くってことか。」

「それで魔なる存在を封じ込める」

「分かりやすく言うとそうだな。だが、真払家はそれを凝縮させたり拡大させたりして、

オリジナルの魔法陣をいくつも作り上げた。そして一つの武器がこれだ…」

すると目の前に小瓶を差し出した。その中には銀色の液体が入っていてそれを振って見せた。

「水銀か？」

「ああ…これは俺の術式の記憶の入っている法式水銀だ…」

「形状記憶合金みたいなものか…これも真払家の至宝ということなんだな。」

それにしても真払家ってのは随分科学的な退魔師だな。普通は歴史を重んじて伝統を頑なに守るものだが…」

「褒めてるのか？」

「ああ。俺も知らない高度な退魔師の集団なのだから感心もするさ」

「ふーん…」

どういふ態度をとっていいのかわからないで、樹開は少し照れくさそうにもした。

「こころが十代だな…ふふ…」

思わず笑みがこぼれてしまった。

それから死者退治を二人で一週間行うことになった。

しかしそれと同時に猟奇殺人の数は確実に増えていた。

「なあ…これだけ死者を退治しまくっても黒幕が出てこないのはおかしくないか？」

それにこちらの動向を知っているとしか思えないほど尻尾を掴ませない…」

俺たちは悩んでいた。気配はあちこちに感じるが肝心の者の姿がどこにもない。

何度も何度も肩透かしを食らって途方にくれていた。

「これでは埒があかないな…」

「同感…」

二人で並んでアイスを食べながらぼやいていた。

「それにしても…これ上手いな」

樹開がそんなことを驚きながら話した。

「まあな、俺は甘いものに関してはずるさいんだよ。

糖分は疲れたときと頭を使った時には一番だからな。お前ももっと生き方を変えないとモテないぞ？」

ぺろりとアイスを舐めた。

「何だよそれ…俺だって一応身だしなみにも気は使っているつもりだ。」

飯だって自炊してるしな…」

「そんなの関係ない。女心をもっと知る必要があるってことだ。」

百戦錬磨の俺から見たらまだまだひよっこでガキだ。もっと男を磨けよ…俺が惚れるくらいにな」

「余計なお世話だ。お前みたいな妖怪ババアが好きな奴の気が知れないがな」

ふんつとそっぽを向いた。

それにしても有力な手がかりもないまま過ごす日々に正直困っていた。

だからかもしれない思いがけない提案を試してみた。

「思考を変えてみるか？」

「思考だ？」

「ああ…今まで俺たちは被害者を救うために死者を殺してきた。結果、死者が人を襲った後の行為を知らない。それなら…」

その先を話す前に強い言葉で遮られた。

「ふざけるな！人を襲わせて、その後をつけるとでも言うのか？そんなことを俺が許すとても？」

「でもな…このままじゃ手がかりがないじゃないか。それなら一人くらい…」

「おい！一人ぐらいって何だ？」

樹開は激しい憎悪に身を任せ、俺の事を鋭い目つきで睨んだ。つまり逆鱗に触れてしまったのだ。

まずい…咄嗟にそう思ったが、俺はそこで怯まなかった。

「所詮…お前も呪者だったことかよ。他の奴らと違うと思ったのにな…」

「ならお前に良い案があるのか？このまま被害者を増やさないように死者を殺すだけなのか？」

いいか、そうしている間にもどんどん別のところで被害者は増えているんだよ。

現に死者になった人間は救えてないだろうが！」

売り言葉に買い言葉とはこのことで、俺も反論した。だが、樹開は信念を変えなかった。

「俺はな…目の前の人間を救えないのが一番嫌なんだよ。

大事の前の小事ってことで片付けてしまえばそこで俺の存在意義はなくなってしまう。」

お前は経験も豊富で人の死も幾度となく見てきたんだろう？だからなのか？

そんな発言ができるのは…」

俺の生き方を否定してきた。

普段ならお前に関係ないといって突っぱねるところだが、

どうしたわけかこの時にはそんなことができなかつた。ただ黙っていることしかできなかつたのだ。

どうして？

そのように悩んでいるうちに樹開は立て続けに話した。

「その考えだけは賛同できない。

それに、そんなことでは、お前ともこのままでは行動を共にできない」

ぱつぱつと切りつけるように俺に投げかけると、そのままそこから立ち去ろうとした。

「おい！待てよ」

俺もそんな樹開の態度に思わず、声が出てしまった。だが、彼は振り返ることはなかつた。

そのままさつさとその場から姿を消した。



「何だよ…全く…」

一人で取り残された俺はぼやきながら、もやもやした胸の内をど  
うすることもできなかった。

何でこんなに俺はあいつのことを気にするんだよ…

樹開とは三日ほど会わなかった。

口喧嘩の後にすぐ合うほど俺も無神経ではなかったし、そんな気分ではなかったのだ。

しかしこのままでは進展しないのは事実だ。どうしたらいいのか  
良い案も浮かばなかった。

はぁ…何であんなに怒るのか分からないが、俺も軽はずみな言葉  
を口にしてしまったのかもしれない。

長く生きすぎると、人の死が分からなくなる…目の前で死んだ人間は  
軽く百を超えている。

自分の感情も死んでしまったのだろうか？

だからかもしれない。樹開の言葉が俺という人間に警告を出した。  
だからこんなに考えてしまうんだ…

うじうじと悩んでいても仕方がないと思い、ため息混じりでいつもの  
日課のように部屋を出ようとした。

すると、そこには樹開の姿があった。

「お…」

声にならない声が出た。

樹開も話を切り出そうにも上手く切り出せないでいたのか無言で、目を合わせようとしなかった。

しかし俺はそんな樹開の姿を見て強気の姿勢を崩すことはしなかった。

「何の用だ？」

すると樹開は照れくさそうに頭をかきながら、

「悪かったな…俺も言いすぎたよ」

素直に謝った。

俺はその言葉で正直ほっとしていた。このまま別れることだけは避けたかったのだ。

「まあ…俺も悪いって言えば、悪いかもしれないからお互い様だ…」

内心は嬉しかった。樹開と一緒に行動を共にできることが…こんな気持ちはいっつ以来だろうか？

まるで遠い昔に忘れてしまったかのようにだった。

それから今までのように二人で呪者探しに出掛けた。

「なあ…聖夜」

樹開は歩きながら俺に話しかけてきた。

「何だ？」

「お前って結婚したことあるのか？」

今までそんな質問されたことがなかったので、どう返すか悩みもしたが正直に話すことにした。

「正式な結婚は一回だけだ…俺が呪者になって二年後だ。

まだ幼い俺は自分が呪われた存在だということを実感できないメルヘン野郎だったんだよ。

理想を追い求めてぱっと恋愛をしてみた…その結果が結婚だ」

「それは上手くいったのか？」

「いくかよ…俺は年を取らない。

しかし相手は年を取るんだ…いくら好きでも相手は先に死んでしまっただ…

その事実を知ってしまった時に結婚は止めようと思った。足かせがない方がお互い自由に生きられるだろ？」

「随分な言葉だな…それなら子どもは？」

「まあ…いたな。しかし俺は自分の子どもが成長していくのを見て耐えられなくなり、

そのままそこから逃げたんだ…だから結婚生活も十数年で破綻さ。

後は気ままに男が欲しくなったらその場限りで…」

「節操なしかよ。男の発言かと思うぞ」

「それが俺のスタイルなんだよ。そうでもしないと気が変になるからな。俺はこう見えても女なんだ。」

普通に人を好きになりたいし、触れ合いたいとも願う…」

「それで、その子どもはどうなった？」

「さあな…末裔が現代に生きているかもな…」

まるで他人事のようにだが、それはそうだ。

四百年近く前の子どもの事などもう忘れてしまった。

しかし…願うことならどんな形でもいい。残っていてくれればと切に願う気持ちもあった。

そんな恥ずかしいこと樹開には話せないな。

「お前のことは同情するよ…だから俺もお前に協力しよう。」

こんなふざけたゲームのような行為は終わりにしてお前も普通の人間に戻れ…」

「頼もしいな…」

「話しついでだから言っておくが、俺がお前のこの前の発言に腹を立てたのには理由がある…」

「え？」

「俺は…父親を見殺しにされたんだよ」

樹開は俺に心を許してくれたのだろうか？そんな話を淀みなく話して聞かせたのだ。

「俺が幼い頃、同業者にな…どこの誰だか分からないけど、結果的に大事の前の小事ってことで片付けられた。」

獲物を追っついてその罠にされたんだよ。あいつら…俺の父親を餌にしたんだ。

今回のように足取りのつかめない集団の背景を探るためにあえて助けなかった。

しかも俺の親族もそのことを咎めることはしなかった。そいつらの目的は形違えど同じだからな…

だけど…そんなふざけた行為は二度と起こってほしくない。それが本音だ。

俺が特異な力を持っているのは弱者を助けるためだからな…」

その言葉には切なさや信念が込められていた。樹開の気持ちは俺にも伝わった、しかしそれは理想論だ。

救えない人間も存在はするのだ…確実に。だが、俺が今ここで話しても何にもならない。

こればかりは本人が経験しなくては…

そのまま黙って話を聞き、樹開という人間をもっと知ろうと思った。

それから彼は自分の話を続けたが、は不快に感じることもなくかえって興味を引かれるものとなった。

樹開は年と関係なく、独特の雰囲気の人だ。弱さもあるが、それを隠さない。

大抵の人間は見栄っ張りか変な謙遜の仕方をする。

いろんな人間と接してくると最初の話口調で分かるのだ…

だからそんな人間の話を俺はあまり聞く耳を持たない。上辺だけで本心が見えない人間が大嫌いだからだ。

しかし樹開は違う。自然なのに自分を隠そうとしない。これは極めて稀な人間だ。

幾年振りかに出会えた同じ波長の人間に俺は引っ張られてしまったのだろうか？

妙な胸のざわめきを不意に感じている。

「それでだ…俺からも提案なんだが…」

樹開の話が切り替わり、はっと我に返った。

いかん…いかん…一瞬であつたが思考が飛んでいた。

しつかりしろと自分に言い聞かせて話を聞いた。それから霧唯の話す今後の動きを俺も納得して受け入れた。

それからすぐに街を探索して死者の気配を探した。

街が大きいといろんな者の気配がすると樹開は話す。しかしその中でも空っぽの死者は特定しやすいらしい。

いつも通りに数時間で一人捜し当てたのだ。

「いつまで経つてもこいつらが減らない現状は異常だな…」

物陰に隠れながら呟いていた。それは俺も同感だ。

だからこの件は早く終わりにしたい…俺の探す大量殺人鬼の手がかりが何もないのだから。

「あいつ…ここで襲う気か？」

殺風景な街角で二人の男女が話し合う。男の方が呪者だ。

ぱっと見イケメンの二十代男性といったところか…

女の方はいかにもほいほいと男の誘いに乗りそうなタイプだ。

あいつらも人を選んで物色しているのが分かる…



「行くか？」

俺が樹開に出るタイミングを伺うが、俺一人でいいと断られた。そのまま樹開は散歩でもしているかのようにゆっくりとそいつらに近づいた。

そんな樹開に二人も気づき、同時に樹開の方を見た。

「君…そいつから離れた方がいいよ。殺人鬼だから…」

核心に迫る話をいきなり女の方に話した。

「はあ？誰？あんた」

当然、女は事実を受け入れるはずもなく、何こいつといった態度だ。

一方で男は無言になっていた。

樹開の話は死者の間に広まっていたのだろう。逃げる気配を瞬時に感じた。

このままでは逃げられる…

そう思った時に樹開は銀杭を懐から素早く取り出すと、男の腕に突き刺しそのまま壁に貼り付けた。

相変わらず反応が良すぎるのに感心する。

女はそれを見た瞬間に悲鳴を上げながらその場から立ち去った。これで邪魔者はいなくなっただ。

俺はというと未だにその場に出れないでいたが、相棒のことを信

頼してそのままにいることを選択した。

「さて…どうしたものか…」

女性が行ったことを確認すると、樹開は死者に向け激しい殺気を放った。

死者もそれを感じて殺されることを直感したのだろう、慌てて逃げることを考えた。

すると、

ずり…

壁に打ち込んでいたはずの銀杭が緩んできた。

それをチャンスだと思い、死者は無理やり銀杭を引き抜くと大きく飛び上がり逃げたのだ。

「あ…」

樹開はそれを見るなり声を上げた。いや…わざとらしいな…

そもそも今回の作戦は、死者を半殺しにして逃げさせることが目的だったのだ。

所謂、囷を人ではなく死者に変えるという発想の転換だ。

しかしその効果はきめんだった。

樹開の放つ殺気は本物だし、躊躇のない行動がそれに繋がり死者

は逃げることを選んでいる。

「ご丁寧に銀杭も抜けやすくしてあったしな…だが、逃げられた後の態度はどうも芝居臭い。」

「行つたか？」

「ああ…」

脇から俺は姿を出して、樹開に確認を取った。

あまり近づきすぎるとまずいので少し時間をおいてから後をつけることにした。

距離が離れすぎても相手を探せるように仕込みもしていた。樹開は銀杭で腕を突き刺すのと同時にマーキングをしたのだ。

「範囲はどのくらいまで？」

「三キロ圏内ってとこだな…側に来れば微調整は俺の感覚でできるから大体で十分だ」

俺にはない能力だからこいつは重宝な存在だな。

死者の後をつけること更に数時間でようやく大きな展開を迎えられそうだった。

## 103話

「ここか？」

夜の繁華街。目の前にはネオン街に相応しい人の欲の塊のようなビルが建っていた。

入っているテナントは金融関係と風俗という感じで、まともな人間がふらっと入れるような場所ではなかった。

人目を阻む輩がいるとは思えないが、気配はここに集中している。樹開の能力に間違いはないと信じていたので、そのまま階段を上がって中に入ることにした。

「何階だ？」

「三階だな…クラブみたいなのうだが、俺たち入れると思うか？」

テナント表を見て二人で顔を見合わせた。

「大丈夫なんじゃないか？暗いから年齢もわかりっこない。

それに…こういう所は黙認で入れるんだよ。未成年だとしてもな

…」

「行ったことあるのか？」

「ない」

「あっそ…」

ドンドンと音楽が外まで漏れてくる扉を前に覚悟を決めた。

そこに何かがあるのか知らないが、中に入らなければ始まらない。

ぐいっと鉄のつてを引っ張るとそこは、別世界だった。

耳をつんざくようなうるさい音楽と人ごみ、

煙草と酒と人の汗やら香水の匂いで充満していて息苦しかった。

俺はこのような状態では気配を察することなどできなかつた。

樹開が人ごみを掻き分けながら進むのに黙ってついていくしかない。

しかしすごいな…こんな場所があるのか。

見たことのない光景に好奇心が湧いてくる。見たこともないような外人もたくさんいる。

「ねーねー…君。いつしよに遊ばない？」

ふらつと二人組みが声をかけたが無視した。

そのまま真っ直ぐ奥へと進むと、一つの部屋がある。どうやらスタツフルームのように思えるが…

「ここだな…」

樹開はそこで一度立ち止まると、懐から銀刀を取り出す。

それだけで緊迫した空気が流れる。こんなやばいものを取り出し

ても周囲は誰一人気にしていない。

がちゃ…

ドアノブを回して中を覗く…すると、

「待っていたわ…」

中にはスレンダーな美女が立っていた。

こちらの気配に気付いていたようだ、取り乱すこともなく冷静な目で俺たちを眺めた。

それからドアを閉めて中に入ると、奥にいる人物に目がいった。

「あいつ…」

樹開がマーキングをつけた死者だった。怯えるように影に隠れていた。

「俺たちを知っているってことは…お前が首謀者か？」

「まあ、そうなるわね…」

余裕すら感じさせて艶めかしい目でこちらを見る。

「ちまたで話題の連続猟奇殺人事件もお前の仕業か？」

「はは…あなた一番最初に生まれた呪者なのに随分鈍いのね…」

「はあ？」

「私が残した痕跡とあれは別物って感じなかったの？」

偉そうに…挑発してるのか？こいつは…

でかい胸しやがって、かなりむかつく…

「いいわ…それよりもあなたがここを知ってしまったのならもう終りね。私はこの街から消えるわ」

「え？」

あっさりと戦線離脱を口にする。開き直りとも思ええる態度には樹開も俺も戸惑った。

何故戦わない？

「今のあなたにとってもその方がいいと思うけど？」

だって…全員が揃ってからでないとおあなたの望みは叶わないんですよ？

それなら今は戦わない方が賢明でしょ」

「そうは行くかよ…」

樹開が前に出た。

「はい、そうですねっってお前を逃がすわけにはいかないだろうが…お前があいつらを操っていたんだろ？」

死者をちらりと見ると、その女はふふっと笑った。

「ええ…そうよ。私が動かない代わりに彼らに働いてもらったの。私の能力は死者を操る…彼らが私の必要とする欲を持つ人間を集めてきたの。」

「まあ…でも…ばれちゃったからもう用済みかな？ねえ…」

死者は怯えていた。がたがたと震えて止めてくれと懇願した。

しかし女がぱちんと指を鳴らすと、隅にいた死者は断末魔を上げながら燃えて消し炭になりながら消え去った。

俺たちは何も出来ずにその様子を見ているだけだった。

「はい…これで終わり…と。これでいいでしょ？じゃあ、私行くから」

「ふざけるな」

樹開が銀刀の切っ先を相手に向けて立つ。

しかしその女は全然動じない。というか逆に笑っていた。

「あのね…あの子の望みが叶わなくてもいいの？」

「ここで私を殺せばどうなるか予測も付かないわよ？それでもよければどーぞ…」

両手を広げて無防備な状態で樹開の前に立つ。

ぎりつと樹開は奥歯を噛み締め悩んでいた。

「私はね…色欲の呪者。だから人の想いも手に取るように分かるわ…」



あなたは彼女のことを好きなんですよ。それなら止めときなさい。ここで私を殺しても何にもならない…互いに損するだけよ」

こいつ…そんなことまで分かるのかよ。

樹開の気持ちまで掌で転がしていた。

「くだらない正義感を振りかざす時じゃないってこと。

男の子は勝負時つてのをきちんと見極めなくっちゃモテないわ」

結局、樹開は何もできなかった。

そのままそんな樹開の横を通り過ぎると、俺の方をちらりと見た。

「私たちは共存する道を選んだ方がいいと思わない？そうすれば誰も傷つかないのよ？」

まあ…私は生まれてそんなに経験年数も少ないけど、そう割り切つて生きる方が楽なのよ。

ねえ？先輩…」

俺には何も言えなかった。ただそいつの話を聞くことしかできなかった。

「あの僧侶の目指す高みは何か知らないけど、

私たちが殺し合いをすればそれこそ思う壺のような気もするけどね…」

長い髪をなびかせそのままドアの方まで歩いた。

「それじゃあね。十七年後あなたと出会わないことを願っているわ。

あ…そうそう、私を見逃してもらおう代わりに一個だけ教えてあげる。

連続猟奇殺人事件の犯人ももちろん同業者だけど、彼には近寄らない方がいいわ。

痛い思いしたくなかったらの話だけどね」

「へー…その口ぶりだと会ったようだな？」

「会ってないわ。聞いただけ…でもそれでも会いたいなら教えてあげる。」

次に起こる殺人現場を調べなさい。そうすれば分かるはずよ」

「殺人現場だ？」

「ええ…そこにいる彼は優秀な能力の持ち主だから、殺害直後の現場にすぐ連れて行けば分かるはずよ。独特の匂いと気配がするはずだからね」

「お前…何が目的だ？」

ぺらぺらと話すこいつには付いていけなかった。呪者らしくないからだ。

「私はね…望んで呪者になったの。それなら楽しまなくっちゃ損でしょ。」

百年以上生きていても楽しいわよ。それじゃあね。ばいばい」

まるで親しい友人にさよならをするかのように挨拶をすると女は部屋から出て行った。

俺と樹開は嵐が去ったようにぽつんと取り残された気分だった。

「あいつ…何なんだ？呪者とは思えないぐらい楽観的だ…」

未だに理解できなかった。

樹開は、自分が何もできずにいたことを悔やんでいたのかもしれない。

拳を握りしめたまま動かなかった。

帰り道で樹開は俺に話した。

「俺…矛盾してるよな」

「ん？」

「正義感を振りかざして弱者を守るために、悪を滅ぼすって話していたのに…」

「あいつと対峙した時にそれができなかった…お前の…望みが叶わなくなるかもって思って…その…」

「…」

「馬鹿だよな…自分の信念すら貫けない腑抜けの退魔師…」

「はは…自分の父親にされたことを嫌って、いきがって、自分ならできるって勝手に思い込んで…」

「所詮ちっばけな信念なんだよ…」

「自分を責めているのがよく分かる。」

「樹開の心の叫びは俺の心にも深く響いて届いていた。」

「悪い…」

「謝ってきたが俺は樹開のことを情けないなど思わなかった。」

「何故謝る？」

「え？」

「お前が…その…俺のことを…えっと…考えてくれたからだろ？」

照れくさくつて顔から火が出そうだった。

そんな恥ずかしさを紛らわすかのように樹開の胸倉をぐいっとつかんだ。

「それにな。全てを救える正義なんて存在しないんだよ。お前が出来る範囲でいいんだ…」

一人の人間が出来ることには限りがあるんだよ！いいか！覚えとけ！」

額がくっつきそうなくらいの距離で熱弁してしまった。

樹開も俺が接近したことで驚いたらしい、柄にもなく焦っていた。

「あ…ああ…」

翌日、俺たちはつい先日あった殺戮現場に来ていた。

そこはゴミ捨て場だった。

ばらばらの死体が隠されることもなく無造作に捨てられていた現場だった。

血痕の後が未だに残り、そこには誰もゴミを捨てようとしていなかった。

やはり気味が悪いということもあったのだろう。

「何か感じるか？」

樹開の率直な意見が聞きたかった。

「はつきりとは言えないが、亡くなった者の残像思念が薄っすらと残っている……」

すると樹開は目を閉じると、自分の五感を研ぎ澄ませぶつぶつと誰かと話し始めた。

俺には何をしているのかさっぱり分からなかったが、奴の能力を信じることにした。

数分後… ようやく樹開は俺の方へと視線を移してくれた。

「襲った奴の特徴は大体分かったよ」

「え？」

突然そんなことを話すものだから、目が点になってしまった。

俺が一ヶ月かけて出来なかったことをこいつは数分で成し遂げってしまったのだ。

だから説明を求めた。

「退魔師は靈魂との繋がりが持ててこそ、一人前なんだ。」

万物の流れは生と死から成り立つ。その全てを把握できてこそ、術式を作り上げることができるとて訳だ……」

「なるほど……お前らは生物の生死を飯の種にしてるってことか……」

「随分な言葉だな。ま……否定はしないがな。それで死者が教えてくれた……殺した者の特徴を……」

どんな奴なのか興味もあり、自分の思い描いている人物像が思い浮かぶ。

「細身で影の薄そうな少年だ……」

「え？」

そこで自分の想像を覆された。

てつきり、筋肉もりもりの殺人を屁とも思わない二十代の狂乱的な男だと思っていた。

「想像とは違ったんだろ？」

おれの顔を見るなり樹開は意地悪そうにそんなことを話した。

「そ……そんなことはない」

「別にいいさ……だがな、そいつはそんな見てくれとは関係無しに被害者を解体したらしいぞ。」

子どもが無邪気に虫をばらばらにしたりすることがあるだろう？  
それと同じだ。何の感情もなしに人の手足を引きちぎり、胴体も  
ねじり切っている…

表面とは大違いってことだ」

流石の俺も楽観的に笑うことはできなかつた。

「もう一つだけ特徴がある…」

これ以上に何かがあるのかは知らなかつたが、黙って続きを聞くこ  
とにした。

「盲目だつてことだ」

「は？」

「そいつが目を開くことが一度もなかつたそうだ…」

しかしその状態でも被害者をばらばらにできたのは特異な能力の  
せいなんだろうよ。

つとまあ、人物像はそんなところだ」

「盲目の少年ね…歪んでいるって言えばそうなるのか？

だが…不気味な部分が多すぎる。俺はその話を聞いただけでも尋  
常ではない力を持っている気がするが…」

正直な気持ち話をすと、樹開もその言葉に付け足すように話した。

「その感覚は間違いではないと思う。

俺もその呪者とやらの残っている些細な気配を感じ取つたが…やは  
り普通じゃない。



まるで静かな大型の猛獣だ。経験の浅い自分では敵いつこないのは分かりきっている」

「ふん…相変わらずの諦めの良さだ…」

「現実を見てると言えよ…虚勢を張って無駄死にはご免だからな」

「はいはい…それで、そいつのその後の行動は？」

俺は無駄話を続ける気はなかった。あっさりと話題を覆して元に戻した。

「薄っすらとだが、東の方にそいつの気配が残っている気がする。

こここの事件から数日経っているが、独特の匂いだな…」

退魔師という奴は便利だな。自分以上に呪者の気配に敏感だ。

「それならその場所へお前も付き合ってくれるか？」

「勿論だ…」

その決断が間違っていたのかは今でも分からない。

でも…そのことが樹開の世界を変えてしまったことは事実だ。

生ぬるい風が吹き荒れる街の外れにある廃墟の鉄工所。

びゅうびゅうという音がうるさく耳の中に響き、真っ赤に染まった建物が目の前に聳え立つ。

時刻は五時を過ぎたところだった。

樹開とバスを乗り継いでここまで来たが、正確な場所を特定するのに時間が掛かった。

「こんな場所がこの街にあったのか…」

俺はここに来たことがなかった。車を持たない者の行動範囲には限界があるからだ。

一ヶ月かけてこの街の半分しか調べることができなかった。人の多い場所を中心に探していたのだから、こんな廃墟は必然的に後回しになってしまう。

カラスが数羽鳴いている…

いかにもって雰囲気は十分伝わった。そして確実に何かの気配もこの建物の中から感じ取れた。

「いるな…」

「お前もようやく分かったか？」

「俺はお前と違って、呪者が近くにいないと分からないんだよ」

どんな奴がいるのか想像もつかない。

「もう少し図太い神経の持ち主かと思っただけど…お前、繊細なところもあるんだな」

「うっさい…そんなお前も大丈夫なのか？ 駆け出しの退魔師に勤まる仕事とは思わないがな」

「ふん。余計なお世話だ」

俺たちはそんな他愛もない会話ができるぐらい樂觀視していた。

しかし…

そいつと対峙した瞬間に四肢が固まって動かなくなり、生まれて初めて恐怖というものを感じたのはそのすぐ後だった。

無論、死なない体なのだ…

そいつは暗闇の中で獣に似たうなり声を上げていた。

低音で苦しんでいる声にも聞こえる。だからすぐに居場所は分か  
った。

建物の中に入ってから数分で大量虐殺の張本人と対峙すること  
なった。

「お前か？ この街で無差別に人殺しをしている呪者は…」

余裕もあつたからこんなことも口に出来た。所詮自分たちの敵ではないという傲慢な考えがあつたからだ。

「ふう…ふう…」

背中しか見えないその人物はゆっくりと立ち上がってこっちを見た。

「え？」

どくん…どくん…

何故だ？心臓が激しく動く。

その人物は細く綺麗な人形のような少年だった。透明感のある白く決め細やかな肌。

呼吸は荒々しく、珠のような汗をかいていた。

しかしどこか普通の人間とは違う。形容しがたい…

出そうにも言葉が出ない…

今まで見てきた修羅場とは異なる世界がここにはある。

「はあ…はあ…はあ…」

息を切らせてこちらを睨んでいるが、

「こいつ…やはり目が？」

俺よりもそいつの間近にいた樹開が気がついた。

そつだ。目が見えていない。

大きな切り傷のようなものが瞼にはつきりと刻まれて目を開くことができていない。

「おい…樹開。まずいぞ」

俺は樹開を見たが、あいつもそいつの気配に飲み込まれて動けな  
いでいた。

あれ？体が…震えている…

ぶるぶると小刻みに体が震えていた。こんな体験ももちろん初め  
てだった。

まずすぎる…

こいつの持つ力は生半可なものではない。

過小評価していたわけではないが、ここまで接近して自分が狩ら  
れる立場と気付く愚かさ。

そいつはゆっくりと近づぐ。

目が見えていないはずなのに、真っ直ぐ向かってきた。嗅覚だけ  
で俺たちを探しているのだろうか…

容姿とは裏腹にゆっくりと獲物に向かって歩く姿が、猛獣を髣髴  
とさせる。

樹開は未だに動けていない。

このままでは無抵抗のまま殺される。俺は必死に震える手を押さ

えて、武器を出した。

できるか…

それは分からなかった。

しかし今動かないと、樹開は真っ先にばらばらにされるだろう。

「うああああああ」

決して計算などで先など見ていない。本能が俺を動かしたのだ。

叫びながら五本のクナイを相手に投げつけた。

そしてそれを盾に自ら前に進む。

樹開を奴から遠ざけなくては…その一心だった。

しかし…結果は凄惨なものだった。

ぶちん…

俺の右腕が捻り切れ後方へと飛んでいった。

「う…ああああああああああああ」

あいつに触れてはいない。クナイを飛ばして数秒にも満たないはずなのに…

クナイはどうなった？

痛みを堪えながら確認するが、クナイは奴の体を貫くことなくひしゃげて落ちていた。

「どういう…ことだ…」

痛みで頭が痛い…意識も飛びそうだ。

ぼたぼたと落ちる血液の量も相当のものだった。

「聖夜！」

樹開は俺の様子を見て叫んだ。それがきっかけとなって火が付いたのだろう。

「くっそおおおお」

勇気を振り絞って動こうとしていた。

それは最悪の選択だ。相手の力が分からないのに動いた俺が良い例だ。

このままでは樹開は確実に死ぬ。

それだけは避けたかった。

俺のために一緒に行動してくれた人間が死ぬのはごめんだ。



痛みなど忘れ去っていた。体の細胞がただ動けと命じて、脳とは関係無しに足が動いていた。

樹開は銀杭を抜く直前…

そんな樹開の前に彼を守るように俺は体を滑り込ませた。

その直後…

ぶちん…ぶちん…ぶちん…

今まで聞いたことのない音をはっきりと聞いた。

体の数箇所が捻り切れて、俺という肉体は無造作に分断された。

真っ赤に染まる世界…

そして真っ暗な闇の中に叩き込まれた。

もはや悲鳴すらあげられなかった。

意識は首が飛んだ瞬間に失われ、その後のことを自分の目で見ることはなかった。

「は…」

気がついたのはあれから一時間後だ。

体は完全ではなかったが、どうにか見た目だけが元通りだった。

くっついた四肢は今にもずるりと落ちそうな感じでどこか頼りなかった。

そしてそんな外見の反面、内臓はずたずた…臓器が回復するのはもう少し時間が掛かりそうだった。

流した血液も一部固まってしまった。

くそ…張り付いて、なかなか取れない。

頬が地面にくっついていて、どうにか引き剥がすように起こした。

辺りは静かだった。

すっかり日は落ちて月明かりが差し込んでいた。

その場に呪者はいなかった。俺を殺したと思い立ち去ったのだろうか？

そっ、樹開はどうなったのだろうか？そのことだけが心配だった。

ぼおっとする脳内を無理やり起こして、今ある現実を把握するにとだけに没頭した。

やばい…立ちくらみがする。

こんな経験は今まで一度も味わったことがない。

生きながらに体をばらばらにされるなど…

霧がかかったように白く、視界は狭くなっていたが、倒れている人影を発見した。

「樹開…」

そこからは生きているのか死んでいるのか分からなかった。

そつと近づき彼の口元を見た。

すると、息はあった。

それだけを確認できてまずは安心した。だが、目は開いていない。気絶しているのだろうか？

事態は一刻を争う。それならば、病院に運んで調べてもらうしかない。

そう決断すると、俺は樹開をおぶって片道二キロの距離を歩いていった。

樹開はすぐには目覚めなかった。一週間寝たままの状態で過ごしていた。

医者は何度も調べていたが体の異常は見られないと話した。

後は脳障害のケースを疑い、強いショックが原因かもしれないと話した。

その原因は明らかに俺だ。目の前で残虐にも引きちぎられたんだからな…

俺のような存在が病室に何度も出歩くのはまずいと思って、依頼人の男の関係者に様子を見てもらうよう頼んでおいた。

それにして…あいつの家族の誰一人として見舞いに来ない。

もしかしたら、母親も兄弟もない孤独の身なのかもな…

そんな境遇を勝手に想像しつつも樹開の回復を心から願ってはいた。

依頼人の側近である多田は、相変わらず俺の事が気に入らないように、樹開のことを話しても良い顔をしなかった。

「もう厄介事は勘弁してください。

これも仕事ですからあなたの言うことにとりあえず何でも従いますよ。

「だけど早く結果を出してください…結果の伴わない仕事は、仕事と叫べないんですよ？」

流石にその言葉には力チンときた。

俺は多田のむ名倉を掴むと壁に叩きつけた。

「依頼の仕事を果たした結果がこれなんだよ！ぐだぐだ言ってるとお前もとばっちりを食らうぞ？」

気迫だけでこの男を殺せそうだった。だが、この男もそんな俺の迫力に負けず踏みとどまっていた。

「わ…分かりましたよ。手を離してください」

無抵抗のまま懇願したので、

「ふん！」

半ば強引に掴んだ手を離す。

多田は、ずれた眼鏡を直してネクタイを締め直すとそのまま早足でそこから立ち去った。

「人の気も知らないで勝手な野郎だ」

自分の力の無さと軽率な行動を棚に上げて人を批判する俺も俺なんだが…

とりあえず樹開の顔だけでも見て帰ろうと思いい病室に入った。

すると、樹開の体に動きがあった。

「…」

指先が微かに動いた。それから手、腕…胸も大きく動いた。

これは…目覚めか？

俺は近寄って細かく樹開の体の様子を見た。

「うっ…」

声まで上がったことで俺のテンションも一気に上がった。

「おい…」

俺はそのまま無意識に樹開の体に触れようとした瞬間、びくんと体が大きく動いた。

すると目がぱちりと開くと俺の方を見た。

良かった…そう思って声を掛けようと思った次の瞬間、

「う…ああああああああああ」

混乱しているのだろうか？声を張り上げて叫んでいた。

俺は抑えつけるように落ち着かせることに必死だったが、それも時間が解決してくれた。

「樹開？大丈夫か？」

落ち着きを取り戻した頃にそう話しかける。  
すると、樹開は俺の言葉に今の状況を整理しようとした。  
肩で息をしていたので、呼吸をゆっくりと整えて俺を見た。視界  
がまだぼやけているのだろうか？  
定まった感じではない。

「うん…と…聖夜…か？」

思い出すのにも時間が掛かるようだった。それもそうだ。気がついたら病院にいたんだからな。

ゆっくりと体を起こすと辺りをきよろきよろ見ていた。  
ここが病院だということ把握しようとしていた。

「あのさ…俺…何でここにいるんだ？ここって病院だよな…」

え？…俺は耳を疑った。

戦いの影響なのだろうか。樹開は今の状況とその前の状況が繋がらない状態だった。

「思い出せないんだよ…今までのことを。お前が…聖夜だってことは分かる。」

でもそれ以外のことが…まるで…白紙のようだ…」

嘘だろ？まさか…あの呪者との戦い。そしてそれよりも前のことまで思い出せていない。

「自分の名前は？」

「それは分かる…真払樹開だ。俺は学生なのか？それとも何か仕事を？」

「お前は退魔師だ。闇に暗躍するものを滅ぼす存在…それも分からないのか？」

「たい…まし？何だそれ…」

まさかここまでとは…

原因は今すぐには分からなかった。



とりあえず樹開がどの程度記憶があるのか知りたかったので、少しずつ覚えていることを聞き出してみる。

すると分かっていることは俺の存在だけだということだった。それ以外の存在が記憶には皆無だった。

「家族は？」

「何も…思い出せない。誰の顔も…」

頭をくしゃくしゃとかきむしり、必死に思い出そうとしていた。

よりによって今まで出会った人間の中で俺しか覚えていないのは不幸な話だ。

ひな鳥が初めて見たものを親だと認識するかのように彼は純粹な眼差しで俺のことをじっと見ていた。

「それと…変なんだよ。まるで心が空っぽになってしまったかのよう…  
うで…」

その…自分の心が無になってしまったかのように何も感じない…  
感情の起伏ってやつか。それが起こらないんだ…」

表情は引きつっていた。そして寂しそうな目をして両手を震わせていた。

「…心まで…崩壊してしまったのか？」

落胆を通り越して絶望を感じてしまう。

記憶と心を失ってしまっただけからどのよう生きるのだ？  
人らしい生き方ができなくなってしまっているのではないか？

くそ…くそ…

俺と係わってしまったばかりに、樹開の人生はめちゃくちゃだ。

それは俺の心にも重圧のようにはかかっている、何も出来ない自分に腹が立つ。

「悪い…変なことばかり話して…別にお前が悪い訳じゃないのにな…  
だけど今の俺にはお前が…聖夜ということしか分からないんだ…  
すまない…」

言葉がまるで棘のように突き刺さる。樹開の一言ひとことが拷問に近かった。

そんな俺を気遣ったのだろうか、樹開は不安な気持ちを必死に隠していた。そして笑った。

「でも…それでいい。それでいいよ…ここから始めれば…  
俺という人間が今日生まれたんだ。俺は一人じゃない。お前という人間を覚えていたから…」

そんな…そんな言葉で今の境遇を片付けてしまうのか？

涙が出そうだった。

自分の浅はかな行為で一人の人間をめちゃくちゃにしてしまったのは事実。

それなのにそれをなかったことのように振舞われてしまった…俺は何ができる？何もできないじゃないか。

岐路に立たされた気分で呆然としていると、

「ここは病院なんだろう？それなら医者が何とかしてくれるだろう。記憶障害なら時間が経てばどうにかなるはずかもしれない」

「いや…しかし…」

「お前は俺の記憶が戻る手助けだけをしてくれよ。

きっとこれも一時的なものだからさ…大丈夫。少しすれば記憶も心も治る。」

だからその心配そうな顔は止めてくれ」

樹開はそんな風に前向きに考えていた。しかし俺は逆に不安だった。

呪者は特異な能力を持っている。そこに例外はない。

だから俺をばらばらに引きちぎったのも、

樹開の記憶と心を崩壊させてしまったのもきっと何かの能力だと思っただ。

だとしたら、普通の人間の彼には修復不可能かもしれないということだ。

悪い方に考えるのは癖かもしれない。しかし嫌なことばかりが浮かんでくるのだ。

俺も考える時間が欲しかったし、今の樹開を見ているのが辛かった。

明らかに別人のようだ…

「もういいよ…後は自分で何とかするからさ。医者にも適当に目覚めたって話しておいてくれ」

今出来るいっぱい笑顔で樹開はそう話したが、俺には愛想笑いもできないほど心は空虚だった。

「あのさ…最後に教えてくれ。俺の事どこまで知ってる？」

樹開は俺が呪者だということを知っているのだろうか？

偽りの自分の姿を見ているのではないか？それを確かめたかった。

「お前が俺といつも一緒にいたということ位かな…素性など知らない。」

でも心の中に残っていたんだ…」

「そうか…そうだな。確かにそうだ…」

自分の話などできなかった。そのまま振り返ることもしないで病室を出た。

「はは…何やってんだよ…俺…」

暗い通路の中で壁に頭を打ちつけて、自分の愚かさを呪った。



あの日以降：定期的に行われていた連続猟奇殺人事件はなくなつた。

俺とあの呪者が出会ってしまったことで、この街に居づらくなつたのだろうか？

色欲の呪者も同様の行動を取っていたのだからその線が濃い。

樹開はというと、とりあえず入院をさせられ精密検査が行われた。脳内の写真を何枚も撮られうんざりしている様子だった。

俺も見舞いには行つた。記憶が戻る兆候があるのか知りたかつたからだ。

しかし一週間経つても二週間経つても彼の記憶は戻らなかつた。その間にも樹開の家の話や能力の話や能力の話や話を聞かせていた。

「へー…俺ってそんな便利な能力を持つてるんだな。実感がまるで湧かないが…」

にぎにぎと拳を握ってみせたが、そんな簡単に彼の能力が出るはずもなく、

空しく見つめるだけだった。

「体は元気なのに、入院つても暇なもんだな…早くここから出たいよ」

穏やかな顔で窓を眺めていると、初夏の香りを風が優しく運んで

くれた。

いつになったら樹開は全てを思い出すのだろうか…

焦る気持ちもあったが、今はゆっくりと療養してもらおうとしかできなかった。

一気に過去の記憶を詰め込んだところで、戻るといつ訳ではないのだから…

こんなに人一人について考えるのも行動するのも久し振りだった。

そうすることで、人間らしかった自分が思い出される。こんな時代もあったのだと…

俺は長生きする度に自らを殻に閉じこもらせていた。  
強い自分でいけないといけない。自由に生きてはいけない。  
いろんな課題を自らに与えて生き方を縛っていた。

そのせいで…心も固く閉ざされていたのだ。

やれやれ…危うく完全なる人ではなくなる所だったな…

このような時間も必要だということをふと立ち止まって考えることができた。

「お前のことは俺もきちんと責任を持つよ…原因は俺なんだからな」

自然とそんなことも素直に口に出た。しかし樹開の表情はあまり浮かないものだった。

「そのことだけど…罪悪感や責任感で俺と接しているのならもう止めてくれ。」

そういつた考えは…俺には惨めなんだよ」

「え？」

「責任がどうか…償うとか…そんなことはお前をただ縛っている感じで嫌なんだ。」

だからお前はもっと自由に振舞ってくれよ。

見ての通り俺に外傷は何もない、失われた記憶程度なら、さほど不自由は感じてないさ…」

樹開は笑顔で俺の事を常に心配してくれていた。

その度に何度も思う…どうしてこいつはそこまで俺にできる？

俺はこいつに必要なものを奪ったというのに…

なら、俺も素直な気持ちで接するしかないんだな。

自分の気持ちを誤魔化し隠して…やだな年を取りすぎるとそんな簡単なことも出来なくなるなんてな。

ふっと一笑してから、俺は

「お前が好きだからだよ」

自然と出た言葉だった。本当に心の底から思っていたのだ。

いずれは伝えなくてはそう思っていた言葉が今楽な気持ちと共にふっと出たんだ。

「…」



樹開は予期せぬ出来事に目を丸くして、自分の身に何が起こったのか理解することができなかつた。

「え？今…何て？」

「二度も言わない。まあ…それだけでお前という理由は十分だろ？だから俺はこれから…来るからな」

照れくさはあつた。自分でこついうことを話すのも何年振りかも忘れてしまったのだから…

でも悪い気はしない。それよりも心が軽くなった気がする。

それと同時に樹開の反応はどうなのか、どきどきしてしまったが、彼も嬉しそうに微笑んでいた。

良かった…

その表情だけでほっとしてしまう。

二人でしばらく無言のまましていると、樹開はその空気から逃れたのか、

「んつと…あの…早速で悪いけど、甘いもの買ってきてくれないか？無性に食べたい」

などと切り出してきた。だが、ありがたい。その言葉は俺の事を認めてくれたということだ。

「いきなりそれかよ。図々しい奴だな。ま、いいさ…ちょっと待つ

てる。下の売店で買ってくるから」

足取りが何故か軽くなる。心もそれだけ軽くなったせいだろうか？  
病室から出て、広い院内を歩いて売店を探し回った。

幸い売店は一階の受付のすぐ側にあった。

そこでチョコやクッキーなどを適当に選ぶと袋に入れてもらい病室まで戻った。

すると……そこには見慣れない人物が樹開の前にいた。

誰だ？俺の記憶ない人物なので、戸惑って身構えてしまった。

そいつも俺の存在にすぐに気がついた。

「お前か…」

俺を見るなりそいつはそう話したが、明らかに人を憎む眼差しで俺のことをじっと見ていた。

その人物は四十代、背が高く、細身の男性で短髪。黒い衣服に全てを身に纏い、闇の住人のようだった。

雰囲気も独特で、どこか樹開に似ていた。

まあ…彼ほど柔軟な空気ではなく、突き刺すような空気だが。

そして俺はいきなりそいつに病室の外に引つ張り出される形になった。

腕を掴まれて抵抗できないまま、廊下へと連れて行かれたのだ。

樹開は心配になりベッドから起き上がろうとしたが、

そいつに「お前は来るな！」と止められると何もできなかった。

そして俺とこいつは二人きりで誰もいない廊下にいた。

「何すんだよ！」

無理やり掴まれた腕を振りほどくと、そいつを睨みつけてやった。だが、全くと言っていいほどそいつは動じない。

死線を潜り抜けた武士の表情のようで、常に死を覚悟している気

配だ。

くそ…嫌な感じだな…俺の苦手な…

「何故お前のような人間が、あいつに近づいている？」

相手は静かに話す、俺はそんな気分ではなかった。

こいつのことを脅威に感じているからこそ強気に出してしまう。

「それは、俺の勝手だろうが。お前は関係ない」

「いや、ある。あいつと俺は血縁関係だからな」

「血縁だと？父親はいないはずじゃ…」

「父親はな…俺は叔父だ。父親の兄で真弘家の当主だ。その当主からの話があるんだ。」

お前は黙って聞く義務がある。もはやお前と樹開の問題ではないのだから…」

勝手な言い分だが無視はできない。そもそも事の発端は俺なのだから。

「どつしると？」

「ここでは人目に付く。外に出よう」

通行人の姿をちらりと見てそう話すと、病院を出て裏庭の芝生の広がる場所まで案内された。

空は先ほどまで快晴だったのに急に雲が出てきて暗くなる。正に今の状況にぴったりだった。

「それで？あんたは何者だ？」

素性を知りたかった。樹開の叔父で真弘家の当主というだけでは何も分からない。

しかもこいつは明らかに俺の事を嫌っている。それだけは、はっきりと分かる。

「真弘千夜だ…先ほども話した通り、真弘家の当主だ…」

真弘家の話はお前も聞いているのだろう？それなら単刀直入に話そう。

お前は呪者なるものだな？」

「ああ…」

俺がはっきりとその事実を認めるとより一層相手の怒りはこみ上げていた。

「我が真弘家が長年かけても滅ぼせない異形の者たち…」

そんな貴様がよく樹開と仲良くできたものだ。樹開の気が知れないな」

俺という存在を全否定で、認めたくはないようである。

「樹開の前から消える…」

「は？」

「樹開の記憶がないのも知っている…今、あいつを刺激するのは得策じゃない。」

それならば静かにあいつの前から消えてくれ」

敵意をむき出しにして俺から目を逸らさなかった。

これは紛れもない…殺意が俺に向けられている。

少しでも気を抜けば飛び掛ってきそうだった。

だから俺もぐつと堪えた。

「お前のような奴にも罪悪感はあるのか？まあ…ないだろうな。

化け物みたいなお前が、今更人間に何を求める？人の真似事でもしたかったのか？

それこそ迷惑な話だな…」

こちらは負い目を感じているだけ言い返すこともできない。俺は黙って聞くことだけだ。

しかしちよつとした抵抗も見せたかった。

「嫌だといったら？」

その言葉を口にしたとたん、周囲の空気が変わる。

千夜を怒らせた？

大気が震えて殺気をぎりぎりの状態で保っている。まさか、来るのか？

俺は体中の組織に危険信号を与えて、いずれ訪れるかもしれない危機に備えることにした。

「よくもそんなことが言えるな？」

今にも崩れそうなきりぎりの均衡の中で、千夜は耐えていた。

「お前があいつに近づかなければこんな結果にはならなかった…  
そうじゃないのか？ ああ？ どうなんだ？ 答えてみる！」

「う…」

「どうにもならないんだよ！ お前では…これ以上そんな言葉を吐くのなら貴様を殺す。」

俺の全力を賭けて死ぬことになってもな」

千夜は自分の身内を必死に守ろうとしている。俺と一線交えてもという覚悟が伝わっている。

それに引き換え、俺は無力だ…

こいつの話す通りだ。俺は樹開の人生をめちゃくちゃにしたんだ。

そもそも交わるはずのない人間だったんだ。夢い夢を見ている気分で、意気消沈していた。

すると空からは雨が降り始めた。

最初は優しくぽつぽつと、それから次第に激しくなっていく。

俺たち二人は雨に打たれながらも、微動だにしない。跳ね返る雨が妙に冷たい。

決断をしなくてはならない…髪の毛を雨水で濡らしながら俺の目は次第に空ろになっていった。

体温も下がり思考能力も低下していく。

「わ…分かったよ…」

望みを絶たれてしまったから出た言葉なのだろうか？

感情は入り乱れてぐちゃぐちゃになっていた。考えるのも嫌になり自暴自棄になってしまったのかもしれない。

「二度とここには来るな。もしも俺の意思が伝わらないのなら貴様を殺せないまでも、

一生身動きが取れなくするぐらいはできる…それだけは忘れるな」

憎悪に満ち満ちている…

所詮俺という人間はどこにいても厄介な存在なんだな。

それは何度も味わったじゃないか。

今更それに気がついて何になるといふんだ？

愚かだ…愚か者だ…

結局、俺はやらなくてもいいことを勝手にやって、他人の世界を



ぶち壊している。

そのまま千夜は病室に戻り、樹開に説明をしたが、俺は雨に濡れながら何度目かの人生の絶望を感じた。

そして戦闘ではなく言葉で打ち負かされたのも今日が初めてかもしれなかった。

## 111話

依頼主の目的は自分の望んだ結果通りにはならなかったが、果たしたことになっていた。

多田が俺の元に来ると、

「この街に以前のような凶悪犯罪は絶たれたようですね。これで主人の望みも叶いました」

俺の気持ちとは裏腹にそんなことを満足そうに話していた。

「ここは無事でも次は違う場所が同じになるかもしれない…その繰り返しかもしれないのにな…」

皮肉にも似た言葉で話したが、多田はそれでも構わないと話していた。

「主人は自分の死期を生まれた街で穏やかに迎えたいのが目的でした。

そしてあなたに会うのが口実でもあった…お気づきかどうかは分かりかねますが…」

「今回の事件を餌に釣ったというのか？」

「まあ、そうなりますね。形はどうあれ、あなたには会いたがって

いた。それは事実なんです。そして一時的でもいい、自分の死ぬ時にはこの街にも穏やかになってほしかった。

そんな望みが叶い、先日亡くなりました…」

多田は俯いてぼつりと話した。

俺はあいつが死んで特に心が動くこともなかった。

しかし…どこか体に穴が空いた感覚が残っているのは分かった。

そつだ。感情が死んでいる訳ではないのだ。

「そこで…予定通りに依頼料の残りは以前の口座に振り込んでおきますが…」

口座は以前の所でいいんですね？」

淡々と確認作業を進める多田であったが、俺にも考えがあった。だからすぐにうん、と承諾しなかった。

「ああ…それだが…それは寄付でもしてくれないか？俺には…もう、もらっ権利がないからな」

「え？え？寄付ですか？まさか…」

「どこでもいい。信頼のある事業団体なら尚いい…」

悲しそうに俺は話してみたがそんな想いは多田に伝わるはずもない。

多田はそんな俺を不思議そうに見ていた。予想外のことだからだろつ。

俺はいつでも無然と振る舞い、言葉にしたことを実行していたのだから。

報酬は当然の如く受け取るものとばかり思っていた。

「まあ…その…あなたが…そう言うなら…そのようにしますが、何があっただんですか？」

興味本位で聞いてきたが俺は答えたくなかった。

「言われた通りにしろ！」

ばつさりと切り捨てた。

それから多田は書類を取りだすと、俺にサインを書かせた。そして自らの仕事をさつさと終えて聖夜に挨拶を済ませた。

俺はというと、それからすぐに樹開のいる街から姿を消した。まるで耐えられなくなって逃げるかのように…

俺も弱い人間だったってことだ…

そして十七年もの月日が流れることになる。

十七年前の出来事が、樹開が目の前に現れたことで今も鮮明に思い出される…

やはり、俺は奴の事が気になるのだな。

しかし聞くことはできない。

あの後どうなったのか…

怖いからなのだろうか？

自分のそんな弱さを隠しつつもあいつの前ではいつものように振舞うしかない。

それが、俺の生き方なのだから。

しかし同じことをまた繰り返そうとしていた。

梨絵を巻き込んでしまったことだ。

最初は何も考えなかった。

だが、あいつが首を突っ込んで来るうちに楽しくもなり、ほっとけなくなったのだ。

こいつとなら一緒にやれるかもしれない。そんな単純な発想だ。

それがどうだ？

死の危険に晒して彼女の人生をめちゃくちゃにしてしまう所だった。

これじゃあ、何も変わらないじゃないか？十七年前と同じ行為を繰り返しているだけだ。

自分自身に腹が立ち、同時に樹開のことを思い出し締め付けられる想いだ。

くっそおおおおおおおおお！

心で大きな声で叫んでみた。誰にも届くはずのない自分の声…

人の心を失ってしまうことは単純だった。ただ諦めればいいのだ。何も期待せずにも何も気にしないで、全てを無視すれば出来る。

しかし…俺は常に踏みとどまったのだ。きっと訪れるであろう、自分の希望のために。

この一線は踏み外さないと…

四百年の月日は俺からいろんなものを奪い去ったが、ここだけは揺るがない信念で自分という存在を抑えた。

だから弱りきった時にはここを訪ねる。

先祖供養の意味も込めて、崩れそうな心を奮い立たせるためにここに過去数度来た。

俺の生き方はやはり間違っているんだろうか？何度も同じことをここで考えた。

教えて欲しい…ねえ父さん、母さん…

激しい風が周囲の草を揺らしながら俺の悲しい気持ちごと吹き飛ばしてしまっつ。

## 112話

蝉が五月蠅く鳴くこの季節は、毎年俺にとっては心に残る季節だ。

何故って？

それは具体的に説明はできない。しかし心がそれを覚えているとしか言えない。

三十年以上を生きてきてその半分が、  
空白の存在の俺にはそのことだけがいつも心の支えになっていた  
のかもしれない。

忘れてはいない。

きっとそうだ…

夜道の散歩は既に日課となっていたが、今日は違う。

聖夜と出会って数週間。

俺の回りの世界は確実に変わってきたのだ。いい加減に過去と決  
別をしなくては…

向かった先は一軒のアパートだ。ここにあいつがいるのも知って  
いる。

馴染んだ煙草に火をつけながら、無の感情のままかんと階段  
を上がった。

こんこん…

礼儀正しくノックするのは俺の性格のせいだからだろうな。

そんなどうでもいいことを考えながら。中の住人が出てくるのを待った。

するとすぐにそいつは顔を出して、

「あれ？あなたは…」

そう新堂徳人が緊張感もない発言で俺を見た。

「ちょっといいかな？」

俺は外へ出るように促した。すると彼はただならぬ俺の雰囲気を感じてか、大人しくそれに従い出てきてくれた。

はは…全く持っっている子だ。

二人で並んで近くの空き地まで行くと、足を止めた。

「あの…あなたはこの前和菓子屋の前で会った人ですよね。」

聖夜も話していた…あなたとはいずれ出会うべき人間だとも」

「そうかい…それなら話が早いね。ならお願いをしておこうかな？」



「お願い？」

「ああ…聖夜とはもう会わないでくれるかい？」

「え？」

彼は分からないといった表情を見せた。それはそうだ。何の根拠もない発言では捕らえようがない。

しかし俺も細かく説明はしなくなかった。

こいつには…

「君の事態も知っている。聖夜と繋がってしまったんだろう？」

「どうしてそのことを？」

「俺も関係者だからね。だからだ…君はこのまま大人しくしていてくれないか？」

いずれは聖夜も君も戻るようにする。これは約束する」

強い眼差しで徳人を見たが、彼にはピンと来ていないようだった。

「いきなりそんなことを言われても…」

煮え切らない態度で返してきた。

「はっきり言うと、君には聖夜を守る実力がない。彼女を危険に晒しているようなものだ。」

万が一彼女が死んでしまえば、君も戻ることはないんだ…」

俺は聖夜のことを第一に考えて提案したが、徳人はいきなり現れた俺の事を警戒していた。

まあ…当然か。

「その前に…あなたは、何者なんです？」

「退魔師と呼ばれるものだ。そう、君と同じね…」

その言葉にぴくりと徳人は反応し俺への警戒心をより深めたようだった。まるで殺気が膨らむようだ。

おいおい…同業者にそれはないだろうに。

だが…俺とて同じ気持ちだった。

「君の家系と俺の家系は仲が良くないらしいな…  
だからか…俺も大人げなく君の感情に反応してしまう」

俺はその言葉を合図に動いていた。いや、自然に体が動いたのだ。距離を詰め、徳人の足を刈って地面に倒した。

そして間髪いれずに懐から取り出した愛用の銀杭を頭蓋に突きつける。

「う…」

何も出来ない徳人はあっけに取られて現実を飲み込めなかった。

「殺気を俺に向けたね…それは死を覚悟してるってことなのかい？」  
ぴたりと止めた銀杭は徳人の額数ミリの所で様子を伺う。

「そもそも死ねない体で、死の覚悟はないか…」

すつと銀杭を下げるとそのまま立ち上がって殺気を解いた。

「はあ…はあ…」

徳人は俺の一瞬の殺気にあてられたのか、呼吸が荒くなっていた。

情けない…これがあの万人に恐れられた新堂家か？

113話

「やっぱり止めるよ。この程度の実力ならあいつといる資格がない  
…」

「あいつって聖夜のことか？」

「それ以外に誰がいるんだい？」

「あんたは俺の事が嫌いなみたいだな。  
出している雰囲気：それに静かな物腰だが明らかに俺に向けて憎  
悪を抱いている：そんな感じだ」

心を見透かされてしまったのだろうか？

ずばり自分の気持ちを言い当てられてしまった。

そうだ。俺はあいつが嫌いだ。

「へえ…やるねえ。なら正直に話すよ」

「…」

「新堂家について君はどのくらい知っている？」

「…呪われた家系としか…」

「どっしって？」

「今思えば、呪者である聖夜の末裔だからだと思っ…」

確かに聖夜は子どもを持ったことが一度だけある。しかしそれがそこに繋がるとは限らないのだ。

「君は聖夜の口から聞いたからそうだと信じ込んでいるのだろう？」

「だって…それ以外に考えられないだろ？」

「いいや…君と聖夜が血の繋がりを持つことなど皆無だ」

「え？」

「新堂家は退魔師などという生やさしいものじゃない。殺魔師だからな」

「さつまし？」

「読んで字の如くだよ。魔を退けるのではなく、完全に殺すんだ。近づく魔なる存在のもの全てを…だから君は魔の存在を見ると殺人衝動に駆られる…」

薄々気がついていたんじゃないのかい？聖夜を殺したいって…」

聖夜を殺したいという言葉に徳人は異常なまでに動揺した。

やはり…そうか…

「だからだ…そんな血筋の君と聖夜は血の繋がりを持つことはできないんだ。

相反するもの同士…どうやっても無理なんだよ」

「な…なら！どうしてそんな嘘を聖夜がつく必要があるんだよ？」

「さあね…俺には分からない。話を戻して君の家系の続きだが…  
代々短命なのは呪いには違いない。少し特殊だね」

「どんな呪いだ？」

「自己の能力を底上げする代わりに、短命にしたんだよ。

代価と報酬って奴？起源はいつからかは知らないが、君の家系を調べるとそんなことも分かってね…

先祖が自らに呪いをかけたという説もある。だから聖夜の血縁のせいではないんだ…」

「その能力っていうのは…」

「君も体験済みのはず…血液だよ。魔を打ち滅ぼす血液…これは相当厄介な代物だ。

自らの肉体が魔を滅ぼす存在なのだからね。熟練者になれば、血液を使っているんな芸当ができるようだけど…

君にはまだ無理のようだ」

「それで…あんたは何がしたいんだ？」

「さっきも話しただろ？聖夜から離れる。

君の魔に対する殺人衝動がいつ表に出るのか分からないのだからな…」

「へー…それならあんたは、聖夜の望みを叶えられるっていうのかい？」

「無論だ…」

「俺もようやく分かりかけたよ…あんたのことが嫌いだ。いるだけで体が拒絶するのは初めてだ…」

徳人は勇ましくもそんなことを口にした。

彼らしからぬ発言に少々戸惑いもしたが、それでこそ俺と同等の存在なのだ。

退魔師と殺魔師…同義に見えるが違う。

俺の家系は自らの能力を伸ばすために切磋琢磨を繰り返し、西洋魔術まで取り入れた。

だが、新道家は安易な力に頼り自らの力を特化させたのだ。

そして彼らの完全なる浄化は、自然界にすら影響を与える。

魔というものは必要なものでもあるのだ。これがあるから成り立っているものもある。

善と悪があるからこそ世の中のバランスは保たれている。

退魔師はそのバランスを重んじ、重要悪だけを駆逐する。

そしてその悪は輪廻転生され小さな規模で生まれ変わる。その繰り返しだ。

だが…新道家は完全なる浄化によって、バランスを壊すのだ。

魔が生まれないのは良いことかもしれない。しかし…善と悪があ

るからこそ世界が成り立つのだ。

「どうする？力づくで俺を殴り倒してもするかい？不死身の君の方に分があるかな…」

徳人の顔つきが変わった。

ここまで挑発されて、黙っていられる男ではないのも知っている。

彼は俺に向かって前触れもなく、殴りかかっていた。

だが…

俺の体を悪意の拳そのものでは殴りつけることはできない。

いつものようにするりと流れるように拳が自らそれてくれた。

「は…」

俺も容赦はしない。

体勢を崩した徳人に向かって、拳を三撃浴びせた。

固い拳がアバラを砕いた感覚に襲われた。

二本…もらった。



## 114話

「ぐう…」

徳人は後方に飛ばされながらも踏み留まって、激痛を感じた。

「これで終わりかい？」

もう一度挑発する。すると彼は同じようにまた向かってきた。

懲りない奴だ…

当たらない拳や蹴りを無理に振り回していたが、結果は同じだった。

倍の攻撃で返してやったので、徳人はほんの数秒でぼろぼろだった。骨は折れ、吐血もしていた。

攻撃は単調。考えも策もない攻撃など所詮はこんなものか…

新堂家の力を少しでも垣間見たかったが、それは叶わない望みだ。

「お…俺は…お前の話すことに従いたくないね…」

「何だと？」

「はあ…はあ…人から押さえつけられるように言われるとどうも反発したくなるんだよなあ…俺…」

「強がるのもいい加減にしろ。

君が動き回ることでも不幸になる人間がいるもの分らないのか？  
家の事情も知らない。

ほんの最近戦いごっこに巻き込まれた甘ちゃんが、  
いくら頑張ったって定めとして生きている人間には敵わないんだ  
よ」

「それも…分かる…けどな…」

だからって黙って指をくわえて見てるほど不感症じゃないんだよ  
…俺は！」

意地だけで動いているのが分かる。

見飽きた大降りの攻撃が俺に迫ってきたが、次の一撃で楽にして  
やろう。

急所を狙えば、気絶ぐらいする。

そう思って俺は拳に力を込めた…が…

がつん！

顔を思い切り殴られた。

「うっ？」

予想外とはこのことで、来るはずのない痛みが俺の体を駆け巡っ  
た。

どういうことだ？

唇が切れて血が流れる。一方で俺を殴ったことで徳人はにやりと笑っていた。

「何をした？」

「あんたの身に纏う空気の仕組みがようやく分かってきたよ……」

意味深なことを口にする。たかが一撃だが、俺には前例のない一撃だったので驚きもする。

「特異体質なのはお互い様だ……あんたを守っている結界は俺の血塗られた拳で壊させてもらったよ……」

「う……」

しまった。そうか……自らの血液を拳につけたのか……

しかし……魔なる存在ならいざ知らず、

俺の体の結界までも切り崩すとは相当厄介な代物をもっているよ  
うだな。新堂徳人……

「どうしたんだい？今までの余裕は……大人は大変だよな。

体裁を気にするから動揺してもそれを必死に隠そうとする……」

迂闊だった。

こいつは戦えば戦うほど自らの能力を上げていく……認めたくない

が、経験を積みれば恐ろしい存在だ。

そう認識して、やり方を変えることにした。

「すまん…甘く見ていた」

このままでは俺も目覚めが悪くなる。ここは白黒はっきり付けておこつ。

隠していた殺意を開放させると、徳人のささやかな抵抗にも似た笑みは消えた。

「う…」

そうだ。全力の一部を出すことに決めたのだ。

「これが今の俺と君との力の差…」

徳人の四肢が身動きが取れないのは見て分かった。俺の気迫だけで止めてしまったのだ。

「そして…これが俺の本気だ」

相手の目に映るかどうかは知らない。だが、倒された奴は必ずこつ言つ。

一瞬の閃光を見た。

同時に四本の銀杭を投げる。縦に四本。

それは人体の急所と呼ばれる箇所の中点だ。

頭、喉、胸、腹部ここを貫かれれば紛れもなく死を意味する。

「かつ…」

声を上げられないまま徳人はまともに四本の杭を体に食い込まされる。

そしてそのまま地面に倒れ落ちた。

「君は不死身だから数時間で元通りだ。

だがこれが俺の本気だということを体に刻んで覚えておいてくれ

…」

忠告が聞こえているのかは分からないが、そのままにして俺は立ち去った。

「くそ…」

後味が悪い…

煙草を取り出して気持ちを落ち着かせるように急いで火をつけたが、美味いはずなどない。

聖夜のことになるとすぐかつとなってしまう…

彼はまだ青年にも満たないというのにあそこまでやる必要があったのだろうか？

俺ももっと自制心が必要だと反省した。

時刻は十二時を回っていた。

あれから二時間…俺は気を失っていた。

こんな広場に二時間も倒れていたら間違いなく通報されるよな。

そんなことを気にしながら、痛む体を起こした。

「くそ…あいつ…本気で俺を殺しやがった」

杭は自然に抜け落ちていた。きっと回復するのと同時に落ちたのだろう。

それにしてもあの退魔師…恐ろしいほど強い。過小評価していた訳じゃない。

しかしあんな人間も存在するのだと思知らされた。

そしてあいつの言葉は俺の心に深く残っている。

甘ったれた自分と定めとして生まれながらに生きてきたあいつ…

確かに違う…

そんな俺が聖夜の望みを叶えられるのか？

自信はほとんど失われていた。しかしそんな俺にもプライドはある。

他人にどうこう言われたからって、俺の境遇が変わることなどない。

それなら自らの手で変えるしかないのだ。不死身になった時点でそう決めたのだ。

「だけど…もしも聖夜が…」

もし彼女が俺よりもあいつを選ぶのなら、俺にはあいつという権利はない。

そのときは潔く諦めよう。

自分の中での取り決めに済ませると、俺はそのまま帰宅することにした。

聖夜はその日帰ることはなかった。

## 115話

俺は次の日学校に向かった。

聖夜は朝になっても帰ることはなかったが、いちいち気にすることもせずいつもの道を歩いていた。

ここ数日、梨絵と聖夜は一緒に行動していたらしい。しかし解せないことに俺は何も知らない。

何をしていたのだろうか？

ここ連日で行われていた殺人事件関連だとは思うが…

「おーっすノリー元気かあ？」

翔太はいつものノリで俺に話しかけた。

「ああ…元気といえば元気だな」

昨夜の事を思い出して、未だに殺された体が元通りになったのを不思議に感じていた。

「何かあったのか？最近、梨絵も聖夜も付き合い悪いみたいだし…二人であちこち出歩いているのか？」

「さあ？俺も知らねえんだよ…」

「しっかし物騒だよな。連続殺人事件が起こったりここ最近のこの街はどうなってるんだ？」



化け物でも入り込んでいるんじゃないか？」

心の中で正解！と思わず叫んでしまった。

「なあ、話し変わるんだけどよ。久し振りに俺たちも今日二人だけで出掛けないか？」

珍しいな。そう言えば新学期になってからはばたばたして、こいつと遊びに行くこともなかった。

俺も気分転換が必要だよな…

そんな気もしてか、その誘いに乗り放課後を待った。

「さてと…行くか？」

「ああ…」

玄関で待ち合わせをしてそのまま校門を出た。

俺は帰宅部だが、翔太は生徒会役員をやっているので、細かい雑務が時々ある。

そのため帰る時間がずれることもしばしばあるのだ。

「梨絵さ…昨日も今日も休んだな。何かあったのか？」

「何で俺に聞く…あいつだって休むこともあるだろう?。」

「それはそうだけどさ…あいつって理由もなく休むことないじゃん。この前休んだ時はお前見舞いに行っただろ?。」

「う…そうだな」

「心配じゃないか?。」

「だから…俺に何で答えさせようとするんだよ」

慌てている俺の姿を見て喜んでいるのだろうか…翔太はその話を止めなかった。

「だって…お前のほうがあいつと付き合い長いだろ?。」

「そ…そんな僅かな出会いの差を言われても困るだろうが…」

「悪い悪い…でもよ。お前から見ると面白くてな」

「面白いだ?。」

「ああ…だからからかって遊んでるんだ」

「てめえ!。」

俺は走って逃げる翔太を追いかけた。

夕焼けの道を思い切りダッシュする若者二人。

他の人の目にははしゃいでいるガキにしか見えないだろう。

余計な体力を使わせやがって…

「お前なあ…これから出掛けようって時に…無駄なことさせるなよ」  
息を切らせてお互いその場に立ち止まった。

「そうだな…」

「はあ…それで、どこに行くんだ？」

「適当に…ぶらつく」

「そうかい…」

それから俺たちは近くの本屋に立ち寄りたり、ゲーセンに行った  
りして時間を潰した。

当たり前のような遊びもしばらくぶりだったので楽しかった。

時間が経つのも忘れて気付いた時には、七時を過ぎていた。

「おわ！もうこんな時間だぞ？お前んちそろそろ帰らなきゃまずい  
だろ？」

翔太の家は特に門限はないが、遅くなるのは好ましくない。だから  
帰ることを促した。

すると翔太もそれもそうだと、まるで他人事のように俺の意見に

賛同し、二人で帰ることにした。

帰り道はすっかり日が落ちて暗くなっていた。

「今日は楽しかったな…」

「久し振りに思い切り遊んだ」

俺も普通の学生だということをごういうことで思い出させてもらえるのは嬉しかった。

殺伐とした生活がこれからも待っているかもしれないが…

いかにいかに…事態を何でも悪い方に考えすぎている。

今は忘れなくては…

しばらく談笑しながら歩いていると、突然翔太の顔が険しくなってきた。

話しづらいことを俺に話そうとする感じだ。

「あのさ…言いくいけど、お前俺に何か隠してないか？」

「え？」

「これは憶測だ…俺の勝手な想像だと思って聞いてくれ。

振り返ると聖夜と出会ったあの日からお前はおかしかったような気がする」

「…」

何も話せず黙っていることしかできなかった。

「おいおい…ここは思い切り否定するところか、ボケるところだろ？」

冗談だよ。別に詮索はしねえーよ。俺らは高校生。

秘密の一つや二つは存在するだろうよ。ただ俺が変だなんて感じただけで確証はない。

お前自身が大丈夫ならそれでいい…どうなんだ？」

「ん…ああ。大したことじゃない。

心配しなくても俺は借金をしているわけでもないし、悪い女に引つかかったわけでもない」

「そうかい…それならいいや。時々さ…お前が思いつめた顔をしてたからつい心配でな。

何かあったら助けには乗るさ」

こいつは本当にいい奴だ。

俺のことを本気で心配してくれる。

しかし…このことだけは話せなかった。だから誤魔化す手段しか思い浮かばない。

「ありがとな…でもお前の手を煩わせるようなことじゃないから…」

精一杯の笑顔で翔太に話したが、心は罪悪感で一杯だった。

戻れない日常…

そんな気がして苦しかった。

それから俺たちは別れて、帰路についた。

アパートには相変わらず誰もいない。聖夜はこのままいなくなってしまうのだろうか？

一人での食事は変な感じだ。

前は何も感じないのに今は寂しい…いるはずの人間がいなくてどうも違うものなのか？

多く作りすぎたコロッケを目の前に俺の箸はぴたりと止まってしまった。

翔太を騙し、梨絵を巻き込み…この先このまま学生生活なんて続けられるのか？

翔太の別れ際の話が気になる…

昨夜の樹開の話も忘れられない。

「あー…くそ！一体俺はどうすればいいんだよ！」

一人で大声を上げて悩む姿は、傍から見れば頭のイタイ人間だ。

それでも叫ばずにはいられなかった。

そして俺はこの気持ちをどうすることもできないまま、夜を過

した。

## 116話

梨絵は次の日も学校を休んだ。

流石の俺も心配で梨絵の家に行かざるを得なかった。

翔太はと言うと、相変わらずでお前だけで行って来いの一点張りだった。

やれやれ…梨絵も何か悪いものでも食ったんじゃないか？

そんな程度で大した心配もしないで、土産の果物をぶら下げて家を訪ねた。

お出迎えはあいつの母さんで、すんなり中へ招き入れてくれた。

「どうも…」

挨拶を済ませて、そのまま二階へと上がる。何度も上がった階段だ。

当たり前のように感じるのも少々不思議だ。

ノックをすると奥から返事がした。

「入るぞ…」

中に入ると、そこには気落ちした表情の梨絵がいた。

「おい…」



その顔は青白く、覇気がまるで感じられなかった。

「お前大丈夫か？」

そんな梨絵を見て出た言葉がそれだった。

「ん…ちょっと…駄目かも…」

梨絵には相応しくない程の弱弱しい言葉が出て俺は驚いた。

「おいおい…しっかりしろよ。大食いのお前が何も食べていないよ  
うな感じだぞ？」

「…」

「病気にでもなったのか？」

首を横に振って否定するだけだった。

「事故や怪我とかか？…と言っても見た目ではそれはないか…早く  
出て来いよ。」

翔太も心配してるしクラスのみんなも不安がってるぞ」

「う…ん…」

一体何があったんだ？…こいつがここまで弱る理由が分からなかった。

「まあ持ってきた果物でも食べて元気出せよ」

手に持っていたビニール袋を机の上に置いた。

沈黙が続く…

普段なら他愛もない会話に花が咲くのにこいつの雰囲気はそれをさせなかった。

まるで重苦しい雰囲気を出しているかのようで、話が思うようにできない。

どのように声を掛けようか悩んでいると、すっと梨絵が話した。

それは小さくささやくような声で、深く重みがあった。

「ノリちゃん…武井さんを殺したって本当？」

体が硬直した。心臓が止まりそうな気分だ。

どうしてそれを？

俺の血の気は一気に引いて、崩れそうだった。

「あ…の…」

ぱくぱくと口を開く俺の目を梨絵は真っ直ぐ見ている。

こいつは知っている。俺のことを…

それならば嘘は通じないとも思った。だが、自分の口からその答

えを話すことができなかった。

「どうして黙ってるの？否定しないってことは認めていることなんだよ？」

先ほどとは打って変わって、強く大きな口調になっていた。

そして俺は何も言えないままだった。

「この数日間…聖夜と行動を共にしたわ。そして聖夜が普通でないことも知った。

得体の知れない不思議なものとも戦ったわ…そして最後に彼女の口から言われたの…

ノリちゃんが武井さんを殺したってことを…」

まじかよ…あいつ。梨絵を巻き込んで何してんだよ。

「興味本位で近づいた私も悪かったわ…でもね。それ以上に…ノリちゃんが…ノリちゃんが…人を殺したってことを信じられなかったの…」

梨絵の頬を涙がつつた。

俺はそんな梨絵の姿を見ているのが辛くて仕方がなかった。

「俺は…」

ここで何を話す？俺の全てを話すのか？梨絵を巻き込んで？

できるかよ。

ちくしょう…俺には…何も話せない。

自ら背負っている宿命っていう奴を憎んだことはこの瞬間ほどなかった。

握り締める拳にも力が入っていた。

「もう…以前のノリちゃんとは違うのかな？」

私たち…もう今までのような関係に戻れないのかな？」

梨絵の表情は涙でくしゃくしゃになっていた。

強気でどんな辛いことがあっても俺に弱さを見せたことのないあの梨絵が、感情のままに泣いている。

それを見た時に俺にはもう、これ以上話せることはないと確信した。

それほどまでに梨絵の涙の影響は大きかった。

今まで味わったことのない罪悪感と喪失感を同時に感じたのだらうか、

俺の思考と体が別物のように思えた。

情けない。

自分が男らしく自分の生き様を堂々と語れる人間ならどんなに楽だらうか？

自分がお前には関係ないだらうと冷たくあしらえる人間ならどん

なに楽だろっか？

どっちつかずの選択しかできない優柔不断野郎は、気の利いた言葉も浮かばず、

優しい言葉もかけられずただ立っていることしかできないでいた。

そしてこの重圧に耐えられずに逃げ出すことを選んでいたので。

何も話さずに部屋を出て、足早に家から退散したのだ。

梨絵の母親も何事かと思っ、立ち去った玄関の方を見たが、その時にはもう俺の姿はなかった。

外に出た俺は少し離れた所から梨絵の部屋のある二階の窓を眺めていた。

「もう…戻れはしないのか…」

自分を取り巻く環境の限界をこの時ばかりは、はっきりと感じそんな言葉もぼろっと口にした。

聖夜のせいにするのは簡単だ。

だが、そんなことをしてしまったら俺という人間は終わってしまうだろう。

だれのせいにすることもできないんだ。これは俺の問題だ。

遅かれ速かれこうなることは必然。失うものも大きいのは分かっていたはずだ…

ただ俺はそこから目を背けていただけなんだ。

まだ大丈夫だろう、いずれ何とかなるだろうとという風に濁して  
いた…

馬鹿野郎は俺だ。

水道水の中に落とされてもがき苦しむ淡水魚の気分だ。

水の合う環境ではない場所に置かれ、それでも無理やり生きよう  
としている。

所詮は無理な話なのだ。

俺はそのまま黙って家に帰った。

## 117話

家に帰っても何もする気が起こらなかった。

昨日の翔太の言葉、今日の梨絵の言葉。そのひとつひとつが回想のように何度も蘇った。

もう限界なのだろうか？

狭い部屋の中で静かに自問自答を繰り返し、答えを必死に探した。時間が何時になっているのかは分からなかった。それほど集中していたのだろうか？

ばたんと、ドアの開く音で我に返ったのだ。

「あ……」

ドアの方を見るとそこには聖夜が立っていた。

こんな時に限って帰ってきたのだ。

タイミングが良すぎだ。

「ただいま……」

いつもと変わらない聖夜の姿に俺は何を思ったの強い口調で話した。

「何してたんだよ。今まで…」

明らかに喧嘩腰だった。

しかし聖夜は疲れていたのだろうか、別にと行って俺の話を軽く流した。

「お前に聞きたいことがある」

座るように促すと、面倒くさい様子で俺の前にどっか座った。

「何だ？」

正直俺は機嫌が悪かった。いろんなことでもやもやしていたからだ。

「梨絵とずっと何をしていた？そして何を話した？」

食って掛かるような話し方に聖夜はいらつきもしなかった。

「呪者探し…そして殺した」

まるでゲームの中での話をするかのように端的にそして冷静にその言葉を口にした。

「おま…それを梨絵の前でやったのか？」

「いや…あいつは俺が呪者を殺そうとしたら逃げ出したがな…」

こいつ…ここまで人の気持ちを考えられない奴だったか？



俺の怒りはどんどん込み上げてくる。

「何であいつを巻き込んで呪者探しなんかやってんだよ！  
あいつは普通なんだ。お前や俺と違うだろうが！それを分かって  
いてやったのか？」

女とか関係なかった。俺は声を荒げて聖夜に近づきぶん殴ってや  
ろうかとも思った。

「あんな…あいつが勝手についてきただけだ。  
それにな、こうなることを知らないで興味本位でいたあいつが悪  
い…」

全てを梨絵のせいにしやがった。

これには我慢がならない。俺は胸倉を思い切り搦んでしまった。

「ふっざけんな！俺はな…お前ならそういった類からあいつらを遠  
ざけてくれると信じてたんだ。  
それなのに…あっさりと仲間に取り入れるだど？そしてそれをそ  
いつのせいにするだど？」

握る腕にも力が入る。だが、聖夜の目は動じることなく俺の目を  
真っ直ぐ見る。

「いつこ遊びは気が済んだか？」

「は？」

「友達ごっこ…学校ごっこ…ままごどだな」

「お前…」

「さつきから聞いていれば…徳人。お前こそ人のせいにしてばかりじゃないか。」

「お前はもう普通じゃない。それをありもしない日常をずっと望んでいる。」

「もうこちら側の世界に足を踏み入れたというのに、右往左往してな。」

「はは…笑える…そんな生半可な気持ちでこれからも暮らそうとしていたのか？」

「聖夜の胸元を掴む俺の拳の力が緩む。」

「もう有り得ない日常を望むのか？それならそのまま何もするな…」

「そして俺と同じ道を歩めばいい。死ねない体で何百年もな…」

「それがどれほどの苦痛が分かるまい。たかが十数年生きているお前にはな！」

「くそ！そんなことは分かっている。分かっているが受け入れたくないんだ。」

「いずれは話そうと思っていた。ここから姿を消すのが得策だと…深く慣れ親しんだ土地を離れるのは確かに辛い。だが、今のお前に選択肢があるのか？」

「俺の思っていたことをずばずばと言うものだから、余計に腹が立った。」

「うるせえ！そんなのは…分かっているんだよ。分かっているけど理屈じゃないんだよ。」

くそっ…くそっ…」

俺は泣いていたのだろうか？

知らず知らずに涙もこぼれていた。先ほどの梨絵の顔を思い出したからだろうか？

聖夜ならもつと人の気持ちを考えてくれるという期待を裏切られたからだろうか？

どちらにしても自分の感情をコントロールすることなどできなかつた。

それから聖夜の胸元から手を話すと立ち上がり玄関の方まで歩いた。

「なあ…梨絵に、武井このみを殺した話もしたんだよな」

どうでも良かったがその答えも知りたかつた。

すると聖夜は、「ああ」と悪ぶれた様子も無く答えた。

俺はがんとドアを思い切り拳で叩いてそのまま部屋から飛び出した。

もうここには入れないな。

きつかけは何でも良かったんだ。きつと、こつなることを本当は心の底で望んでいたんだ。

夜道をとぼとぼ歩いていると、会いたくない奴の姿がそこにあっ  
た。

あまりにもタイミングが良すぎる。

「踏ん切りはついたのか？」

真払樹開は煙草をふかしながら、電柱の影から姿を現した。

いつものように独特の雰囲気を身に纏い、死んだ魚のような目をしている。

こいつと対峙すると俺の体が拒絶反応を示すのは、昔から決められた定め<sup>せいな</sup>のせいなのだろうか？ たく…

「いつからいたんだよ」

先ほどまでの怒りは収まらずに、そのままの勢いでつかかった。

しかし相手は百戦錬磨の兵だ。俺<sup>こ</sup>ときの怒りでは怯ませもしない。

「さあな…でもその様子だと、聖夜とは離れる決意は汲める」

「勝手な想像だな…」

「本当にそう言いきれるか？」

こいつは全く持って嫌な奴だ。人の心を見透かしているような奴で、驚きもしない。機械か人形だ…

「別に…」

これ以上話したくなかった。無視してそのまま行くことも思ったが、今日は話したい気分だった。

「あんたさ…聖夜のこと好きなのか？」

戸惑うかと思われたこの質問にも樹開は、時間を掛けることも迷うこともなく素直に答えた。

「ああ…」

「本気か？」

「ああ…」

本気だ…

以前もそう思ったが、こいつの聖夜に対する想いは生半可なものではない。

時間と絆をはっきりと感じるのだ。

ここに俺の入り込む余地があるのか？ほんの数ヶ月いただけの俺に…

どんどん自信は失われ、自分という存在はちっばけに思えてもきた。

それならどうする？このまま突っぱねるのか？

いや、できるはずもない。

こいつはこんなにも純粹なのだから。

俺は樹開という人間の本质を見てからもう迷わなかった。

「なら、あいつを守ってやってくれよ。知ってるんだろ？あいつは見ただ目ほど強くない」

「…だから俺がいる」

清らしい…こいつは常に真っ直ぐだ。

泥の中にも必死に咲いている汚れない一輪の花だ。

俺のようにひねくれていないのは、尊敬に値する。というかそのことで自分が惨めにも思える。

ガキだからな…俺は…

「俺はどうしたらいいかな？」

何も残されない俺の心は空虚だった。それでも前に進みたかった。だから嫌いな奴にも聞きたかった。

「知るか…それはお前が決めることだ」

そうだよな。

そんなこと他人に聞くなって話だ。

「分かったよ。それなら俺はもう行く…何だかんだあったが、やっぱりあんたの言っていた通りだ」

そのまま振り返らないで、先に進もうとしたが、樹開は俺を引き止めた。

「俺はな…お前が羨ましい」

「は？」

どこがだよと言いたくなった。

「俺には感情がない…あの日から…」

どこか遠くを見つめる樹開は寂しそうな表情だった。

「だから平気で死と向き合える。本当は弱いのかな。」

覚えていることは聖夜が好きだったということだけなんだ…純粋に人を想えるお前が羨ましい」

こいつにもいろんなことがあったんだな。

しかし同情はできない。

お互い様だ。

「俺とお前は決して交わらない存在かもしれない。  
だからこれはたわ言だと思って聞き流しておいてくれ」

「あっそ……」

そのまま二度とこいつと会うこともないだろうと思えば逃げようとしてそこから立ち去った。

それからいろんな人間は一つの方向を向いて歩き始めたのだ。



ピロロロロロリー…

メール音が鳴り響くと、男はその携帯電話を面倒くさそうに取りに行く。

「なんだよったく…催促のメールかよ」

男は半ば安心してそのまま携帯を部屋の中に投げ捨てた。

部屋の中はゴミの山だ。

食いかけの弁当やら飲みかけのペットボトル、  
雑誌で埋め尽くされ自分がその中の一部ですら思えてくる始末だ  
った。

この男は多額の債務者だ。

ほんの軽い気持ちで闇金で借りた五十万が利息で四倍に膨れあが  
っていた。

元を正すと、当面の生活費と思い借りたが、仕事はみつからない。  
目先の欲にくらいんで博打を打つ、飲むの繰り返しがこの結末を産  
んだのだ。

自業自得とってしまったら言いのだが、この男は最初は真剣に  
仕事を探し回った。

二十代で終わる人生など真っ平ごめんと。

しかし探せども探せども、資格はない。持ち味もない。話術もない。容姿も良くない。

ときたらどこも雇ってはくれなかったのだ。

不況のせいもあった。

大きなふるいにかけられたら真っ先に落ちるような男は、無限螺旋のように職安を行ったりきたりしていたのだ。

それは次第に諦めの方向に向かっていく。

報われない自分の行動。積み重なる借金。ここから逃れるにはどうすればいいんだ？

その繰り返しの上に選んだのは、何もしないことだった。

俺が何をしたって何も変わらない。

それなら何もしない方がいいんだ…

世の中はクソだ。誰も俺を認めない。みんなゴミだ。クズだ。死んじまえ。

俺と同じように生きながら死ね。

死ねよ。死ねよ。みんな死ねよ。

男の中では怒りが爆発しそうな勢いだった。

見えない現実を生きていた男の脳は確実に破滅へと向かっていた。

ゴミの中で怒りを叫んでいた。

すると…

「良い匂いがする…」

男の背後からそんな声がした。

はっとして慌てて男は振り向いた。するとそこにはどうやって入ったのか、少年が立っていた。

「おま…どこから入って…」

どうみても子どもにしか見えない。しかし気持ちが悪いほど不気味な存在そのものだった。

だからかもしれない。

男はすぐに追い払うことが出来ずに、震えていた。

「う…う…」

体が動かない。まるでライオンにでも睨まれて逃げ道を完全に封じ込まれている餌の気分だった。

生物本来が持ちこたえる危険信号というやつだ。

「いいね…その怒り。僕の好みそのものだよ」

少年は意味不明なことを口にしてゆつくりと男に近づいた。

男はかたかたと震えることしか出来なかった。

「何を…する…」

もう男に逃げることはできなかった。そう男が確信してしまったから。

それは諦めである。

生きることから逃げてしまったのだ。

だが、それはほとんどの人間がそうなってしまふに違いない状況だったのだ。

少年の放つ殺気は広範囲に広がっていたため、どこに逃げても無駄だということがはっきりと分かるのだ。

「僕の餌になつてよ」

にこりと微笑み少年は話した。

「ごくりと唾を飲み込み男はその少年をはっきりと見た。

「お前…目が…」

その言葉を最後に男の体は、ぐにゃんと曲がると、もう人間と呼べる姿ではなくなっていた。

「はは…久しぶりの食事だな」

少年は嬉しそうにその男の魂を食った。

薄汚いこの部屋で裸電球にばたばたと蛾が飛んでいる羽音だけが響き渡っていた。

そんな時、

「やれやれ…」

静寂を切り裂くかのように少年の背後から別の男が姿を現した。

「食事は済んだのかい？」

「ん？」

その声に反応し、少年は食べることを止めた。

「その声は…あんたかい？」

ゆっくりと立ち上がって見えない背後を見た。

そこにいる誰かを少年は知っていた。にやりと笑って警戒はまるでしていない。

親しい友人にでも話しかけるようだった。

「その力には慣れたかい？」

話しかける男には得体の知れない独特の雰囲気があった。

少年の持つ威圧感もそれなりのものだが、この男はそんなものは持っておらず、

誰でも平気で近づけそうだった。

だが…敏感な者なら確実に感じる危険信号がこの男からは感じられるのだ。

そして余計な感情は表に出さなかった。

「ま…この様子だと…八割程度か」

死体を見ながら男はそんな分析を始めた。

人ではないそれを男は楽しそうにも眺めていた。

「あれから五十年か…」

「うん…」

「意外と短いものだ…初期の段階では能力に振り回されて生きることもままならないと思ったのにな…」

昔を思い出してくすくすと笑い出した。

まるで我が子の成長を楽しむ父親のようだった。

「でも、あんたが助けてくれた。僕の能力を徐々に制御できるように教えてくれたからね」

「そうかい…では、そろそろ我々もゲームに参加しなくてはならないな」

「ゲーム？」

「ああ…君も分かっているだろ？あの僧侶の仕組んだゲームだよ。まあ…君の場合は能力に翻弄され本来の目的も見失ってしまったから記憶が曖昧なのも仕方がない」

「そうかもね…それで、何をするの？」

わくわくしながら質問する姿は子どもそのものだった。

「ま…それは追々話ささ。君にとっても懐かしいかもな」

「懐かしい？」

いずれ分かると言っただけのまま男はその部屋から出て行った。

あれから二ヶ月。徳人は学校を辞めていた。

自らの良心の呵責に耐えられなくなったのか、それとも新たな道を歩く踏ん切りをつけるためかは分からない。

しかし自分の道を切り開く第一歩だとは理解していた。

このままではいけないと、あの日に悟ったのだ。

彼のいなくなった日常は、絵梨にも翔太にも切なさを感じさせるものだった。

いつもいるはずのものが無い。

そんなことだけで、毎日は酷くつまらないものになっていた。

梨絵はいなくなった理由を薄々感づいてはいたが、翔太には話せなかった。

自らの責任とも感じていたからだ。

だが：翔太も梨絵と同じ分だけ徳人と同じように時間を過ごしていたのだから、何となく把握はしていた。

言葉に交わさなくても分かっているのだ。

「あいつ…元気かな？」

「うん…」



徳人の話をすると決まって梨絵は曖昧な返事になってしまう。だから翔太もそのことを深く追求することもなく流していた。

「あいつならどこでも元気だよな。きっと」

梨絵を元気付ける意味での答えだった。

「そうね…」

浮かない表情は相変わらずだが、どうにか笑顔を見せていた。

すると翔太は、

「無理して笑うなよ。お前…本当は辛いんだろ？」

一人で抱え込むのもいいが…少しは相談しろよな」

ぶつきらぼうにも見えるが、これが翔太なりの励ましだった。

「徳人は俺らの親友だ。きっとまた会える。その時に俺はぶん殴ってやるがな」

「え？」

「相談なしにいきなり消えたんだ。当然だろ？」

翔太は真っ直ぐの言葉で、会えることを信じていた。

「そうだね…いつかは会える」

その時に何を話すのかは分からなかった。しかし会いたい気持ち  
は確かにあったのだ。

二人はそのまま帰り道を歩き続けていた。

## 白神町

人口二十万人とそれなりに栄えている町であったが、ここにも怪  
事件が起こっていた。

それは忽然と人が姿を消すということだった。

しかしそれは確固たる事件性がなかった。

証拠がないし、消えた人間は他人を拒絶する人間ばかりで、いな  
くなった所で誰も搜索願を出さなかった。

孤独な人間ということだ…

単純な言葉で片付けてしまえばそれまでだが、人が一人いなくな  
るということはそんな単純なものではない。

一枚の風景画に微かな穴が開くかのように誰かの生活にはどこか  
欠如してしまうものなのだ。

それは誰のキャンバスかは分からない。

しかし世の中はどこか誰かと繋がっているということだけだった。

「あそこにいた浮浪者…最近見ないね」

そんな言葉もその人間の中には気になっていたということだ。

「あそこの家って誰が住んでいたっけ？」

指差す先には古くて崩れそうな家があった。

「老人が一人で暮らしてたはずだよ。でもさ…一週間前ぐらいからめっきり姿を見ないんだ」

これもそれを見た人間には意識の中にはつきりと残っているのだ。

だからあちこちで起きた人間が失踪する事件も表ざたにはなっていないが、噂で広まるのだ。

「やっぱりさ…また神隠しかな？」

「そうかもね…最近多いよねーそういう話。この町も怪談の対象になっちゃうんじゃない？」

「それはそれで変な町おこしよね…」

「あはははー」

そしてそれを聞きつけた男は喜んだ。

「今の話は本当？」

二人の女子校生が楽しそうに話しをしている所で割って入った人物がいた。

それは新堂徳人だった。

二ヶ月前に颯爽と姿を消した張本人は今、故郷からかなり離れたこの場所にいた。

そして女子高生も同年代でやさしい表情で迫る男にはたいした警戒もしないで、話をしてくれた。

ここ数ヶ月に渡ってこの町で起こっている噂話を。

女子高生はいつも見かけているはずの人間があちこちで姿を消したことをまず話した。

浮浪者だったり、老人だったり、一人暮らしの若者だったりと……

規模はそんなに大きくはないが、今までいたはずの人間がいきなりいなくなるのは不気味だった。

「へえ……それは面白いな。ねえ……死体とかは発見されなかった？」

「うん。だから変なの。人がいなくなる話は出ているのに殺人事件とかじゃないんだもん。」

搜索願も出てないらしいしね」

「祟りだ何だって、勝手なこと言ってる人もいるけど……そんな非科学的なこと信じられないよ」

「そっか…ありがとう」

礼をすると女子高生たちと別れた。

ほんの数分の短い会話でしかなかったが、徳人は有力な話が聞けたと喜んでいた。

そう、ここにも呪者がいるのだとはつきりと知ることができたからだ。

## 121話

徳人の雰囲気はどこか変化していた。以前よりも視線は鋭くなりやわらかさがどこか失われていた。

それから町の中を何気なく歩きながら意識を集中させていた。人の行きかう中でいるんな人物とすれ違つ。その中で些細な手がかりを探していた。

普通の人間には感じ取ることのできない、異質な電波…

魚群の中からお目当ての魚を探す行為のように呪者がそんなに簡単につかまるはずもなかった。

それでも靴をすり減らして、何時間も何日も歩いていた。

そして一週間後…

「む…」

ファーストフード店で食事を取っていると、ガラス戸越しに外から微弱な電波を感じた。

食べかけのハンバーガーをそのまま置きっぱなしにしながら慌てて外へ出た。

夜中十時の町中はネオンや街灯の明かりがあるとはいえ暗かった。

徳人は先ほど感じた気配を追いかけた。姿はない。しかし気配だ

けは残っている。

相手の足取りは速かった。おそらく徳人の存在に気がついたのかもしれない。

「はあ…はあ…はあ…」

足早に走る目標は息を切らしながら境内を彷徨っていた。

ここならば姿を隠せると思ったのだろう。

死者も眠っていると自然とそういう気配まで拾ってしまふ。そのことも計算しているのかは分からなかった。

しかし徳人は正確に距離を詰めていた。

以前のような探知能力は失われたものの、本来の素質でそれを補うことは十分にできていたのだ。

近道で墓場の合間を抜け、本堂の前に差し掛かるとお目当ての人物は立っていた。

もう逃げることを諦め、向き合うことを選んだようだ。

寺の中はまるで闇に等しかった。

ざわざわと木々が風に揺れているだけで、異質な空間を作り上げられているかのようだった。

「はあ…はあ…あんだ、何者？」

最初に口を開いたのは徳人ではなかった。肩で息をしているもう一人の男だった。

金髪の若い男で自らを呪者だと認めていた。そして流暢に話を続ける。

「いやさ…俺もさつき感じた時には同業者とは思わなかったから…」

「どうして？」

「あんた、気配が変だもん。呪者であってそうじゃない…  
どうしてそんな風になってるの？興味深いね…」

見た目同様に軽い口調の男にも徳人は警戒を許すことはなかった。言葉を慎重に選んで話していた。

「さあね…でもこれだけは言える。俺はあんたらは大嫌いだってことだ」

「へー…直球だね。まあ、そうなるだろうね。俺たち人間の天敵だもんね。」

でもさ、あんたはどうなの？こっち側の人間じゃないのかい？  
放つ雰囲気はどちらかというところと闇に等しい…」

「俺は…」

表情が一瞬曇ったが、そんなことは関係ないと一蹴した。

「なら取引しない？見逃してくれたら情報をあげるよ」

「情報だと？お前らが何の情報を持っているっていうんだ？」



でまかせでその場逃れはご免だと思っていたのだろう、全く信用していなかった。

「焦らない、焦らない…他の呪者の情報と根源の僧侶のお話ってのはどう？」

俺はこう見えても無作為に食事をしている訳じゃないんだよ。

人の迷惑にならないように消えてもいい人間を選んでいる…

だから穏便にことを済ませたいんだ」

徳人は武井このみ以外の呪者を知らない。

だからこのタイプは、つかみどころがなくてどう対応していいのかわからなかった。

しかし体はその要求を飲むことを拒絶していた。

「無理だ…お前がいくら穏便にことを進めたいと思っても結局は死ぬ人間は減らないんだろ？」

それならいずればぶつかり合う運命だ。それに…俺にもやらなくてはならないことがあるからな」

「へー…君のような性格の人間にはこういった取引が得策かと思っただけど、説得は期待できず…か…

やっぱりね。会った瞬間にもものすごい嫌悪感しか感じられなかったからね。

殺すことが前面に押し出された確かな拒絶」

知っていてあえてそんなことを要求したのだろうか？

はっきりとこの呪者が読めないと徳人は悟った。

「君さ…狭間で悩んでいるんじゃないか？人が化け物かの…俺の予想だと君は半分だけこちら側の人間だろ？」

徳人はどきつとした胸の内を隠した。

「しかも最近だな…普段の生活からかけ離れ間もないから自分という存在が分からなくなっているんだ。

人殺しをする俺たちは悪者。そして自分もそんな俺たちと同意義の存在だからそれを否定したい」

徳人は真払樹開に打ちのめされたことを再び思い出すはめになる。しかしもうそんな弱い自分を捨て去ろうと思っていた。

うんざりしていた。だから向き合いはつきりと否定した。

「お前らを殺さない限り俺は前に進めないんだ。それなら殺すしかないだろう？どうだ？」

これがシンプルで分かりやすい言葉だと思うが？」

まどろっこしい話し合いは望まなかった。

だからきっぱりと話したのだ。それでも男はそこで会話を終わらせる気はなかった。

「はつきりと言つねー…確かにそのほうが分かりやすくいいね。  
ところで君さ…どう考える？呪者の存在…俺はもう百年近く生き  
たかな…」

前任から引き継いだからそんな長生きじゃないんだよね。  
でも呪者になるうが人間のままだろうがどちらも同じってことに  
気がついたよ…

唯一違うのはこちらが捕食者だってこと」

「ならお前は何で呪者になった？同じなら人間のままでいいじゃな  
いか」

「君のようにシンプルに話すなら、飽きたってこと…何もなく生き  
ることが辛くなったんだよね。」

破滅願望って奴を持っているんだよ。人間はさ…聞いたことある  
かもしれないけど、

スリルを求めて生きているんだよ。狩猟の名残かもしれないけど、  
ギャンブルなり生身の殴り合いなり、

自分の全てを賭けることで生きることを確認する。そういう人間  
が俺だってことだよ。

前任の呪者は百年近くで自らの限界を感じた…でも俺は百年超え  
ても感じないよ。

だって…今でも楽しいもの…」

「人の命を奪って生き長らえることが楽しいと？」

「はは…そうじゃないか。君は退魔師じゃないだろ？」

滅ぼすことに意義を感じる者ではないなら今ある境遇を楽しんだ方が良いに決まってる。

そうしなければ自分に潰されてしまうからね。自ら命を絶つ呪者も所詮は良心が残っていたか、生きながらえることに絶望を感じたかだ…だから俺はそうなりたくないけどね」

「随分な言葉だけど…あんたに先はあるのかい？」

「馬鹿だねえ…そんなこと考えていたらこんなことしてないって…俺はだから最強なのさ。割り切った上で強いからね」

確かにそうかもしれない。そう徳人は感じていた。

あの武井このみは罪悪感を感じていた。自らの能力に翻弄されそして悩み苦しんでいる。

そこから考えたらこの男は短絡的であるものの割り切った強さがあるとも思った。

「なら…もうこんな無駄な時間は止めましょう。白黒はつきりさせた方がいい」

徳人はすつと今まで携帯することもない武器を取り出す。

それは赤く染まった太刀だった。

脇差よりも長く日本刀よりも短い。そんな寸法の刀だが、不気味なほどに禍々しさを放っていた。

「妖刀の類かい？おかしな気配だ」

大した警戒もせず男は徳人の武器を冷静に分析した。

「なあ…あんた名前は何て言うんだい？」

これから戦おうって時に名前を知らないのは味気ないと思わないか？」

軽口にも思えるが、そうは取れないぐらいの殺気を徳人は放っていた。

「いいね…そういう態度、俺は好きだよ。それなら名乗ろう。」

俺は織神喜一郎。昔臭い名前だろ？

そして…持つ欲の称号は、話口調からも分かると思うけど傲慢だよ…」

はつきりと自らの正体を明かし、徳人と戦うことを決意した。

「君は全くの素人ってわけじゃないのも分かる。でもね…俺の能力は生易しくないよ」

そして喜一郎は即座に動いていた。何も武器を持つてはいないが、そつと地面に手を触れた。

すると、アスファルトという物質が徳人に向かって突き刺さす勢いで無数の槍と化していた。

速度も攻撃力も申し分ない。このままでは串刺しを免れないとも思われたが、徳人は取り乱さない。

じつくりとその一部始終を目に焼き付けると、握り締めた唯一の

武器を横一線に振りぬく。

触れるか触れないかのその刹那に、

ぞほうっ…

もろいはずのない物質がいても簡単に切れて崩れ落ちた。

がらがらつと石の転がる音が聞こえるのと同時に徳人は距離を詰めていた。

しかし相手は必死にそれを阻む。

木に手を触れるとその木は生きているかのように絡み付こうと枝を伸ばした。

この流れで徳人は悟った。

この男の能力は触れたものを自らの意のまま操れるのだと。

## 123話

すると襲い掛かる木々も問題なくなぎ払い、どんどん前に進んでいた。

ひとつでも体勢を崩そうものならきつと喜一郎の操る武器の餌食になる所だが、

徳人は足場を間違えることなく軽快に動いていた。

相手の動きがまるで透けて見えるかのように無駄なく、つまずくことなく、最小限の動きで距離を縮めた。

「馬鹿な…」

喜一郎はここで初めて自分が窮地に立たされていることを実感した。

今までこのようなことは体験したことがなかった。

全てのものを自分の思い通りに操り敵は葬り去ったのだから…

人は必ずミスをする。自らの命の掛かった場面で百ある障害をミスなく逃れられる者はいない。

一歩間違えれば死ぬということが練習ではこなせるものでも、絶対にそれができなくなるのだ。

それが人間だ…

しかし徳人は違う。

死なないのだ。だから気持ちの持ち方は違った。  
殺されても良い覚悟を持ち、自分は死なないという絶対的な自信  
があったのだ。

恐怖を乗り越えたことで視野が広くなり、冷静な判断もできた。  
この二ヶ月でそれは学んだのだ。

無数の木の破片が落ち、飴のように滑らかに動く鉄骨までもばら  
ばらにした。

喜一郎は手当たり次第にそこら辺のものを武器に変えていた。

だが…

徳人はその幾多の障害を平気で乗り越えた。

下がりながら応戦する喜一郎にも冷や汗が流れた。

「来るな…来るな…」

味わったことのない恐怖を今はつきりと感じていた。だからそんな  
情けない言葉も平気で口にする。

徳人は戦いの中でハイになっていたのだろう。  
自分の身体能力の高さに気づき、まだまだいけると踏み込む速さ  
を上げていた。

喜一郎はそんな徳人とは対照的に判断が鈍る。

どうして網の目のような障害物を涼しい顔して潜り抜けられる？



数を増やしても動きに変則性を持たせても駄目…

こいつは本当に人間か？

生まれて初めて敗北と死の感覚を垣間見る。

そんな弱気のままではいけないと自らを奮い立たせてコンクリートの壁に手をつけると、

壁は徳人を包み込むように覆いかぶさった。それはまるでコンクリートという名前の津波だった。

材質そのものが液体化してしまっただけはいるが、きつと体に触れたら元の固形物となり固められてしまふのだろう。

しかし徳人は何も躊躇しない。見切っているし、何よりも波の速度が徳人に追いついていない。

走り抜けた後にコンクリートは崩れ落ちる。

あと三步、距離にして二メートルというところまで迫った。

このままの流れでいけばきつと徳人は目の前の敵を八つ裂きにするだろう。

しかしそんな勢いが徳人の予想外の方から絶たれる。

ずばっ…

何故か徳人の左腕が上空に舞い上がり吹き飛んだ。

その正体はコンクリートに埋め込まれていた鉄筋だった。

コンクリートは徳人に致命傷を与えることはなかったが、流れ出

した後にも別の攻撃に転じていたのだ。

いわゆる二段構えというやつである。

流石の徳人もそこまで予期することはできなかったので、直撃は免れなかった。

鉄筋は鋭い刃に形を変え、蛇のように後方から伸びていた。そして刃の先には徳人の血がべったりとついていた。

それを見るなり喜一郎はしめれたと思ったのだろう。

ようやくあの化け物が歩みを止めると身勝手な期待感を抱き、ほんの少しの間を空けてしまった。

だがそんな都合の良い淡い気持ちも、次の瞬間に喜一郎を地獄へと突き落とす。

「あ……」

斜めに体を斬られた。

刃の先十センチは体に入り込んだから、体の臓器も深く傷つけられ致命傷は免れなかった。

それは何度も叶わなかった喜一郎の望みを徳人が今現実とさせた形となった

「嘘……だろ……」

血を大量に噴出し、自ら流した血のたまりに体を倒すように崩れた。

あの時、徳人は止まらなかったのだ。左腕が吹き飛ばそうが、勢いを緩めることもなく突っ走った。

喜一郎はダメージを与えたことによる油断で、徳人の攻撃を防ぐこともできなかった。

だからまともに攻撃を受ける結末となったのだ。

「お前…死が…怖くないのか？」

動くことができない喜一郎は下から血まみれになりながら徳人を見上げて途切れ途切れに話した。

徳人は呪者を切り伏せたことによって余韻に浸っているようだった。

「そんなことは…忘れてしまった」

「そうかい…だが…その芯の強さ…それは身についたものではない…な…」

元々持ち合わせたもの…まったく…嫌な才能の持ち主と…会ったものだ」

それ以上話すこともままならなくなったのか、喜一郎は例によって姿をさらさらと砂のように消してしまった。

と、同時に異世界のように変化していた徳人の周りの景色も元通りになった。

喜一郎が滅びたことにより全ての物質は元の姿に帰ったのだ。

騒がしかった先ほどまでの戦場の地は恐ろしいほどの静けさを漂わせる。

そんな中で徳人は自らの疼く感覚を必死に抑えていた。

徳人は気づいてしまったのだ。

喜一郎を滅ぼしたことで得た快感…退魔師の血をはっきりと自覚した。

## 124話

海に見える町で潮風を浴びながら、真弘樹開は手がかりを探していた。

秋を迎えようとしているまだ暑いこの時期でも樹開は、ダークスーツを脱ぐことはなかったが、ネクタイだけは相変わらず緩んでいた。

呪者探しは勿論のことだったが、それよりももっと大事なことがあった。

海沿いのこの町は人口も少なく、年老いた猟師の姿がちらちらと見られる。

歩く人の数も数百メートル先まで見渡しても片手で数えられる。

のどかで安定した空気が流れてはいるが、一方で樹開の表情は険しかった。

まるで何かを警戒しているかのように一歩一歩慎重に踏み出しているようにも見える。

ふと樹開が視線を先に移すと海を眺めて座っている老人が一人、広大な景色の中に納まっている。

違和感は特にない。元々そこにいるのが当たり前のようなぐらいに溶け込んでいるようだった。

樹開はそのまま歩くことを止めずにその老人に近づいた。目的は情報を仕入れるための聞き込みだった。

なぜならこの町には不可思議な話が流れているのを聞きつけたからだ。

有名な幽霊屋敷がある…

そんな話が巷では数十年前から流れていた。

そこに足を踏み入れたら最後、出て帰ったものはいないという…科学で証明できないことはない時代にそんな与太話を信じるものも少なくはない。

だから肝試し程度に考えて何人も若者が興味本位でそこに行ったらしいが、本当に帰ってこなかったらしい。

警察も本物がどうか多少は動いたらしいが、

その屋敷に踏み込んで何もなかったということは立証された。

所詮は噂話…

そんな形で片付けられてしまったが、いなくなった者の周りではそれは語り継がれていた。

この話が本当かどうかは分からないが、

それでも呪者と関連があるのならと樹開はこの町に足を運んだわけだが…

この町に足を踏み入れた瞬間に体に旋律が走る。

今まで味わったことのない感触…

五感が激しく警報鳴らしているようで、はっきりと呪者がいるのではないと悟った。

今でも煙草の煙を揺らしながら考えていた。

俺は順序を間違えてしまったのだろうか？

中堅キャラを倒す前にボスキャラに出会ってしまったようだ。

困惑しながらも違った形で聖夜の協力をしたかったのだからこれは間違いではないと言い聞かせた。

「君もそんな噂話が好きなのかい？」

老人は笑って話していた。きつと何度も同じことを耳にしたのだろう。

こんな小さな町で外部の人間が来れば目立つ。

樹開同様にここの心霊スポットを目指して来た人間もそう少なくないはずなのである。

「ここはそんな話で何人も人が出入りするからなあ…君もあそこに行くのかい？」

「正直に話すと…そうですね」

「そうかい。それならひとつだけ教えておくよ。あそこには何かがある。確実にいる。」

ただふざけて行くのなら止めたほうがいい。この町に住んでいる我々も誰もあそこに足を踏み入れないからね」

「どつしてです？」

「神聖なる領域として語り継がれてきたからね。神の宿すところでも言おうか…」

とにかく、無粋な人間がおいそれと近寄れる場所じゃないんだよ」

「それは、いつからあるんです?」

「私のひい爺さんの生まれる前からあったから百五十年以上はあるんじゃないかな?」

「そんな昔から…」

「武家屋敷のような作りだが、おかしな空気が流れているのも側に行っただけで分かる…」

それなのに恐れも知らずに向かう若者だけは増えていくばかりだ…」

「それで、その者たちは帰って来なかった」

「まあ…噂話だからそんな事実があったのかどうかは知らないよ。でも近づかない方がいいのは確実に分かる…根拠はないがね」

それだけ恐れられていることが判明するのだから、

樹開がこの町に足を踏み入れたときに感じた不穏な空気を考えればこの老人の言っていることに嘘はないことも分かる。

老人に礼を述べると、樹開は、早速その武家屋敷に向かって見ることにした。

きつとここにあいつがいるのだろう。



そのことを信じて林の中へと入っていった。

## 125話

まだ昼間だというのに林の中は、薄暗い。そして独特の空気に樹開の肌も刺激されていた。

「こいつは酷いな……」

この林に入って数分で、自分が異空間に迷い込んだ気分になっていた。

それもそのはずで、人間に備わる五感に誤作動を生じさせる磁場のようなものが漂っていたからだ。

明らかに強力な結界が張られていることは間違いなかった。ここまでのものは、そう簡単に出来るものではない。

熟練者の技か、それとも死者の魂が集まり偶発的に出来上がったものか……

判断に困るところだが、樹開は自分の意識を持っていかれないようにするために、手の甲にナイフで魔よけの印を刻んだ。

軽い防御策ではあるが、効果はある。

樹開は呪いや憑依、といった類に免疫があるとはいえ何もしないままでは、この場所で自分がどうなるか自信がなかった。

周囲を見回し確認しながら歩くと、様々なものが目の中に入り込んだ。

ここに迷い込んで死んだ者の遺留品らしきものだ。

どうみても捨てたようなものではなく、そこに誰かがいたのだ。

しかも死者の魂もぼつぼつと浮遊しているが、微弱で消えそうなロウソクの炎のようだった。

これでは死者から情報を得ることも無理だと判断した樹開はそんな浮遊霊を無視しつつ先へと進んだ。

森の奥には霧に囲まれ崩れ落ちそうな建物があった。至る所に穴が開き、屋根は半壊していた。

それでも入り口はぼつかりと口を開いていて、手招きをしているようにも思えた。

ここに迷い込んだ者たちもきつと、ここに吸い込まれるようにたどり着いたのだろう。

決して自ら望んだわけではない。そんな感じすらする。

ゆっくりと入り口まで行くと、霧はより一層濃くなった。

樹開は微かに震えていた。

恐怖心はなかった。あの日以来、まともな怒りも、恐怖も喜びも感じなくなったのだからだ。

しかし体は反応する。心とは関係なしにだ。

それが人間の本能なのだろう。

本当に恐怖を感じるのとは心ではなく、体だということが樹開にも

はつきりと理解できた。

それからぎしぎしときしむ床を歩いていった。所々穴が開いているので、細心の注意を払いながら進んでいく。

すると広間が見えた。

ぼろぼろの障子の先に二十畳分位のスペースが広がる。

「来たか…」

どこからか声が反響するかのようには聞こえた。

樹開は、はつとして辺りをきよろきよろと忙しく見回す。だが、誰もそこにはいない。

気配すら感じることはなく、声がまるでスピーカーから流れるように頭上から聞こえてくる。

「真払…樹開だな？退魔師の系譜か…その独特の気配…実に好みだ」

樹開にはさっぱりでも相手は知っていた。そのことがより一層樹開の気持ちを混乱させる。

「お前も私を探してここに来たのだろうか？なら名乗る必要もあるまい」

身勝手にも思える発言だが、樹開は何も話さなかった。未だに相手の出方を伺っている。

そして懐にも手を忍ばせていた。

「ここで殺し合いをする気はない…時はまだ満ちていないだろう？  
そのことはお前も分かっているはずだが？」

わんわんと響く声の主に向かって樹開がようやく口を開く。

「なら…お前は何をしてるんだ？俺が知りたいのはこれから何が起  
こるかってことだ。

聖夜に何をさせようとしている？」

そんな世間話もない、質問だらけの発言だが、声の主は少し間を  
置いた。

「ほ…ここを探し当てることもすごいことだが、お前は相当頭が  
切れるようだな」

「褒められても嬉しくないが…」

「いいだろう…このままでは拉致があかない」

そこまで話すと暗闇からすつと姿を現した黒衣に身を包む僧侶。

髪は短髪、年は四十代だろう。

眼光は鋭く何人たりとも寄せ付けないような突き刺さるような気  
配を持つ。

そこまで接近されると、樹開の体はまるで動かなくなる。

それはそのはずで、遠くからの気配だけでも肌が震えていたのだ  
から、

至近距離のこの場ではもつとひどい状況になるのだ。

「記憶障害…心の欠如…そんなお前が持ち合わせている精神面での強さという武器が、

役には立っていないようだ。それだけ体は正直なのだ。

自分で克服できるような恐怖というものは脳内で作り上げたものだ…本当の恐怖は克服はできない」

どこまで自分のことを知っているのか…この男には何でもお見通しだということも分かった。

だからこそ見えない恐怖に樹開はもがき苦しんでいたのだ。

震える声を絞り出して男を見た。

「た…確かに…あんたを目の前にしてこの様は…否定の仕様がないうか、あんたは人間なのか？これほどまでのプレッシャーは今まで味わったことがないもんでな」

このまま襲われれば赤子をひねるよりも簡単だろう。それほどまでに樹開は身動きが取れなかった。

「人か…そんな称号は…随分昔に捨てたな。俺が深い絶望に陥ったあの日から…」

「絶望だと？それが、呪者と何か関係があるのか？」

「やれやれ…少々しゃべりすぎたか…今はまだ早い。お前がここに來ることな。

だが、ここで命の取り合いをしようということではない。そろそろここを引き払うとしよう…」

すると男は先ほどのように姿を消してしまった。

「お…おい！なら、何故俺に姿を見せた？」

どこに消えたのか分からないので上に向かって声を張り上げた。

しかし声の主は当に姿を消し去っていた。

そのせいか樹開の体は急に軽くなった。

ほっとした気持ちとやりきれない気持ちで立っていたが、あの男がこの先も周囲に現れるのだとはつきり感じた。

## 126話

呪者という駒が盤の上に乗って欲望というものを満たすゲームをする。

一人は狩るもの…残りは逃げるもの。

狩るのは当然、聖夜だ。だが、彼女には他の呪者は殺せない。が…新堂徳人と体を共有することでそれまでできるようになった。た。

呪者のほとんどはひっそりと暮らしたかった。欲望を満たしながらも永遠に…

しかし生物に永遠という言葉は存在しないのだ。物を考え、悩み、幸せを感じ、生き続けるとやがて死を望むようになる。それは自然な行為なのだ。

体が年老うことなくとも思考の限界はあるのだ。

人の欲は無限…しかしそれを満たすことはできない。だから道半ばにして自害する呪者も存在するのだ。

中には割り切って生き続ける者もいるが、いずれはきっと死を望むだろう。

飽きるか諦めるかという形を取って…

だからこそ、聖夜は生き地獄を味わっているのだ。

四百年もの間自殺することもままならない状態で、重い枷だけを



背負っていた。

死にたい…そう思うことも何度もあっただろう。しかし彼女は挫けることをしなかった。

きつと存在するであろう自分の未来を信じて。

おかしくなることは簡単だ。

不条理な境遇にただ単純に身を任せ、本能のままに…獣のように生きればいいのだから。

ひよっとしたら僧侶の狙いはそれだったのかもしれないとも、聖夜は薄々感づいてはいた。

しかしそんな屈強の精神力の持ち主も徳人と血を交えてしまったことで、格段におかしくはなっていた。

「っは…」

聖夜の目覚めは最悪だった。

普段見慣れない夢を見てしまったからかもしれない。汗を大量にかきながら起き上がる。

どくんどくと心臓が動く音が聞こえるようだった。

「くそ…」

思い出したくないようなことが聖夜には山のようにある。そう、四百年も生きていれば。

しかしそれから目を背けることはできなかった。だから脳裏には確実に残っているのだ。

映像として…記憶として…

朝を迎える前に目を覚ましてしまった聖夜は、二度寝をする気はなかった。

寢床から立ち上がると、外に出た。

ここは森林の中に存在する一軒の廃屋だ。

雨露しのげればいいと思っっている聖夜の毎度の発想だが、そこには聖夜以外の人の存在はなかった。

「さて…そろそろ行くか」

呪者の生き残りは、聖夜を除いて残り五人だった。

聖夜は独自に動いてここに新たな呪者が存在することを嗅ぎ付けていた。

徳人からもらった能力は巢晴らしだった。

以前よりも五感研ぎ澄まされ、違った意味で体も鋭くしなやかに動くのだ。

これが人間に戻った体の証…

そんなことも考えながらも、徳人に対しての罪悪感も感じていた。自分が死ねば、徳人も死んでしまう。そしてそれを誘発してしまったのは自分だと。

明け方が近い…

森林の中の気温は低いせいもあり、聖夜もいつものようなラフな格好ではなく長袖を着ていた。

空気が澄んでいて、吸い込むだけで清しい気分させるが、聖夜の面持ちは険しかった。

今から一ヶ月前、聖夜は導かれるようにこの地に足を踏み入れた。駅に着くとはっきりと呪者の気配を感じた。

それからは地道な搜索活動。

そしてはっきりと住処まで特定することができたのだ。

仕掛けるなら今日。そう決めていた。

だから緊張もしていた。悪夢にうなされたのもこのせいかもしれない。

今回は一人だ。

樹開も徳人もいない…

そして生身の体。ひょっとしたら死んでしまつかもしれない。

そう考えるだけで恐ろしいのだ。

選択肢はない。自分はただ前に進むことしかできない。それだけで足は自然と前を向いてしまうのだ。

「行くか…」

夜も明けない間にけりをつけようと、街中に向かった。

## 127話

二ヶ月前

徳人は自分自身の力の本質を知りたかった。

不可思議な力に翻弄されるのはうんざりだったからだ。

自分が力に振り回されるのではこの先も生きてはいけない。力を自分の意思で使えなければ…

だからまずは自らのことを知ろう…と。

疎遠になっていて知らない、親戚のことを調べることから始めた。

身内はみんな短命で生き残っていない。しかし新堂家の本家なるものは存在した。

昔一度だけ葉書が届いたことを思い出したのだ。小さいころ父親宛に届いたのを見たのだ。

両親の荷物は亡くなるよりもずっと前に知人に預かってもらっていた。

きっと自らに訪れる死を感じていて死ぬ前の整理をしていたのだろう。

そこに何かの手がかりがあると、数県離れた場所まで移動する。

片田舎のこの場所には住宅街は存在しなかった。

点在する大きな民家ばかりで、幼少の頃につれてこられた記憶が

蘇る。

徳人は土の道を一時間以上も歩き続けた。

水田の広がる風景はどこか心を落ち着かせる。

「すみません…」

一軒の民家の庭に入ると、そこには庭作業をしている老婆がいた。

老婆は徳人にすぐ気がつかなかった。

遠目で見て、それから近づき、その人物が知っている人間だと瞬時に思ったらしく声を掛ける。

「あれ…徳人くんかい？」

「あ…はい…」

自分を覚えていることに驚きもしたが、ここは話を合わせようと考えていた。

「大きくなったねえ…十年振りかね？」

「そうなりますかね…」

そこからしばらくの会話が続き、いよいよ本題に入った。

「あの…親父たちが残したものを受け取りたいのですが？」

「ああ…圭也さんのかい。あの人、本当に不思議な人だったねえ…」

「不思議と言うと？」

「人には見えないものが見えたり、それを払ったりしてくれただよ。だからこの村の恩人でもあるのさ」

すると老婆は徳人の父親、新堂圭也のことを話した。

多少誇張してあることに違いないが、それでも徳人は父親が生粋の殺魔師だということを知った。

この村は昔おかしな出来事に悩まされていたらしい。

原因不明の奇病。それは人から人に伝染するものではなかった。

毎年、この村の誰かが一人必ず死ぬというものだった。まるで生贄を与えるかのように。

今年も村の若い女性がいきなり倒れ、長い間床に就いていた。

医者に見せても原因が分からないとのこと。

祈祷師やら霊媒師に視てもらってもとりつかれている様子もないということだった。

女性はどんどん弱っていく一方だった。

そんな不可思議な状況に困惑していた村人の前に現れたのが、徳人の父、新堂圭也だったのだが、

彼はこの村に着くなりその原因を一目で看破した。

「この村の奥から邪悪な臭気を放つものがある」

そんな言葉を口にしたものだから大変だった。こいつは頭がおか

しいのかと村人は笑った。

しかし圭也は私がこの村に起こる厄災を沈めてやると強気の姿勢を崩さなかった。

そんな態度なので村人もやれるものならやってくれと話した。

それから圭也は村人の前から姿を消すように村の山奥に入っていた。

殺魔師の称号を持つ圭也にとって、この村の違和感の場所の特定はすぐに来た。

この村の山の奥から不穏な空気が流れ出しているのだ。

人の目には見えないが、白っぽい煙のようなものが人を誘うように森林の中を這うように進んでいた。

歩くこと一時間で目的の場所まで到達する。

そこにはぽつかりと穴が開いていて、そこから白い煙が流れ出ていた。

「おい…出て来いよ」

圭也が穴に向かって声を掛けると、そこに住む主は声につられてか大人しく姿を現す。

それは人などではない。物の怪の類だった。

浪人のような姿をしていて、右手には刀を握っていた。



顔に生氣はなく青白い。しかし目の鋭さは剣客そのものだった。立っているだけで殺気に気おされそうになる。だが、圭也は平然としていた。

「おたくかい…この村を騒がしている原因は…怨念の塊にも見えるが、どうして村人を襲っている？」

「人間と話すのは久しいな…彼らに私は見えないのだから…貴様は退魔師か？」

珍しい者に出会えたものだ。百年振りだろうか…半端な退魔師にこの地に命もろとも縛り付けられたのだからな」

「何をした？」

「大したことじゃない。人を狩るのが好きなまでだ…それが趣味の段階では済まされなくなっただけだ…」

未熟な退魔師に無理やり封印されたよ。しかし甘い結界でな、数十年で崩れかけた。

おかげで今は村人の魂を一年に一度だけ奪えるまでになった…」

「それは厄介だな。性格もそうだが、怨念がいつまでも漂っているのは感心しない。」

「さっさと殺すでしょうか」

「ははっ…私を殺すだと？名のある高僧がたくさんここを訪れたがみんなさじを投げるか、私の餌食になったのだぞ？」

「どう見ても霊感の強いだけのお前に私が払えるかと？」

「お前は、よほどレベルの低い人間に出会っていたらしいな。世の中を知らない」

「何だと？」

「本物つてのは多くを語らないんだよ。そして速やかに任務を遂行する」

ばちんと圭也が指を鳴らすと、いつの間にかその霊を取り囲むように方式が出来上がった魔方陣が完成されていた。

「な……」

気がついたときには遅かった、体を光の糸で縛られる。

身動き一つできなかつた。声も上がらずにそのまま地面に引きずり込まれる。

そんな霊を圭也は冷静に見ていた。そこに一ミリの隙もない。

確実なる消滅を見届けるまでの徹底振りにはプロそのものだ。

そしてその霊の全てが飲み込まれると、

大気は安定を取り戻し、穴の中からは以前のような白い煙のようなものは出なくなつた。

終わったかのように思えたが、圭也は気を抜かなかった。解せない。あまりにも簡単すぎる。そう思っていたからだ。

だからかもしれない。次に起こることの気構えにも繋がる。

ひゅんっ

空気を切り裂く刃の音が圭也の頬をかすめる。

ぎりぎりまでの緊張感がそんな奇襲を本能で避けさせる。もしも無警戒なら首が飛んでいただろう。それほどその攻撃は殺気を感じさせない。

圭也が視線を真横に移すと、そこには刀を握り締めたもう一人の男が…

「悪いな…俺たちは二人で殺人を楽しんでいたんだよ」  
にやりと笑うもう一つの靈魂。実体化も完璧で縛りを受けていないようだった。

「あいつが封じられたおかげで、俺の封印が解けたよ…」  
刀をさっさと圭也に向けて構えたが、殺気はまるでない。

「奇妙な奴だな…殺気がまるで感じられない」

そんな特異体質のような霊に向かって圭也は話しかけた。

「殺す意思がないからさ…俺にとっての殺人は日常の一部。当たり前  
前の行為なんだよ。」

だとしたらそこに殺意は働かない」

「益々嫌な奴だな」

そこまで会話を続けると、そいつは圭也にかかっていった。

まるで殺気のない相手の攻撃は読みづらい。しかし圭也は自らの  
経験でそれを避けていた。

かなりの技術を持つ相手に出遅れた形ではあったが、圭也はどう  
にか応戦していた。

右に左にかわして隙を伺う…だが、相手に法則性はない。

同じ攻撃は一度もすることがなく、直線の動きだけではなく回転  
を加えたり、

フェイントまでも織り交ぜるから読みづらく難しかった。

殺気もない相手のフェイントは読めないのだ。動体視力が物を言  
うこの状態で圭也は確実に切り刻まれていた。

「ふう…」

呼吸にも余裕はなくなる。どうにか致命傷は避けているものの体  
にはダメージが蓄積していた。

「ここまで相手の…」

ぼりぼりと頬をかいて自らの誤算を悔いていた。

「それは光栄だ…あいつを軽々と葬り去る相手にここまで言わせられれば、俺も自信がつく。

ははっ…俺の腕も捨てたものではないな」

「そこまで褒めたつもりはないがな…」

「俺は自由の身だ。お前さえいなくなれば、このまま麓の村の人間の魂を根こそぎいただいて、空腹を満たすさ」

「それでどうする？」

「他の村にも行く…俺らのような縛られた靈魂は、たくさん人間の魂を食らうことで実体化に近づく…」

そうすれば更なる活動を広げることができるというもの。

食って食って飽きるまで人間を食い尽くす」

「そんなまやかしを…信じているというのか？お前らはいくら人の魂を食おうと実体化などしない。

元々肉体が存在しないのだからな」

「どういうことだ？」

「お前に教えるのはここまで…どうせ滅びるのだから…」

「何だとお…！」

相手は怒った。刀をぶんぶん振り回し、襲い掛かった。だが、圭也はその一撃一撃を抜いた短刀で振り落とす。

「な！」

かわすことで精一杯の圭也が反撃をしたのだ。

「俺だって反撃はするさ…見切りに時間は掛かったが、あれで十分だ」

その斬撃の速さは三倍以上。相手の攻撃が届く前に一太刀も二太刀も入れられる。

しかし怨霊というものは強い意志で動いているので生半可な攻撃では消滅しない。

斬られてもすぐに再生していた。

「封印の術さえ警戒すればいい。多少斬られようが、俺はこのまま突き進むのみ…だから貴様に勝ち目はない」

そのようだ、状況を見て判断していたが、圭也に焦る様子は微塵もない。

「こうなることも予想していたからな」

手を変えることを選択し、刀同士の連撃の合間を縫うようにして上空に何かを投げた。

相手にそれが何かだ、ということを知るほどの余裕はない。

丸い固形物のようなもの。

それが舞い上がり一定の距離まで到達すると、ぱっと光と共に広がった。

「うう！」

まるで投網のようだった。

網状の光の糸がそいつを取り囲み動きを封じる。

「何も魔方陣ばかりが封印の道具じゃない」

必死に網から出ようとする哀れな猛獣を見下して、短刀をすつと構えた。

「さっきの話の続きを教えるよ……」

「さっきだと？」

「お前らは元々存在しないってことだ。人間には強力な思念が存在する。」

その残留が実体化するものが霊だ……しかし例外もある。たくさんの人間の負の思念が集まると生まれる集合体もあるんだ」

「それが……俺たちだと言うのか？」

「ああ……そんな馬鹿な術を開発して生きつづける人間もいるからな。元々の存在はないのに純粹に無から生まれるってことだ……」

自らの存在を真つ向から否定され、何もできない無残な思念体は、そのまま圭也の手によって滅ぼされた。

全てを無に返すことが苦痛なのか、冷たくて悲しい圭也の眼差しは、自らの力を軽蔑しているかのようにも見える。

それから圭也は開いている穴を埋めると、村に帰って様子を見ることにした。

すると先ほどまで弱りきっていた女性が急に起き上がって、体の不調が治ったことを村人に知らせた。

「これは…」

当然、全員がそれを見て驚いた。

すぐに治るような症状ではないぐらい辛そうだったからだ。

「大丈夫なのかい？」

側にいた老婆が尋ねると、女性は全然平気だと、体を動かして見せた。

「どうやら…間に合ったようだな」

圭也がそんな村人たちの前に姿を現すと、全員が態度を変えた。

「何をしたんですか？誰も治せなかったのに」



「別に：不浄なものを取り去っただけだ。それでこの村からは奇病なども存在しなくなる」

詳しくは話さなかったが、女性を救ったことは事実だったので、村人はこの男の話を信じることにした。

長居をするつもりもなかったらしく、圭也はすぐにここから立ち去ろうとした。

そして去り際に、

「また様子を見に来る…」

と話した。

それからこの村に出入りすることになったのだが、この村と圭也は長い付き合いをこれからすることとなる。

圭也が助けた女性こそが、徳人の母親となる人物だったからだ。

「それで？圭也さんの持ち物だったかな？確か：蔵にしまってたはずだけど…探してみるからちよつと待っててね」

人のいい老婆はそのまま徳人の欲しがるものを嫌な顔一つしないで探しにいった。

一人残された徳人は、自分の両親が過ごした場所を改めて眺めていた。

文明が進んでも変わらないものがあることを証明しているかのような景色にどこか心が奪われてもいた。

「これだと思うけど…」

数分後に老婆は一つの箱を持ってきた。鍵も何もない木で出来た箱だった。

「これねえー不思議なんだよ。鍵もないのにびくともしない。だから徳人くんにも開けられるかどうか…」

困った表情を見せていたが、徳人は迷うことなくその木箱を手にとった。

そんなに大きくない木箱はしつくりと手になじむ。そして心地の良い風が徳人の体に流れ込んだ。

「これは…」

視界が変わる。

まるで脳内に映像が流れ込んでいるようだった。徳人の脳裏に真っ先に浮かんだものは、一人の男だった。

「お前が今の殺魔師か？」

ダイレクトに会話を求められ、いささか戸惑う。

「そうですね…」

素直に返してしまう辺りが若い証拠でもある。

その男はこちらの様子をじろじろと伺っていた。

「お前がこの記憶の箱にたどり着いたということは後継者だということには違いない。

なるほど…不安要素はたくさんあるようだな」

徳人の風貌を見るなり頼りない様子に表情を曇らせた。

「…」

「まあ、いいだろう。お前も新堂家は殺魔師の家系だということは分かっているのだから覚悟は決まっているはずだ…」

それなら私の話を聞く権利はあるか」

何の話か想像もつかなかったが、徳人には選択権はなかった。男は黙って話を続けた。

「私は、新堂家宗家にして第一党首の新堂環<sup>たまき</sup>だ。殺魔師の歴史は浅い。四百年前から始まるのだが…どのようにして生まれたか知らないだろう?」

徳人の頭には聖夜の姿が浮かんでいた。

あいつは言っていた。自分の生んだ子どもの末裔が徳人だと。しかし樹開はそんなことがあるかと否定していた。

口にこそ出さなかったが、それらのことを重く受け止めていた。

「その表情は何だ?誰かに聞いたのか?」

「いえ…その…」

「まあ、いい。私は孤児だった…寒さと飢えに震えていた少年の頃に一人の僧侶が目の前に現れた…」

あの時ばかりは聖人のようにも思えた。だが…実際は違った」

徳人はどこかで聞いた話だと思った。

「その僧侶はこう話した。お前に生き抜く力を授けよう。ただし…その代償として寿命を頂くと…お前の周りでも短命で死ぬものは多かったはずだ。」

新堂家と交わった者はみんなそうなってしまっただけだからな…所謂呪いって奴だ。その力は永劫に続く無限の遺伝。

しかしそれと同時に能力が強くなっているのもあるんだよ。

そんなお前に聞こう…人ではない者に対する疼きは感じるか?殺

人衝動は抑えられるか？」

一瞬、徳人はどきっとした。自らの心の内を知られてしまったのだろうか、焦ったからだ。

「そう警戒するな…新堂家が魔なる者に対して滅ぼす能力が特化している証なのだから。」

みんな持っているんだよ…」

「みんな…」

「自らの敵が目の前に現れたら、本能で滅ぼしたくなる力が他の退魔師にはない力を生み出しているんだ。」

生きる力と魔を滅ぼす力が平衡しているから寿命が短くなるのかもしれないな」

そのように自己分析をしていたが、徳人には本能の部分にしか興味がなかった。

言うまでもなく、今までの行動を振り返れば、環の話すことは間違いなかった。

殺人衝動はたびたび感じていたのだ。

自分はおかしくなったのだろうか？そんな不安を抱きながら聖夜とも接していた。

「それは悪いことではない。所詮は人の害になる存在なのだからな…殺しても罪に問われることもない」

「割り切れってことですか？」

「それが新堂家の定めだ。今更、自らの行為を咎めてどうする？  
誰もお前に同情などでない…分かってるだろう？普通じゃない  
んだよ。」

それを認めるしかない…いいか、生あるものには役割がある。  
お前は…人を脅かす存在を葬れる力を持っているんだ。それを否  
定したらお前の存在は意味がない」

環の言葉は徳人の凍りついた心を徐々に溶かしていった。

徳人はずっと悩んでいたのだ。自分の能力の意思に本能で従って  
いいのだろうか。

しかしここでそれを利用しなければ、存在価値はないとまで言わ  
れた。

それならば…という気持ちに変化はしていた。

「受け入れるんだ。自分の力を…」

「…」

「逃げるな。自分の運命から。寿命が短くとも…使命を皆全うして  
きた。お前の両親もそうであった」

「く…」

徳人は死に際の両親の顔と言葉を思い出してしまった。

『私が死んでも…意思は受け継がれている。そう信じている…』

押し付けることはしなかったが、新堂家に流れる血のことをはつきりと話していたのだ。

そして何かあったらここを尋ねると言われていた。

「確かに…あなたの言うとおりだ。俺は前に進むしかない。しかし…聞きたいことがある」

「何だ？」

「この…俺の…湧き上がる本能の力に素直に従ってもいいのか？正直…自分が怖い。」

我を忘れてしまったらどうなるのか想像もつかない。抑えることに必死の部分もあるんだ！」

「恐れているのか…」

「ああ…そうすることが正しいのかも分からないのだから当然だ…元の自分に戻れるのかも疑問だから」

「力は…未熟なものが使えばそれなりの痛手で返ってくる。」

しかし使う時を間違えなければ、救える者を確実に救えるのだ。どっちにしてもそれはお前次第だ。

私かとやかく言う必要はない。だが…これだけは言える。お前は自らの血を否定しているんだよ…

それは単なる逃げだ。大きな力があってもそれでは、振り回されて終わってしまうぞ？」

「…」

「受け入れることから始める。自分は普通ではない。魔なる物を滅ぼすことが使命だ。」



何より自分は短命だ…とな。諦めは更なる欲を生むことはない。固い決意は生き方そのものに反映される。迷い、焦りは判断を鈍らせる危険な存在だ。

お前の父親は優しすぎた。そのことを生まれながらに教える義務があるはずなのに怠っているのだからな」

「親父が…」

「別に責めるようなことではない。いずれは知る事実だ。

しかし…長い歴史の中で、力を生かせず、使わず死ぬものもいた中で、お前も同じ道を辿るか？

それはないだろう…今は呪者なるものが激しく活動を迎える殺魔師にとって最高の時なのだから」

呪者を知っているということに対して徳人は自分の気持ちはさておき、詳しく聞き出したかった。

すると環は、殺魔師と呪者は出会うことがなかったと話した。

徳人はそれならどうして呪者の存在を知っているのか理解できないと環に詰め寄った。

「私に授かった能力は予知の能力。その上、新堂家の血を絶やさなように見守るのも私の役割だ。

だからこうやってその時代に合った情報を与えている」

「なんだよ…それ…なら、ただの漠然とした見解ってこと？」

「甘いな。そんな単純な読みなら、私がいなくても十分だ。だからここから先が重要だ。」

お前は貴重な時期に生まれた。呪者が集うこの瞬間。きつと歴史を動かすほどの大きな鍵となる。

それに…実際に一人葬り去っているのだろうか？紛れもなく歯車は回り始めているんだよ」

「それがあなたの見た未来なのかい？」

「はつきりとは見えない。臆だ…こんなのは初めてだ…だからこそ、何かがあるのだろう。」

新堂家の最後かもしれないのだからな…」

未来をはつきりとは見通せないからの曖昧な発言の連続。

しかしそれが間違いだと言わせない程の環の自信に満ちた表情。

その狭間で徳人はどのように捕らえていいのか分からなくなっていた。だから妙な苛立ちも覚えていた。

「…俺は負けない。このまま潰されるわけにはいかない。だからあなたの視えた未来も鵜呑みにはしない」

「ほう…なかなか良い答えだ。私の言葉はあくまで助言。」

それを信じきってしまったえば、そこでお前という人間の成長は終わりだ。そうやって自らの足で前を歩け」

励まされているのか？そんな気持ちになりながらもどこか徳人の心は奮い立っていた。

「あの僧侶に出会うことがあったのなら、話してくれないか？新堂環は死にたがっている…」

「あの僧侶が生きていても？」

「当然だ…不可思議な力を与える永遠の魔法使い…そんな所だ。それなら寿命など陳腐な枠組みに囚われる生物ではない。恐らく万物の仕組みを知る者…」

人間など凌駕しているんだよ」

「そんな力を持つものが、どうしてこんなくだらないゲームを作る？」

「目的は分からない。しかし意味はある。

私はもう疲れた…私に課せられた呪いは新堂家が滅びるまで続く…不自由な不死だ。

いや…思念だけの存在か…」

「厄介だな…でも…その僧侶って奴が生きているのなら打開策はいろいろあるってことだ。

それに…高みの見物しているそいつを殴ってやりたい」

「勇ましいいな…できるかできないかは、別として最後の希望をお前に託すか…」

「最後の希望？」

「新堂家に伝わる開限界。読んで字のごとく限界を開放する。

私が長い間自らの術に力を注いで完成させた。これを得ることで能力の更なる力の上乗せにもなるはず。

ただ…お前の自我が崩壊しなければいいがな…」

「恐ろしいことを言うなよ」

「先代にも託すことを躊躇った。しかし…お前なら…」

環は徳人の潜在能力に賭けていた。先代の新堂圭也はその術を与えるに足りないと思っていた。

人の良い彼にはその覚悟が足りなかったと環は思っていた。

徳人はそんな圭也とは映し鏡のように、強い覚悟を持っていた。

素質は十分…自らの能力を託すに足る存在だと判断した。

「止めてもいい…ただ…私はお前に託したい」

環は徳人に光を見ていた。未来を視る力などではない。直感だった。

見るからに甘さの残る青臭い青年だが、期待に値するものを持っている。そんな風に徳人のことを評価していた。

「ありがたいね…それなら俺も…期待に応えなくては…」

「ほう…覚悟は出来ているようだな」

「ああ…俺は…聖夜と血を混ぜり合わせてから、普通の生活には戻れなくなったからな」

「聖夜だ？」

「こつちの話だ。心配しないでくれ。だが、俺にもやらなくてはならないことがある。」

それなら力が欲しい。あんたの言うその術を俺にかけてくれる

というのなら、喜んで受け入れる…」

これ以上話すことはないと思った環は、自らの最高の術を徳人に託すことに決めた。

それから間をおくこともしないで、どうなるかは想像できないが、自分の力でどうにかしろと話すと、環は徳人の脳内に術をかけた。

そして空白の時間を置いて、徳人は気を失った。

## 131話

黒い衣に身を包む一人の僧侶は、天まで届きそうな高層ビルから下界を眺めた。

いつものように寂しい眼差しと空虚な心で群がる人をまるで蟻でも見るように見下す。

「溢れる欲望…その果てに見えるものも見えなくなる人間…愚かだ…」

僧侶は一人だった。いつでもどこでも…

その素性を知る者もいなければ、追いかけることもできない。

それほど人とは違った能力を持っていた。

しかし…そんな力を持っているからといって、彼が優越感に浸ることも、

権力を得ることや名声を得るために翻弄することはなかった。

孤独な存在で何百年も過ごすことには慣れていた。だからこそいんなものが見えていた。

彼の目には進化した人間と高度な文明は上辺だけの滑稽なものにしか写らない。

絶望は昔たくさん味わっていた。

何百も何千も…だからこれは人間に与える試練のようなものだとも思っていた。

人はどこまで足掻ける？

そう思っただけで口元が緩んでしまった。

彼の頭の中には単純な目的だけが一つあった。それはいずれ明らかになる……

「自らの欲望と対峙して愚かさを知るがいい」

落ちるか落ちないかのぎりぎりの場所に立って下から迫り来る突風を全身に浴びた。

呪者を操り四百年の時を掛けてゲームを展開する魔法使いは再び闇の中へと消え去った。

これから味わうであろう人間の絶望に向かって……

## 132話

秋もすっかりと深まった十一月。

紅葉は山々を覆い、色彩豊かな景色を見せていた。

呪者同士の争いが始まってたった半年しか経っていないが、渦中の人間にしてみたら一生分の中でも体験できない経験をしている真つ最中だった。

半ばで命を落として死ぬものもいたが、一般人からしたら何事も無い日常の一部でしかなかった。

全部で八人いた呪者も残り四人となっていた。

葬り去られた呪者は何も徳人と聖夜の手によってだけではない。

別の呪者によっても殺されたものはいた。

それぞれのプレイヤーには思惑があった。

だからそれぞれの意思が反映される結果がそこにはある。

生き続けたいものは必死に逃げ、僧侶の入れ知恵があり何かを企むものは、

残りのものを狩る、というように追いかけてこのような形に出来上がっていた。

徳人は自らの家系の詳細を知り、聖夜は残りの呪者を探しに歩いた。



真払樹開は僧侶と出会い未だに明らかにならない計画を悟った。

そうやってそれぞれの思惑は一つの場所に集中していった。

「やはり…ここにいたか」

真払樹開は、一人うろついている聖夜に声をかけた。

どうやって探したかなど、聖夜は聞きはしない。

樹開にとって聖夜を探すことはそんなに難しいことではないからだ。

「その面持ちだとお前も見つけたのだな。残りの呪者を…」

何も話さない聖夜だったが、細かい表情や仕草で樹開は察していた。

そんな相手の微妙な変化を感じ取れることが、好意を寄せていることにも繋がった。

「相変わらず…お節介なんだな。お前は…」

「それが今の俺にできることだからな。十七年前、お前が忽然と姿を消した時から決めている…」

「そんな昔のことを引つ張り出して…」

もう自分のことは忘れて欲しいとでも言いたげだったが、口にはしなかった。

聖夜も本当は嬉しかったのかもしれない。

だから樹開を口では煙たがっていても本気で嫌いにはなれなかった。

「徳人に何か話したか？あいつの様子もおかしかったからな」

「ああ…少し…お前もそうだが、新堂家を甘く見すぎている。

あいつらは魔に対しての反応が異常だ。長くいれば確実にお前が殺されている」

「そんなことを話したのか？」

徳人のおかしな行動にもそれで納得がいった。

「これは事実だ…お前が人間に戻るきっかけをつくったのはあいつかもしれないが、

一緒に行動を共にするのは危険だ」

「退魔師としての意見か？」

それともお前が単純に徳人が嫌いだということですか？そんなことを話したのか？」

「両方だな…」

「正直な奴。しかしいい機会だったかもしれないな。俺も俗世間に

慣れすぎてしまった。

本来の目的を忘れて一時の青春を謳歌してしまった。  
自分がいるだけでたくさんの人間を不幸にするのにな。

梨絵には悪いことをしたよ…ほんと…」

「そう責めるな。長く生きてれば、夢を見なくなるのも分かる…」

樹開は煙草を取り出すとすつと火をつけた。

聖夜から見ると、青年の姿の樹開が焼きついているだけに変な感じがした。

十七年の歳月が一人の男をここまで成長させたことを確認するようじつと樹開の姿を見ていた。

「樹開：お前は俺を恨んでいないのか？あの日…お前の全てを奪ってしまった」

すると樹開は全て済んだことだとしか話さなかった。

過去にこだわることを嫌い、先だけを見ようとしていたのだろう。

真つ直ぐで揺らぐことのない意思が目の奥に宿っていた。

それだけで、聖夜は自分の甘さを再認識させられた。

「お前にはかなわないよ…」

それ以上詮索することもなかった。

そして二人で事が起こるであろうこの町の中を歩き出した。



### 133話

聖夜以外の呪者も動きを見せていた。

聖夜が目をつけるだけあって、確かにこの町には呪者が存在した。

盲目の呪者で十七年前に聖夜、樹開の両者に一生忘れることのない深い傷をつけた幸塚太介だ。

彼はもう一人の人物と行動を共にしていたが、基本的には自由行動だった。

憤怒の称号を持つ彼としては、欲を食い漁るよりも殺人衝動に駆られて無作為に人を殺すことが多かった。

優先順位など関係なくその日によっての行動が違うので、探す人物としては面倒な人物でもある。

今日もいつものように予定もなくぶらつく。

盲目ではあるが、他の機能がそんな障害を補うには十分なぐらいの能力を発揮していた。

皮膚に当たる空気の流れだけでどこに何がいるのかを脳内でイメージすることができた。

そして音で距離を測り、匂いでその物体が何であるのかを判断していた。

行き交う人とも杖もなしにぶつかることなく歩いているのがその証拠だ。

すいすいと上機嫌で人ごみのなかを歩き、獲物を物色していた。

しかし今日はいつもの日とは違った。

「うん？」

何かを感じてその足をぴたりと止めた。

太介はそんな自らの足を止めさせた気配のする先を見る。

そこには聖夜と樹開の姿があった。

目の見えない太介にはその主が会ったことのある人物かどうかは分からなかった。

しかし…どこかで感じたことのある気配だとも認識していた。

「何者？」

脳内に浮かぶイメージでは、そこにいるのは男と女で実際の体型もほぼ一致していた。

「関係者だよ。率直に言おう、俺について来い」

聖夜は説明する間もなく、太介を誘導した。

そんな強引な対応にも太介は動ずることもなく、大人しくついていった。

彼には恐怖などない。どんな形でもいいから自分を楽しませてくれるものなら何でも歓迎する。

そういった人格形成も幸いしたのだろう。

聖夜と樹開は、先ほどの所から程近い漁港の倉庫を戦う場所を選んでいた。

だから人ごみの中心街から一変して昼過ぎのここには人がまるでない。

仕事を終えて誰もいなくなっていた。

辺りから潮の匂いがするのに太介もにやりと笑っていた。

「ここは…漁港かい？」

さつと言い当てて誘導した聖夜の方を見た。

決して見えているわけではないのに、聖夜は心の目で見られているような感覚に襲われる。

それは、ぞわぞわと背後から虫が這うように気色悪いものだった。

「君も呪者なんだろう？僕を殺しに来たのかい？」

「ああ…お前とは因縁があるからな」

「因縁？やっぱり以前どこかで会ったことがあるんだ？そうかなって思ったりもしたんだよ…」

十七年前とは大違いで、口が良く回る相手に不気味さを感じる。

「俺は思い出したくもないが…お前を殺さないと前に進めない気もするんだよ」

「そういうことを口にするってことは、手痛い仕打ちを受けたってことか…なるほどね。」

でもね…僕が今のようにならないうちに感情も能力も上手にコントロールできるようにしたのって

ここ数年の話なんだよ。悪いけどそれ以前は力に振り回されてほとんど覚えてないんだ」

聖夜は初めて対峙したときのことを思い浮かべた。

確かにあの時は、太介の自我が崩壊しているような錯覚に囚われた。

それなのに今の落ち着きようはおかしい、そう思っていた。

それから太介も話しついでだと思ったのか、自らの過去を話し始めた。

「僕はね…今までの時間を絶望と狂気にしか費やしていないんだよ。この姿を見れば分かると思うけど、目は力を手に入れる前に失った。」

実の親に切り刻まれてね…」

「な…」

「戦争から帰って来た父親は精神がおかしくなっていてね。」

ちよつとしたことで暴力を振るい、酒に溺れ、自我も崩壊していったよ。

だから何も無いある日にいきなり理由もなく僕の目を包丁で切り裂いた…

十二歳の僕には耐えられない苦痛と決別を強いられたんだよ。それでその後どうなったと思う?」



続きの予想を迫る太介に二人は何も応えられなかった。するとつまらないなといった様子で話の続きを話した。

「救いの手を差し伸べるように呪者の契約を持ち掛ける僧侶が現れたよ。

お前の望みは何だ？ってね。そして…まあ、当然の如く契約をしたさ…

不可思議な能力もおまけに。だけどそれで自分は救われたと思っただね。

だってあのままじゃ、きっと野垂れ死にか殺されていたよ…

だからさ、僕は未来に進むためにあることをまず最初にしました

…」

「勿体ぶるな。どうせお前は親父を殺したんだろ？」

ぼろっと樹開が代弁した。

当たっているのかは分からないが、太介の嬉しそうな顔でそうなのではないかと判断した。

「つまんないな…先に言われたよ。そうだよ。

これでもかかって言うぐらいにずたずたに刻んでやったよ。時間を掛けてゆっくりとね…

でもさ、最後までやるうと思ってたのに途中であっさりと死んだんだよ。

信じられる？両腕、両足、下半身を潰した途中でさ…折角頭までいきたかったのに。

でもさ、今でも覚えてるけどあいつの声は殺してくれの繰り返しだったんだよ。

これって楽しいよね。自分が優位な立場に立っていた頃とは大違

いで、泣き喚いでいるんだもん。

あの声が聞けるだけで快感だったなあ……はははは……」

自分の親をじわじわとなぶるように殺した話を鮮明に楽しそうに話す太介の姿は、自然だった。

## 134話

それを見た瞬間に樹開は、やはりこいつはやばい存在だと思った。

天性の殺人者で、明らかに狩る側の人間だと。

人間が殺しを行った後で抱くのは、罪悪感、

そしてそれから逃れるための自分に対する言い訳が大半だ。

確固たる理由があるから殺す。

というものは人の心があるからなのだが、稀にそれに属さない人間がいる。

ただ殺したいから殺すだ。

貧しいから殺す、憎いから殺す、かわいそうだから殺す、必ずそ

こには感情が入るのだが、

ごく自然にああ、この人間殺してみたいな…的な軽い発想で殺せる奴がいる。

それは人間という枠組みには入らないのだ。生物として別の人種と捕らえてもいいだろう。

だから、どこかが壊れているとも二人は思っていた。

「でもね…そんな僕の力の反動も当然あつたんだよ。

僕という器に納まりきれない能力はどんどん僕を精神を侵していったんだ。

まるで意思とは無関係に…このままではまずいと思ったさ、

流石に自分が自分でなくなるのは殺しをしても意味がなくなるからね。

そして数十年はその力を必死に抑えるようにひっそりと暮らしたよ。

そして十七年前：あの人が僕を助けてくれた」

「あの人？」

「無知な僕にこの力の抑え方と、知識を与えてくれたんだ：同じ呪者だというのに助けてくれたんだよ」

太介はそうやって行動を共にしていたもう一人の呪者の話を始めた。

その男の詳しい素性は太介本人も分からないらしいが、自分の敵ではないようなことを話していた。

「お前：騙されているんじゃないのか？そいつも呪者なら何か企んでいる」

そんな忠告を聖夜はしてみたが、太介は耳を貸さなかった。

「お前にあの人の何が分かる？僕をどんな形であれ救ってくれたのは、あの人だけなんだ。

あのまま僕が膨張していたら狂って終わりだったんだよ。だけど：今は違う。こんなにも楽しく殺せている」

十七年前、太介と初めて会った時、彼は苦しそうだった。それを明確に覚えていたが、二人は解せないでいた。

呪者が他の呪者を救う能力など持っているのだろうか？ということだ。

しかしこの太介の熱狂的な信者のような話し方ではいくら質問しても無駄だろうとも感じていた。

「お前のように…意味もなく殺しだけを楽しむ呪者もいるんだな」

十人十色だといったそうに聖夜は呆れた顔をしていた。

「僕には僧侶のことなどもう忘れてしまったよ。」

このままの世界を維持していきただけだけど邪魔をするなら喜んで排除する」

急に殺気を膨らませた。

以前感じた殺気に比べるとおとり気味なのは、やはり力が抑えられたせいなのだろうか。

聖夜たちもそれほど恐怖を感じなかった。

「樹開…どうだ？お前の四肢は動くか？」

前回のことを教訓にそんな質問を試みたが、樹開は余裕の表情を見せていた。

「なら…いけるな」

お互いに意思の疎通を取り終えると、戦闘態勢に入った。

「面白いね…」

これから始まる惨劇を楽しむかのように太介は、にやりと笑みを浮かべる。

明らかに自分は負けないといった様子だ。

聖夜たちは決して相手に近づかなかつた。未だに相手の能力が分からなかつたからだ。

じりじりと互いに探り合っていると、痺れを切らした太介は右腕を樹開に向ける。

何かが来る。

そう思った瞬間、咄嗟に樹開は体を太介の視界からおおきく外れるように移動した。

と同時にバカン！と大きな炸裂音が周囲に鳴り響きさつきまで樹開の立っていた場所の地面が大きく抉られていた。

「お…」

姿を見失った太介は樹開を慌てて目で追うことをした。

しかし樹開は、太介の側に近づいていた。

それから懐から水銀の入った瓶を取り出すと振りまいた。

「破爆の陣……」

そう告げると水銀は無数の円形の魔法陣の形に変化して太介を取り囲む。

真払気に伝わる方式水銀。型を口にするだけでその陣形を象り能力を発揮する。

その時間は一秒にも満たない。

完成された魔法陣が赤い色をして、その発動準備を整えた。

太介は咄嗟に大きく円を描くようにその場で体を回転させた。

しかし……魔法陣は発動し爆発する。

ずずんという重低音と地響きが鳴り響くと、土ぼこりが舞い上がる。

何も見えないこの状況で追撃するのは危険だと聖夜も樹開もその場でじつと様子を伺っていた。

ぱらぱらとコンクリートのかすが空中を舞っていた。そんな中で少しずつ視界が晴れていった。

「ふう…すごい力だな…」

そこには衣類がぼろぼろになった太介の姿があったが、瀕死の重傷を負っているようには見えなかった。

「僕の手でも全部を防ぐのは無理だったよ。だから少し怪我をしちやっとな」

背中から出血をしていた。血がじわじわとにじみ出していた。

それから空中に飛散していた水銀が樹開の持つ小瓶に戻っていた。

「面白い力を使うね…でもこのぐらいならどうってことない。僕の能力の方が上だよ」

まだ全てを見たわけではないのにそんなことを口にした太介に聖夜は腹が立ったのだらう。



びゅんつと飛び出した。

「馬鹿！」

樹開は迂闊に近づく聖夜を止めようとしたが、遅かった。

聖夜は短刀を抜いて切りかかっていた。

「遊んであげるよ」

目が見えないのに、そんな一振りを余裕でかわしていた。

聖夜も負けずとすぐに切り返して襲い掛かった。

びゅんびゅんと何度も空振りが続く。こんなことは今までになかった。

それに目の見えない相手にかわされることなど経験がなかった。

聖夜は囷にとクナイを数発投げてみる。しかしそれも相手に届く前にひしゃげて落ちる。

これは前回と同じだ。

「くそ…くそ…」

焦りが出てきた聖夜の動きには当然無駄が出てくる。

「目が見えないってことは…不自由なことじゃないんだ。

大気の流れと相手の殺気で先読みまでできるようになるのさ」

そう講釈を話して聖夜をからかっていた。

樹開は黙ってその戦いを見ていたが、このままではまずいと思っていた。

だから再び方式水銀を使う準備を整えていた。

もう何度目か分からないぐらいの聖夜の空振りが続いた後に太介は飽きたのだろうか、

「もういいよ…」

そんな一言を最後に隙だらけの聖夜の腹部に狙いを定めていた。

やばい…

樹開はそれを見て方式水銀を再び開放する。

どん！

凄まじい破壊音が聖夜の腹部から鳴り響いた。

「う…」

その音を聞いて聖夜の動きも止まった。

だが体に異常は見られない。音だけが周囲を埋め尽くすだけだった。

「あれね？」

そんな結果を見た太介はどうしたことだと、聖夜の腹部を見たが、そこには樹開の放った水銀が新たな魔法陣を形成し聖夜を守っていた。

水銀は衝撃を吸収し、また空中で飛散した。

聖夜はその間に大きく後退して、態勢を整えた。

「迂闊に近づくな」

樹開は聖夜を一括したが、聖夜も反論はしなかった。

「あいつの能力は念力だ。おそらく範囲は半径数メートルだ。近ければ近いほどその威力を発揮する。

そうでなきゃ、俺の最大級の魔法陣をいとも簡単に粉々にできるはずがない」

「それならあいつに弱点はないのか？」

「いいや…ある…」

樹開は、たった数分で太介の弱点に気がついていた。

「へえ…すごいね。君…僕的能力を見極めただけでなく、僕の弱点を見つけたの？」

是非とも聞きたいね」

「悪いが…それはお前の体で味わってくれよ。っとその前に…一服させてくれないか？」

戦闘の最中にもぞもぞと煙草を取り出すと、火をつけて至福の表情を見せた。

これには太介も気が緩んでしまった。

「君の心臓の強さには呆れるね…」

「俺もそう思う…前回お前に会った時、俺は震えて何もできなかったからな。」

そしてこいつに守られる形で記憶と感情を失ったよ」

「へー…そんなことがあったんだ。悪いけど、僕の記憶にはないね」

「だからこそ、お前の能力もなんとなく分かったのもある…」

聖夜が俺を庇ったとはいえ、俺の脳は内部を破壊されていたのだからな。

これは物理的な攻撃ではなく、目に見えない意思の力だということだ…」

「だから念力だと…」

「そうなるな。しかし以前のお前は能力を使いこなせずなりふり構わず襲い掛かって来たのに、

今は違う。その能力を意のままに使いこなしている…まったく厄介だ」

「それはどうも。でもさ、二度同じ相手に叩きのめされるのってどんな感じなのかな？」

君はまだ絶望を感じていないでしょ。早く絶望して欲しいんだよ。そうすれば、僕もおいしく君たちを頂くことになるんだからさ」

「それだけのご免だね…俺はあの日のことを知ってから誓ったんだよ。

お前だけは絶対に許さないって」

「そこまで好かれると困るね…」

「おしゃべりはここまでにしようか…そろそろ煙草も吸い終わる…」

樹開の指先にある煙草はフィルターの寸前まで燃えていた。

そしてそのまま煙草をゆっくりと地面に落とした。

地面に火種が触れた。すると、

「じー！

火柱が太介を取り囲むように天空へと舞い上がる。

樹開は焰の陣を方式水銀でこっそりと組み立てていたのだ。音もしない液体にしかできない技である。

「これは…」

太介は致命傷にならないとはいえ炎に取り囲まれ気が動転した。

判断が鈍ったのは確かだった。

相手の動きを読むことをほんの数秒だが怠ってしまった。いや、できなかった。

熱風と灼熱が聴覚と触覚、嗅覚の力を封じてしまったのだ。焰は大気の流れを大きく変えてしまった。これは視力に頼らない者にとっては大きな衝撃だ。

「闇に帰れ…」

樹開はその間を利用してか、それ以前に仕込んでいたのか、上空に大規模な魔法陣を作り上げていた。

色は黒。漆黒の魔方陣だ。

真弘家の魔方陣は術式によって色が変わる。

対術防御は青、物理攻撃は赤、浄化は白、回復は黄色と…

そして黒は帰依を目的とした封印術でもある。

輪廻転生。それを成す異界の門を開いてその者を送り届けるのだ。

何人にも防御は不可能でありその術から逃れることもできない。

その空間に入ってしまった者に例外はないのだ。

びきびきと音を立てて空間が割れる。そんな隙間に太介が引き込まれる。

「くっ…そおおおおお」

引つ張られる力に必死に耐えるが、体は浮き上がってく。

上空に引き込まれることは経験などない。どう対処していいのかも分からなかった。

しかしそんな最大級とも言える樹開の技は容易く行えるものではない。

だから樹開の体にも異変は起きる。

体の至る所から悲鳴が聞こえるように、びきびきと血管が浮き上がる。

速く…あの割れ目に入ってくれ。

そう願うように魔法陣をどうにかコントロールしているようだった。

最早、このまま封じられることを余儀なくされると思った太介は策など考えてはいなかった。

このままでは…いや…それぐらいなら。

そんな気持ちを抱いていた。

これが何を意味するのか。それは彼の力の根底にあった。

十七年前から彼は、力を制御するようになった。それは彼が彼として生きていくためだ。

力の支配を受けないために…それからようやく手に入れた安定と  
快樂…

しかし今、全て崩れ去ろうとしている。

そんなことがあっていいのか？

死んだらそれまでじゃないか。

能力を開放させても生きていれば、元に戻る可能性だってある。

自問自答を何度も繰り返しながら、必死に耐えていた。

自分がどうするべきなのか…

しかし何度考えてもいい案など浮かぶはずもなかった。

だから、それぐらいなら…という言葉が頭の中を連呼する。

そして…遂に…そのか細い糸が切れてしまう。

ぶちん…



「うああああああああああああああああああ」

大気が震えるほどの咆哮は、人のものとは思えない。馬鹿でかい獣の類だった。

しかも周囲の空気は一変する。

殺気がどんどん膨れ上がり、先ほどのものが可愛い位だった。

## 137話

「これは…」

聖夜もカタカタと震えて再度同じ恐怖を体の芯で受け止めた。二度と味わいたくないあの日がフラッシュバックしたようだった。不死身ではない、生身の体には相当こたえる。

このままではこの殺気だけで気を失うのも時間の問題であった。

そんな聖夜を察してか、樹開は叫んでいた。

「まずいぞ…聖夜！一刻も早くお前はここから離れる」

「ば…馬鹿野郎。そんなことできるか…あいつの死は目前なんだぞ？」

明らかに強がっている。

このままでは最悪の事態を招きかねないと樹開が判断するのが速いか、

上空の魔法陣は破られた。いや…無理やり引きちぎられたと表現する方が正しかった。

リミッターの外れた太介の念力は抑制時の十倍は軽く超えており、標的を定めるまでもなく周辺の自らに迫る悪意を消滅させた。

「くそ…」

振り返ると、そこには憎悪に満ちた化け物が立っていた。

樹開の全身は先ほどの魔法陣の形成維持だけで限界に近かった。ぶるぶると勝手に体が震えていた。

「こんな状態でも…できるか…」

自分の力を信じて樹開は聖夜だけでも守ろうと堅く決めていた。

あの日のかりを返すために…

「三重封印術…光の矛」

方式水銀と自ら描く魔法陣を組み合わせる三重の魔法陣を作り上げると、

襲い掛かる太介に向かって発動させる。

寸でのところで彼の攻撃は防げたが、破られるのも時間の問題だった。

押し切られるのが見て分かったからだ。

だから…

「早く逃げる！お前がここで死んだら何にもならないだろうが！」

聖夜を逃がすことだけを願っていた。自分はどうなってもいい。そう思っていたのだろう。

聖夜がどうするか迷っているうちに状況は悪くなっていた。

「この…化け物め…真弘家の最大級に等しい技を使っても…これしか止められないのかよ…」

今の太介の足を数秒しか止めることはできずに樹開は念力の餌食となった。

「くっそ…」

血飛沫が舞い上がり、粉々になった魔法陣と共にゆっくり地面に落ちた。

幸いだったのは、三重魔方陣が念力の威力を軽減させていたことだった。

本来なら体が飴のように曲がってもおかしくないのに、衝撃波を受けて倒れることで留まっていたのだ。

太介の意思はそこにはもうなかった。何度も雄たけびを上げて本能のままに破壊をしていた。

彼の側にいる動くものがその対象となり、側にある船が波で揺れただけで、ばらばらに破壊された。

繊細で目の見えない太介にしかできない滑らかな動きはもはや過去の物になってしまった。

聖夜がその時、動けなかったことはある意味助かったに違いない。きつと背中を見せて逃げていたら殺されていた。

「やばい蓋を開けてしまったのかよ…」

一部始終を見守りながら、樹開は呼吸を必死に整えていた。

聖夜は樹開が戦っている間にずっと考えていた。

自分が何も出来ないでいるのは我慢ならない。

他人任せで自らの自由を手に入れようとしていいのか？

だからそんな責任感が彼女を突き動かしてしまった。

武器を片手に全力で太介に向かって走り出していた。

「ばっ…止める！聖夜あ」

ずきずきと痛む体を無理に起こして叫んだ。

先ほどのように聖夜の側に魔法陣を張ろうにも距離が遠すぎた。

黙ってその様子を見ていることしかできなかった。

二人の距離がどんどん縮まる。聖夜の動きに太介も反応し、その能力をぶつけようと試みていた。

そして互いが触れるか触れないかの瞬間に、何故かびくと太介の動きが止まった。

「え？」

それには聖夜も合わせて動きを止めるしかなかった。

何が起こったのかは分からないが、思わず反応してしまったのだ。

「ど…どうして？」

そんなことを太介が呟いていた。

正気に戻ったのだろうか？

破壊音が一気に止み、恐ろしいほどの静けさが周囲を埋め尽くし、太介の動きだけがその場を支配しているようだった。

それからゆっくりと前のめりに倒れてしまった。

それには聖夜も驚きを隠すことは出来なかった。

目の前で起こっていることの整理が頭の中でできなかつたからだ。

敵がいきなりの戦線離脱を図ることがあるのだろうか？

そしてそんな出来事の結末は太介の背後を見ればすぐに分かった。

「お前は…」

明らかに背後から太介を襲った人物が何も言わず立っていた。

性別男、年齢は三十代後半、身長百八十以上で、細身、眼鏡を掛けてスーツに身を包んでいた。

いかにも几帳面そうな性格の持ち主で狡猾な存在にも捉えられる。

その人物を聖夜は知っていた。

何度か会っていた人物で、自分が嫌っていた奴だ。そう思っていたが、真つ先に浮かんだのは何故ここにいる。そして十七年前と何一つ変わらないその姿、だった。

「久しぶりですね、聖夜さん」

計算高いその男の顔からは感情など何一つ読み取れなかった。

以前と同じだ…

聖夜も初めて会った時にそんなことを思っていた。

そして…今までのおかしな出来事に合点がいったのもその瞬間だった。

「多田…お前は…呪者だったのか…」

その存在を認めるように聖夜は相手に向かって言葉を聞いた。

彼は、十七年前に聖夜に依頼を申し出た老人の右腕で、多田幸四郎という。

聖夜も詳しいことは知らなかったが、この男が嫌いだということにはつきりと覚えていた。

多田は呪者としての気配がまるでなかった。

そのせいもあってか、その場にいた者たちが無警戒だったのだ。

ネクタイに乱れはなく、眼鏡をきりつと掛けている姿はどこからどうみても

ビジネスマンにしか見えない。

「私好みの展開になってくれたな…太介。君は初めからこのためだけに私に利用されていたんだよ」

背中にぽつかりと穴の開いた太介を見て、慰めにもならない冷酷な言葉を投げかけた。

微かに意識のある太介は、どうみても救える状況ではなかった。

血液が大量に流れ出し、体の末端ですら動かせない。

「何故です…あなたは…私を救ってくれたのではないんですか？」

理由が欲しかった。だから必死に多田に問いかけた。しかし多田は淡々と自らの心情を話した。

「全てはこの時のためだよ。いいかい、呪者が一つの存在になれば、莫大な力を得ることができんだ。私とて僧侶の目的など知ったことではない。

あいつは何一つ約束したわけではないのだから…」

「力を得る？そんなことのために…僕を利用したんですか？」

あの日…地獄のような日々から抜け出させてくれたあなたを…心から信じていたのに…」

「浅はかだよ。呪者っていうのはそんな人間くさい部分を持っていてはいけないよ。

自由に生きたいのなら、もう少しずる賢く考えないと…」

まるで説教でもするかのような話ぶりで、聖夜たちも混乱してい



た。

「君はもう…帰りなさい。あの無力だった頃に…」

「う…嫌だ…嫌だあ！」

そして多田が、手のひらを太介に向けると、どんつと大きな衝撃音と共に消し飛んでしまった。

姿かたちは残らず、塵になってしまったのだ。

どんな力を使ったのかは分からなかったが、あれほど強かった太介が一撃で滅びるのだから、

すさまじい威力を持つことだけは見て取れた。

「こいつ…」

二人とも得体の知れない恐怖を感じていた。

それから気を取り直すように多田は話を続けた。

「私の見立てで厄介な存在は二人いました。一人はあなた…聖夜さんです。」

だって不死身の体を持っているんですからね。これは反則ですよ。私も間近でその能力を見せさせてもらいましたが、勝ち目などないと思いましたが…」

色欲と憤怒の欲の呪者を利用することで情報はかなり得ることができましたがね」

色欲の呪者という言葉で、樹開も聖夜もあのクラブハウスにいた女性のことを思い出した。

「あの女性もお前の差し金だったということか？」

「いえいえ…あの人には、聖夜さんの情報を与えてあげたんです。」

どこにいたりとか、どんな能力を持っているとかね…」

でも、諦めも良い方だから早々に立ち去ったのでは？」

「そういうことか…」

あの時に死者の動きが掴めなかったり、

大量殺戮をしていた太介の居場所が分からなかったのも多田の指示だったのだ。

「そこまで用意周到だと笑えてくるよ」

聖夜も強がりな発言をしていた。

「いずれにしても残りの呪者はあなたと私で終わりです」

そのことを聞いて、あの女性も殺されたのだと理解した。

「さっき話していたよな。お前の脅威になる存在ってもう一人は誰だよ。こいつのことか？」

樹開を指差したが、多田は首を横に振った。

「あなた程の術者がどれほど力をつけても怖くはありません…」

「だとしたら…」

「新堂徳人が…」

樹開が口にもしたくないといった様子で渋々声に出した。

「正解。あなたも気づいているんでしょ。」

あの人は、力を与えてくれた僧侶に近い存在だってことに

「徳人がか？どういうことだ？」

樹開は何かを知っているようだが、聖夜はそれを知らない。

そんな時、不意に背後から誰かが近づいてきた。

「む…」

その場にいた全員がその気配を感じた。

懐かしく思う者もいれば、忌み嫌う者もいたが、紛れもなくその人物はこの中に関わりのある人間だった。

どうやってここを察知したのかは知らなかった。

だが、自然と足が引かれてここにやってきたのだろうか。

その男は以前のような優しい目をしてはいなかった。

「徳人…」

真っ先に気がついたのは聖夜だったが、その場の全員が徳人の方を向いていた。

新堂徳人は独自にこの場所を突き止めていた。

呪者の気配を察知する能力が落ちたとはいえ、彼の持つ殺魔師の能力がそれを補っていた。

自然と空気の淀む場所には足が向いてしまうのだ。

「おやおや…話をしていれば、渦中の人物の登場ですね」

多田は眼鏡を上げて徳人を見た。

徳人は二人と久しぶりの再会となったのだが、何も話さなかった。ただ、目の前の敵だけを見ていた。

「新堂徳人さん…初めまして。あなたがあの殺魔師と呼ばれる方ですね」

馴れ馴れしく話しかける多田だったが、そこに嫌味はなかった。

「あなた方一族の噂は聞いてます。呪者に限らず闇の者には会いたくない存在…」

その強さは能力とは関係なく悪そのものを打ち消す執拗なまでの本能。

正に誰もが認める正義の味方だ」

「随分と俺の家のことを調べたんだな。否定はしないが…俺はそんな大層な存在じゃない。

どこにでもいるガキだよ」

「謙遜を…あなたは自分が思っている以上に素晴らしい力を持っているんですよ。」

そのこの退魔師なんかよりもね」

樹開を引き合いに出したが、そのことに何も返すことはなかった。そして樹開も同様に黙って話を聞くだけだった。

「そうかい…そこまで俺の能力を評価してくれるのはありがたいが、お前がここで滅びることには変わりない。そのために俺はここにいます」

無駄な話はこれ以上避けたいとばかりに多田の会話を終わらせようとした。

しかし多田はまだ話し足りないようで、話を続けた。

「徳人さん。あなたに一つ質問。私を殺してどうするつもりですか？」

そんな単純な質問をしたが、徳人は別に動揺もしなければ迷いもしなかった。

「俺は元の生活に戻りたいだけだ。それ以上のことは望まない」

二ヶ月間という期間が徳人に考えさせる時間を与えていた。だから自らの宿命も考え、これからの生き方を決めていた。

「ささやかな幸せのためですか？これは滑稽だ。呪われた一族なのに…」

人間のような普通の人生を望むなど…」

「大きなお世話だ。そんなささやかな幸せのためでも覚悟は決めている。」

だから他の呪者も殺せた。お前も例外じゃない」

「そうですか…なら、その前に私の話も聞きませんか？あの僧侶の話ですよ。」

おかしいと思いませんか？我々に殺し合いをさせてそこで終わらだなんて…」

その場にいた全員がそんな多田の発言に同調してしまった。

確かにそうだと…

聖夜は人間に戻れるということを知っていたが、他の呪者は何があるのだろうか？

そんな疑問が浮かんでくるのだ。

「根源から戻すと、我々はその人に望みを叶えてもらう代わりに、与えられた称号の欲を持つ人間の魂を食べることを義務付けられた。」

これが何を意味するのか…」

多田はいろいろな視点で呪者のことを考えていた。

「私の個人的見解では、彼は人間が嫌いなのかもね…だから我々を利用して殺させ、そして最終的には人間という生物を殲滅するのかもしれない」

「人間を…殲滅？」

「ここまで時間を掛けたにも理由があるだろうし、人が嫌いじゃなくてはこんなことも思いつかないんじゃないと。そして聖夜…君が鍵なんだよ。おそらく君が全ての呪者を葬るところで何かが起こる…」

一人だけ違う欲を持ち、不死という他者には持つことの出来ない能力がそうです。

だから…そんな僧侶の思い通りになるのは避けたくはないですか？」

「なら、どうしろと？」

「私が全てを引き継ぎましょう…君が引き継ぐことで何かが起こるといふのなら、」

私が引き継いで僧侶の目的とは違った形を取りたいのです」

多田にも目的があるようだが、全員がそんな曖昧な言葉に納得することもできず、

どんな目的があるのかを聞き出した。

「私は影ながらに人間を操作したいんですよ。」

人種間や貧富の差から生まれる不平等な生活を一蹴したい…」



「影の政治家にでもなる気か？お前は…」

「そこまで大げさじゃなですけど、分かりやすく言うとそうです。この先呪者として逃げ回っていてもいつまで続くやら…それなら自分の思い描く理想郷つてものを作ってみたいじゃないですか」

多田は確固たる目的と信念を持っていた。元々策略を立てることが好きな人間ではあったので、それも仕方のないことだった。

「人は不完全な集合体です。いくら有能な統率者が存在しようともそれは狭い地域でしか力を発揮できない。」

だから私は挑戦してみたいんです。全世界を統合できるかどうかね」

「発想はすごいな…それが本当にできると思っているのか？人種も言葉も考え方も違う人間を統括？夢に過ぎない…」

「そうやって諦めてきた者は、所詮凡人だったということです。私は諦めません。呪者の能力と生きながらえる力を使えば幾年掛かろうともその結果を見出せる。」

そう信じているのだから…それに…私の覚悟も先ほどのだまし討ちを見ても分かっているはずですよ」

先ほどの光景が蘇る。

何の躊躇もなく、感情も存在しない。

まるで目的を完遂したかのごとく達成感も感じていたのだろう。  
多田の目には長年を共にした太介の姿は映っていなかった。

ただ前を向いて、自らの目的のために突き進んでいた。

「そしてそのためには…新堂徳人くん…」

多田は徳人の方をしっかりと見ていた。

「あなたが邪魔だ。ここで消えてもらおう」

周りの空気が一気に変わる。それは全員が感じていた。何かが起  
こる…

すると暗闇の中から湧き出るようにぞわぞわと無数の黒い影のよ  
うなものが姿を現した。

その数は十数体に及び、不気味さと同時に異様な殺気を放つ。  
得体が知れないだけにその存在が与える影響は大きかった。

「呪者を取り込むことで得た力…その全てをお見せしよう」

多田は他人の能力を完全に取り込む能力の持ち主だった。

つまり、今まで殺してきた人間や呪者の能力を全て引き継いでい  
るということになる。

「すると、これは…あの女の能力か」

樹開は真っ先に気がついた。十七年前の死者を操る呪者のことに…

「正解：だけどあの時の死者は、君に簡単に殺されるような弱い存在だった。」

だから私がアレンジを加えることでより強固な戦士に作り変えました。」

無から形成したくぐつをあなた達に葬り去ることができますか？」

「馬鹿な：そんなことありえるはずがない」

退魔師が浄化できる存在は、限られていた。そこに人の意思が存在するということだ。

生きていても死んでいても思念は存在するのだ。それを浄化させることで帰依につながる。

しかし無から作り上げた存在では葬ることも浄化することもできなかった。

それに思念に悪意がなければ、樹開の相手に触れさせないという能力も意味がないのだ。

「戦闘力は自らの体でお試し下さい」

そこまで言うと、その場にいた黒い操り人形は一度に襲い掛かってきた。

自らの体を刃に変化させたり、槍に変化させたりと武器化させて迫る。

その速さは最速を誇る聖夜の動きにも匹敵する。

今まで純粋な闘争をすることのなかった樹開は当然苦戦した。

体がよけることをしない。一切の封印術は使えない。

相手の動きを見極め対策を練るしかなかった。

一方で聖夜も徳人も同じだった。

攻撃を避けることで精一杯で、反撃の機会を探せないでいた。

連携も上手い黒い人形は、近距離攻撃と遠距離攻撃を使い分け、取り囲むように攻撃する。

小回りのきく聖夜は最小限の動きだけでそれを的確にかわしていた。

そして反撃のチャンスを見つけると、迷わず持っていた短刀をわき腹に振りぬいた。

しかし…

相手は全然怯む事をしない。

痛点がないのだからその必要がないのだ。

だから斬られたままでも涼しい顔で反撃をしてくる。

「うっ…」

聖夜の相手が止まるだろうという勝手な判断で一瞬の間が出来た。逆に肩を貫かれた。

激痛に顔を歪めたが、追撃がくることを察し、刺した相手の腕を瞬時に切り落とすとその場から離脱した。

徳人もどうしていいのか分からず困惑しているようだった。元々そんなに戦闘経験のない徳人にとって複数で襲いかかれるのに慣れるはずもなく、体は切り刻まれていた。

「く…そ…」

不死の体になった徳人にとってこの手の攻撃による絶命はなかったが、

敵はあの策士の多田だ。何かあるには違いなかった。

樹開は雑魚に構っていても埒が明かないと判断していた。だから攻撃の合間を縫いながら多田に向かって進んでいた。

操っているのがあいつなら、あいつを倒せばこいつらは止まると思っていた。

そして同士討ちを誘いながら、大きな跳躍で叩き合いの場所から無理やり抜けると、

着地と同時に一気に多田との間合いを詰めた。

二メートルに満たない場所まで迫れば十分だった。ここで狙いを外すはずはない。

確実な勝利の道筋を見つけ、自ら描く線上に樹開の武器が放たれた。

そんな無防備にポケットに手を入れて立っている多田の心臓には、瞬きが終わる頃には銀杭が打ち込まれようとしていた。

ばん！

あと数センチというところで、その杭は弾けた飛んだ。

そしてそれだけでは終わらず、螺旋状に襲い掛かる衝撃波が、そのまま樹開の体を捻りながら吹き飛ばす。

「ぐは！」

着地もままならないまま、コンクリートの地面に直撃する。

樹開の体は何度かバウンドし全身を擦らせながら動きをぴたりと止めた。

「駄目ですよ…私は、他者の能力を得ることができると話したですよ…」

これは、先ほど私が殺した太介の力です。

念じるだけでこれまでの威力だとは私にも想像が付かなかったのですがね…

「さあ、一気に終わらせましょうか」

多田が指示を出すと、黒い人形たちの動きが変わる。

今までの動きで全員の攻撃パターンを読み取ったのだろう。

聖夜も徳人も攻撃が当たらずに徐々に押されていった。

そして、徳人が最初の餌食となった。

樹開に向かっていた戦力が全て徳人に向かったのだから太刀打ちなどできなかった。

右に左に好きなように斬られ、その流れで手足を貫かれ、遂に動きを封じられた。

「あ……」

黒い人形が磔の道具にその身を変化させ、手足に食い込んだのだ。

「徳人！」

聖夜は重傷を負わないものの死が迫るのは時間の問題だった。

「私が一番厄介だと思っていた新堂徳人の動きさえ封じることができれば、ほぼ作戦は完了です。

後はあなたの命を奪えば、彼も息絶えるでしょう……」

その通りだった。認めたくないが、多田の話すことが現実となりかける。

徳人は意識を失いかけ、樹開は生きているのか死んでいるのか分

からなかった。

生身の聖夜が出来ることはもう限られている。



## 142話

「さあ…もう観念して下さい。素直に私に取り込まれるなら痛い思いもみせん」

そんな痛みからの解放を迫って聖夜の心を折ろうとした。

しかし…

「残念だな…それは俺のスタイルじゃないんだよ」

目は死んでいなかった。あてがあるわけではない。

だが、多田に屈服することが嫌なだけという、ただの子どもじみた発想でしかなかった。

そんな聖夜を見てため息を大きくついていた。

「そこまで強がる理由が見当たりませんが？もういいでしょう…

一思いに首をはねて殺してあげますよ」

多田が全てに終止符を打とうと、黒い人形たちに指示を出そうとした瞬間、

ぞくりと背後に恐怖を感じた。

迫り来る闘気、いや膨大な殺気が冷氣のように一気に襲いかかったのだ。

まるで極寒の地に立たされ、ブリザードを全身に受けたようだった。

「まさか…」

慌てて身動きの取れないはずの徳人の方に視線を移した。

そこには取れるはずのない、封印を解いてゆらりと立っている鬼神の姿があった。

意識があるかは分からなかった。

多田もその様子だけでは何えず、その殺気に飲まれないように必死だった。

「そんな馬鹿な…こんな気配を感じたことは今までにない」

汗が大量に噴き出し、戦況を頭の中でコンマ数秒で組み立てる。

黒い人形たちを全て徳人に集結させたのだ。

聖夜を襲っていた奴らまでもあと僅かで止めをさせそうな聖夜を放っておいて、徳人の方へ向かった。

「新堂徳人…君の身体能力の分析は終わっている。だから私に負けない」

そう口では話すが、確証もなく嫌な汗をかき続けていた。

そして黒い人形たちと徳人がぶつかり合う。

が…

爆発でも起きたかのように、ばらばらと黒い人形たちが宙を舞っていたのだ。

その身を粉碎され、原型を留めず…

「な…何だと！」

冷静に装っていた多田の頭の中はパニックだった。何が起きたのかを見ることができなかった。

どんな能力を持っている？

ただの殺魔師にそこまでの能力はない。

物理的な攻撃に対してあそこまでの破壊力を持つ者はいないからだ。

「多田：お前は俺のことをそんなに簡単に分析できるほど賢いのかい？」

殺魔師ってのはそんなに底が浅くはない…」

ゆっくりと歩く徳人に対して多田の動きは速かった。

太介のお株を奪うような念力による多重攻撃を仕掛けていた。

同時に五箇所に発動させた念力は、徳人の体を覆い隠すように襲い掛かる。

しかし、徳人が片腕を払っただけでその全てが消え去った。

「ははっはははっはっはあは…そんなものかい？」

徳人のテンションはどんどん上がっていた。そして爽快感すら感じていた。

戦闘の真つ最中にそんなことは一度もなかったのに。

「馬鹿な！目には見えない巨大な念力を払っただけで消し去る？人の域を超えている！」

それならばと、自らの能力に取り込んだ技を惜しみなく次々と繰り出すが、

その全てはあっさりと無へと返されていった。

「終わり？終わりなの？」

そしてそのまま徳人は笑みを浮かべながら走って近づいた。

殺魔師という職業の本質を今、ここで出せることを喜んでいた。

邪悪な者を滅ぼせる…滅ぼせる…滅ぼせる…滅ぼせる…おいしい餌を目の前にありがとう。

「来るなあ！来るなああああああ！」

本能に従うということはそのうことだった。徳人の意識は別の方へ向かっていた。

だから多田幸四郎は無残な最期を遂げることとなる。

ぶちん…

武器も持たない徳人に素手で、解体されてしまった。

気の利いた言葉も発することもできず、腕を足を引きちぎられ、体の中にまでずっぽりと腕を突っ込まれた。生暖かい臓腑の感触が温もりとして伝わっていた。

しかし徳人は笑っていた。

げらげらげらげらと高笑いをして真っ赤に染まった腕を見て喜んだ。

## 143話

徳人の自我は崩壊してしまったのだろうか。聖夜はそんな徳人が怖かった。

初めて目の当たりにする殺魔師という人間に対する恐怖だ。

「…まだだ…まだだ…」

手ごたえのない敵に満足しない徳人の怒りの矛先はすぐに別の者に向けられる。

「止めて…徳人…」

崩壊してしまった徳人にとって呪者の気配は強すぎた。自らの欲望を満たす糧なのだ。

聖夜だということすら分からなかった。

その匂いのする方へ足を動かしていた。

腹をすかせた獣のようによだれを垂らしながら、素手で聖夜の元へと走り出した。

「止めるお！徳人おおお」

埠頭に響き渡る聖夜の声。そして迫り来る恐怖に心が折れた。

だが…

徳人の動きが聖夜の手前でぴたりと止まっていたのだ。

何が起きたのだろうか？そう考えるよりも先に声がした。

「だから言っただろうが…あいつに気をつけろって…」

「樹開…」

樹開が多重結界を張って聖夜を守っていた。

びりびりと目に見えない力に押されて徳人がもがいていた。

樹開の体はぼろぼろだった。先ほどの衝撃で肋骨数本と、左腕が骨折していた。

「邪魔を…邪魔をするなああああ」

徳人は正気ではない。だから目の前の餌にありつけられないことを怒るだけだった。

しかし徳人の力は樹開の力を押し切ることはできなかった。

それが意味するのは徳人の力は魔なる者に有効だからだ。

聖なる者に対する力の対抗策は備えていなかった。

「新堂徳人…だから忠告した。お前はいずれこうなる。

聖夜といれば遅かれ早かれこうなっただよ！」

ばちんと大きく徳人を弾き飛ばして後退させた。徳人には未だに闘争意欲があった。

いつでも襲い掛かれるようにタイミングを見計らっている。

「樹開：徳人を止めてくれ！このままでは、あいつは化け物になってしまう」

聖夜は懇願した。自分が間違っただけを後悔してしまっただとはつきり今分かったからだ。

「分かってる…俺はそのためここにいるようなものだから…」

痛む肋骨を押さえ、今の自分に徳人を抑えることができるか考えていたが、すぐに止めた。

勝算考えるから判断も鈍るんだ…

覚悟を決めて再びにらみ合った。

徳人は純粹な身体能力だけで樹開を押し切ることを決断した。

左右に動く早さは誰の目に映らない。

開限界と本能で動く徳人の身体能力は人のものではなかった。

瞬発力、破壊力が常人ではありえない数値に跳ね上がっていた。

気配のみで徳人の場所を突き止めるしかない樹開にとって辛いことはなかった。

前か…後ろか…右か…左か…

動きが速すぎて気配を捉えきれなかった。



しかし自分を殺すには必ずどこかの方向から来るのだ。その一瞬だけを見極めればいい。

方式水銀を自らの足元に撒き、様子を伺うが、賭けにはずれたら体を貫かれて死ぬだろう。

目をつぶり余計な邪念を振り払う。

暗闇の中で白い気配が動き回る。そんな感覚をどんどん研ぎ澄ます。

上空。

はっと目を開いてそこに向かって水銀の網を張った。

だが…

それは残像に過ぎなかった。虚しく水銀の束は空を切ってしまった。

本物の徳人はすでに右側に回りこんでいた。そして樹開の腹部に手刀を突き刺す。

ずん…

指先十数センチがめり込み腹部を真っ赤に染める。

「かはっ…」

呼吸が一瞬止まりそうになる。  
幸いだったのは徳人が空中に一度舞い、着地してすぐと不安定な  
態勢から放った攻撃だったので、  
この程度で済んでいたということだ。

足腰の入った本来の威力なら体を突き抜けている。

だから樹開は笑っていた。

「賭けに勝ったな！」

そして右手を腹部に当てて叫んだ。

「解呪！」

その一声で眩い光が徳人を包み込む。光の原因は樹開の腹部にあ  
った。

腹部に仕込んでおいた魔法陣の発動。

樹開はこのようなことも予期して自らの体に魔法陣を書いておい  
たのだ。

光は徳人の邪悪な部分を取り去る。

「あががががががが…」

抵抗をすることも出来ぬままに光の洗礼を受けた。  
徳人を巢食っていた悪意はどんどん洗い流された。

ほんの数秒の出来事ではあったが、それだけで十分だった。

光が消え去ると徳人はゆっくりと倒れて気を失っていた。

## 144話

「くう…はあ…はあ…」

腹部を貫かれた樹開は臓器までは損傷していないとはいえ、筋肉を貫かれ腹膜は傷ついていた。

それに加えて、先ほどのダメージの蓄積もあった。がくりと右膝をついた。

「はあ…はあ…」

「樹開！」

聖夜が普通の女に見えたのは、樹開にとってこの時が初めてだったのかもしれない。

弱弱しくどこにでもいるような女の子のように樹開の心配をしていた。

このまま全てが終わればハッピーエンドなのかもしれないが、まだ終わりじゃなかった。

「おい！どこかで見てるんだろ？早く出て来いよ！」

上空に向かって叫んだ。

聖夜は誰に向けて話しているのか分からなかった。しばらく周囲をきよろきよろと見ていた。

「私は…ずっとここで見ていたよ…」

樹開の影から黒装束の男がぬうつと姿を現した。

「な…」

言葉を失い、その人物の姿をゆっくりと眺める。  
そうだ…全ての元凶であり、神に等しい男だ。

その登場の仕方にも圧倒されたが、その風貌だけで気を失いそうになる。

樹開は一度会っていたが、その気配に慣れることなどなかった。

「やってくれたな真払樹開…私の思惑を潰すとは…」

「そうかい？そんなつもりはなかったがな」

「してやったという顔をしている。つくづく嫌な男だ。」

私の撒いた種を潰されるとは夢にも思わなかったからな…さて…  
役者が揃ったが…」

聖夜の方を見るなり、瞬間移動でもしたかのように姿を樹開の目の前から消すと、

聖夜の前に現れた。

「え？」

「お前は寝ている…」

腹部に重い一撃を与えて、あっさりと気絶させてしまった。

聖夜は何もすることができずにずるずるとその場に倒れてしまった。

「おい！」

「さて…これでお前と落ち着いて話ができる。」

外野にいろいろ聞かれるのも癪に障るというものだ…

全てが思惑通りに運ばないのも知ってはいる。しかし実際に起こってしまうと歯がゆいものだな。

だが…どうして私が徳人に聖夜を殺させることが分かった？」

ただならない雰囲気は樹開そのものを飲み込む。

しかし以前のように体が動かないわけではなかった。だから怯まず話すことから始めていた。

「新堂家の血筋は不可解だ。どうみてもあれは人の域を超えている。あんたの呪いが原因なんだろう？俺の見立てでは、新堂家も呪者の一人だ。」

きつと死に際に自分の子どもたちに能力を受け継がせていたんだろ？

そして聖夜を殺すことで末裔の徳人が一固体の強力な呪者となるんだ…」

「…なるほど。そこまでの発想力は実に素晴らしいな。しかしそれだけでは面白みに欠ける。」

徳人には呪者の定義としてはあてはまらない部分も多いとは思わないか？

それにだ…：そうすることで私が何をする？」

「人間を一掃するんだろ？多田の見解ははずれていないと俺も思う。あんたは人間を憎んでいる…：欲をどんどん膨れ上がらせ、自己中心的な人間という生物を否定している」

そうやって樹開は次々と今までの僧侶の行動を思い出し、その一つひとつを人間嫌いに当てはめていった。

その見解に間違いがなかったのだろう。僧侶も反論せずにふふっと笑っていた。

「そうなるのかもな…その通りだ。私は人間が大嫌いだ…  
ついでだ、昔話を聞かせてやるう。私の名は九条院斉明という神  
職に就く人間だった。」

神降ろしを成すことで未来視をしたり、不可思議な術も使えた。  
そんな私は当然のように人から利用され、妬まれ、不気味がられ、  
人間という集団から自然と排除されていった。樹開、お前の言う  
とおりだ。人間の欲は深い。

まるで底なしだ。私は何度も絶望したよ。だから決断をした。  
欲が人を駄目にするというのなら排除しよう。

そして私はこの地上に大きな呪いの種を撒いた。  
あらゆる欲望を集め、全てを飲み込む器を作ろうと…」

「それが徳人なのか？」

「彼は私に近い存在なんだよ…実在しない思念から生まれた集合体  
…」

「何だと？」

「四百年前…聖夜と徳人の先祖である新堂環は一人の人間だった。  
しかし私との契約で二つに分かれてしまったのだよ。空っぽの肉  
体と思念体にな…」

肉体には不死を与え、思念には永劫の縛りを与えた。全ての欲が  
集まるまでの四百年。

子孫に受け継がせその身を消さないように…  
そして反対に空っぽの肉体には虚偽の思念を与え放った…」



「それなら…今の聖夜の人格は…別の物だということのか？  
そもそも新堂環というのは何者なんだよ！どうして男性のような  
思念が聖夜の中にいる」

「思念とは…心の奥底の願望のようなもので深層心理という奴だ…  
そこに性別などが存在するわけがなく純粋な思考だけが漂う」

「なら思念にどうして肉体がある？おかしいだろ？」

「私にはそれが可能なのだよ…不可思議な力を持つと話したろ？  
私の開発した術は思念に肉体という器を与える力だ。

そうすることで私も千年以上生き永らえることができた。  
肉体はいずれ腐り滅びる…そんなものからは遠い存在なんだよ」

樹開はごくりと唾を飲み込んだ。

この九条院斉明と名乗るこの僧侶の力は人の想像を超えすぎてい  
た。

そんな生物の理を無視した能力を使える人物に出会ったことがな  
いのもあったが、

いとも簡単に人の命を左右できる力は神に等しいと思った。

「そう化け物を見るような目で見えるな。別に難しいことでもない。  
思念と肉体の乖離は日常的にも行われている。それに器を与えら  
れるかどうかなのだ。

新堂環を作り上げ、子どもができたなら子孫に力を残す…

その作業を繰り返させるためだけに箱に閉じ込めて語り部役とな  
った。

そして四百年後の末裔には開限界の術を掛けるようにも話した」

徳人が受けた開限界は能力の底上げなどという生易しい術ではなかった。

あれは全ての呪者を滅ぼさせる催眠だったのだ。しかしそれも寸でのところで失敗した。

「徳人は良い素質の持ち主だったのにな… 実に残念だった。

そして、そんな力を与えた新堂環は聖夜同様に死ねない無限地獄を今まで見ていた…

肉体なき思念と思念なき肉体の悲しい関係… しかしそうすることで、私の目的は果たされる。

器が全ての欲を飲み込み世界は浄化されるのだ。誰もいない世界に…」

「あんたも消えると言っのか？」

「私は人間に失望しているのだ。私まで生き残っていては意味がないだろう？」

それではただのエゴだ… 目的さえ果たせばそれでいい。それが自然に帰るといふものだ」

斉明の話すことは必ずしも間違いではなかった。

人間が増え続ければ、おそらくこの世界を滅ぼしてしまうだろう。だからこそ樹開も真っ先に否定することができなかった。

「お前もどこか認めているんだろ？ 人間はこのままではいけないと… 私が行う行為は遅かれ早かれ現実になる。しかし今ここで青臭い感情論を持ち出し抵抗するか？」

私がここで気絶している二人を殺し、取り込んでも全ては完了するのだから…

だが、お前が私に勝てないことも知っているはずだ」

「青臭いか…確かに。十七年前のような感情はここでは出せないかもな…」

しかしどうしてあなたは、俺に話を聞かせ、挑発までする？  
意のままに事を進めたいのなら黙って俺を殺せばいいんじゃないか？

本当は止めてほしいんじゃないのか？長く生きすぎ狂った自分にな…」

「樹開：流石だよ。長く生きることとは、絶望をより深める。」

それが正しいのか、間違っていることなどもう分からないのだよ。数百年の歳月を掛け自分が成し遂げようとしていることは、道半ばに何度もなくじけそうになる。

しかしその度に私は人間に成りすまし、  
人間と接することで自分の行為が間違いでないことを再認識したんだ」

「何をした？」

「簡単なことだ。人は他の者のために死ぬるかってことだよ」

それだけでは意味が分からなかったが、続きを詳しく話した。

「まずは一生貧しさから逃れられない者に富と名声を与えた。  
それから数年して、そいつの知人、友人、親族を瀕死の状態で見せせる。」

私はそこで話す。もしもお前がこの者たちのために目の前で死んだらこいつらを皆助けてやると…

しかし結果は皆同じだった。見殺しにして終わりだ」

「悪趣味な行為だ…人の命を秤にかけるとはな…」

「人の心は変わるといふことだ…貧しく汚れない頃なら、あつさりと命を差し出したかもしれない。しかし欲がそれを狂わせる。」

増え続けた拳句に心まで壊したんだ…だからそんな光景を見ることで私は安心できる。」

間違いではなかったと…」

「お前がやっている行為は人を狂わせているだけだ…欲を作っているのはお前じゃないか。」

呪者の契約にしるそうだ。弄んでいるだけだ。」

自分が神に近い存在だからその力を使って楽しんでるんだ…」

「私は強制をしていない。選ぶのは人間だ。」

代償があると知っていて受け入れているのは人間だ。」

それを後になって酷いと罵る…そこに矛盾はないのか？」

「それは…」

「樹開よ…私ですら自らの成す行為が完璧だとは思わない。」

だからお前に話して聞かせた。止めるというのなら止めてみる。」

そこではつきりとする」

齊明は自らの行為に言い訳など何一つしなかった。

そして今まで見せることのなかった構えを見せる。」

右手をすつと前に出して樹開を警戒したのだ。

「光荣だな…あんたのような存在に俺のことを過大評価されたのだからな」

「謙遜をするな…ぼろぼろとはいえ、

お前はこの場に立っているだけで私と対等に渡り合える存在。ただ何かを隠していそうだしな…」

斉明のどす黒い気配がじわじわと樹開を飲み込もうとしていた。開戦の合図だと取れる行為に樹開は神経を研ぎ澄ます。

気圧されそうになった以前とは違い、手負いであることで更なる力をもたらしているかのようにだった。

樹開の手の内はほぼ知られている。だからどのような攻撃をしようとも簡単に弾かれてしまうだろう。

一方で斉明の能力は未知数で、神職の業を味わったこともなかった。

そんな対照的な二人であったが、相手の動きを待つまでもなく樹開の足は大地を蹴り上げていた。

そんなには速くないその動きに斉明は見切りをつける。

樹開の攻撃のパターンに限りはある。それならば足を奪うまで…

と。

右手から放たれるは、漆黒の魔法陣。太介との戦いで樹開の見せたものそのものだった。

しかもあるうことが最大級の技を同時に三つも出していた。

魔法陣というものは描き、発動いう二段階構成だが、斉明の場合  
は違う。

自分の思いの場所に印を切るだけで魔法陣を操り発動させられる。  
それを見た樹開は自らの能力で相殺を試みた。

黒い魔法陣には白い魔法陣を…

方式水銀で自らの体を守るように覆い、襲い掛かる相手の術を消  
し飛ばす。

懐まで近づくことで幾許かの勝機も見出すことができ、樹開は銀  
刀を力の限り振るった。

空気を切る音が聞こえ、斉明の服を切り取った。

「む…」

これには斉明が驚く番となった。

偽りの肉体とはいえ壊されればそこで全てが終わるのは斉明も同  
じなのだ。無理はできない。

追撃もどうにかかわっていたが、樹開の鋭い攻撃に一步及ばない

感じではあった。

「鋭いな…攻撃が…手負いの者とは思えないほどの切れだ。それに私は肉弾戦が苦手だ。」

そういった類ではお前の方が上だということは認めよう」

殺し合いの最中でも余裕からなのか、そんなことも口にしていた。しかし樹開は戦いに没頭していた。

いちいち耳を傾けて流れを止めるほど愚かではない。

右に左に空手の相手を追い詰め、傷を負わせていた。

時間を与えてはならない…

そのことばかりが頭の中にあった。

斉明のような偉大な術の持ち主の場合は、時間を掛けた術が多い。戦闘向けの瞬間的な術を持っていることが少なく、肉弾戦ではその分野の努力をすることはないので、その道の達人には押されてしまう。

だから…

樹開の武器は容赦なく斉明の体を斬りつけた。

「ぐ…」

胸を斬りつけられ血が流れる。作られた肉体でも普通の人間と構造上は変わらないのだ。

相手は決して幽霊ではない。そう樹開も知れたことで新たな活力が生まれる。

一方でこのままではまずいと判断したのだろう。

斉明は新たな術を繰り出そうとしたがそれを樹開は阻んだ。

回りこんでどんどん距離を詰めていく。

術を出させないことと相手に圧力を掛けるという相乗効果があったか、遂に右腕を斬り落とした。

樹開の持つ銀刀は武器そのものに靈力が込められ、斬るといふよりは刈り取るといった方が正確な表現になる。刀身には血や油が付着しても効果は失われない。

斉明は人形のように動かなくなった自らの右手を見ても眉一つ変えなかった。

このような痛みには慣れている…そんな様子だった。

「速いな…」

ぴつたりと張り付く樹海に嫌気がさしてか、そんなことを口にした。

だが、まだ何かを隠しているかのような口ぶりであった。

「残念だが術式は完成した。樹開：お前にこれが受け止められるか？」

不意を突かれる反撃だった。



斉明が力強く大地を踏みしめると、その言葉が実現となる。

地面に描かれた黒い魔法陣。

樹開の攻撃を受けながら足で描いていたのだ。

樹開と斉明を取り囲む半径数メートルが黒い雷の荒れ狂う半球体となり、

耳を劈くような炸裂音が響き渡った。

「ぐあああああああああああああ」

電撃を体に流されたその光景はまるで電気椅子そのもので、樹開はもがき苦しんだ。

一方で斉明の体には雷が通電することなくその一部始終を見ていた。

いままで優位に戦況を作り上げていたからこそ樹開の絶望感も大きい。

放電がしばらく続いたが、それも長くはなかった。

ばちんという音を最後に黒い球体はその場から姿を消した。

「くっ…そ…」

心が折れそうだ…

そのままゆっくりと無数の火傷を負いながら地面に倒れた。

長い戦いが終わったそんな感じで斉明は感傷に浸っていたのかも  
しれない。

だから樹開のそのぼろぼろの体を見て称えた。

「よくやった…お前は人間にしては私に近い存在だから期待はして  
いた。

ひょっとしたら私を止めてくれるのかも…」と。

唯一私に対抗できるはずの人間が滅びたのは使命を全うしろとい  
う証。

もう迷うこともないだろう。ここで終わりそしてここから始まる  
のだ…」

そこに満足感や達成感はない。重苦しい面持ちでこれからのこと  
を考えていた。

「帰依を…」

そう決意して、徳人の方へ向かおうとした。

するとそこにはゆらりと立ち上がった徳人が亡霊のように覇気の  
ない顔で斉明を見つめていた。

開限界を使い、猛獣と化した徳人の体は目に見えないダメージの  
蓄積があった。

肩で大きく息をして汗もびっしょりかいていた。

「正気に戻ったか…不死ではなくなったお前の体に掛かっている衝撃は痛いだろう…」

呪者が全て滅びたことで不死という力は失われた。

「さ…斉明とか言ったな。薄れ行く意識の中でお前らの言動は…耳に入っていた。だから信じたくはない。信じたくはないが…事実なんだな。」

俺は…聖夜の思念体の末裔だつて…作られた一族だと」

「そうだ。お前は私が与えた器に過ぎない。器にも年数の限界はある…」

だから子孫を残し思念だけを受け継がせたのだ。

そうすれば私がいちいちその度に介入する必要はないからな。

新堂家が短命なものも納得か？そして聖夜がお前を取り込めばお前は消える。

器は元に戻るのだ。どうした悲しいか？

お前という人間は…いや人間ではない存在が自分の生きている意味を知ってしまったから…」

「俺の…俺の生きてきた十七年は…いや、親父たちもこのためだけに生きてきたのか？」

「人間とやらなら変わらない生活をしてきたのだ、別段に驚くこともないだろう？」

だが…お前という人間はいないのだ。空っぽなんだよ。それだけは事実だ」

斉明の話す言葉はどんな刃よりも深く突き刺さり、徳人の体を無残に切り刻んだ。

「う…嘘だろ…なら…俺は…俺という人間の意志は…存在は…」

徳人という人間はこの世界にいなかった。

ただの思念が器を乗り換えただけ…

この体は…何なんだよ？俺のじゃない。この思念も…徳人っていう人格じゃない。

俺の作り上げた記憶も意味のないものじゃないかこれは聖夜のものなのか？

分からない。何も分からない。考えたくもない。

「心配するな。ここで聖夜とお前が一つになれば全て終わる…」

その無限の苦痛から開放してやろう」

利用済みの道具にはもう未練はないとでも言うかのようにじわじわと近寄った。

徳人の自我は崩壊寸前だった。

自分という存在を否定され、どうしていいのか分からなかった。

斉明のすることが正しいのか。自分は元に戻ったほうが良いのか…

「ば…馬鹿野郎…難しく考えるな。お前は…お前なんだよ。それをお前が信じなくてどうする…」

瀕死の樹開から細い声が聞こえた。

「まだ生きているか？」

斉明は樹開のしぶとさに思わず感心してしまった。しかし何もできない相手にかまっっている暇はない。すぐに視線を戻して徳人に残った左手を伸ばした。

「聞け…ここからは、新堂徳人として、生きた証を残せ。そしてそいつを倒せ。」

力に振り回されてるんじゃない」

激励にも皮肉にも似た言葉に徳人は戻された。

このままでは斉明の成すがままだ。

それでいいのか？

自分は何もしてないじゃないか。

樹開ははつきりと聖夜のために…自分のために戦った。それがどうだ？

俺は新堂環にそそのかさね、その拳句に力に振り回されて自分を見失った。

目的もない殺戮者になった…

これでは、今までの行為が全て無駄になる。

かけがえのない友人を…好きな奴を巻き込んだ…

そんな俺ができることは必ずあるはずなんだ。

そうだ！

それでいいんだ！

「俺は…俺は…新堂徳人なんだよ！これは、お前に何度覆されようが何度でも否定してやるよ。」

今、ここに俺がいるということだけで十分だ」

高ぶる感情が吐き出され、徳人は迷うことを止めた。

自分は新堂徳人であると強く強く願ったのだ。

「あの男の戯言を信じたか…だが、覆されない事実はそのにある。」

例え私を殺したとしても思念と器を繋ぐ術が消えてしまうことに変わりはない…

それが何を意味するかは分かるだろ？」

徳人にも分かっていた。自分がどちらの選択をしても生き残ることはできないと、

だから覚悟が決まったかもしれない。

頑として最後まで自分という存在を残す行動を取ることにした。

「新堂：徳人：四百年の長い呪縛から聖夜を解放するんだ：お前の意思で…」

樹開の言葉が届いたかは定かではないが、徳人は戦闘態勢に入っていた。

不死ではない条件でも今までにない独特の空気を身に纏い、相手を威嚇する。

ゆらゆらと陽炎のように徳人の姿が歪んで見えてもいた。

「あたとちまちま時間を掛けてはいられないようだ…」

俺も肉体が引き裂かれそんな感覚に耐えることで精一杯。

だから…一撃で決めるよ」

「奇遇だ：私もそんな時間などない。

早くお前を半殺しにでもして聖夜と融合させたいのだからな」

互いに手の内が分からない状況であったが、考えていることは同じであった。

相手が確実に絶命する手段を模索していた。

徳人に武器はなかったが、それでも相手を怯ませる程の威圧感があった。

斉明の右腕は失われていたが、彼にとってそれは不利な戦況ではない。  
体の部位のどこかが動けば相手を一撃で死に至らしめる技を持っている。

膨れ上がる殺気は混ざり合い、緊迫感は頂点に達していた。

まるで蟻の足音でも聞こえそうなくらいに神経を研ぎ澄ませていた。

その刹那、斉明は姿を消した。

決して徳人がそこから目を離したわけではない。

斉明の得意とする影走りという技で、  
自らの影を相手の影に瞬時に移し変えるように移動する高速移動の一つだった。

登場した際に見せたのもその技だった。だから徳人は目で追うことができなかった。

「…」

斉明はすでに徳人の背後に回りこみ背中を眺めた。

このままでは無防備の背中に絶命の一撃を食らうことは間違いないしだった。

生かすも殺すも選択は自らにある…



そう感じた一瞬でもあったが、その瞬間、徳人の脳内にはある魔法陣が浮かび上がっていたのだ。

今まで魔法陣を一切使ったことのない徳人にいきなり舞い降りたその魔法陣は、

殺魔師最高の術式、『八方殺魔陣』

自らを術式の一部に組み込む荒業の一つで、大量の時間の書き込みを必要とする。

だが、徳人はそれをたつたの一コマ、思い浮かんだ形式だけで完成させた。

だからこそ、鮮血を撒き散らしたのは、優位に立っていたはずの斉明の方だった。

「ぐっ…は…」

自分の体に何が起きたのかを理解することはできなかった。

真上から降り注ぐ自らの血を浴びながら地面に倒れた。

それと同時に徳人もがくんと膝をついて頭を押さえていた。

眼球からは血が涙のように流れていた。

「はあ…はあ…はあ…」

幕切れはあつけないものだった。

大の字になって地面に倒れていたのは斉明の方で徳人はかろうじて生き残ったのだ。

「思念で…思い描くだけで…意のままの場所に魔法陣を組み立てたのか…」

「これでは予測も防ぎようもない」

起き上がることもできずに、大量の血を流しながら斉明は話した。

「くくくく…能力を受け継がせ続けることで、

私にも不可能な能力を持つものが育ってしまったのか…」

愚か者は私…なのか…」

そのまま何も語らず吹っ切れた様子で、さらさらと呪者のように姿を消し去ってしまった。

斉明の気配が完全に消え去り、静まり返った埠頭には三人の間人しかいなかった。

そして誰も口を開かない。

あれだけの死闘を繰り広げ、余韻に浸る余裕も話しかける気力も残っていない。

聖夜は気を失ったままで、樹開はかろうじて生きている。

徳人も頭を必死に押さえて先ほどの技の代償を払っているようだった。

思念で魔法陣を特定の場所に完成させるのは脳内に相当の圧力がかかるということだった。

思念体ならではの技でもあるが、あれが出来るとは思っていないかった。

自らの能力を信じたからこそできたのだ。思い浮かんだのだ。

自分ではできると…

そして徳人はゆっくりと立ち上がった。

自分の使命を全うした気分で清清しいのだろう。

憑き物でも落ちたように穏やかな表情をしていた。

自分が何者でどうなるかも分かった。

残された時間は短い…

ゆっくりと一步を踏み出して歩き始めていた。

「徳人…どこへ行く？」

体を起き上げて樹開はその寂しそうな背中を見つめていた。

「聖夜には…一言も話さないのか？」

ぴたりと足を止めた。そして聖夜の方をじっと見つめた。

気を失っている聖夜はまるで天使の寝顔のようだった。

四百年の呪縛から解き放たれたのだからそういう重みがそう感じさせたのだろう。

その顔を見るだけで安心できたのかもしれない。

「俺は…近いうちに消え、聖夜の思念に戻るだろう」

自分の体のことは自分がよく分かっているとばかりに話したが、

その言葉は弱弱しいものではない。

「もしも…そいつの性格ががらっと変わったとしても…お前だけは見放さないでくれよな…」

精一杯の笑みを浮かべると、そのまま徳人は何も話さないで前だけを向いて歩いていった。

樹開には徳人に掛ける言葉など見つからない。

聖夜以上に苦しんでいたのは彼だということを知ったのだから。

あれから一週間。

聖夜は昏睡状態になっていた。気を失いそのままずっと意識が戻らなかった。

徳人との繋がりが関係しているのは間違いなかった。

肉体と思念が元の形に戻るのそんな簡単な出来事ではないのだ。積み重ねた年数が多いのが一つの要因でもあったが、寝ている聖夜の体に思念が少しずつ戻っているような感覚に近かった。

時折見えない風のようなものが聖夜の体に入り込んでいたのだ。

それを間近で見ていたのは看病していた樹開だった。

あの戦いから聖夜を運び出すと、自らの部屋へ置いていた。

病院でいろいろ検査されたとしても理解されないのがオチだと分かっていたからの行動だが、聖夜の目覚めの瞬間に自分が立ち会いたいのが最大の理由でもあった。

そしてそんな待望の目覚めは天気の良い午後を訪れる。

聖夜がゆっくりと目を開いた。

「あ……」

本を読みながらうつとうとしていた樹開はそんな微かな動きにも反応した。

慌てて聖夜の顔を覗き込んだ。

「聖夜：気がついたか？」

聖夜はそんな樹開の姿を見てもすぐに返事はできなかった。自分の身に何が起こっていたのか整理もできていない。

そして樹開は聖夜の第一声を不安そうに待っている。

徳人が聖夜の思念に戻ったというのなら、性格も別物になってい  
る。

肝心の記憶もどうなっているのか予想もつかない。

別人という可能性が高いのだ。

ときどきしながら聖夜の様子をじっと伺っていた。

だが、覚悟もできている。

あの日徳人とも約束した。どんなことになるうとも自分は聖夜を  
見捨てないと。

だからどんな言葉でもいい……早く発してほしいと願った。

「じゅ…樹開さん」

聖夜は樹開の名前を呼んだ。

そんな単純なことだったが、樹開にとっては鳥肌が立つくらいに嬉しいことだった。

「聖夜…どこまで…覚えている？」

聖夜はゆっくりとベッドから体を起こして、頭を押さえた。

「徳人が…私に…話しかけました」

その口調はいつもの聖夜とは違った。

男のような荒々しい話し方ではなく、  
落ち着いた大人の女性を思わせるような清楚で礼儀正しい女性そのものだった。

やはり…前の人格は失われたのだ。樹開はそう思った。

「心配しないでください。私は全て覚えています。

呪いを掛けられたあの日からのことを…」

「あの日？」

「ええ…私が小さな貧村での生まれは知っていますね。

そこで起きたことも、あの僧侶が現れたことも…」

「だいたいな…」

「僧侶は私に力を与えました。  
その代償として思念と体を分けられたのですが…思念の方に問題  
がありました…」

「問題？」

「ええ…私の奥底の願望のようなものが出てしまったんです。  
あなたも見てきたはずです。徳人と聖夜はどこか似ていると…」

確かに口調も性格もそっくりだと思った。

「ああなりたいという私の願望がその性格を作り上げたのでしょう。  
以前の私の体にもその願望の部分が名残で残っていたのかもしれない  
ません。」

新堂家は代々男しか生まれませんでしたから…  
それも私の心の奥底にある男のような願望が生み出した結末なの  
かもしれませんね」

ふふつと笑って話すが、そんな簡単な言葉で済まされる話ではな  
い。

「でも…徳人たち新堂家の意思は私の中で生きています。  
それだけは、はつきりと分かります。そして彼らに感謝もしてい  
ます。」

私の成しえなかったことを彼らがしてくれましたから」

「え？」

「引っ込み思案で、暗くて、誰とも距離を置いてしまい、  
そして他人をうらやましく思うだけの私の望みを叶えました。」



友達をたくさん作り、最愛の人を作り、短い期間でも幸せという時間をたくさん与えてくれた。

元に戻れたことでそれを改めて感じる事が出来たんです。彼らのしてくれたことは決して無駄ではない。

私の心の中に深く…深く刻まれています」

聖夜の目からは何故か涙がこぼれていた。

「だからこそ…彼らにも罪悪感を感じています。

私の意志の依代として生きていたのですから…

この想いは…彼らが積み重ねてくれたのに…」

言葉に詰まり、自らを責めていた。しかし樹開は励ました。

「確かに彼らは存在しない者たちだったかもしれない。

だけど、その瞬間を精一杯生きていた。それだけで十分じゃないか。

それに、末裔の徳人に酷いことをしたのは俺も同じだしな…

だからこれからは、お前が強くなればいい」

「樹開さん…あなたは どうしてそこまで私のことを励ましてくれるんですか？」

「う…そ…その…それは…」

樹開はそんな聖夜の質問にどう返答していいのかわからなくなっていた。

しかし徳人との約束だ。

これだけははっきりとしておこうと、焦る気持ちを必死に抑えて

聖夜の顔を真剣な目で見た。

「それは、お前が好きだからだ。これからも…お前を…守るよ」

突然のことで聖夜は目を丸くしたが、笑っていた。

樹開にとってそれがどういう意味なのか理解できなかった。

認めてくれているのか？軽くあしらわれたのだろうか？

十七年前の聖夜に抱いた気持ちの時と同じにどきどきしていたのだ。

「知ってます。あなたの気持ち…あえて聞いたんですよ」

聖夜は涙を拭ってぺろつと舌を出していた。

からかわれたそう思った時、樹開の動きは速かった。

頭をぐりぐりと拳で押さえつけた。

「お前なあー…」

「いたたたたたたたた…痛いです…」

「うるさい！大人をからかうな！」

まるで十七歳の時の樹開そのものだった。

聖夜とそんな時間を過ごしていたことを思い出すかのように笑っていた。

するとじゃれている二人の間に冷たい風が流れ込む。

秋から冬へと変わることを告げるように、その風はやさしく二人の心を吹き抜けていった。

いつまでもこんな時間がこれから続きますように…

「今日は転入生を紹介します」

高校の先生がそう一言話して、クラスの中へとその人物を招き入れる。

すると女性はすつと教壇に立ち、クラスの生徒の前に姿を現した。

凜として、すらつとした美しいその女性は強さと透明感を持ち合わせていた。

そのせいもあって、全ての生徒の視線は釘付けだった。

何を話すのだろうと…

「自己紹介を…」

担任からそう促されると、その女性は両手を腰に当て、大きな声で叫んだ。

「双葉聖夜です。趣味は新しいものを見つけることで、特技は経験豊富な所から繰り出される絶技ってこと……」

しーーーーーん

クラスは静まりかえっていた。

こんな自己紹介見たことないと。

しかしそんな自己紹介の光景を見ていた、梨絵と翔太は何故か笑みがこぼれていた。

どこか懐かしい……

二人の記憶には新堂徳人という人物も双葉聖夜も存在しなかった。徳人という元々存在しない人間が消えてしまった時点で、全てが元に戻った。

聖夜がこの地に足を踏み入れる以前に……

だからこそそんな何気ない高校生活がまた始まる。

そう、徳人の成しえなかったことを今度は聖夜が叶えてあげる番だと誓い……

緩やかで緩やかで、それでいて長い時間がこれからも流れる。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5707g/>

---

呪術の契り

2010年10月10日03時41分発行